

日英教育文化交流史研究
——日本・スコットランド間の技術移転と文化交流を中心に——

(課題番号 : 11610257)

平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2))
研究成果報告書

平成 14 年 3 月

研究代表者 加藤 鉦治 (詔士)
(名古屋大学教育学部教授)

研究の概要

研究種目 : 基盤研究(C)(2)

研究期間 : 平成11年度～平成13年度

課題番号 : 11610257

研究課題名 : 日英教育文化交流史研究----日本・スコットランド間の技術移転
と文化交流を中心に

研究組織 : 研究代表者 加藤 鉦治 (詔士)

研究者番号 : 00109232

研究経費 : 平成11年度 1,100,000円

平成12年度 1,000,000円

平成13年度 500,000円

合計 2,600,000円

研究の目的と内容 :

近代日本は、欧米諸国に先進モデルを求め、これを積極的に導入し移植する形で生成し発展してきた。教育の領域においても、外国とくに西洋諸国の教育についての情報が、お雇い外国人教師の招聘、海外留学生の派遣、使節団・調査団の海外視察、万国博覧会への参同、学術文献の輸入・紹介、漂流民の異国見聞など、多様な経路をとおして積極的に収集・摂取され、近代日本教育の基礎づくりに生かされた。

本研究では、日本の近代教育の発足期（幕末・明治期）における、外国教育とりわけ英国教育の発見と英国教育情報の導入経路をめぐって考察する。とくに西洋教育情報の日本への導入の方途として、①お雇い英国人教師の招聘、②英国留学生の派遣、③岩倉使節団の英国視察、④英語文献の輸入という四つの方途に注目してとりあげ、日本教育の近代化と自立化が果たされるさいの、日英間の交流と関係の諸相を分析する。

日英教育の交流と関係といっても多面におよぶため、本研究では考察対象を絞って、とくに日本とスコットランドにおける技術教育の側面について、

具体的に分析する。近代日本の発足期には富国強兵と殖産興業が目ざされ、英国が一大モデルと目されたが、実学人材の養成の面では英国のなかでもスコットランドとの関係が緊密であった。この日本とスコットランドの間に見られた技術移転と文化交流をめぐって、歴史的・具体的に考察する。

研究の特色・意義：

1. 本研究では、英国のなかでもとくにスコットランドに注目する。近代日本の発足期には富国強兵と殖産興業が目ざされ、実学人材を養成することが急務とされただけに、英国のなかでも、産業が発達し機械学・造船学など自然科学の学問中心地であった、スコットランドとその諸大学との間に緊密な関係があった。
2. 本研究では、お雇い教師を介して生じた内外交流における教育連鎖に着目する。日英間にはお雇い教師、留学生、使節団を介して緊密な人的交流がみられるが、そのうち、お雇い教師のなかには日本における教育体験を母国に持ち帰り、母国で新しい教育実践をなす者がいたし、日本の美術工芸品を持ち帰った者もいた。この帰国後のかれらの活動を具体的に分析して、日本からの逆影響の側面に注目し考察する。
3. 英国と出会った日本の教育は、どのようにしてモデルを移植し、近代化と自立化が成るに至ったか。その関係と交流の諸相を解明することを通して、日本教育の国際環境について、理解が深まることが期待される。とくにお雇い教師は、西洋の教育モデルを持参して来日したが、任務が終われば母国に帰る一時的な教育文化の伝来者でもあるので、かれらを核にした教育の日英連鎖関係が生じるという点で注目される。すなわち、かれらは日本教育の近代化と自立化を果たさせるという効果を生み出すが、その一方、かれらの紹介と推薦によって日本人留学生の留学先が選定されたし、使節団の視察先が選択された。しかも、帰国後は日本における教育実践の成果を紹介しつつ、英国の技術教育の改革を訴え実際に指導したのであった。このような日本からの逆影響という研究視角は、英国以外の他の諸国との交流史研究にも示唆を与えることができるであろう。

主たる研究成果：

1. 「『広辞苑』のなかのお雇い外国人」
『日本古書通信』839号（日本古書通信社，1999年6月）
2. 「岩倉使節団の英国視察」〔翻訳〕
『教育社会史研究室年報』5号（名古屋大学教育学部教育史研究室，
2000年2月）
3. 「工部大学校都検ヘンリー・ダイアー——日英交流の推進者」〔翻訳〕
『大学史研究』15号（大学史研究会，2000年3月）
4. 「日英交流史上の人物評伝，ジャパン・ソサエティ刊行の三書」
『教育史研究室年報』6号（名古屋大学教育学部教育史研究室，20
00年7月）
5. 「絵師・河鍋暁斎（1831-89年）と英国人」〔翻訳〕
同上。
6. 「ヘンリー・ダイアーと田辺朔郎」
『UP』340号（東京大学出版会，2001年2月）
7. 「お雇い教師フレデリック・サンデマン」
『英学史研究』33号（日本英学史学会，2001年10月）
8. 「日本最初の洋式灯台技師R. H. ブラントン」〔翻訳〕
『教育史研究室年報』7号（前出，2001年11月）
9. 「竹鶴政孝をめぐるスコットランドとの交流，ウイスキー醸造と国際結婚」
〔翻訳〕
同上。
10. ‘Soseki Natsume, Examiner in Japanese at Glasgow University’
Nagoya Journal of Education and Human Development, 2002-1
(February 2002)
11. 「東京大学所蔵『ヘンリー・ダイアー記念図書』をめぐる考察」
『東京大学史紀要』20号（東京大学史史料室，2002年3月刊行予定）

目 次

第1章 お雇い英国人の招聘

- 第1節 『広辞苑』のなかのお雇い外国人 ----- 1
- 第2節 ヘンリー・ダイアー・シンポジウム ----- 9
- 第3節 ヘンリー・ダイアーと田邊朔郎 ----- 29
- 第4節 工部大学校都検ヘンリー・ダイアー——日英交流の推
進者（翻訳・解説）----- 36
- 第5節 日本最初の洋式灯台技師 R. H. ブラントン（翻訳・
解説）----- 55
- 補 節 ヘンリー・ダイアーの結婚 ----- 78
- 補 節 ヘンリー・ダイアーの胸像 ----- 84

第2章 英国留学生の派遣

- 第1節 南清のスコットランド留学 ----- 91
- 第2節 福沢三八のグラスゴウ留学 -----101
- 第3節 Soseki Natsume, Examiner in Japanese at Glasgow
University -----113
- 第4節 竹鶴政孝のスコットランド留学 -----134
- 第5節 竹鶴政孝をめぐるスコットランドとの交流——ウイス
キー醸造と国際結婚（翻訳・解説）-----139

第3章 使節団・調査団の英国視察

- 第1節 岩倉使節団の英国視察（翻訳・解説）-----156

第4章 学術文献の輸入・紹介

- 第1節 東京大学所蔵「ヘンリー・ダイアー記念図書」-----177
- 第2節 明治日本における経済学の到来（翻訳・解説）-----209
- 第3節 絵師・河鍋暁斎（1831-89年）と英国人（翻訳・解説）---237

第5章 日英交流史研究の考察

- 第1節 日英交流史上の人物評伝——ジャパン・ソサエティ刊
行の三書 -----254
- 第2節 明治日本躍進の研究——H. ダイアー（平野勇夫訳）
『大日本，技術立国日本の恩人が描いた明治日本の
実像』（1999） -----265
- 第3節 日本・スコットランド交流史研究——O. チェックラ
ンド（杉山忠平・玉置紀夫訳）『明治日本とイギリ
ス』（1996） -----272
- 第4節 明治期日本人留学生の母校——ストラスクライド大学
200年史研究 -----278
- 第5節 ストラスクライド大学200年史研究——J. バット『ジ
ョン・アングソンの遺産』（1996） -----283

第1章 お雇い英国人の招聘

第1節 『広辞苑』のなかのお雇い外国人

(1)

「お雇い外国人」への関心が高まって久しい。総合的な調査研究としては、古くは大日本文明協会が編集した『明治文化発祥記念誌』（大正13年）がある。明治百年を迎えるころには、日本近代化における隠れた功労者として注目され、『お雇い外国人』シリーズ全17巻（鹿島研究所出版会，昭和43～51年）が刊行された。やはり明治百年を記念して、ユネスコ東アジア文化研究センターによる総合的な調査も企画され、『資料御雇外国人』（小学館，昭和50年）が上梓された。明治元年から22年までに活躍した、史実の確かな公・私のお雇い外国人のいわば「基本台帳」が作成されたことで、研究が一段と進展をみることになった。

こうした関心の高まりは、辞書・事典にもとうぜん反映する。今では、見出し語としても登場するようになった。大見出しであれ小見出しであれ、注意深く選りとり見出し語になったということは、社会的に認知されたことばになったということであろうから、その意味は大きい。しかも、何度も版を重ねることがあれば、その都度、あたらしい標準的な知見が盛りこまれるはずだから興味深い。

『広辞苑』における「お雇い外国人」の扱われ方に注目するのも、何度も版を重ねている同書に見出し語としてあらわれ、具体的な氏名があがっているからである。

(2)

『広辞苑』に「お雇い外国人」の見出し語があるとはいっても、最初から登場していたわけではない。実は、初版（昭和30年）では独立した項目として扱われず、ようやく第3版（昭和58年）になってあらわれたのだった。それも

「おやとい」という見出し語のなかに、小見出し語として記載されているのである。

「おやとい〔御雇・御傭〕お上すなわち政府や主君による雇用。「――教師」「――運転手」「――がいこくじん〔御雇外国人〕 明治維新政府が欧米先進国の学芸・技術・制度を摂取するために官庁や学校に招いて雇用した外国人。」

版が改まり第4版（平成3年）になると、説明文は第3版と同じであるが、具体的に人物が列記されたことが注目される。「ボアソナード・ベルツ・フェノロサ・コンドル・モースなど。」という記述である。この5名とも、同版の主見出し語としても選定され、ていねいな説明が施されていることはいうまでもない。

最初のボアソナードとは司法省お雇いフランス人法律学教師。ベルツは官立東京医学校や東京大学のドイツ人医学教師。フェノロサは東京大学の政治学・経済学教師であり、そのかたわら日本美術の研究に意を注いだアメリカ人。コンドルは工部大学校のお雇い英国人建築学教師。モースは東京大学のお雇いアメリカ人動物学教師である。

このたび世に送り出された第5版（平成10年）はどうかというと、やはり「おやとい〔御雇・御傭〕」という見出し語のなかの追いこみの小見出しとして入っており、第4版とほぼ同じような説明がされている。

「明治維新後、政府が先進国の学芸・技術・制度を摂取するために官庁や学校に招いた欧米人。ボアソナード・ベルツ・フェノロサ・コンドル・モースなど。」

『広辞苑』のこれらの説明によれば、明治政府が招いた外国人をお雇い外国人ということになる。しかし、政府雇いだけがお雇い外国人ではないはずである。「お雇い」外国人と敬称するだけに、おかみ（明治政府）が「お雇い」になったというのが原義であろうけれども、雇用主体は政府のみに限るものではなかった。地方の府・藩・県や会社、私人もまた、政府の方針に呼応して外国人をどんどん雇い入れ、近代文明の移植につとめたことを忘れてはならないで

あろう。文明開化の時代に対応して、あたらしい人材を養成するために招いたのだった。

『広辞苑』の発売にあわせて新版が出された『大辞泉』（小学館）や、ほかの国語辞書もこれとよく似た記述であるけれども、その一方、『日本国語大辞典』（講談社）のように、「明治時代、政府・民間に雇用された外国人。西洋の政治制度・産業・教育などを移入し、日本近代化の基礎づくりに寄与した。」と説明する辞書も確かにあるのである。

もっとも、地方のお雇い外国人は、中央で活躍した人たちに比べればあまり華々しくはない。それだけに注目されることが少ないかもしれず、その履歴や事跡の不明な者はずいぶんおおい。けれども、実は、その地方の教育文化や産業技術の発展、それに先行する外国語教育のために尽くした功績は、けっして小さなものではなかった。

(3)

官雇いであれ私雇いであれ、お雇い外国人への関心の高まりは、見出し語に採用されるお雇い外国人の数にもとうぜん反映する。版ごとに拾いあげてみるとつぎのようになる。これは、もっとも総合的な調査研究と思われる、先記の『資料御雇外国人』に所収の「お雇い外国人名鑑」に記載された人物のうち、『広辞苑』の主見出し語にあらわれた数である。

第1版（昭和30年刊）	22名
第2版（昭和44年刊）	27名
第3版（昭和58年刊）	29名
第4版（平成3年刊）	32名
第5版（平成10年刊）	32名

これを見ると、初版からずいぶん登場していることが分かる。その初版に登場した22名とは以下の諸氏であって、政府雇いの外国人が圧倒的におおい。地方の藩や県に雇われたという記述があるのは、わずか4名にすぎない。「磯部弥一郎と共に国民英学会を創立、また『国民英語新誌』を発行、英語普及に尽力。博言博士と称された」イーストレーキ、「鹿児島藩医学校・病院に勤務」

したウィリス、松江中学などで「英語・英文学を講じた」ハーン、「政府の顧問」であったが1887（明治20）年に「明治学院神学教授」に推されたフルベッキ、の各氏である。

イーストレーキ (F. W. Eastlake)
ウィリズ (W. Willis)
エッケルト (F. Eckert)
キヨソネ (E. Chiossone)
クラーク (W. S. Clark)
グリフィス (W. E. Griffis)
スクリバ (J. Scriba)
チェンバレン (B. H. Chamberlian)
ナウマン (E. Naumann)
ハーン [小泉八雲] (L. Hearn)
フェノロサ (E. F. Fenollosa)
ブリンクリー (F. Brinkley)
フルベッキ (G. F. Verbeck)
ベルツ (E. Balz)
ボアソナード (G. E. Boissonade)
ボードイン (A. F. Bauduin)
ポンペ (J. J. L. C. Pompe van Meerdervoort)
マレー (D. Murray)
メースン (L. W. Mason)
メッケル (K. W. J. Meckel)
モース (E. S. Morse)
ライマン (B. S. Lyman)
ラゲーザ (V. Ragusa)

「お雇い外国人」という見出し語自体は第3版になるまであらわれなかったが、具体的な個人名の記載の数は初版以来着実に増えてきているのをみると、

『広辞苑』では、早くから相当の関心がはらわれていたことになる。それだけ、お雇い外国人の貢献度が高かったという認識が示されているといえよう。

「お雇い外国人」という見出し語が登場した第3版から具体的にみると、コンドルとマイエットが新登場したことが注目される。コンドル (J. Conder) は、先記のように、工部大学校の教師として来日した英国人建築学者。建築学教育で実績をあげ、とくに「東京帝室博物館・鹿鳴館・ニコライ堂などを設計・建築」したことが特記されている。

マイエット (P. Mayet) はドイツ人お雇い教師。「一八七五年 (明治八) 来日し、大蔵省・農商務省の顧問、大学教師などを歴任、九三年 (明治二六) 帰国。地租軽減と農事改良・農業保険の必要を説き、『日本農民ノ疲弊及其救治策』などの労作を残した。」もともとは東京医学校のドイツ語とフランス語の教師であって、上記のような経済政策の建策者として活躍したのは、大蔵省に雇い替えになってからのことである。西欧の学校貯金制度の紹介者であることも、特筆すべきであろう。ベルギーの制度にならって建議したのである。『教育家必携 郵便局学校貯法』 (大日本教育会、明治19年) などにその構想がうかがわれる。

第4版になると、エアトン (W. E. Ayrton), ユーイング (J. A. Ewing), メンデンホール (T. C. Mendenhall) が初登場している。最初の二人は工部省のお雇い英国人教師。ともに工部大学校で自然科学の教育と研究の面で大活躍した。エアトンは「重力の測定、また多数の電気測定機器を発明」したこと、ユーイングは「日本地震学会を創設」したことが、特記されている。

メンデンホールは「アメリカの物理学者」。とくに「東京帝国大学で物理学を教え、富士山頂での重力測定、地球密度の測定、気象観測などを行」ったことで知られる。

最新版の第5版ではどうかというと、お雇い外国人のあたらしい追加はみられない。

(4)

お雇い外国人への関心の高まりは、見出し語としての登場、掲載者数の増加

のほかに、説明文の充実にもあらわれている。

『明治日本体験記』や『ミカド』という訳書で知られるグリフィス (W. E. Griffis) のばあい、初版では「アメリカの宗教家・著述家。再度来日，東大に教え，日本に関する著述が多い。」とだけあるが，第2版・第3版になると「アメリカの宗教家・著述家。大学南校（東大の前身）で理学・地理学・生物学を教えた。日本に関する著述が多い。」と変わる。第4版から教授科目が「理学・化学を教えた」と修正されている。ただし，第5版を含めていずれの版も，福井藩お雇い教師であったことにかかわる記述はみられない。海軍軍楽の創始者エッケルト (F. Eckert) は，初版以来の「ドイツの音楽家。明治十二年来日，海軍軍務局に奉職，軍楽隊の育成に貢献」という説明文にほとんど変更はないが，第4版で「文部省音楽取調掛を兼務」，第5版で「宮内省雅楽所に勤務」という一節がそれぞれ加筆された。

クラーク (W. S. Clark) とといえば北海道開拓に必要な人材養成を指導した人。かれのばあいも，初版以来，ほぼ「アメリカの化学者・教育家。北海道開拓使に招聘されて明治九年来日。札幌農学校の教頭となり，そのキリスト教信仰に基づく訓育は内村鑑三・新渡戸稲造などの学生に深い感銘を与えた。」という説明であったのが，第5版になって

「『少年よ大志をいだけ』の語は有名」という一節が加わった。氏名の英文表記も，初版はClarkeであったのが，第2版からClarkに修正されている。

日本の唱歌教育の成立に寄与したメーソン (L. W. Mason) は，見出しが初版以来ずっと「メースン」であったのが，第5版ではメーソンに改められた。また，初版では「東京音楽学校教師として在留三年。『小学唱歌集』の著がある。」とあるが，第2版以降になると一変し「音楽取調掛の教師」，「洋楽教育の基礎」づくりの面が特筆されている。来日年が明治12年から13年に，生年も1828年から1818年に，いずれも第4版から修正されたことも注目される。

建築学教育で実績をあげた前出のコンドルになると，初登場した第3版では，「一八七六年（明治九）工部大学校教師として来日」となっているが，第4版から「一八七七年（明治一〇）」に来日，と変わっている。来日年といえば，

前出のマイエットのばあいも、第3版・第4版の明治8年から最新の第5版では明治9年に正されている。

来日年の修正は、モース (E. S. Morse) についてもみられる。初版・第2版では明治9年の来日とあるが、次の第3版から明治10年に変えられている。また、第4版になると詳しくなり、「わが国の近代的考古学の最初の実践者。著『大森介墟古物篇』『日本その日その日』など」というあたらしい説明が加わっている。第5版でも同じである。

日本美術の振興に寄与したフェノロサ (E. F. Fenollosa) のばあいどうかというと、初版には、「アメリカの哲学者・美術研究家。明治十一年来日。東大に哲学を講じ、傍ら日本美術の研究に意を注ぎ、美術学校創設。日本画復興などに助力。著『東亜美術史』など。」とある。それが、第2版から「弟子の岡倉覚三(天心)とともに美術学校を創設」と変わり、第4版になると一段と詳しくなり、「日本画復興などに助力。のちボストン美術館東洋部長。著『美術真説』『東亜美術史綱』など。」となっている。第5版では、あたらしさはみられない。

その一方、説明記事が簡略化される事例もある。フルベッキ (G. F. Verbeck) のばあいがそうであって、初版では、「アメリカの宣教師・教育家。オランダ生れ。安政六年長崎に渡来。政府の顧問として、教育・法律などの制度を調査献策、また、ドイツ医学採用を建議、後、明治学院神学教授。明治三十年東京に没。」とある。第2版で「アメリカのオランダ改革派教会宣教師・教育家」と加筆されはしたけれども、第3版、第4版になると、「政府の顧問として、教育・法律などの制度を調査献策」という重要な一節が省かれてしまった。第5版では、ミドル・ネームが加わった (Guido Herman Fridolin Verbeck) ことを除けば、特段の修正はみられない。

もう一人、フォンタネージ (A. Fontanesi) といえば「工部美術学校で初めて正式な西洋画法を教授」したイタリア人絵画教師であるが、かれは第2版から次のように登場している。

「イタリアの風景画家。バルビゾン派の影響を受く。一八七六～七八年

政府の招待で 来日，工部美術学校でわが国で初めて正式 な西洋画法を教授。門下に浅井忠・小山正 太郎・山本芳翠・五姓田義松らを輩出。」このうち，門下生について出入りがある。第4版から，山本芳翠および五姓田義松にかわって「松岡寿」があがっているのである。

こまかく調査すれば，さらにおおくの新知見をうるであろう。しかし，最新版の第5版についてみると，筆者の調べてみたかぎり，あたらしく登場したお雇い外国人は認められず，その数は第4版と変わっていない。近年，お雇い外国人研究は一段と活発になり，めざましい成果がみられるというのに，これは何か特別の理由によるものであろうか。お雇い外国人に関心をよせる筆者には，いささか気にかかるところである。

第2節 ヘンリー・ダイアー・シンポジウム

1. ダイアー記念シンポジウムの開催

ヘンリー・ダイアー（Henry Dyer, 1848-1918）といえば、スコットランドから招かれたお雇い教師である。明治6（1873）年から15（1882）年まで、工学寮ならびに工部大学校（現在の東京大学工学部）の都検および土木・機械工学教授として活躍した。実学重視という工学教育理念を日本に残したし、工学部を草創期から大学のなかに位置づけるという日本の工学教育制度の生みの親である。グラスゴウに戻ってからは、日本での体験を生かした技術教育改革に取り組み、グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジ（現在のストラスクライド大学）の創設に参加した。その一方、日本研究に取り組むかわら、グラスゴウに留学した日本人学生を支援してもいる。「技術移転と文化交流」の推進者であり、日英教育文化交流の実をあげようとした人でもあったのである。

そうした「ダイアーの業績を評価し、21世紀に向けて工学教育と技術移転を広く討議するための日英相互交換シンポジウム」⁽¹⁾が、先頃開かれた。1996年は、かれの出身校のひとつであるストラスクライド大学が創立200周年にあたること、また、翌年の1997年は工部大学校が明治10（1877）年に創置されてから120年目にあたることから、企画されたものである。

このヘンリー・ダイアー・シンポジウムはこれまで2回開催されている。第一回は、1996年4月15日と16日の両日、ストラスクライド大学において、第二回は、1997年の3月18日と19日、東京大学でそれぞれ開かれた。いずれも東京大学工学部とストラスクライド大学の共催である。

第一回シンポジウムは、「産業の国際化——問題点・戦略・事例研究」⁽²⁾というテーマで開かれた。科学技術、工業、商業の国際化が進展し、経済および社会への影響が大きくなりつつあるという傾向にこたえて、企画されたものである。

同シンポジウムの『プログラム』⁽³⁾には、一具体的な目的として、4点掲げ

られている。①世界的な経済競争のなかにある大小の企業に対し、将来の産業技術と経営上の諸問題を提示すること、②大きな変化を呼ぶ要因と国際化の影響を検討すること、③世界市場で活躍する人びとの体験を共有すること、④企業が競争力の維持に必要な確固たる対応策をたてることを強調すること、という4点である。そして、5部門（企業と戦術の問題、環境問題、情報科学の影響、教育と訓練の問題、国際的な製造活動）に別れて、産業の国際化にかかわる諸問題が検討された。

報告内容を具体的に示すと、ストラスクライド大学学長による「産業の国際化」と題する開会の辞にはじまり、吉川弘之東京大学総長による「科学技術国際化の諸側面」、および英国IBM社長による「国際化——産業界への挑戦」という基調講演のあと、次のような題目の個別報告がつづいた。

- ①労働市場への国際経済の影響
- ②企業金融への国際化のインパクト
- ③国際的な製造業と供給網
- ④国際的な環境団体
- ⑤企業活動と環境問題の和解
- ⑥情報の波
- ⑦単品生産における情報技術
- ⑧産業情報社会
- ⑨ヘンリー・ダイアーの活動と日本の工学教育への影響
- ⑩生涯学習のための工学再教育
- ⑪AV製品互換性のための科学技術の国際化
- ⑫国際的な航空宇宙産業からの教訓
- ⑬IMS学習からの教訓

次の第二回シンポジウムは、「工学および工学教育の現代と未来における役割の評価」というテーマで開かれた。人口爆発、自然資源の枯渇、環境汚染などが進行する昨今であるだけに、工学教育のあり方を再検討することになったものである。ストラスクライド大学からは副工学部長以下7名が参加し報告を

している。

研究報告は全部で15本、それに「21世紀の大学に物申す」と題するパネルディスカッションが用意された。研究報告の題目は、順に以下の通りである。

- ①コレクションとアブダクション
- ②科学と工学研究における産学共同研究体制——英国での視点
- ③ダイアーから21世紀に受け継ぐもの
- ④ヘンリーダイアー——使命を帯びて
- ⑤明治の近代化遺産
- ⑥生涯学習——時宜を得たアイデア
- ⑦工学教育でのボルトとナット
- ⑧産業が必要とする工学教育
- ⑨テクノグローバリゼーション：コンピュータ技術の工学教育へのインパクト
- ⑩単品生産——21世紀の生産方式
- ⑪研究と技術移転による産業界のパフォーマンス向上
- ⑫技術力とビジネス知識とコミュニケーション技能とのマッチング
- ⑬産業地域の遷移——進化論的検討
- ⑭未来の技術開発：英国における工学の発展
- ⑮工学教育の未来像⁽⁴⁾。

見られるように、多様で包括的な内容から成るが、工学および工学教育のあり方をめぐる報告がおおい。これらの報告を交通整理して、ダイアー研究にむすびつけることは容易なことではない。ここから何が出てくるのか、まだわからない。報告のなかには、ダイアーの著述を援用することも、ダイアーの実践と結びつけることもない報告が少なくなかったけれども、ダイアーの再評価とあたらしいダイアー像の形成にむかって踏み出したことはまちがいない。

2. ダイアー人物像の研究

(1)

第二回ヘンリー・ダイアー・シンポジウムでは、工学および工学教育のあり

方をめぐる報告が多かったが、そのほかに、ダイアーの生涯と活動を直接取りあげた報告が2本含まれていた。石原研而「ダイアーから21世紀に受け継ぐもの」⁽⁵⁾と、ロビン・ハンターおよびレズリー・ハート「ヘンリー・ダイアー——使命を帯びた男」⁽⁶⁾という報告である。いずれも学術研究というよりは、エピソードを交えながら、かれの業績と人となりが簡潔に紹介されて興味深い。これらの報告をきいて、出席者は、ダイアーは縁が遠い存在ではなくなりつつある思いを強くしたであろう。

第一の報告「ダイアーから21世紀に受け継ぐもの」では、ダイアーのエンジニア教育に言及され、注目すべき特徴点として以下の4点が指摘された。①情報と知識と教育を区別し、エンジニア教育における、知識の伝達と技能の訓練のほかに教養教育の意義を重視した。②その「エンジニアは真の革命家である」といい、エンジニアは工業化の推進をとおして近代社会の形成者であるとみなし、大きな期待をした。③日本ではエンジニアの地位が高いのはダイアーの遺産である。④工学教育において実習が重視されるのもダイアーの遺産である、という4点である。

この報告は詳細でなくあまり分析的ではなかったが、ダイアー研究の周辺にかかわる興味深い言及があった。

その一は、ダイアーの日本再訪計画をめぐる話である。大正のはじめころ、工学会およびグラスゴウ会が中心になってダイアーを招くことが準備された。ダイアー自身も日本来遊を楽しみにしていたのだが、折から第一次大戦となり来日を見合わせていた。

「おそろしい戦争が終結するのはまだまだ近そうではなく、権勢ある人たちは長期戦になるといっています。日本訪問が延期になり、わたしはとてものがっかりしています。戦争があまり長引かず、日本を訪れることができますよう祈っています。」⁽⁷⁾

1917（大正6）年11月15日付けで、教え子の田邊朔郎にあてた書簡で、ダイアーはこのように記しているのだが、実現をみないうちに死去してしまった。

ダイアーの招へいは実現しなかったけれども、そのかわり、事業の一環とし

て、拠金をもとにした歓迎費と記念資金の一部は東京帝国大学に寄贈され、工学関係図書 122冊が購入されることになったことが注目される。「工学部各科に必要な図書を備へ、之に故ダイエル先生の写真及小伝を貼付し永遠に先生の我国工学及工業の開発に対する功績を記念すること」⁽⁸⁾が図られたのである。

ダイア―再訪計画にかかわるこれらのことは、別段あたらしい史実ではなく、『旧工部大学校史料附録』にある記述の域をでないけれども、帰国後のダイア―の動静をめぐる興味深い一話と思われる。

その二は、かれの主著『大日本、東洋の英国 (Dai Nippon, The Britain of the East, A Study in National Evolution, London, Blackie & Son, 1904)』の翻訳が進められ、年末に刊行される予定であるということについての紹介であった。同書は全20章、450ページをこえる大著であり、封建制の崩壊、日本人の精神、移行期、教育、陸軍と海軍、交通と通信手段、産業の発展、美術界、商業と通商、食糧の供給、植民地建設と移民、立憲政体、行政、財政と金融、国際関係、外交政策、社会的成果、将来の展望、最近の出来事、という広大な内容から成っている。まえがきには、「世界が19世紀後半の奇跡とみなしたものの、すなわち、国際社会の一員として台頭してきた日本に隆盛をもたらした原動力は何であったのか」に注目する⁽⁹⁾とある。ロシアとの戦争に勝利したことで世界の耳目を集めていた日本を、実に多面的に考察しており、外からみた出色の近代日本論なのである。

この『大日本』の翻訳出版計画は少し遅くなったが、1999年末までに実現した。これもまた、ダイア―再評価の機運が高まっていたことを示す事業であり、慶賀すべきものである。

(2)

ロビン・ハンターおよびレズリー・ハートによる報告「ヘンリー・ダイア―——使命を帯びた男」は、ダイア―の経歴、来日中および帰国後の活動をめぐる考察から成っている。具体的には、ダイア―家の素性とダイア―の少年時代の教育、学生時代の見習い修業と学業成績、お雇い教師として来日中の生活と

活動、帰国後のグラスゴウにおける活動と関心事など、幅広く概括的に取りあげている。多彩で華麗な人物像を描こうとされたのだが、ダイアーは「依然として十分には理解できない人物である」と結んでいる。

報告者の二人は、ダイアーの妹ジャネット（Janet Dyer, 1850-1916）のひ孫にあたる方である。それだけに、資料の発掘とあたらしいダイアー像の提示を期待したのだが、筆者にはそれほど刺激的ではなかった。活用された文献史料は一般的であり、所説に新味が乏しかったように思われる。かれらのダイアー研究は緒についたばかりの感がつよく、今後の進展が期待される。

しかし、本報告は、ダイアーの多彩な側面が概括的に要領よくまとめられているという特徴がある。さらに加えて、とくに下記の二点が特筆される。

第一は、帰国後のダイアーの処遇のされ方に関心をはらい、考察をめぐらしたところである。ダイアーは学問研究でも職業の面でも大活躍したのに、「誉の高い学界や専門職のポスト」に思うように就任できなかったのはなぜか、その事情を問題にしているのである。「調査研究してきたが、われわれははっきり結論を出せないでいる」といいながらも、ダイアーの「見解が遠慮会釈のないもの」であったこと、かれには「まったく公平無私なところ」があったこと、さらには、「当時のグラスゴウ人はあまりにも心が狭く視野が狭隘であったので、物にとらわれない、広い、世界的規模をもったヘンリー・ダイアーの考え方をよく理解できなかった」ことなどが災いしたことから、「自国では日本ほど世に認められなかった」と指摘しているのは、示唆に富んでいる。

第二には、ダイアーの結婚をめぐる話も興味深い。かれはいいなずけのマリ一嬢を同道せずに、日本にむけて旅立った。一族のあいだでは、「マリーの両親はかれがすばやく出発したことにいささかろうばいをし、彼女の手から彼がするりと抜けないようにと、急いで次の便の船に彼女を乗せた」こと、そして二人は「東京で結婚した」ことが伝わっているという。

これまで「ダイアーは明治7（1874）年グラスゴウに一時帰国し結婚している」⁽¹⁰⁾と考えられてきただけに、これは新説といってよい。ただし、確たる論拠が提示されていないのだから、裏付け作業を進めなければならないであらう

う。

この報告の魅力は、上述のように、ダイアー家の素性ならびにダイアー自身の多彩な生涯と活動について、短文ながら、簡潔にまとめられているところにある。ダイアーの人物像について概観をえるのに便利であるので、『プロシーディングス』に所収された論文をもとに、以下に翻訳紹介する⁽¹¹⁾。

なお、同論文の報告者の横顔を紹介すると、レズリー・ハートは、1991年からストラスクライド大学高齢者問題研究所 (Senior Studies Institute) の所長。「15年間成人教育活動を行ない、同大学と地域社会間の成人教育の輪を拡げた責任者であった。グラスゴウとストラスクライド両大学を卒業。目下の研究関心は健康と高齢者の問題。ヨーロッパ諸国の多くの教育機関と共同研究があり、各国共通のいくつかの教育課題に参加している。」

ロビン・ハンターは、「ストラスクライド大学に30年近く勤める。現在、コンピューター科学の上級講師。研究関心はソフトウェア工学と言語コンパイラ。専門の論文と教科書をいくつか執筆し、その一冊が日本語に翻訳されている。現在ソフトウェア・プロセス評価に関する国際標準プロジェクトに貢献している。グラスゴウ大学から理学士号と哲学博士号を取得。英国コンピューター学会の会員。研究以外の大きな関心の一つは、一家のルーツ探しである。」⁽¹²⁾

3. R. ハンターおよび L. ハートの報告論文「ヘンリー・ダイアー 使命を帯びた男」⁽¹³⁾

[要約]

ヘンリー・ダイアーは、東京の工部大学校の初代校長として、19世紀後半期の日本の工業化に多大な影響をおよぼした。本論文は、ダイアーの経歴、および日本での活動以前、活動中、活動以後に、ダイアーに影響を与えた諸要因について考察するものである。とりわけ、グラスゴウに戻ってからの教育活動などと同じく、ダイアーの家族の素姓とダイアーの教育歴を詳しく記述している。また、帰国以後ダイアーに与えた日本の影響を、本人の出版物その他の新資料

から検討している。ダイアーは生涯たいへん尊敬され高く評価もされたけれども、その高い主義主張と、また幅広い諸問題に関する明快で率直すぎるほどの見解がかえって災いして、自国では日本ほど世に認められなかったことを、本論文は明らかにしている。

1. 家族の背景と青少年時代

ヘンリー・ダイアー一家の出は卑しく、ダイアー自身の家柄は富家でも名家でもなかった。

1.1 少年時代

ヘンリーの父ジョンはアイルランドの生まれであり、たぶん働き口とよい暮らし向きを探して、西部スコットランドへ移住してきたのだった。ラナークシャで鑄造工の仕事についたが、比較的低給の不熟練労働であった。1848年に地元の娘と結婚して、二人にはヘンリー、ジャネット、ロバートの3人の子どもが生まれた。筆者たちは、そのヘンリーの妹ジャネットの子孫にあたる。

1857年ごろ、ヘンリー・ダイアー一家はグラスゴウとエディンバラの中ほどにある、ショッツ (Shotts) という小さな産業都市に移転し、ダイアーの父はそこの大きな景気のいいショッツ鉄工所で働いた。工場長だったと子孫は主張するのだが、実際にどんな仕事をしていたのかはよくわからない。この論文の筆者たちはまだ証拠を見つけていないが、1861年の政府の国勢調査では「技術者 (engineer)」と記されているから、おそらく工場長ではないであろうと思われる。この家族の歴史のある時期に、ほんの少し社会的地位があがったと思えたことであろう。

ショッツ小学校におけるヘンリー・ダイアーの若いころの教育には、スコットランドであらゆる社会層の優秀な少年には何ができるのかが、あらわれている。

スコットランドの教育制度は、何世紀ものあいだ、その平等主義を誇りとしてきた。16世紀の宗教改革の結果、教区と関連をもちながら、小学校制度が発

展した。この小学校制度は、やがてヨーロッパで最初の国民学校制度の一つになった。優秀な少年はこのようにして生まれた教育制度を進むことができたので、ヘンリーはそうした学習機会を利用した数多くの優秀な生徒の一人であったのである。ロバート・マックナビ先生は、この教え子に感心してしまったにちがいない。この先生は、ダイアーのある推薦書のなかで、「この子のもつ類まれな忍耐力と勤勉さ」に言及して、「これにすばらしい記憶力と最高の天性の才能とが加わって、この子のいるどのクラスでも、また毎年の試験でもトップになることができた」といっている(McNab, 1872)。ショッツ小学校で見せたヘンリーの見事な成績は、実は、後のすばらしい学業成績のほんの始まりにすぎなかったのである。

1.2 家族のグラスゴウ移転——1865年頃

ヘンリーが十代のころ、家族、つまり母、父、弟、妹はグラスゴウに移った。かれにはだれの目にも明らかな学力がすでにあったおかげで、ジェイムズ・エイトキン社の鑄造所へ、工学生見習いで入った。この仕事はさらに学習を必要としたので、アンダソン大学（現在のストラスクライド大学）の夜学で学習を始めた。1863年から1868年までの5年間定時制で勉強し、1868年には労働者部門でホイットワース奨学金を獲得したのである。

1.3 日蘇関係の始まり

1863年に、日本から来た山尾庸三は英国人実業家の援助で密出国した5人の若きサムライの一人であった(Checkland, 1981/2, Butt, 1996)。かれらは明治の王政復古を目指したエリートであり、日本の工業化を導く知識と経験を願いもとめていた。山尾はロンドンで学んだだけでなく、グラスゴウまで来て、ロバート・ネイピエの大きなクライド造船所で働き、またアンダソン大学の夜間学級にも学んだ。ヘンリー・ダイアーは自著『大日本』（1905年）で、たぶん個人的には知っていなかったようであるが、いくつかの夜間学級で学ぶ山尾のことを覚えていると言っている。しかし、山尾はヘンリーのその後の生涯に

とって重要な人物となった。山尾は、明治の王政復古後の、1870年に帰国した。工部省に入り、技術者と職人の職業教育振興計画の立案に参画することになった。

2. グラスゴウ大学での優秀な成績——1868—1873年

ヘンリー・ダイアーは、それまでの学業成績によって、1868年にグラスゴウ大学に全日制学生として入学し、称賛に値する学究生活をおくった。グラスゴウ大学に修学中、名高いホイットワース奨学金を受けていた当時たった一人のスコットランド人であると同時に、全部で12の学級賞を獲得したのだった。かれは工学認定書、理学士号、文学修士号および造船学修了証明書の取得を目指して勉強した。ヘンリー・ダイアーが日本の新設大学に就職をもちかけられたのは、1873年に学業を終えようとしていたちょうどその時であった。

既述のように、日本では技術者の教育が最重要事項とみなされつつあり、工部大学校という新設校の立案が進展しつつあったのである。この大学校では近代的な技術者の第一世代を養成することが構想され、したがって、同校の教職員の資質がもっとも重要なことであった。そこで、日本政府の工部省のロンドン代理人であるヒュー・マセソンとグラスゴウ大学のマクオーン・ランキン教授を介して人材有無の照会がなされた。この照会と山尾の実体験の結果、日本政府はヘンリー・ダイアーに土木工学教授と工部大学校校長の地位につくよう申し出たのであった。

十分過ぎるほどの教育はあるものの実務体験がまったく不足していた25才の青年にとって、この申し出は絶好の機会と思われたにちがいない。ヘンリーは即座にひき受けたようである。グラスゴウ大学が特別な試験科目とその範囲を設けることに同意してくれたので、ダイアーは造船学修了証明書のほかはすべて取得して、早めに卒業することができたのであった（Dyer, 1886）。

3. 日本での生活と活動

ヘンリー・ダイアーは1873年に日本に向けて出帆した。あたらしい任務に対

し熱意があったことは明らかである。かれは私生活の整理を待つ間もなく、また、婚約者のマリーさえも伴わずに旅立ったのだった。スコットランドを離れる前に結婚して、日本への船旅で新婚旅行をゆうゆう楽しむよりもむしろ、単身で出発し、艦上にいる時間を新設大学の規程書の準備に使う途を選んだのである。一族のうわさでは、マリーの両親はヘンリーがすぐに出発したことにいささか狼狽し、娘の側からそっと逃げ出すことがないようにと、急いで次の船に娘を乗せたのであった。ヘンリーとマリーは東京で確かに結婚して、子どもを5人もうけている。そのうち、長子は子どものときに亡くなった。ほかの息子たち、すなわち、チャールズ・ヘンリーは牧師になり、ロバート・モートンはグラスゴウと香港の造船所で働き、また、ジェイムズ・ファーガソンはインドの官吏になった。この三人とも結婚したが、子どもがいなかった。娘のマリー・ファーガソンは未婚のまま子どもがなかった。だから、ヘンリーとマリー・ダイアーには孫がいなかったのである。

3.1 日本での業績

この仕事は、日本に着いた若いヘンリー・ダイアーにはかなり気骨がおれる仕事であったにちがいない。しかし、かれが思い通りに工部大学校を発展させるために、大きな支援と行動の自由が与えられたことは確かである。ダイアーには工学教育の最善の形態について強固な思いがあり、実践と理論の結合がよいことを確信していたのだった。同校では学術的な講義が行われ、赤羽の工作所では学生は働くことを通して実体験がえられたのである。ヘンリー・ダイアーは、短期間のうちに、アングソン大学で学んだ多くのものを実施し、現在でいうサンドイッチ・コースを率先して導入したのであった。

ダイアーズ・カレッジ——工部大学校は東京で時にはこのように呼ばれた——は、教職員も設備も十分に備わっていたため、教育機関としてたいへん成功したのである。ヘンリー・ダイアーと同僚たちは、学生に総合的な工学教育を目指す（英語だけで授業する）6年間の教育課程を構想した。ダイアーの教育観は進歩的（急進的などころもあった）であり、そのため当初は日本の教育伝

統と相容れないこともあった。大半の学生は武士階級の出であったが、ヘンリー・ダイアーはかれらの熱意とつらい仕事に打ちこむ様子に感銘を受けたけれども、多くの学生が丸暗記学習に頼りすぎて、論理的思考の面が十分発展していない傾向にあることを知った。

ダイアーは、事実の単なる集積記憶の仕方に強く異を唱え、東京で発表した小冊子（1879年）において、情報、知識、教育を区分している。

「情報とはまとまりのなかったものを形にまとめる過程であり、知識は完成された情報であり、教育とは知性を磨くことである。」

ダイアーの指導のもと、工部大学校は拡充し繁栄していった。日本の産業界の将来の指導者たちが、この工部大学校で最初の教育を受けたのである。

日本にほぼ10年いたのち、ヘンリー・ダイアーは個人的・家庭的な理由で辞職した。多くの人には不思議な決断のように思われるかもしれないけれども、理由を知ろうにもこれ以上の詳しいことは何もわかっていないのである。

かれの著書『大日本』は日本と日本人をおおいに称賛しているし、また日本を去るにあたり受けた褒賞から考えれば、日本人の方もダイアーを高く評価したようである。ロス（1987）は、工作所の将来をめぐる若干の意見の相違があったかもしれないと言っている。その一方、かれと妻は子どもの教育のために今がスコットランドに戻る時だと決断したのかもしれない。日本政府はヘンリー・ダイアーをおおいに称賛し、日本を離れるにあたり旭日章（勲三等）と工部大学校名誉校長の称号を贈った。

こうして、ダイアーの生涯の前半は終わった。かれは妻と幼い4人の子どもと一緒にスコットランドに戻った。優れた学問業績に匹敵するたいへんすばらしい職歴を得て、これを武器にすれば学界ないし専門職で名のある地位にすぐ就けると、もしかして思ったとしても無理からぬことであろう。しかし、そうならなかったのはなぜなのか、実に不思議であるが、今日までのわれわれの調査研究では、明確な結論を出すことができないでいる。

4. スコットランドへ帰国——1882年

グラスゴウへ戻ってから、ヘンリー・ダイアーは確かに東京とたいへん違った生活をおくっている。かれは大学の職に三度応募したが、うまくいかなかったことが知られている。エディンバラに新設されたエリオット・ワット・カレッジの学長職の場合は、不成功に終わった理由は政治的なものであったかもしれない。——つまり、かれの意見は激しすぎたのであり、また後で段々明らかになるはずであるが、かれには自分の思い通りずけずけとものを言う傾向があったのである。

1886年以降、かれは有給の職業には背をむけ、教育、社会、宗教問題への関与にますます関心をむけたように思われる。広範な話題について、新聞や雑誌記事、専門の論文、報告書、著書など数多くの著述をおこなった。また、蔵書をおおいに増やしていったが、後にそれを子孫のものがグラスゴウのミッチェル図書館に寄贈した。しかし、この蔵書の多くはこれまで目録化されたことがなく、ダイアー家の者はミッチェル図書館がもっとこの蔵書に気を配ってくれるべきであったとの思いが強かったので、その後は、エディンバラ市立図書館に大量の日本絵画コレクションを寄贈したのである。ダイアーの蔵書には科学と宗教の本が多く、また自著も多数含まれている。

ヘンリー・ダイアーは、また、グラスゴウを本拠にするいろいろな協会や組織の集会における講演者としても、引っ張りだこであった。筆者たちの想像するところでは、ダイアーは、聴衆全員の賛成がないにしても、関心だけはかならず引きつけるような話題には、たいてい自分の確立した意見をもっていたから、話がおもしろく聴衆の気を引く議論好きの講演者であったと思われる。

4.1 グラスゴウにおける教育活動——1883—1918年

ヘンリー・ダイアーが今日グラスゴウでもっともよく記憶されているのは、たぶん教育の分野であろう。確かに教育こそかれのもっとも影響力のあった分野である。グラスゴウ工芸学校、西部スコットランド農科カレッジ、西部スコットランド家政カレッジの理事長に任ぜられたし、1891年にはグラスゴウ学務委員会の委員、後に副委員長、最後には委員長になったのである。

ヘンリー・ダイアーはアンダソン大学のとりわけ活動的な理事であったが、グラスゴウに戻ってすぐにこのポストについた。1880年代後半以降に種々の学校が合併して、まず初めにグラスゴウ西部スコットランド技術カレッジ（1887年）が、ついで王立技術カレッジが設立された（1912年）が、かれはそうした進行に関与し影響力があった。この技術カレッジの終身理事長としての職務のなかで、かれは教育水準、学級数、諸資格の授与にとくに腐心している。ダイアーは、また、かつて工部大学校で自分が導入した制度におおむねもとづいて、この技術カレッジで資格証明書と学位の授与制度を創設させもした。

かれは理事たちにこれらの教育課程の認定がグラスゴウ大学から得られるよう力説したので、1889年に同大学は技術カレッジの学生には理学学位取得の最初の2年間を免除して、工学修了証明書を承認した。また、同じ1889年には、この証明書の所持者全員に準学士（Associate）という称号が授与されて、記録によれば、グラスゴウ大学で学位取得を目指して勉学を続けるカレッジ準学士が、ここに誕生したことがわかるのである（Butt, 1996）。

4.2 ダイアーのその他の関心

ダイアーは教育分野でおおいに活動したのであったが、その他のいろいろなことにも関心があった。まず、スコットランドに戻るやいなや、社会状況のなかで社会の破壊になると気づいた問題には大きな関心を示した。たとえば、資本主義の成長を気につけ、労働者を搾取する雇用者をとくに批判したのであった。とはいえ、ダイアーは、あらゆる点で労働者を支持したというのではない。労働者には欠点が多くあることに気づいたからである。ダイアーは、また、慈善事業に対する根強い反対意見を表明している。慈善事業は自分で努力する人を助けられなければ、対処していく害悪を永続することになるだけなのだ、と信じていたのである（Dyer, 1899, 1890）。

著作物からみると、1880年代の終わり近くに、ヘンリー・ダイアーは社会経済改革の将来の途は19世紀中ごろにイングランドで確立をみた協同組合運動にある、と信じていたと思われる。その運動は勤労者の一団から始まった。勤労

者その他がかならず適正な価格で物品の購入ができるようにと小さい店を開いたのであったが、この企てがうまくいったことから、世界中で同種の事業がおおいに発展した。この協同組合運動は——社会的需要とヴィクトリア時代の自助の価値観にもとづいていたため——、やがて活動を購入と分配、銀行業務と保険、農業と教育にまで広げていった。ヘンリー・ダイアーはこの協同組合の原理と実践の称賛者であると同時に支持者でもあったので、自分は協同組合教育者だと称したのであった。

かれはこの運動を促進するための小冊子をいくらか執筆しており、一時は『スコットランド生活協同組合新聞』の編集長でもあった。しかし、この運動についてさえ、結局は欠点を見て非難し、非能率で未熟と思う運営方法を公然と批評している（Scots Commercial Record, 1899）。

ヘンリー・ダイアーは明らかに宗教的な人でもあり、この宗教問題についてしばしば執筆したり講演したりしている。極東で生活したことがあったので、仏教、神道、儒教について学んでおり、自著『大日本』のなかに宗教の話題が何度も出てくる。キリスト教会についての著述のなかで、スコットランドで観察したことを批判している。数多くの信徒は宗教活動といえれば日曜日に礼拝にでかけるだけだから偽善的だ、と主張している。ダイアーはキリスト教の教えは日々の生活のなかで従うべきだと信じており、スコットランドの多くの者にとって、キリスト教はおおいに墮落して邪教程度になったと書いたのだった（Dyer, 1890）。

ヘンリー・ダイアーの意見は遠慮会釈のないものであったから、かれはグラスゴウに戻って友人と同じくらい敵もきつとつくったであろうし、また、このことが生涯の出世に影響したと言ってよいかもしれない。かれは自分の個人的な出世のために制度を利用しようとする、体制派の人でなかったことは確かである。しかし、かれは人から尊敬されたことは疑いのないところである。産業調停者——日本から戻るのとほとんど同時に務めた役目——として、かれはおおいに成功した。かれにはまったく公平無私なところと産業の知識があったので、雇用者と非雇用者の双方に格別な信頼があり、西部スコットランドの製鉄

鋼業調停仲裁委員会の副会長になったのであった (Glasgow Herald, 1918)。

5. 日本との継続的なつながり

ダイアーは日本に戻ることはなかったが、日本と日本のあらゆる事物に対する関心は生涯続いた。

かれのもっとも大きな著作の一つが『大日本』であるが、これは美術から産業の発展、教育からコミュニケーション手段に至るまで、日本生活の諸側面を扱っている。かれの親日的な姿勢は、ロシアとの戦争のぼっ発について記述した章にとくに明らかである。

その『大日本』において、ヘンリー・ダイアーは先見性のある、批判的な思想家であることも示している。グローバリゼーションという言葉はまだできていなかったが、かれは、スエズ運河の開通、電信の発明、シベリア横断鉄道の建設といった技術開発に由来する、世界のなかの幾多の多様な影響について記述している。ダイアーは、世紀が進むにつれ、世界の「縮小」が人びとの生き方に大きく影響するということを先見の明でもって見抜いていたのである。また、おもしろいことに、かれは技術者の潜在的な能力と影響力を確信しており、技術者は工業技術、経済、社会の変化の進歩を促進するうえで中心的な役割をはたすと、考えていたのである。

グラスゴウで、ダイアーは、19世紀の終わりごろと20世紀初めにグラスゴウ大学に続々留学してきた、多数の日本人学生の世話をした。ダイアーの大きな支援で、大学当局を説得して入学用の外国語として日本語を認めさせたのである。グラスゴウに戻るやいなや、日本政府の代理人を勤めたので、まったく日本大使とってよかった。かれの著作を見れば、日本および日本式生活様式にたえず感心していたことがわかるので、スコットランドで日本のイメージを高めたことは間違いない。

5.1 褒賞

ヘンリー・ダイアーの教育その他の業績は、晩年近くのいろいろな時期に認

められた。1890年には、グラスゴウ大学から工学博士号を授与されたスコットランドで最初の人となった。1910年にはグラスゴウ大学から名誉法学博士号を、また1915年には東京大学から工学博士号を受けた。1908年には、グラスゴウに戻って以後に日本のためになした活動によって、瑞宝章（勲二等）を授与された。

6. 結び

ヘンリー・ダイアーは、生涯の前半に、学問の面でも職業の面でも多くのことを成し遂げた。後半では、権威を捨てて影響力ある活動をしたと思われるが、これはみずから選んだものか必要に迫られたものか、不明である。金銭面ではほどほどに恵まれていたので、有給の職務に拘束されることなく、むしろ自由にいろいろな人生経験を広げることに決めたのか、それともまた、かれの強固な、そしてよく無遠慮に発言する意見のために、職が得られる見込みを狭めてしまったのか。今日でさえ、スコットランド人は、一身代作ろうと国を出て、あたらしい革新的な考えをもって帰国した同胞には、警戒心を抱き批判的になることがある。おそらく当時のグラスゴウ人はあまりにも心が狭く同族意識に偏していたので、ヘンリー・ダイアーの物にとらわれない、視野の広い、世界的規模の考え方をよく理解できなかったのである。

したがって、ヘンリー・ダイアーは興味深いけれども、われわれスコットランド人には、依然として十分には理解できない人物なのである。グラスゴウ人の生活に多くの面で影響を与えたのであるが、しかし、ダイアーの後半の生涯で、ダイアー本人もスコットランド人も、ダイアーのもつ確かな知識と実に広い職業経験を十分に役立てる術を見いだしえなかったのは、せっかくの機会を逃したことになるように、筆者たちには思われるのである。

参考文献

Butt, John (1996) John Anderson's Legacy, Tuckwell Press Ltd, Scotland.

Checkland, Olive (1981-82) 'Scotland and Japan, 1860-1914, A Study of Technical Transfer and Cultural Exchange',

Bakumatsu and Meiji: Studies in Japan's Economic and Social History, London School of Economics, London.

Dyer, Henry (1879) The Education of Engineers. Imperial College of Engineering, Tokyo.

Dyer, Henry (1886) Letter of Application for Post of Chair of Naval Architecture and Marine Engineering at the University of Glasgow.

Dyer, Henry (1889) The Foundation of Social Politics, Paper Read at the Ruskin Society of Glasgow.

Dyer, Henry (1890) Christianity and Social Problems, Address Delivered at Bridgeton Free Church, Glasgow.

Dyer, Henry (1905) Dai Nippon, the Britain of the East: A Study in National Evolution. Blakie, UK.

Glasgow Herald (1918) Obituary Notice, 26 September, Glasgow.

McNab, Robert (1872) Testimonial for Henry Dyer on the Occasion of His Appointment as Principal of the Imperial College of Engineering, Glasgow.

Ross, David (1987) 'On the Trail of the Tartan Samurai', Glasgow Herald, Glasgow.

The Scots Commercial Record December (1899), Dr Dyer's Admissions, Glasgow.

[筆者注]

- (1) 富山哲男「第1回The Henry Dyer Symposium (ダイアー記念シンポジウム) 報告」, 東京大学『工学部ニュース』No. 315 (1996年6月1日) 3頁 ; 「第1回The Henry Dyer Symposium (ダイアー記念シンポジウム) 開かれる」, 東京大学『学内広報』No. 1064 (1996年6月3日) 6頁。これらの

資料は、中野 実先生（東京大学史料室）よりお示しいただいた。

- (2) Industrial Globalisation—Issues, Strategies & Case Studies.
- (3) The Henry Dyer Symposium, Industrial Globalisation, Issues, Strategies & Case Studies. University of Strathclyde, 1996.
- (4) The Henry Dyer Symposium (Tokyo), The University of Tokyo, School of Engineering, 1997. 本シンポジウムについては、新井民夫「The Dyer Symposium報告」、東京大学工学部ニュース編集室「工学部ニュース」No. 325・326・327（1997）1－2頁にも紹介されている。
- (5) K. Ishihara, 'Henry Dyer's Contribution and His Legacy towards 21st Century,' in ibid., pp. 36-41. 報告題目名はシンポジウムのファイナル・プログラムの表記による。次の注(6)も同じ。
- (6) L. Hart & R. Hunter, 'Henry Dyer—A Man with a Mission', in ibid., pp. 42-49.
- (7) 旧工部大学校史料編纂会「旧工部大学校史料附録」昭6, 100-102頁より再引。
- (8) 同上, 102頁。小伝は、寄贈図書の見返しに貼付されている。「ダイエル博士記念図書引」と題し、「此書ハ元工部大学校卒業生並ニグラスゴー会ノ有志相謀リ元工部大学校都検故ヘンリー・ダイエル博士ノ記念トシテ大学ヘ献ジタルモノ」と始まっている。たとえば, G. A. Hool & N. C. Johnson eds., Handbook of Building Construction. Vols. I & II (N. Y. , McGraw-Hill Bookcompany, 1920) 参照（同書は東京大学大学院工学研究科機械系図書室に所蔵）。本報告書の第4章第1節参照。
- (9) Dai Nippon, The Britain of the East, A Study in National Evolution, London, Blackie & Son, 1904, p. vii.
- (10) 北政巳「工部大学校の『お雇い英人教師』教師団の系譜」『自然』1983年11月号, 101頁: 同『国際日本を拓いた人々』（同文館, 1984）107頁。同「工部大学校都検ヘンリー・ダイアー」梅溪昇編『ザ・ヤトイ お雇い外国人の総合的研究』（思文閣, 1987）302頁, その他。

(11)ただし、「まえがき (Introduction)」は訳出することを省略した。ここでは、H. ダイアーとの家族関係、ならびにテーマ設定に至るこれまでの研究経緯が紹介されている。本稿の翻訳にあたっては、松村好浩先生（姫路獨協大学）よりご教示をえたことを記して、多謝する。

(12)The Henry Dyer Symposium (Tokyo), *op. cit.*, p.134.

(13)副題は、シンポジウムの『プログラム』（日本語）には「使命を帯びて」とあるが、『プロシーディングス』所収の英文原稿に忠実に、「使命を帯びた男 (A Man with a Mission)」と訳出した。

第3節 ヘンリー・ダイアーと田邊朔郎

1. 日英交流の推進者

近代日本が開国するとき、大勢の外国人教師が関与した。かれらは教育の実践、学校の経営、学事にかかわる献策という職務を遂行したほか、日本研究という成果を残したことが知られている。

日本での活躍にとどまらない。任務が終了し母国に帰ってからも、日本と緊密な関係を保ちつづけて、内外の交流を促進したものもいる。今いう国際交流の先駆者といってよいであろう。

日本人留学生の受け入れとか、日本が海外の国際博覧会に参同するさいに便宜をはかったり、通信員となって日本の海外への紹介を担当したものもいる。親密な師弟関係をいつまでも保ちつづけ、おりおり指導と助言を与えて、日本教育の近代化と自立化を支援したものもいる。

ヘンリー・ダイアー (Henry Dyer) こそそうした一人であった。工学寮および工部大学校といて、東京大学工学部の前身校の都検 (教頭) として学校経営にあたったほか、土木・機械学教授として工学教育制度の基礎づくりに貢献したお雇い教師である。滞日中、ダイアーの薫陶を受けたものは 136 名に及んでいるといわれる。故郷のグラスゴウに帰ってからは、日本研究を推しすすめ、その成果を『大日本、東洋の英国 (Dai Nippon, the Britain of the East)』や『世界政治のなかの日本 (Japan in World Politics)』などという大著にまとめて世に問うた。明治35 (1902) 年には日本政府の帝国財政及工業通信員に任ぜられたし、グラスゴウに留学してきた日本人学生の生活と教育を支援もした。外遊の機会に立ち寄った教え子には、指導と激励をなすこともしばしばあった。

のちに東京帝国大学名誉教授の称号を受けたり、勲三等旭日中綬章、勲二等瑞宝章が授与されたのも、そうした功勞による。叙勲調書には、「本邦ヨリ英国ニ渡航スル諸学校教授文部省留学生等」に対する支援はもちろん、「殊ニ日

露戦役中ハ終始克ク帝国政府ニ対シ好意を表シ絶ヘス有益ナル諸報告ヲ為シ大ニ利益ヲ与フル等其功劳顕著ナリ」と明記されている。

2. ダイアーとの再会

そんなダイアー先生を慕いつづけて、二度までグラスゴウの自宅を訪ねた教え子がいる。田邊朔郎（1861-1944）がその人である。わが国における水力発電事業のパイオニアであり、琵琶湖疎水工事を計画し実現したことで知られる。

朔郎がダイアーを慕うのは、工部大学校に学んで指導を受けた縁による。明治8（1875）年5月に工学寮小学校へ入学、10（1877）年4月に工部大学校へ進学し、土木学を専攻している。16（1883）年5月に卒業するとき、ダイアーはすでに帰国していたが、「成績が拔群というだけでなく、独創性を合わせもつ」朔郎は、いち早くダイアーの目にとまったはずである。『琵琶湖疎水工事計画』という卒業論文は一大雄篇で、そのできばえに外国人教師は舌を巻いたという。

朔郎が最初にダイアー宅を訪れたのは、明治33（1900）年のことである。

「学術研究」という目的で、「韓、清ヲ経テ欧州」までという旅行免状をとり、5月13日に長崎から出帆。ヨーロッパ視察の途次、ロンドンからグラスゴウに入り、8月13日に自宅を訪ねている。ダイアーが日本を離れたのは明治15（1882）年7月14日のことだから、実に18年ぶりの再会である。

ダイアー宅は、グラスゴウ大学近くのハイバラテラス8番地にあった。現在のハイバラロード52番地にあたる。宅は屋根裏部屋をいれれば四階建てで、うしろには「古木旧苔に富める庭園」を構えていたという。

馬車を下りて入り口の鈴を押すと、夫人の出迎えをうけた。二人のあいさつをきいて、ダイアーが扉を開いた。白髪の人になられたであろうと思っていたが、あにはからんや、「其若き容貌顔色つやつやしく活気迫るが如く」であった。18年前の先生そのままの感じであった。夫人の方は、帰国された時よりもずいぶん年をとられたようにみうけられた。

室内に導かれると、一段と懐旧談がはずんだ。ダイアーは朔郎の活躍ぶりに

いつも関心を払ってきたといい、「君の名は英国の新聞紙などでも折々見て居るが、又能く成功して居ることも知って居る」と喜ばれた。ほかの教え子たちの活躍についても報告すると、おおいに喜ばれ、「ソレは諸君の勉勵にも依ることであるが、一は国の発達に伴ふ個人の進歩である、聞く所によれば日本は其後非常に発達して居る左うで、實に喜ばしい事である、東洋の天地には、今後日本人の活動を容るるの部域が頗る広いのであるから、君等も手に唾して起つてこの活動圏内の主動者と成らねばならぬ」と励ましたのだった。

やがて食事の用意が整うと、会談の場は食堂に移った。食堂こそ、ダイアーが家庭生活において重要視していたところである。家族一同が会し、卓をかこんで、斎しく和気あいあいの一時を楽しんだのだった。日本にいたころまだ小児であった長男は、今やグラスゴウ大学を卒業していた。乳離れして間もなかった次男と三男は、ベビーさんと呼ばれていたのに、「六尺三寸の先生に似て身長まさに六尺を抜くばかり」の大男に成長していた。一人娘もまたこれに加わった。

工部大学校時代に、ダイアー「先生は常に家を斎るの方法順序を話された」ものである。「イングリッシュホームの美はしさ」を伝えんとしたのである。そのダイアーに私淑していた朔郎は、教えにもとづいて家庭を作ってきた。それだけに、いまその有様を目の前にして、感慨深いものがあった。

書斎に席を移しても話ははずんだ。アームチェアに身をしずめながら、ダイアーはかつて工部大学校で教え論した事どもを、ふたたび話題にしたのだった。その一つに「過度なる愉快を取る勿れ」という教えがあった。かねてから機会あるごとに繰り返してきた警句であり、摂生を重んじ、品性を尊び、快樂をむさぼらない生き方を大事にせよ、という教えなのである。朔郎もこれに従い、つねに平生を規律する戒めとしてきたのだった。

朔郎は、どうしても尋ねたいと思っていたことがあった。わずか20代の青年ダイアーが、工部大学校の創立と工学教育の基礎づくりという大事業をよくなしえたのはどうしてなのか、その秘訣についてである。ダイアーによれば、第一に、若者が「大なる事業を担任するには人に信ぜらるる所以のものなくては

ならぬ」というのである。卒業直前に朔郎が手を負傷しながらも学業課題を実に見事にこなしたことに触れ、ダイアーのいうには、「卒業の前に当り君は実地演習に於いて右手を傷け、用ひ難きに至りしも少しも之に屈せずして、一切の卒業試問、卒業論文製図を認め、見事なる卒業をせられたのは、是ぞ君が困難に打ち勝つことの出来ることを人に信ぜしめた試金石である、余のランキンに知られたのも、亦た理由なくてはならぬ事である」。ランキンとは、グラスゴウ大学の恩師W. J. M. ランキン教授のことである。

もう一つ、人望こそが大事だとも語っている。「一体創立事業は非常の注意を要する者である、世間ではつまらぬ事によって大事業の全体を破壊する者が少なくない、凡そ人は其職務に必要な学識才幹の外、人をして敬服せしむるの徳がなくてはならぬ、教育を司どるものは教育以外の天地に人を心服せしむるもの人望がなくてはならぬ」というのである。

このとき、『明治工業史』編纂のことも話題にのぼったにちがいない。朔郎は、同書編纂の「計画を打ち明けて力強い励ましの言葉を貰い、以後ひとりで資料の収集に努めてい」たということである。そのご編纂委員長として尽力し、ついに同書は昭和6（1931）年に完成をみている。

ダイアー宅訪問の2回目は、大正2（1913）年になってからであった。門司を出港し、釜山、奉天、大連、パリそしてロンドンを経て、5月末日にグラスゴウに入り、翌日の6月1日に訪れている。それより前、ダイアーは『世界政治の中の日本』（1909）という大著を上梓して、日露戦争後に世界列強として登場した日本の国際社会に果たすべき役割について論ずる一方、日本の経済財政事情などを紹介する論文も精力的に発表し、日本問題の権威者、日英協力の推進者とみなされていたのだから、そうしたことも話題にのぼったにちがいない。

朔郎はダイアー宅訪問後の4日にはフォース橋を見学した。6日には墓地と水道を見学し、8日にロンドンへ戻っている。フォース橋とは、エディンバラ近くのフォース湾に架けられた鉄橋で、「片もち式鉄橋」で知られる。特異な円筒形の部材によるその工法は、朔郎の後輩にあたる渡辺嘉一（1858-1932）

が、工部大学校を卒業してからグラスゴウ大学に留学中に、現場での実地修業に出むいていたころ提案した、といわれている。

朔郎が訪ねたころ、ダイアー宅は市内のハイバラテラスにあったと先に記したが、これより前、日本から帰国後しばらくの間は別のところにあった。レンジィ (Lenzie) という、グラスゴウ市内から北東へ8マイルほどのところにある町である。「ダンロワン (Danrowan)」と名づけていたその家は、グラスゴウ・エディンバラ鉄道のレンジィ駅の近くにあった。今も、レンジィ駅の南側の、林に囲まれた広大な屋敷のなかに、その邸宅は残っている。クラシック・スタイルの家であって、同型の家が並んでいるから、ここは中産階級むけの郊外住宅地として計画され、建てられたようである。

3. ダイアーの日本研究

最初のダイアー宅訪問からしばらくすると、待望の『大日本、東洋の英国』が贈られてきた。背と平には金箔の菊花御紋が印刻されており、450頁をこえる大著である。前書きにあるように、「世界が19世紀後半の奇跡とみなしたものの、すなわち、国際社会の一員として台頭してきた日本に隆盛をもたらした原動力は何であったか」について分析し、やがて日本が「東洋の英国」になるよう期待した本である。

贈呈されたのは明治37 (1904) 年12月15日。そこには次のような献辞がつづられていた。

「To prof. Tanabe Sakuro, a distinguished graduate of the Kōbu-Dai-Gakko, who has done good service to Dai-Nippon. As a mark of friendship and esteem」

「謹呈。田邊朔郎殿。工部大学校の優等生にして、『大日本』の完成に多大な貢献をされた、教授の友情と敬意の印として。」というのだから、朔郎は執筆にあたって協力したのであろう。同書には各章の終わりに参考書文献が掲げられ、そのなかに日本語の文献もあげられている。

ダイアーから贈られた図書は右の二冊にとどまらない。『教育と仕事 (Edu-

cation and Work, a Lecture)』(1906), あるいは『教育と国民生活 (Education and National Life)』(1912)と題する図書も贈呈されている。表紙の頭とか遊び紙とかに, 「With the Author's best wishes」とか「To Sakuro Tanabe with the good wishes of Henry Dyer」とかいう献辞がそれぞれ書きこまれているから, それとわかる。

ダイアーは大正7(1918)年9月25日に死去した。その報は, 27日に, ロンドンの国際通信社から配信された。日本の各紙は10月1日の紙面で報じたが, このとき, 朔郎は哀悼記事を書いた。「逝けるダイヤー博士, 我工業界の恩師を悼む」と題し, 『大阪毎日新聞』(大正7年10月5日, 6日)に寄稿している。「博士が如何に我が工業界の爲めに貢献するところ多かりしかを知らんと欲せば人は先づ如何にして維新以後に於いて我が工業教育の端緒が開かれたかを知らねばならぬ」という趣意から, 岩倉使節団の欧米視察の途次, 副使の伊藤博文が英国で日本の工業開発上の相談をジャーディン・マセソン氏に仕掛けたことにはじまる, という話を紹介している。

4. ダイアーの座右銘

朔郎とダイアーの右のような親交ぶりは, 田邊康雄『びわ湖疎水にまつわる, ある一族のはなし』(1991, 私家版)に詳しい。著者は朔郎の孫であり, 朔郎が設計監理した琵琶湖疎水事業の推進者である北垣国道京都府知事のひ孫にもあたる。西川正治郎編『田邊朔郎博士六十年史』(1924)なども参考になるが, ダイアーと朔郎の親密なかかわりぶりについては, 同書にかなわない。

同書には, ほかに, 朔郎がダイアーをいかに尊敬していたかを示す話が披露されている。朔郎の書斎にはダイアーの肖像写真が掛かっていたとか, 朔郎はダイアーから贈られた座右銘を大切にしていたとかいった話である。

座右銘というのは「Not how much I did, but how well I did.」であって, これを朔郎がどれほど大事な指針としていたことか。琵琶湖疎水記念館に展示されている疎水工事記録帳にも, よくあらわれている。これは明治20(1887)年2月から23(1890)年11月までの工事上の諸問題を書きとめた帳簿だが, 5

冊あるいずれの帳簿にも、表紙に

「It is not how much we do, but how well. The will to do, the soul to dare.」

と筆書きされているのである。わたしが意をもちいたこと、それはたくさん仕事をするのではなく、立派に仕上げることである。やる意志、やってみる勇気が大事である、といった意味であろう。ダイアリーの生き方がしのばれる言葉である。

第4節 工部大学校都検ヘンリー・ダイアー——日英交流の推進者（翻訳・解説）

1. ヘンリー・ダイアー

ヘンリー・ダイアー（1848－1918年）は1872年、25歳のときに、東京に工部大学校⁽¹⁾を設立しその校長になるよう任ぜられた。10年後にはグラスゴウに戻り、そこで余生を送りながら、大学院体験を求めて西部スコットランドにやって来た数多くの日本人技術者や科学者の案内人、カウンセラー、友人として、私的な活動を続けた。半世紀の間、東京であれグラスゴウにおいてであれ、日本における創生期の工学が発展するのに重要な貢献をなしたのだった。

ヘンリー・ダイアーは、1848年8月16日、ラナークシャーのボスウェルにあるベルシルのミュアマドキンというところで生まれた⁽²⁾。一家はラナークシャーのショッツ鉄工所に移り住んだ。ダイアーはこのショッツのウィルスン基金学校で学び、その後はグラスゴウの克蘭ストンヒルにある鋳物工場のジェイムズ・エイトキン社の徒弟になった。ヘンリー・ダイアーが大学への入学を出願して工学を学ぶべきであるという提案をだれがしたのかは、分かっていない。グラスゴウ大学（1451年創立）は、女王の名において、評議会の反対があったにもかかわらず、1840年に、ロンドンの政府によって工学講座の開設を強いられていた。1860年代までに、W. J. M. ランキン教授⁽³⁾の指導のもとに、工学はグラスゴウ大学における有力な科目になった。幸いなことに、その当時、マンチェスターの技師ジョウゼフ・ホイットワースが工学の奨学金を創設するための資金を残してくれた。ヘンリー・ダイアーはこのホイットワース奨学金⁽⁴⁾を授与されたので、大学に通うのに必要な財政支援を得たのだった。ダイアーの奨学金は「労働者」であるかれに授与されたのであって、「学生」としてではなかったということは注記しておくべきであろう。かれは優秀生であって、数々の学級賞その他の栄誉を獲得した。

ダイアーが勧められて日本で奉職した1872年に、かれがもっていた資格は工

学証書（当時はエンジニアになるのに必要な資格であった）、文学修士、理学士であった⁽⁵⁾。ヘンリー・ダイアーは、東京の工部大学校の校長になるのに理想的な候補者であった。見習いエンジニアの身分で、みずからの手で機械工として何年間も働いたことがあった。それに、労働者むけのアンダソン・カレッジの夜間学級に出席したのだった。その後、グラスゴウ大学に何年間か学んで卒業した。そのうえ、日本での職務にとって重要なことであるが、雇い入れた日本人に対する関係は、援助的、融和的かつ協力的なものであった。

ダイアーは、1873年、命を受けた同僚たちと一緒に日本へむかう航海中に、東京の大学校の組織について論じあっていたと思われる。日本に着くやいなや、長州五人組の一人である山尾庸三⁽⁶⁾（当時は日本政府の工部少輔）に迎えられた。山尾は（1866年から1868年まで）グラスゴウで勉強し、クライド河畔にあるナピエ造船所で働いたことがあった。この山尾と会ったとき、ダイアーはかれがグラスゴウのアンダソン・カレッジで勤労者の夜間学級に一緒に出席した男であったことに気づいた。

ダイアーと山尾は力をあわせて、工部大学校⁽⁷⁾を創設し、それを大いに発展させた。同校は（1886年に）東京帝国大学の工学部になるまで、13年間ほど独立した教育機関として存続した。

工部大学校の教授陣（1873－86年）

- | | |
|--------------------|---------|
| 1. ヘンリー・ダイアー | 都検、機械学 |
| 2. エドワード・ダイヴァーズ | 都検、化学 |
| 3. W. E. エアトン | 物理学・電信学 |
| 4. ジョン・ミルン | 地質学 |
| 5. デイヴィッド・H. マーシャル | 物理学 |
| 6. フランク・プリンクリー | 数学 |
| 7. ジョサイア・コンダー | 造家学 |
| 8. T. アレグザンダー | 土木工学 |
| 9. A. W. トムスン | 土木工学 |

10. ジョン・ペリー	土木工学
11. チャールズ・D. ウェスト	機械学
12. W. M. アンガス	機械学
13. ジョージ・コーリー	機械学
14. J. M. ディクソン	英語
15. W. G. ディクソン	英語
16. ウィリアム・クレイギー	英語
17. G. S. ブリンドリー	赤羽工作所, 機械学監督
18. トマス・グレイ	電信学
19. エドマンド・F. マンデー	図学
20. W. バー	図学
21. ロバート・クラーク	図学
22. アーチボルド・キング	模型学
23. R. D. ライマー・ジョウズ	測量学・予科
24. G. ハミルトン	予科
25. F. サンディマン	予科
26. ジョージ	予科
27. ラクデン?	予科
28. マクレイ	予科

出典：旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料，1871～1886年』

（東京，旧工部大学校史料編纂会，1931年）353－354頁；H. J. Jones,

The Meiji Government and Foreign Employees, 1868-1900 (PhD

[Thesis], Michigan, 1967) および, Live Machines, Hired Foreigners

and Meiji Japan (Tenterden: Paul Norbury Publications, 1980).

ここにあげた教授陣の大半が日本に数年滞在したし，任務終了後も在住することを選んだ者もいた。教授陣のうち，1873年から1886年に至るまで勤務した

者は一人もいなかった。ヘンリー・ダイアーは1874年の春、横浜で結婚した。婚約者のマリー・ファーガスンが1874年5月19日に横浜に到着し、結婚式は1874年5月23日に、英国国教会の儀式にのっとり英国公使館でおこなわれた。英国公使ハリー・スミス・パークスが出席し、結婚証明書に署名をした。立会人はデイヴィッド・マーシャル（工部大学校から）、ウィリアム・ウォルター・カーギル、エドウィン・ホウィーラーその他一名であった⁽⁸⁾。

日本から出立するとき、ヘンリー・ダイアー夫妻は「客室の4人の子ども、それに召使とともに」、日本をあとにした。1882年7月14日に、英国蒸気船アラビック号で、サンフランシスコに向かったのである⁽⁹⁾。

2. 工部大学校

工部大学校の学生は6年の課程を履修することになっていた。

第1・第2学年 全学生が履修する1年生・2年生課程には、英語学（英語および英作文）、地理学、数学初歩、機械学初歩（理論および応用）、理学初歩、化学、図学（幾何図および機械図）が含まれる。

第3・第4学年 各学生は、第3学年のはじめに六つの選択科目、すなわち土木学、機械学、電信学、造家学、化学・冶金学、鉱山学のなかから専攻する1科目を選ぶ。

第5・第6学年 最後の二年間はすべて実習にあてられることになっていた。ただし、学内で、試験だけでなく特別講義も実施された。

第1・第2学年

こうした最初の工部大学校生を教授するのになんの難しさもなかったとしたら、驚きであろう。当時、授業はすべて英語でおこなわれ、したがってどうしても英語を話したり理解したりする段階にない学生もいたはずである。確かに授業の質はよかったし、英国人教授は誰もが有能な人たちであった。しかし、19世紀最後の四半期にあって、現代の水準からすると、想像力が乏しく、独創性に欠けるものであった。夏目漱石はJ. M. ディクソンの授業についてする

どい意見を述べている。「英語の文章を読むとき、発音が違っているといってディクソン教授からしばしば叱られた。『シェクスピアのフォウリオウ判は何種類あるか?』とか、『スコットの作品を年代順に述べよ』とかいうような試験問題を出された。そのような問題は英文学の勉強になんの役にも立たない。」

(10)

最初の二年間の授業で、教師たちは学生たちの長所と短所を知るいい機会をえたようである。日本人学生はそれまでは何事も暗記するよう教えられていたが、エンジニアになろうとする者にとってこれは望ましいやり方ではなかった。工部大学校での近代的な学習では、やがて一つのテーマか一つのプロジェクトについての知識を活用して、さらに前進するための最良の方法を導き出すことができる学生を必要としたのであった。

教授陣は学生たちの「立派なふるまい」と「熱心な態度」をただただ称賛するばかりであった。確かに学生たちはいつも勉強のしすぎであるように思われた。開校時から1878年まで同校で自然哲学を教えたエアトン教授もおおいに感激し、自分が受けもった日本人学生は「西洋の学生よりも態度はずっとおとなしく、勉強ぶりが熱心であり、適応性がある」と述べている。しかし、かれは警告ぎみのことばも発して、「日本の若者は不利な条件のもとで努力している。つまり、観察力が乏しく、……知識はすべて授業で学んだとおりの形式的な知識であり、型どおりの勉強からはえられない知識については比較的無知である」といっている⁽¹¹⁾。日本の教え子たちの反応ぶりにエアトンが敏感であったことから、学生たちは、西洋では日常生活の一部であった機械類を知ることなく、前工業社会のなかで生活していたため、大きく飛躍するよう求められたということが想像できる。この青年たちは新旧を折衷させなければならなかったが、それはかれら自身にとっての負担となった。

初期のたいへん熱心な学生たちのなかでさえ、ほかにもいくつか難しいことがあったことは確かである。たとえば、西洋における実際の土木事業では、ふつうは職人がやる手仕事を、土木監督自身がいかにしてやるかを学ぶよう求められた。学生たちはそうした土木監督になることを期待されていたので、みず

からの手を汚す覚悟でいなければならなかった。侍の伝統のなかで育った人たちには、下賤の仕事をなすことを通して学ぶ必要があるということをも認めるのは難しかったのである。自分から下賤な課題にとりくむことができるようになるという、発見的な教育を導入することは、古い日本の伝統を断ち切るものであった。

日本人学生がどれほどの成果をあげたかを判断するのは難しい。もっとも優秀な学生のなかには、ウィリアム・エアトンやジョン・ペリーのような教師の要求に応えることのできる者もいた。一部の卒業生は、その後、政府奨学金をもらって西洋でさらに勉強する学生もいた。そのなかでもっとも優れた学生たちは、西洋の大学において当地の学生とじかに競いあって、賞をいくつも獲得したのである。

日本人を教える若い教授たちは、確かにとても有能かつ情熱的であった。ほとんどの場合、その後、英国内で際立った経歴をたどったのである。

第3・第4学年

どの学生にとっても3年生のはじめに重要な決定がなされる、といってもよいであろう。この3年生と4年生の教育課程は工部大学校の教育の中核をなすものであった。選択した専攻科目を十分に学習するのに使われるこの2年間は、日本人学生を満足のゆく能力レベルに到達させることが期待された。必然的に、学生は西洋の流儀で教えられた。

学生たちが自分の専門を独自に選ぶことが認められていたかどうかは、定かでない。土木工学を選んだ者は道路か鉄道で働くことになるのを予期できた。工場は機械技師を必要としたし、日本その他で機能していたあたらしい電信システムは電信技師を必要とした。鉱山がまだ地面から掘り出される簡単な立て坑であった国では、近代的な鉱山技師がぜひとも必要であった。近代産業、とりわけ化学産業と織物産業は訓練をうけた化学者を必要としたし、鉱業が近代化されるなら冶金学者がぜひ必要であった。

第5・第6学年

1870年代と1880年代に、日本がまだ工業化されていない状態にあったことを考えれば、工部大学校は学内で技術者を養成するより手はなかった。普通、西洋では、そうした学生は工場か工作場での実体験を求めたであろう。だが、このころ、日本でこの選択肢を利用することはできるものではなかった。

もともと、実験設備は、あきらかに40名から50名までの学生を収容できるだけのものだった。ダイヴァーズ教授は、化学実験室を鉱山学および電信学を専攻する3年生と応用化学および冶金学を専攻する4年生が共同で使用するよう実習を編成した。ダイヴァーズ教授が報じたように、「必要な器具や化学薬品はすべて工部大学校から学生に無料で支給され、どの学生も全部そろった器具や化学薬品を自分専用で使った」⁽¹²⁾。しかも、土木学および造家学の訓練は、一般図学教室と造家図学教室を利用することができた。

しかし、何とんでも人を感嘆させたのは自然哲学の授業用のウィリアム・エアトンの実験室であった。ジョン・ペリーが以下のように説明している。

「1875年にわたしが日本に着いたとき、世界のどこにも見られない、すばらしい実験室に出あった。グラスゴウ、ケンブリッジ、ベルリンには優れた科学者が三人いましたが、そのケルヴィン、マクスウェル、ヘルムホルツの各実験室は、このエアトンのものと比較すれば、言うに足らなかった。立派な建物、見事な精選された器械があり、休むことを知らず、熱心なまなざしの、実に独創的で個性豊かな責任者がいた。こうしたことが、わたしが日本で目にしたことです。」⁽¹³⁾

実験室は実に有用なものであったが、エンジニアはそれ以上のものをさらに必要としたのだった。日本には近代的な工場、製作所、造船所は皆無であったので、なお一層の設備の充実がなされたのである。

赤羽工作所が工部大学校の実習場として設立された。ヘンリー・ダイアーは幸運にも1870年代に東京の工部省の管轄下で工部大学校を経営できた、と確信

をもっている。この工学実験場は、日本の工業が確立するうえでますます大きな役割をはたすことになった。しかし、初めのころは、工部大学校の付属物として重要な機能をいくつももっていた。工部大学校の学生はここで実習をうけることができたし、また、日本のあたらしい時代の技術者の中核になるはずの、労働者や見習い工を大量に受け入れたのだった。この実験場が完璧に機能したとするなら、320名（1876年）から370名（1884年）の「労働者や見習い工」が訓練を受けていたであろうと思われる⁽¹⁴⁾。

ダイアーにとって、赤羽時代が最盛期であった。1881年には、『赤羽工作所』という題名で図解入りの目録が作られた⁽¹⁵⁾。これには数多くのエンジンが取りあげられていた。蒸気機関、船舶機関、機関車用ボイラー、各種のポンプ、消防車、起重機、サトウキビ圧搾機、機械工学の数々の工具、さらには鉄製品や装飾欄干や門扉が収録されている。

この目録には機械の縮尺図とともに、各機械について日本語と英語の説明が含まれている。同書は、西洋の製造業エンジニアやその代理人たちが、利用できるすべてのものについて図解を入れて説明するために作った数多くの本と、よく似ている。この目録は、おそらくダイアーの指図で、赤羽工作所監督官ブリンドリの手で作成されたのであろうが、ここで活用できる機械類を実際に説明したものなのである。赤羽工作所では数おおくの機械が製造されたのであるが、すべてがそうだったとは記されていない。

明治の日本にいたアメリカ人少女クララ・ホウィットニーは、工部大学校の諸設備を観察して、こう述べている。

「それから、劇場のようになっている教室を通り抜けて、工部大学校を見学しにいった。教室の椅子は一番低いところから天井にくっつきそうなところまで段々になっており、先生の机は低いところにあった。化学科に寄ってから図学室にいったが、そこでは大勢の男子学生が建築の設計図に取り組んでいた。」⁽¹⁶⁾

この工部大学校は、日本最初の近代技術者たちの養成上注目すべき役割をはたした。学生たちの熱意と若い教授たちの献身ぶりが、先駆者として優秀な人たちを生み出したのだった。このような日本人技術者のなかの最優秀者を、日本政府は留学させた。「留学」といっても、教室での学習だけでなく、工場、事務所、あるいは造船所で実習するのが普通であった。

そうしたぜいたくな措置を講じてもらった学生とは、いったいどんな人たちであったのであろうか？ 日本人技術者の第一世代となった若者たちは、過去よりむしろ将来のために教育することを決断した父親たちの息子であった。その大半は西南日本、つまり旧体制への反抗に加わった地域および藩の出身者であった。

工部大学校の二人の学生の例を取りあげてみよう。

渡辺嘉一（1858－1932年）は1883年に工部大学校を卒業したのち、グラスゴウ大学でさらに勉学するため1884年にスコットランドへむかった。後には、当時構想中のフォース鉄橋（1890年完成）の設計主であったベンジャミン・ベイカー社⁽¹⁷⁾という土木会社に勤務した。渡辺は、フォース橋を建設するさいに用いられた片持ち梁の原理を示した、有名な写真の中央にいる人物である。帰国するや、日本土木会社の主任技師に任ぜられた。後年、参宮・成田鉄道会社や東京・京都鉄道会社の取締役になった。

もう一人の前途有望な物理学者が、志田林三郎（1855－92年）であった。1879年の工部大学校第一等卒業生であり、東京の実験場でJ. W. エアトンのもとで勉学に励み、電気工学を専攻研究した。志田は、グラスゴウでは1880年代初頭にケルヴィンの指導を受けて⁽¹⁸⁾電磁気と電信術の研究をした。かれはケルヴィンの紹介状をもってドイツの何人かの学者を訪れるなど、遠方にまで赴いたのであった。1883年に日本に戻るとすぐ、工部大学校の自然哲学教授になったが、このポストはエアトンがロンドンに戻った1879年以来空席のままになっていたものである。志田は、日本の電信技術の発展にも大いにかかわった。しかし、1892年に37歳で死去した。教育に猛烈に専心して上級のレベルに達したのちに、結核のような病気で、志田のような若者が死去するのは、当時の日本

では珍しいことではなかった。

3. 再定住の苦悩

ヘンリー・ダイアーは、35歳の、1882年夏に日本を離れ、ふたたび戻ってくることはなかった。日本政府はダイアーの業績を惜しみなく称えた。勲三等旭日章と、工部大学校の名誉校長の称号が授与されたのである。かれはグラスゴウにふたたび定住し、ここで余生をおくった。

工部大学校の大半の若い英国人教授とは異なり、ダイアーは大学での有給の専任職にうまく戻ることができなかった。1883年と1886年の二度、グラスゴウ大学にあたらしく設けられた造船学の教授職に出願したが、この応募はうまくいかなかった⁽¹⁹⁾。10年にわたり、東京の総合的工科大学の管理職を勤めたのちに、造船学教授になろうとするのは不利であったようである。船舶の意匠やそのエンジンはめまぐるしく変わりつつあった。造船学教授になろうというダイアーの意図は、思慮に欠けていたように思われる。ダイアーはまた、エディンバラの再編されたばかりのヘリオット・ワット・カレッジの校長ポストにも応募した。これはかれの資質にふさわしかったであろうと思われるが、しかし、この好機はエディンバラ市長の決定票でもって失われたのだった⁽²⁰⁾。ダイアーは、マクウォーン・ランキンのようなだれか長老の強力な支援が、ぜひとも必要だったにちがいない。ランキンは1872年になくなっていたが、きっとダイアーに助言を与え、かれを推薦したことであろう。

ダイアーは、高い代償を払って10年間東京の工部大学校の校長となったのである。とはいっても、けっして活動を停止したわけではなかった。由緒あるアンダソン・カレッジのために大いに尽力した⁽²¹⁾し、それがグラスゴウのロイヤル科学技術カレッジ（現在のストラスクライド大学）に変容するのを支援したのだった。1887年から1918年に亡くなるまで、ダイアーは同カレッジの終身理事であった。最近も、ヘンリー・ダイアーは、ケイト・トムスンの手であらたに二つの頭像が彫られ、東京大学とストラスクライド大学で除幕をされ敬意を払われている。ストラスクライド大学でヘンリー・ダイアーの除幕式がおこ

なわれたのは、1998年11月16日であった。ダイアーは評判の高い教育者になったのであり、時間をとられるいくつもの要請に応えたし、グラスゴウ教育委員会の委員（後には委員長）でもあったのだった。また、グラスゴウで「引退」していた35年の間ずっと、同市で勉学している日本人学生を支援したのだった。

・・・

ヘンリー・ダイアーは、著者としても見過ごせない晩年をおくった。かれの処女作⁽²²⁾は工部大学校長としての職業柄、どうしても欠かせない一冊であって、『校長による報告書』（東京、工部大学校、1877年）を作成したのである。続いて『エンジニアの教育』（東京、工部大学校、1879年）を著し、また、グラスゴウに戻って以後は、技術者教育に関する小冊子を何編も書いた。船舶機関（造船学に対するかれの関心を反映している）、科学の教育、大学に工学部を創設する必要性についての論説もまた執筆した。

1895年に、『産業進化論』（ロンドンおよびニューヨークのマクミラン社）の出版をもって、ダイアーはまた違った部門に関心を移した。これに続いて、『大日本、東洋の英国』（ロンドン・グラスゴウ・ダブリン・ボンベイのブラッキー・アンド・サン社、1905年）、1909年には『世界政治の中の日本』（ロンドン・グラスゴウ・ダブリン・ボンベイのブラッキー・アンド・サン社）が出されたのである。

『産業進化論』において、ダイアーは一種の社会主義を褒めたたえるかなり過激なアプローチをとっている。かれは、「それほど遠くない未来の社会は、個人主義、労働組合主義、協同組合、市政・国政の社会主義が混ぜあわさったものとなるであろう」と結論づけた。かれはやがて「思慮深い社会主義者をもたらす」ことになる、「社会化された個人主義」を提唱していたように思われる⁽²³⁾。しかし、「怠け者や同胞たちの墮落を食い物にして肥大する寄生虫たち」については、手厳しい判断を下した。

ダイアーは、いくつかある主題の中でも、とくに女性の地位についての考えをめぐらしている（第6章、110-123頁参照）。かれは工場などで働く女性について良識ある書き片をしたが、しかし、ほかの人と同じように、やはり生き

た時代の価値観を反映していた。かれが結論で書いた（123頁）ように、「女性らしい女性とは立派な母，献身的な妻，やさしい姉妹，家族のだんらんの物静かな管理者であり，したがって人の運命を形成するうえで遠大な影響をおよぼす」人なのである⁽²⁴⁾。

次作の『大日本，東洋の英国』（1905年）において，ダイアーは1868年以來の日本の驚異的な進展ぶりのことを，褒めたたえるように書いている。この『大日本』は日露戦争が終わった後に出版されたので，ダイアーがかなり日本に味方したのも驚くことではないであろう。実際，ダイアーと同僚たちは，日本の偉業は明治初期の日本における自分たちの先駆的事業によるものだと主張することもできたのである。

1909年に出版されたヘンリー・ダイアー最後の著書『世界政治の中の日本』は，世界のほかの国々との関係でみた日本研究である。ダイアーは幅広く読んでいたし，第一次大戦へと近づいていた当時において，西洋を悩ましていた軍備競争を十分に理解していたことは疑いない。しかし，たとえば，東アジアにおける日本観はかなり一面的であった。1894年・95年の日清戦争で中国が敗北した後，1895年に日本帝国の一部になった台湾について論じるとき，ダイアーは日本の統治は揺るぎないものであるが，「野蛮な先住民」や中国人のなかには日本の統治を受け入れるつもりのない者がいた，ということを知っている。韓国の場合には，ダイアーは伊藤博文公に信頼をおいている。ただし，韓国における日本の抑圧的な統治を多くの者が非難したということを知っている。

4. グラスゴウの日本人

グラスゴウは，少なくとも1914年の第一次世界大戦の勃発まで，ずっと日本人の技術者，科学者，造船家のメッカであった。グラスゴウの西の端，ギルモアヒルのグラスゴウ大学から数分の，ハイバラテラス8番地にあるダイアーの広々とした家では，いつも日本人が歓待されていた。それに加えて，1890年から（1941年まで）グラスゴウには名誉日本領事がいた。初代領事のA. R. ブラウンもまた，1913年に死去するまで日本人をこころよく受け入れたのだった。

グラスゴウが日本人に好まれたのには幾多の理由がある。1855年から1872年末に死去するまで工学教授の地位にあったウィリアム・ジョン・マクウォーン・ランキン(William John Macquorn Rankine)は著名なエンジニアであって、かれはクライド河畔の造船業者たち、とりわけジョン・エルダーと緊密にしながら活動していた。マクウォーン・ランキンの後継者で、1873年から89年まで欽定工学講座担当教授であったのが、ケルビン卿の兄ジェイムズ・トムスンであった。

そして、なによりも重要なのは、1883年に、クライド河畔の造船業者たちからの請願にこたえて、イザベラ・エルダーがジョン・エルダー造船学講座の基金を寄付したことである。これは世界で最初の造船学講座である。グラスゴウ大学のこのような特質を活用できたことから、当時、グラスゴウは日本人にとって最高のところであったのである。それに加えて、国際的に有名なウィリアム・トムスン、すなわちケルヴィン・オブ・ラーゴウ男爵が、1844年から99年まで自然哲学教授の席を占めた。ケルヴィンの力を活用することができ、しかもかれが日本人学生に対して親切であったことは、日本では周知のことであったのである。

日本人にとってダイアーが役に立ったことについては、疑いのないところである。1901年には、グラスゴウ大学が日本語を入学希望者が受験できる語学科目としてくれるよう要請する日本人学生を支援して、大学評議会に働きかけをした。大学がこれを認めたので、その後、この措置の利用を希望する日本人は、日本語の試験問題を受けた。夏目漱石は、ロンドンに滞在中の1900年代のはじめに、この試験委員であった。この任務に対して、夏目には4ギニーが支払われた⁽²⁵⁾。

ロンドンの大きな東洋貿易会社ジャーディン・マセソン社のヒュー・マセソンが、1860年代に、グラスゴウでは工学教育を受ける機会が豊富にあるということを、伊藤博文に最初に気づかせた⁽²⁶⁾ことは確かのようなのである。スコットランド人のマセソンは、青年のころ、グラスゴウ・カレッジの聴講生であったことがある。かれはまた、グラスゴウ大学の初代工学教授ルイス・ゴードンの親類でもあった⁽²⁷⁾。

ヘンリー・ダイアーがグラスゴウを立てて東京へ行き、そこに新設される工科大学の長になるという協定が、1872年後半か1873年はじめに結ばれたが、これは創生期にある東京の工学とグラスゴウの工学とを結びつける役をダイアーに担わせるうえで、決定的な機会となった。40年以上もの間、グラスゴウにはいつも日本人技術者がいた。ダイアー自身も、1918年に亡くなるまで、グラスゴウならびに西部スコットランドで日本人技術者を支援するネットワークの中心人物であった。

ダイアーが低い身分の出であったこともまた注目すべきことである。というのも、かれは、西部スコットランドで裕福になるためにアイルランドの郷里コークを離れた、アイルランド人労働者の息子であった。父ジョン・ダイアーはマーガリット・モートンに出会い結婚した。ヘンリー・ダイアーの学業面での進展はショッツのウイルスン基金学校でおおいに促進され、その後の大学での勉学はホイットワース奨学金のおかげで可能になった。晩年になって、ダイアーはグラスゴウ社会で高く尊敬される人物になった。東京でも、工学界においてヘンリー・ダイアーの名前と偉業が忘れられることはない。

[注]

- (1) もっと幅広く詳細な考察については、O. Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan 1868-1912 (Macmillan, 1989) 参照。同書は東京の法政大学出版局から刊行された日本語版も利用できる。また、ストラスクライド大学ウェブサイト <http://www.cs.strath.ac.uk/rbh/hd/index.html> も参照。
- (2) ラナークシャー、ビガーのブライアン・ラムビーに感謝する。
- (3) Anon, Appointment of Professor Lewis D. B. Gordon (University of Glasgow, Faculty of Engineering, 出版年不祥). Hugh B. Sutherland, Rankine, his life and times (Institution of Civil Engineers, London, 1973)
- (4) D. A. Low, The Whitworth Book (London, New York: Longman Green & Co., 1926) p. 34.

- (5) グラスゴウ大学は1873年に理学士号を導入した。ヘンリー・ダイアーとトマス・アーカートがこの理学士号を取得した同大学最初の卒業生であった。
- (6) 東京・六本木の山尾信一にご助力を感謝する。
- (7) 工部大学校の関連資料は、東京大学、グラスゴウのミッチェル図書館ダイアー・コレクション、グラスゴウ大学附属図書館、グラスゴウ大学アーカイブズに保存されている。
- (8) 1874年5月23日の結婚登録書については、ロビン・ハンターに感謝する。
- (9) Japan Weekly Mail (16 July 1882)を参照。加藤詔士に感謝する。
- (10) 'Introduction of Western Culture into Japan in the Age of her Modernisation', Tokyo Municipal News (1967) の付録7頁。
- (11) W. Ayrton, 'Report', H. Dyer, General Report on Imperial College of Engineering by the Principal (Tokyo, 1877) 所収。
- (12) E. Divers, 'Report', H. Dyer, General Report on Imperial College of Engineering by the Principal (Tokyo, 1877) 所収。
- (13) J. Perry, Central, Vol. 7 (1910) p. 708.
- (14) H. Dyer, General Report on Imperial College of Engineering by the Principal (Tokyo, 1877) 赤羽工作所の節, 39頁を参照。
- (15) 『赤羽工作所』東京の内閣文庫蔵。
- (16) C. Whitney, Clara's Diary (Tokyo and New York, Kodansya, 1981) p. 184.
- (17) B. Baker, The Forth Bridge. London, 1882, 参照。
- (18) 志田とケルヴィンとの通信文は、ケンブリッジ大学図書館所蔵のケルヴィン文書S126-S130参照。
- (19) J. F. C. Conn, Department of Naval Architecture and Ocean Engineering, the University of Glasgow, 1883-1983 (Glasgow, Marine Publications International Ltd., 1983), およびH. Dyer, Testimonials (Court Papers, University of Glasgow Archives) 参照。
- (20) H. Dyer, Testimonials, pp. 31-32, および Glasgow Herald (15 May 18

86) 参照。

(21) A. R. Buchan (ed.), A Goodly Heritage, A Hundred Years of Civil Engineering at Strathclyde University, 1887-1987 (Glasgow, 1987)

参照。

(22) ヘンリー・ダイアーの出版物の詳細については, O. Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan (1989) 中の精選文献目録, およびストラスクライド大学のHenry Dyer Website, <http://www.cs.strath.ac.uk/obh/hd/index.html> も参照。

(23) H. Dyer, The Evolution of Industry, pp. 274-275.

(24) H. Dyer, The Evolution of Industry, Chapter 6, pp. 110-123.

(25) Glasgow University Archives, Court Minutes, Count Minutes, 1901.

(26) 本書に所収のAndrew Cobbing, 'Ito Hirobumi in Britain' を参照。

(27) H. M. Matheson, Memorials of Hugh M. Matheson (London, 1899).

[訳者解説]

(1)

本稿は、このたび刊行された J. E. ホア編『英国と日本、人物評伝』第3巻 (J. E. Hoare ed., Britain & Japan: Biographical Portraits, Vol. III, 1999) に含まれる一篇である。同書は、ジャパン・ソサエティから刊行された日英交流史上の人物評伝シリーズのなかの一書である。

同シリーズは、ロンドン日本協会 (Japan Society of London) の創立百周年を記念して企画され、まず、百周年目にあたる1991年に、H. コータッツィ、G. ダニエルズ共編『日英交流史1859-1991、人と主題』(Sir Hugh Cortazzi & Gordon Daniels eds., Britain and Japan 1859-1991, Themes and Personalities. Routledge, 1991) が上梓された。先ごろ翻訳が成り、大山瑞代訳『英国と日本、架橋の人びと』(思文閣出版, 1998) と題して刊行されている。同書では、日英の外交が1859年に始まって以来、両国の相互理解の推進に貢献してきた人びとの活動と、両国間の外交・経済・教育文化の交流における一大

推進機関であったロンドン日本協会の百年史とをみつかった論文が、収められている。日英交流の推進者として取りあげられているのは、日本研究の先駆者、外交官、お雇い教師、軍人、文学者、宣教師、実業家、技術者、政治家・法律顧問、経済・政治思想家など、さまざまな分野で活躍した諸氏である。日本人も5名（馬場辰猪、菊池恭三、林董、山梨勝之進、坪内逍遙）取りあげられている。

その後も、ひき続いて、書名を改めて下記の三書が刊行されている。

- ① Ian Nish ed., Britain & Japan: Biographical Portraits. Japan Library, 1994.
- ② Ian Nish ed., Britain & Japan, Biographical Portraits. Vol. II, Japan Library, 1997.
- ③ J. E. Hoare ed., Britain & Japan, Biographical Portraits, Vol. III, Japan Libray, 1999.

上記の第一書では、ロンドン、マンチェスター、グラスゴウ、ニューカスル、東京にある、大学やテクニカル・カレッジ、造船所や鑄鉄工場、日本領事館などを舞台にしてすすめられた、日英交流の諸相について考察した22篇の論文から成っている。カバーの袖に記されているように、「1865年に来日し英国公使として20年ほど過ごして、英日の通商と外交関係の基礎をきづいたハリー・パークス卿にはじまり、それから約60年後の、連合国の日本占領期間中の英国渉外連絡部部長アルバリ・ガスコイン卿で終わっている」。具体的には、イザベラ・バード、牧野義雄、東郷元帥などのほかに、明治期日本における英国人ジャーナリストたち、日本における英国人宣教師たち、英国で教育をうけた日本人技術者たち、さらにはアームストロング・ヴィカー社、あるいは1910年の英日大展览会との関連で取りあげられた人物もいる。

第2巻では、24篇の論文が含まれ、活躍した人物の年代順に配されている。外交官がもっとも多く、実業界の人物（明治日本の鉄道建設のパイオニアである井上勝とE. モレル、大蔵省紙幣寮顧問のA. A. シャンドなど）も少なくない。東京（江戸）とロンドンを舞台にして展開された政府レベルにおける日

英関係史上の人物だけでなく、日本各地を訪れた英国人（松江・熊本・東京で活躍したラフカディオ・ハーン、宣教師として函館に赴任しアイヌ研究やアイヌ伝道に専念したジョン・バチェラーなど）が数多く取りあげられていることも特筆される。

チェックランド論文が含まれる第3巻は、18世紀末から現代までという長い時代におよぶ27篇の論文を含んでいる。英国海軍の測量士・探検家であり、1790年代にアイヌと千島列島の訪問記を残したW. プロートンから演出家の蜷川幸雄、ならびに「日本におけるラグビーの発展にたいする英国の貢献、1874—1998年」までが、扱われている。

(2)

チェックランド論文では、日英交流の推進者としてのH. ダイアーを取りあげ、東京およびグラスゴウにおける活動を考察している。とりわけ、かれが構想し指導した工部大学校の教育課程とその特色、グラスゴウにおける日本人への支援と日本研究に、大きな関心が払われている。

日英交流の推進者としてのダイアーの考察といっても、特定の局面ないし事項を対象としてはいないだけに、考察はそれほど分析的ではない。生涯と活動の諸相について全般的に論及したという特色をもっている。

けれども、ダイアー研究の深化につながると思われる指摘がいくつか含まれており、貴重である。たとえば、①目録『赤羽工作所』は「西洋の製造業エンジニアやその代理人たちが、利用できるすべてのものについて図解を入れて説明するために何冊も作った本と、よく似ている」こと、②著書『産業進化論』においてみられるように、「ダイアーは一種の社会主義を褒めたたえるかなり過激なアプローチをとっている」こと、③「女性の地位」についての考えをめぐらし、「工場などで働く女性について良識ある書き方をしたが、ほかの人と同じようにやはり生きた時代の価値観を反映していた」こと、④著書『世界政治の中の日本』にみられるように、「ダイアーは幅広く読んだし、当時世界政治を悩ました大いなる軍備競争を理解していたことは疑いない。しかし、たとえば、東洋の中での日本観はかなり一面的であった」、などといった指摘であ

る。これらの諸点は、ダイアー研究において具体的に検討されるべき重要な課題であるように思われる。

なお、本論文の原題は「ヘンリー・ダイアー、東京の工部大学校とグラスゴウでのその後」であるが、その内容にかんがみ、表記のような題名に変更して紹介した。訳文中の見出しに付した1から4という表記は原文になく、訳者があたらしく設けた。翻訳にさいし、宮田学先生（名古屋市立大学）ほかよりご教示をいただいたので、記して多謝する。

著者：Olive Checkland（グラスゴウ大学元名誉フェロウ）

出典：'Henry Dyer at the Imperial College of Engineering Tokyo, and afterwards in Glasgow', J. E. Hoare ed., Britain & Japan: Biographical Portraits, Vol. III (Japan Library, 1999) pp. 121-131, 365-366.

第5節 日本最初の洋式灯台技師 R. H. ブラントン（翻訳・解説）

（1）

リチャード・ヘンリー・ブラントン⁽¹⁾（1841-1901年）は、日本で最初の灯台技師として、8年近くのあいだ横浜を中心に活躍した。ウィリアム・エリオット・グリフィス⁽²⁾が記したように、「ブラントンは灯台を建設するためにやって来た。必要に迫られて、かれは船舶の設計・建設・進水・儀装や橋梁の建設、鉄道計画に手を染め、沼沢地を近代都市に変身させ、あたらしい居留地を舗装し、下水道を敷設し、街灯をつけた。そして、機械類の船荷が海で難破すると、海の街灯として灯台を組み立てて据えつけたのである」⁽³⁾。封建時代の日本で直面したあらゆる技術的な諸問題に取り組んだブラントンの献身、能力、意志を思えば、グリフィスの言い方は大げさではあるが、かれを「光り輝く」と形容してかまわない。しかしながら、ブラントンはジョージ・スティブソン（1781-1848年）や、ロバート・スティブソン（1803-59年）、ジョセフ・ウイリアム・ベザルジット（1819-91年）あるいはイザムバード・キングダム・ブリュネル（1806-59年）の伝統を引き継いだ、「偉大な」エンジニアではなかった。

1875年4月4日、当時の工部卿であった伊藤博文⁽⁴⁾はブラントンに書簡を送っている。「あなたに委ねられた、日本の海岸に灯台を建設し保守管理するという業務は完璧に実施され、政府は完全に満足しております。これらの灯台は現在30基を超えていますが、その設計、建設、運営のどれをとっても、満足すべき十分な理由があります」⁽⁵⁾。

それにもかかわらず、ブラントンの契約は更新されなかった。1875年3月には一年後に解雇する旨の通告を受け、1876年の春に日本を去ったのである。かれの仕事ぶりが満足 of いくものであったことを考えると、なぜブラントンはこのように解雇されたのであろうか。かれが高圧的なやり方に出たため、多くの日本人の不興を買ったことに疑いの余地はない。というのも、ブラントンは植

民地行政官の伝統を引き継いでおり、自分の権限に口出しされることに耐えられなかったからである。しかし、当時の日本のような封建国家であっても、最終決定権は日本人の手にあるということをすべてのお雇い外国人は認めなくてはならなかった。それゆえ、ブラントンは一緒に仕事をする人たちとの関係を損なってでも、つねに自分の意志を主張したがる摩擦の多い存在であると、雇い主の目に映ったのである。

(2)

日本は西洋列強とのあいだで調印した条約にしたがって、「条約港に向かう航海の安全を確保するのに必要な、灯台、浮標、航路標識等」⁽⁶⁾を装備しなければならなかった。外国人の船長たちは、帆船にしる蒸気船にしる、日本の港に安全に入港するのに伴う危険について激しく苦情を述べた。したがって、日本の灯台は緊急の問題であった。日本は約11,000ポンドの為替手形をイングランド銀行に送付し、これをもとに、英国商務省は業務を遂行するのにふさわしい経験に富んだ技師たちを捜しだしたのであった。

その照会状はエディンバラのデイヴィッド・スティブンソンとトマス・スティブンソン⁽⁷⁾——トマス・スティブンソンは、『宝島』ほか多くの本の著者であるロバート・ルイス・スティブンソンの父であり——の机上に届いた。スティブンソン兄弟社は、北方灯台委員会に属する灯台建築家であった。この委員会は、スコットランドの扱いにくい岩の多い沿岸部に灯台を建設し、保守管理するという責任を担う組織体である。スティブンソン社は日本政府お雇い灯台技師職の求人広告を出したが、これには灯台建設経験のあるエンジニアは一人も応募しなかった。そこで、一般的な工学に熟練したリチャード・ヘンリー・ブラントンが、1868年2月24日付でこのポストに任ぜられたのだ⁽⁸⁾。

ブラントンはスコットランド北東部に生まれて教育を受け、アバディーンの鉄道技師であり一般土木分野の技師でもあるジョン・ウィリト⁽⁹⁾のもとで働き、指導を受けた。1864年にはロンドンに移り、サウス・ウエスタン鉄道会社のガルブレイス・アンド・トームのところで働いた。当時、英国のたいていの技師たちは見習い技師として徒弟契約し、仕事をしながら知識技術を身につけ

たのである。理論的な研修はほとんどなかった。このころの英国では、大学の工学分野の教育課程は当時めずらしかった。ただし、グラスゴウ大学⁽¹⁰⁾とロンドン大学のユニヴァシティ・カレッジ⁽¹¹⁾の双方は卒業生を輩出しており、そのなかにはヘンリー・ダイアーやウィリアム・エアトン⁽¹²⁾のように、工学技術を身につけ、日本政府に雇われた人たちがいた。

ブラントンは任命されるとすぐ、2名の助手ブランデルとマクビーンを伴って、エディンバラのスティブソン兄弟社の指導のもとに、灯台技師としての業務訓練の「速成コース」を受け始めた。かれらはこの仕事が複雑多岐にわたることを知った。というのも、スティブソン社は請負頭として、すべての段階の作業を引き受けて、用地を選定し、灯台に必要な資材を算段し、仕様を作成し、図面を準備し、専門の業者に特別仕立ての装置を発注したのであった。また、ブラントンと助手たちは、灯台守の日常業務に精通するために、スコットランドの東海岸にあるセント・アブズ・ヘッド灯台やガードルネス灯台にも足を運んだ。

集中的な訓練を受けたのち、ブラントン、マクビーンとブランデルは6月13日にサザンプトンを出港し、1868年8月8日に横浜に上陸した⁽¹³⁾。最初に灯台建設事業に着手すると、旧徳川幕府は崩壊し、あたらしい明治政府が権力の座についた。旧徳川幕府の生き残りが日本の本土である本州の北部でまだ抵抗していたけれども、幸運にもブラントンにとって直接的な問題はなんら生じはしなかった。

日本に到着したとき、ブラントンは二人の力強い味方に恵まれた。一人は英国公使のハリー・パークス卿⁽¹⁴⁾であり、もう一人は横浜を管轄する当時の神奈川県知事であった寺島宗則⁽¹⁵⁾である。ハリー・パークス卿はけた外れの気力と意欲の持ち主で、英国が工学を――そしてその他あらゆる種類のノウハウを日本に――提供するのがまったくふさわしいと考え、すぐに忙しく働いてブラントンが調査航海をできるように手配したのだった。ジョンソン船長の指揮する帝国軍艦マニラ号が使用に供された⁽¹⁶⁾。ブラントンはつぎのように報告している。「われわれの航海は1868年11月21日に始まった。まだ精査され

たことのないあちこちの湾に入り、いろいろな場所を訪れたが、航海は事故もなく1869年1月5日に完了した。14の灯台用地を訪問・調査し、その海拔を測定し、場所ごとに調達できる建設資材と労働者や、そのほか手に入った情報を書き留めたが、それらはすべて、日本帝国政府と英国公使にその後提出した報告書に盛りこまれた」⁽¹⁷⁾。

技師にとって、スコットランドの寄りつきにくい場所に灯台を建設することは技術的難題であったが、エディンバラの納入業者から何千マイルも離れた日本ではなおさらむずかしかった。日本での事業にさいし、スティブソン社はブラントンから詳細な図面を受け取り、それを仕様書にてらして実行に移し、印がつけられた部品をブラントンあてに発送した⁽¹⁸⁾。横浜の弁天にある灯台の作業場や倉庫では、鍛冶屋や建具屋ほか多くの作業者が組立品を点検し、それから器材を灯台建設現場に運んだのである。

日本で、ブラントンは適切な原材料をたえず探していた。現場の近くで、自分のよく知っているアバディーンの花崗岩の切石を思い出させるような「すばらしい品質の」石材を見つけたこともあった。利用価値が高い硬材のケアキ（*Planera Japonica*）だけでなく、屋内工事用にヒノキ、スギ、マツといった軟材をもすすんで使用した。灯台の建設現場にできるだけ近い場所で石灰岩が焼かれ、砂と混ぜてモルタルが作られた。精力的なブラントンは、粘土を見つけた場所では煉瓦作りも始めた。

ブラントンは日本の職人たちの作業の仕方を熟知していなかったので、日本側が多額の費用を負担して、スコットランドから英国人の石工、配管工、機械工やさらに数名の灯台守が呼び寄せられた。光源を直接支える骨組みの資材も英国で製造された。スティブソン家の伝記編者が述べるところでは、「いつもエディンバラのミルン社が鑄造金属のフレームと機械部品を製造し、バーミンガムのチャンス社がレンズとプリズムを準備し、ブレア・ストリートのスミス社が灯芯とバーナーを供給した。たいていエディンバラのダヴ社が灯室のガラスを製造した」⁽¹⁹⁾。

灯台業務にとって、自前の補給船を保有することはきわめて重要なことであっ

た。最初はサンライズ号⁽²⁰⁾、つづいてタボーア号(Thabor)⁽²¹⁾、のちには明治丸⁽²²⁾が灯台業務に欠かせなかった。A. R. ブラウンがその船長に採用された。灯台業務と関係はなくても、本土から遠く離れた各地におもむく必要のある官吏たちにとって、この船の利用価値は実に高く、しばしば徴用されることになった。まったく幸運なことに、明治丸は現存しており、東京商船大学で永久保存されている。優美な帆船の輪郭を持ち、初期のスクリュウ駆動蒸気エンジンによって、その動力が供給されていた。天皇のお召専用、優美な装飾を施した美しい船室がある。

明治天皇⁽²³⁾は、あたらしい技術の発展におおいに興味を示され、1874年3月、横浜の弁天にある灯台施設を訪問するご意向が発表された。ブラントンは、そのときの様子を説明している。

「多くの従者を従え、馬車に乗った皇后とその随行者たちに伴われて、すべて絹で着飾った馬上の天皇はまず、外務卿の紹介する外国人使節に接見した。その後、工部卿の伊藤が、わたしやヨーロッパ人のスタッフを紹介した。上品な装飾を施した控えの部屋が用意され、天皇はここで当時建設されたすべての灯台の位置を示す地図や、それぞれの経費の一覧表を吟味された……通訳を務める林と一緒に、灯台頭とわたしが同行して、いろいろな機械工房や倉庫、その他の建物を見て回られた。天皇ははるか遠方まで光を照らす灯器やその他の器具を念入りに調べられ、えられた情報に満足していると述べられた」⁽²⁴⁾。

およそ4年間奉職した後、ブラントンは休暇をもらって国に帰ろうとしているとき、正式に天皇に拝謁するという栄誉を与えられた。それは印象的なできごとであり、ブラントンはこう述べている。「ミカドは赤い絹で覆われた高座に座り、豪華な刺繍を施した同じ素材の礼服をお召しになっていた。伊藤もわたしも天皇陛下のおられる部屋には入らず、6ないし8フィート離れた外側の奥まった所に立っていた。天皇はわたしを目にすると、威厳のある態度で会釈された。しかし、その顔つきはひじょうに硬くて無表情なものであり、こわばった顔からは歓迎のほほ笑みのひとかけらも見られなかった」⁽²⁵⁾。

祝賀の辞が交わされたが、どちらもかなり儀式ばったていねいなものだった。ブラントンのスピーチは慎重に吟味されて、日本語に通訳されたが、天皇のものに劣らず大げさなものであった。

(3)

天皇との謁見や日本政府の高官らに対する友好的な態度にもかかわらず、ブラントンと日本人との関係が日本でうまくいったのはまれであった。すでに述べたように、日本では、英国植民地の属国の場合とは違って、権限は日本人にあったのである。このことは、「首席技師」という肩書きにもかかわらず、ブラントンの決定はすべて上司の日本人官吏の承認が条件となるということの意味するものであった。

ヘンリー・ブラントンは、明治初期の日本で奉職しているあいだ、ヘンリー・ダイアー⁽²⁶⁾やA. R. ブラウン⁽²⁷⁾らにみられるような、紳士的で寛容なところはまったくみせることがなかった。かれのやり方は直接的で、対立的なものであった。かれ自身が書いているように、「個人的にどんなに辛くまた自己犠牲を払おうとも、わたしは工事の遂行責任者としての立場を主張しようとした」とのである。ブラントン自身のことばによれば、「わたしは部分的にしか成功をおさめなかった。無関係な役人の指令がわたしの計画と関係なく出され、時にはこれらがわたしの指示と実際に衝突することがあった」⁽²⁸⁾。

その結果、やることなすことたえずトラブルに見舞われた。首席技師としてすべての経費を承認すべきであると信じていたので、ブラントンみずから帳簿を記録する会計担当者を任命した。しかし、日本人はこれを喜ばなかった。気がついてみると、「自分の知らないところで支払いがなされるようになり、結局、支払われる金額に関する詳しい情報をわたしが知らないまますべての作業が進行した」⁽²⁹⁾のだった。これは、ブラントンが経費全般をチェックするという単純な方式をむしばむ「大規模な腐敗構造」であった、と断言している。

ブラントンは、灯台局を指揮するために頻繁に任命された、上司の官吏たちと一緒に仕事をするにもひどく苦勞した。かれが到着した1868年8月から、日本を去る1876年春までのあいだに、灯台局は「15人も長（灯台頭）」が交替

したが、そのだれともうまくやっていけなかった。おそらく最悪であったのが、短いあいだではあったが、統合局長の職を務めた二人の若い官吏であった。それをブラントンが、つぎのように説明している。「無知で頑固で傲慢で横柄な態度の、この二人ときたら……トラブルには際限がなかった。仕事の枝葉の部分にいたるまで勝手なやり方で指示を出しただけでなく、おのれの権限を大勢の下っ端の役人に委任したのである。かれらは首席技師のわたしとは関係なしに行動するようになり、わたしのやり方にまで口を出すようにさえなった」と⁽³⁰⁾。ブラントンは、伊藤博文工部卿やハリ－・パークス卿に訴えることで身を守ろうと試みた。この二人とも辛抱強かったが、ブラントンのたえまない不平不満にはいらいらしたにちがいない。

西洋での幅広い経験のある佐野常民⁽³¹⁾が灯台寮長であったとき、ブラントンは、佐野を高く評価し、「つねにいていねいで思慮のあるふるまいをし、高邁な理想と寛容な精神の持ち主だった。この本物のサムライとの何カ月にもおよぶつきあいについて思い出すと、いつも喜びの情がわいてくる」と書いている。しかし、この場合でも、ブラントンは「……かれがつねに自分の意見を言い張り、わたしの希望を否定していたのは事実である。しかし、これは静かで威厳のある主張や議論であって、かれが自分のやり方を通すのに成功したのはきわめてまれであった。」⁽³²⁾と記している。

佐野とブラントンは、灯台の基地に保管しておくべき緊急用物資の量をめぐって延々と議論したことがある。ブラントンが1年分の備えが必要だと主張したのに対し、佐野は6ヵ月分で十分だと言いはったのだった。1870年代の日本沿岸では輸送は困難であったことを考慮すれば、おそらくブラントンが正しかったのであろう。しかし、現在の日本産業のカンバン方式⁽³³⁾、つまり「ジャスト・イン・タイム（必要なときに間にあう）」制度に照らしてみると、そうでなかったかもしれない。

日本の元サムライの中には、日本を近代世界に放り込むべく企画された数多くの事業に西洋人が関与することに対して、程度の差こそあれ、抵抗した人たちがいたことは疑いない。外国人に頼らなくてはならないという考え方を日本

人は嫌い、日本の習慣に対して無知で、ときには不寛容であるような人たちと一緒に働くことをいやがる者もいた。そして、わずかではあるが、とくに西洋で暮らしたことの無い人たちは、日本にあたらしいものを導入することに価値があるかどうかについて懐疑的であった。

それにもかかわらず、ブラントンには日本側の苦悩という発想がなかった。かれは日本人のプライドに関してまったく鈍感であった。かれと一緒に仕事をしていた人たちは「現地人」なのである。「現地人」であれば、言われたことは何でもすべきであった。外国籍雇われ人、いわゆるお雇い外国人と当時の発展途上国の雇用主たちとのあいだの緊張については、日本における事例が一番しっかりと記録に残っており、こうした問題が今も昔も普遍的にみられるのは興味深い。発展途上国の人びとと一緒に仕事をする者はみな、見知らぬ外国人からの情報に頼る以外に選択の余地がない人びとの感受性を理解しなくてはならない。つねに緊張感があり、すぐに敵意にまで発展しかねない。協同でおこなう気持ちが足りないと、援助計画全体が損なわれたり、だめになりかねないが、実際、よくそうなるものである。

ブラントンは、日本から帰国して20余年の後、よわいを重ねてから書いた回顧録のなかで、自分が見た状況をつぎのように要約している。

「日本であたらしい業務を忠実かつ効率的におこなうことは、雇う側にとっても雇われる側にとっても、もっともこみ入った困難な仕事であった。高い給料、異なる生活様式、懲戒権の欠如、そしてとにもかくにも外国人は絶対欠かせないという日本人の意識などによって、ヨーロッパ人の助っ人は、きわめて扱いにくく、手に負えないものとなった。日本政府に奉職するために雇われたヨーロッパ人のあいだに、辞職、反抗、欠勤、酒浸り、その他常軌を逸脱した行動が増え、さんさんたるものとなった。一方、天皇の従者である日本人にみられるかなりの無知、下っ端役人の自負、いいかげんさ、ずるさや腐敗ぶりのせいで、光栄ある外国人との共同作業はひじょうにいらいらするものとなった。」

ブラントンは、自分には二つの選択肢があると信じていた。

「第一の選択肢は、平穩と休息を約束するものであったが、成りゆきに任せることで、求められればアドバイスをし、……進行の妨げになるようなことで騒いだり悩んだりしないことである。1870年代には、そうしたやり方でヨーロッパ人は日本人雇い主のお気に入りになることができたのであった……。

「もう一つのやり方は、雇われたヨーロッパ人の職員が、自分の出した指示どおりに執行されることを主張することであった。置かれた立場からすれば、かれは結果に責任をもつことになる。こうした挙動が摩擦を起こすことはほぼ確実で、人間関係の破綻に終わることもあった。日本人がお雇い外国人をできるかぎり活用はするが、どんな場合でも、主人にしたり権力を与えようとしなないことは、はっきりしていた。日本人は、外国人を指揮権をもたない顧問ないしは指導者の立場にとどめようとしたのである」

(34)。

ブラントンが、外国人の助っ人と日本人との関係をこのように対立的なものとしていたことは、残念なことである。英国人のお雇い外国人のうちでもっとも著名な人のなかには、まるで異なった見方をする者もいた。たとえば、ヘンリー・ダイアーは工部大学校の校長を10年間務めた後、グラスゴウにおいてかつての生徒たち、つまり、日本人技術者の第一世代と、亡くなるまで接触をしつづけた。同じ工部大学校で英語を教えたウィリアム・グレイ・ディクソン（グラスゴウ大学文学修士）は、著書『朝の国（The Land of Morning）』（エディンバラ、1882年刊）を「東京の工部大学校の現在およびかつての学生たちに」「愛情をこめてささげる」と記した。ブラントンと同じくスコットランド北東部の出身であったアレクサンダー・アラン・シャンドは、日本の銀行業と会計学の双方に重大な影響を与えたが、日本人銀行家の友人たちと緊密にかかわりつづけた。20世紀初頭に日本人がロンドンの金融市場に融資を求めたときには、シャンドが日本を去ってから30年経っていたが、日本人が頼ったのはこのシャンドであった。明治初期の日本に奉職していたあいだに多大な影響を受け、日本人の仕事仲間やかつての同僚たちを敬服して、かれらとの友人関

係を保った人たちは数知れずいる⁽³⁵⁾。

日本で優れた仕事をしたにもかかわらず、有能な日本人の同僚と親しい友人関係を築けなかったのは、ブラントン本人にとって悲劇であった。それができていれば、かれの日本での歳月は豊かで実りの多い経験となったであろうし、日本を離れたのちでも、日本では貴重で自己形成につながるような経験をしたという満足感を与えたことであろう。

(4)

ブラントンは、1876年11月14日に英国に帰国するとすぐに、会員であった英国土木技師協会⁽³⁶⁾で、日本でおこなった事業についての論文を発表した。会長のジョージ・ロバート・スティブソン（ジョージの孫でロバートの息子）が、その議長を務めた。

ブラントンの説明によると、主要な貿易港は横浜であって、毎年「200隻から300隻ほどの外国籍の大型船舶」が寄港した。神戸と長崎にも毎年170隻ほどの外国船が来航した。北方の島である北海道の箱館には、夏場に外国船が数隻寄港したが、新潟と大阪には外国船の寄港はほとんどない。日本灯台は、こうした条約港において役立つようにと、発注されたものである。ブラントンが述べた、港を使用する外国船舶数はおそらく1874年頃の数字であろう。

ブラントンは、この論文のなかで、日本の灯台の設置場所を決定する際には、いくつかの原則にもとづいていたことを説明している。

1. 岬が切り立っていて容易に識別できる所、あるいは危険が潜んでいない所には、灯台を設置しない。
2. 視界不良の天候のため船舶が通過できないような、困難で危険な海峡がある所には、夜明けをまつことのできる安全な停泊地まで、船を誘導するための灯台を設置する。海峡を通過するのに役立つような位置に、これを設置する。
3. 灯台がなければ通過することはむずかしいが、あれば容易になるような場所、または船員たちが位置を知る手がかりをうるために灯台が必要となるような場所に、灯台を設置すべきである」と⁽³⁷⁾。

論文の発表につづいて、ブラントンが日本灯台を配置するのに採用された、これらの原則に対する反対意見が出された。(副会長の)アバネシー氏は、おそらく瀬戸内海についてはその特性に特別なものがあるのだろうと講評した。そうでなければ、ブラントンが規定した、岬が切り立っていて識別が容易な場所や、危険が存在しない場所には灯台を設置しないという原則には賛同することはできない、というのである。アバネシー氏は灯台の位置を選定する際には三つの必須条件があると述べた。すなわち、灯台は突出している岬にあるべきこと、灯台は港の位置を明確に示すべきであること、そして、船舶を安全に入港させるための道案内となって誘導する灯台があるべきだということである⁽³⁸⁾。もう一人の会員でダグラスと名乗る人物は、34基の灯台のうち5基だけが回転灯であるという事実を批判した。かれは、「回転灯あるいは閃光灯は、不動灯よりも石油消費量で5倍から10倍の累積光力がある。」⁽³⁹⁾と考えたのだった。ブラントンはこう応酬している。

「不動灯の割合が多い一つの理由は、それがはるかに単純であるということであり、これは日本のような国では大事なことであった。しかし、沿岸部に灯火をともすという計画のほんの一部しか目下のところは実行されていないことを理解すべきである。目立つという特徴を取り入れようとすれば、これから設置すべき灯台は主として回転灯になるであろう。現地人は、そのころには経験を積んで回転型の機械を任せられるであろう。しかし、事業に取りかかったばかりの時点では、単純な装置を備えることの重要性は、いくら強調してもしすぎることはなかった」⁽⁴⁰⁾。

発表論文のなかで、ブラントンは、地震の衝撃から日本沿岸の灯台を守ろうとデビッド・スティブソンが努力したことに言及している。スティブソンによると、以下のようなであったという。

「地震という活動を十分考慮に入れると、その衝撃を緩和するのに必要なのは、衝撃の伝播を防ぐために、建物を構成している堅固な骨組みがつながっているなかに遮断部分を入れることだと思われた。……考えられたのは、耐震結合部という、青銅製の球体が同じ材料で作られたカップのな

かを動くようになっているものである。それを、二つの台のあいだに配し、下側のカップは基部を形成する梁に固定し、上側のカップは上部構造の下側の梁に固定する。こうして、限られた範囲内で、建物の下側部分に対して上側部分が自由に動くことが可能になる」⁽⁴¹⁾。

しかし、ブラントンが指摘したように、柔軟性があるために地震が揺れているあいだは建物を守ったかもしれないが、それ以外のときには、めんどろな事になった。ひどい強風が吹いても、灯台のテーブルは動いたようである。灯台守は、耐震テーブルの上に乗ると上部が「かなり横揺れするためランプが乱れ始めるし、回転灯の場合は時計仕掛けの機械の規則的な動きが損なわれる」と思っていた⁽⁴²⁾。灯台守はテーブルをしっかりと固定する方を選択し、デイヴィッド・スティブンソンが心をこめて考案した耐震結合部は、地震があってもけっして試用されることはなかったのである。

(5)

1868年8月の到着から1876年春に離日するまでに、ブラントンは灯台技師として灯台34基、灯船2隻、浮標13基、標識3基を建設した。その他、横浜で着手されたいくつもの土木事業においても、かれは重要な存在であった。日本で最初の歩行者専用の鉄橋を設計・施工したが、今では補強され、4車線の高速道路に広げられて毎日活用されている。また、横浜の外国人居留地の最初の「市街計画」を任されたこともあるし、横浜にあたらしく敷かれた「マカダム舗装の」道路表面の水を排水するための最初の陶製排水管を敷設する計画にもかかわった。費用がかさむという理由で受け入れられなかったものの、上水道や街灯の計画も作成した。日本滞在の終りころには、日本の資料を利用して、20マイル=1インチの縮尺の日本地図を作成した。この地図には、「町や村、川、山、街道や小道」を日本語と英語の両方で示してあった。これが日本の標準地図となった。イサベラ・バードは、『日本奥地紀行』を著す目的でこの地図を実際に用いたが、「役に立った場合もあったし、そうでなかった場合もあった」と述べている⁽⁴³⁾。ブラントンは日本ではじめて施設された電信網、あるいは最初の鉄道計画に関しても、主導者ではなかったがアドバイザー的な役割

を果たしている。

リチャード・ヘンリー・ブラントンは、1841年12月26日にキンカーディン州ストウンハイヴンのフェテレッソ (Fetteresso) というところで生まれた⁽⁴⁴⁾。26才の青年のときに来日し、職責をしっかりと果たして、35才のときに離日した。1868年に本国から日本社会に移り住むにあたり、強烈なカルチャー・ショックに耐えなくてはならなかったが、当時はそれについて理解されることはまったくなかったし、職を失って1876年に本国に戻ったさいに、個人として払わなければならない大きな代償についても理解されなかった。かれはグラスゴウのパラフィン・ヤング石油会社——石油はもちろん当時の灯台にとって標準的な燃料であった——でしばらく働き、その後、ロンドンで石膏細工——当時の英国の家庭で人気があった——の会社で働いた。おそらく、顧問技師として開業したこともあるらしく、ロンドンの公会堂 (public hall) の音響問題にたずさわったようである。こうした職のどれかに誇り高く気むずかしいこの男は満足したのであろうか。人生の終りにさしかかった時期になって、かれは日本での日々を述懐した作品を書いたが、1901年にロンドンで死去すると、未亡人がそれをウィリアム・エリス・グリフィスに売り払っている。

リチャード・ヘンリー・ブラントンの生誕 150周年を祝って、ロンドンのウェスト・ノーウッド墓地にあるかれの埋葬地に記念碑を建てるという計画が、横浜市当局によって実行された。それは、ふさわしいことに上り坂の地にあり⁽⁴⁵⁾、訪れる人は、日本で最初の灯台技師であり英国土木技師協会の会員であったブラントンの記念碑の頂に、小さな灯台の彫刻をはっきりとみとめることができる。

【注】

- (1) R. H. ブラントンの原稿は、未亡人のエリザにより W. E. グリフィスに20ポンドで売却された。グリフィスはアメリカ人教師・牧師・著述家で、1870年代初期の日本で化学を教えた。グリフィスは、アメリカ合衆国に戻ってから、明治期日本研究の権威となったのみならず、固い決意と熱意をもって、日本で奉職した外国人に関するあらゆる種類の資料を収集した。

この大量のW. E. グリフィス・コレクションは、現在、アメリカ合衆国ニュージャージー州ブランズウィックのラトガーズ大学にある。

ブラントンの原稿は、現在、1841年生まれのかれの生誕 150周年を祝う本となって公にされている。その本は『リチャード・ヘンリー・ブラントン、日本の建設 (Richard Henry Brunton, Building Japan 1868-1876)』(The Japan Library, Sandgate, Folkestone, Kent, 1991) という題名で、ウィリアム・エリオット・グリフィスによる1906年版のあとがきと注釈に加え、ヒュー・コートツイ卿 G. C. M. G. (聖ミカエル=聖ジョージ勲位大十字章保有者) による序文と注釈が付されている。明治期日本に対する R. H. ブラントンの貢献に関する簡潔な論議としては、O. Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan, 1868-1912 (Macmillan, London, 1989) pp. 45-48 [訳注: O. チェックランド (杉山忠平・玉置紀夫訳) 『明治日本とイギリス, 出会い・技術移転・ネットワークの形成』法政大学出版局, 1996, 58-63頁] を参照のこと。

(2) W. E. グリフィスは、1876年刊の『ミカドの帝国 (The Mikado's Empire)』ほか、日本に関するいくつかの書物を著した。かれは、ブラントンの活動を『日本における先駆的工学, 1868-1876年 (Pioneering Engineering in Japan, 1868-1876)』というタイトルで出版しようとしたが、叶わなかった。[訳注: 正確なタイトルはつぎのとおり。Pioneer Engineering in Japan. A Record of Works in Helping to relay the Foundation of the Japanere Empire (1868-1876). R. H. ブラントン (徳力真太郎訳) 『お雇い外人の見た近代日本』講談社, 昭61, 271頁参照。]

(3) W. E. Griffis, R. H. Brunton, Building Japan (1991) の序文16-17頁。

(4) 日本名は、西洋風に名を先に、姓を後に表示してある。伊藤博文 (1841-1909年) は明治期のもっとも重要な政治家の一人となった。

(5) R. H. Brunton, Building Japan, p. 141.

(6) R. H. Brunton, Building Japan, p. 23.

- (7)デイヴィッド・スティブンソンとトマス・スティブンソンは、とても危険な場所にある、ベル・ロック灯台やスケリボー灯台のような、スコットランド沿岸から離れた所に灯台を建設したことで名声をえた、有名な工学一家の出であった。スティブンソン家文書は、エディンバラのノース・ブリッジにあるスコットランド国立図書館に保管されている。同社はスコットランドで港湾や橋梁も建設した。Craig Mair, A Star for Seamen, the Stevens on Family of Engineers (John Murray, London, 1978) 参照。
- (8)R. H. Brunton, Building Japan, p. 26.
- (9)R. H. Brunton, Building Japan, ヒュー・コータッツィによる序文, 3頁。ジョン・ウィリト（工学修了証取得者：1815-1891年）は、アバディーンに居住して仕事をした。かれの死亡記事は、1891年8月15日付の『ノーザン・デイリー・ニュース（Northern Daily News）』に掲載されている。1851年から1891年までの『アバディーン・ディレクトリ（Aberdeen Directory）』も参照のこと。
- (10)1840年、グラスゴウ大学に土木工学・機械学の欽定講座が、大学の評議会の反対にもかかわらず、国王によって創設された。
- (11)工学教育はロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジでも1840年に始まり、これは強固な工学の伝統の先駆けとなった。
- (12)ダイアーとエアトンの日本での経歴について論じたものとしては、Olive Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan, 1868-1912 (Macmillan, London, 1989) を参照。
- (13)R. H. Brunton, Building Japan, p. 26.
- (14)ハリー・パークス卿（1828-1885年）は押しの強い熱情的な人であって、1865年から1883年まで、日本における英国の権益に尽力した。
- (15)寺島宗則（1832-1893年）は、サムライの家系出身の薩摩の外交官であった。かれは西洋で長期間を過ごした。
- (16)英国海軍は1883年まで日本の海図の作成に相当かかわっていた。のちになって、日本人は独自の水路測量に着手した。O. Checkland, Britain's

Encounter....., pp. 60-61参照。

- (17)R. H. Brunton, Building Japan, pp. 66-67.
- (18)ブラントンとエディンバラのスティブソン本社とあいだでは頻繁なやりとりがなされ、考えられるあらゆる難題や見解の相違が処理された。スコットランド国立図書館の所蔵資料を参照。
- (19)Craig Mair, A Star for Seamen, the Stevenson Family of Engineers (John Murray, London, 1978) p. 191.
- (20)R. H. Brunton, Building Japan, Chapter 16, pp. 76-79.
- (21)R. H. Brunton, Building Japan, Chapter 19, pp. 86-89.
- (22)明治丸は、1873年にグラスゴウのクライド河岸にて、ロバート・ネイピアによって建造された。
- (23)明治天皇(1852-1912年)は、当初は顧問らに乗せられてこうした新規事業への訪問をすることになったのだが、のちには有力で影響力をもつ存在となった。
- (24)R. H. Brunton, Building Japan, p. 140.
- (25)R. H. Brunton, Building Japan, Chapter 26, pp. 110-113.
- (26)ヘンリー・ダイアー(1848-1918年:理学士・文学修士・工学修了証取得者)は、1873年から1882年まで東京の工部大学校の校長であった。かれもまたブラントンのように、グラスゴウ社会で復職するのがむずかしかったが、ブラントンとは違って、そのころのスコットランドに学ぶ多数の日本人学生を中心となることを第二の人生とした。O. Checkland, Britain's Encounter.....参照。
- (27)アルバート・リチャード・ブラウン(1839-1913年)は、日本に20年間滞在し、船長および海事全般の顧問として日本人に仕えた。その後、グラスゴウで日本名誉領事として復職し、ここですばらしい地位を築きあげ、日本人のために力を尽くした。O. Checkland, Britain's Encounter.....参照。
- (28)R. H. Brunton, Building Japan, Chapter 23, pp. 97-105.

- (29)R. H. Brunton, Building Japan, pp. 99-100.
- (30)R. H. Brunton, Building Japan, p. 100.
- (31)佐野常民(1822-1902年)は、西洋での広範な経験をもち、とくに海事に関心があった。かれは、日本に赤十字の博愛主義精神を紹介したことで認められている。
- (32)R. H. Brunton, Building Japan, p. 102.
- (33)製造業における保守点検や資材の供給のための日本のカンバン方式については、N. Charmers, Industrial Relations in Japan, the peripheral workforce (Routledge, London, 1989) で論じられている。
- (34)R. H. Brunton, Building Japan, Chapter 23 (章題：移り変わり), pp. 97-105.
- (35)O. Checkland, Britain's Encounter.... Chapters 1 - 6 を参照。
- (36)Richard Henry Brunton, M. Inst., C. E., The Japan Lights. Session 1870-71, Part I, Section 1, Minutes of Proceedings, pp. 1-41.
- (37)R. H. Brunton, 'The Japan Lights', in R. H. Brunton, Building Japan, p. 238.
- (38)R. H. Brunton, 'The Japan Lights', in R. H. Brunton, Building Japan, p. 259.
- (39)R. H. Brunton, 'The Japan Lights', in R. H. Brunton, Building Japan, p. 257.
- (40)R. H. Brunton, 'The Japan Lights', in R. H. Brunton, Building Japan, p. 260.
- (41)D. Stevenson, Royal Scottish Society of Arts, Vol. VII, p. 560.
- (42)R. H. Brunton, 'The Japan Lights', in R. H. Brunton, Building Japan, p. 256.
- (43)R. H. Brunton, Building Japan, p. 54.
- (44)International Genealogical Index (Scottish Section) Microfiche, Church of Jesus Christ of Latterday Saints, Batch C112586, Serial

Sheet 1711. ここには、リチャード・ブラントンとマーガレット・テルファーの息子リチャード・ヘンリー・ブラントンが、1842年2月3日にキンカーディン州ストーンヘイヴン、フェテレッソにて洗礼、1841年12月26日フェテレッソにて出生、という記録がある。

(45)墓は、小高い場所にある火葬場に向かって登っていく広い道の右手にある。

〔訳者解説〕

(1)

リチャード・ヘンリー・ブラントン (Richard Henry Brunton, 1841-1901年) といえ、**「日本灯台の父」**として知られるお雇いスコットランド人である。日本で洋式灯台の建設と監督にあたった最初の技師であった。かれの来日は、神奈川条約にもとづいて、徳川幕府が英国公使ハリー・パークスに灯台建設技術者の派遣を依頼したことにはじまる。幕府の灯明台築造方首長として採用されたが、幕府が倒れても明治政府に採用され、首席の灯台技師として、1868年8月から1876年春まで8年近くのあいだ奉職した。

灯明台築造方首長という職名が示すように、ブラントンは灯台の建設と監督が主務であったが、在日中のかれの活動はそれだけにとどまらなかった。「必要に迫られて、かれは船舶の設計・建設・進水・儀装や橋梁の建設、鉄道計画に手を染め、沼沢地を近代都市に変身させ、あたらしい居留地を舗装し、下水道を敷設し、街灯をつけた。そして、機械類の船荷が海で難破すると、海の街灯として灯台を組み立てて据えつけた」のだった。

本論文は、ブラントンのそうした活動のうち、とくに灯台建設をめぐる諸相が考察されている。諸相の中身はおもに三つある。日本における技術的指導、その日本での経験にもとづく英国の学会での報告、そして、お雇い外国人として技術指導したさいの日本人との関係ぶり、の3点である。

第一の技術的指導については、お雇い技師としてみずから灯台建設を指導したばかりでなく、英国に発注して建設資材の輸入や職人の招へいを指導したことが注目される。

ブラントンは、お雇い灯台技師として「灯台34基、灯船2隻、浮標13基、標識3基を建設した」が、洋式灯台建設はわが国ではまったくあたらしい事業であっただけに、立地の測量や灯台の設計と建設をすすめるさい、建設資材や機器をエディンバラのスティブソン社から調達したし、灯台の「光浮を直接支える骨組みの資材」などを、英国の関連会社に発注して輸入した。しかも、スコットランドから「石工、配管工、機械工やさらに数名の灯台守を呼び寄せ」たのである。

第二に、日本人との関係のなかでお雇い外国人としての職責を果たすさいに体験ないし遭遇した、苦悩やトラブルについての考察が注目される。

一般に、お雇い外国人のなかには、「誠実、熱心な奉職ぶりを超えて、外国人としてのあまりにも強い自負心、強情不屈の精神が出すぎる場合、いろいろとトラブルが生じた」（梅溪昇『お雇い外国人 ①概説』鹿島研究所出版会、1969、180頁）ことがしばしば知られている。ブラントンの場合は、「やることなすことたえずトラブルに見舞われた」のだった。本論文は、「摩擦の多いエンジニア (abrasive engineer)」という副題があるように、そのような摩擦とトラブルをくりかえし指摘し、その理由をめぐって考察している。本論文の特色であると思われるので、のちに再論する。

第三に、日本での技術指導の経験は、帰国後にロンドンの英国土木技師協会での報告をとおして、ブラントンの母国に報告されたことが注目される。その報告では、おもに灯台の設置場所をめぐる内容が論議をひきおこした。

この日本での技術指導の経験が英国に持ち帰られて報告されたということは、興味ある史実である。しかも、その報告事項が論議を呼んだということは重要である。日本における実践指導が、日本だけにとどまらず英国の関係者に共有されたからである。けれども、本論文では、その技術指導にかかわる報告がどの程度受容され影響をおよぼしたかという、反応についての記述まで及んではない。

(2)

本論文では、「有能で摩擦の多いエンジニア」という副題がついているよう

に、お雇い外国人としての職責をはたすなかでさまざまな「摩擦」が生じたことについて、繰り返し論じられている。ブラントンにかかわる個別の事例ではあるが、お雇い外国人一般にみられる事柄であるので、注目したいと思う。

ブラントンは、お雇い外国人としての「職責をしっかりと果たし」、その「仕事ぶりは満足のいくものであった」けれども、雇用契約は更新されることはなかった。それは、「かれが高圧的なやり方に出たため、多くの日本人の不興を買ったことに疑いの余地はない。というのも、ブラントンは植民地行政官の伝統を引き継いでおり、自分の権限に口出しされることに耐えられなかったからである。しかし、当時の日本のような封建国家であっても、最終決定権は日本人の手にあるということをすべてのお雇い外国人は認めなくてはならなかった。それゆえ、ブラントンは一緒に仕事をする人たちとの関係を損なってでも、つねに自分の意志を主張したがる摩擦の多い存在であると、雇い主の目に映ったのである。」

また、「天皇との謁見や日本政府の高官らに対する友好的な態度にもかかわらず、ブラントンと日本人との関係が日本でうまくいったのはまれであった」という。かれは在職時に15名の灯台頭と一緒に仕事をしたが、「だれともうまくやっていけなかった」。それは、「日本では、英国植民地の属国の場合とは違って、権限は日本人にあった」からである。つまり、「『首席技師』という肩書きにもかかわらず、ブラントンの決定はすべて上司の日本人官吏の承認が条件となるということを意味するものであった」のである。

ブラントン自身の気質にも一因があった。かれは、日本人との関係を「対立的なものともみていた」のである。お雇い英国人のなかには、「明治初期の日本に奉職していたあいだに多大な影響を受け、日本人の仕事仲間やかつての同僚たちを敬服して、かれらとの友人関係を保った人たちは数知れずいる」。本論文では、工部大学校の校長ヘンリー・ダイアー、同校の英語教師ウィリアム・グレイ・ディクソン、「日本の銀行業と会計学の双方に重大な影響を与えた」アレクサンダー・アラン・シャンドの三名があげられているが、ブラントンには、かれらにみられるような、「紳士的で寛容なところはまったくみせること

がなかった。かれのやり方は直接的で、対立的なものであった。」のである。

しかも、「ブラントンには日本側の苦悩という発想がなかった。かれは日本人のプライドに関してまったく鈍感であった」。日本人という後発国の人びとの心情に対する認識は不足していた、という下記のような指摘は、お雇い外国人研究において重要である。

「かれと一緒に仕事をしていた人たちは『現地人』なのである。『現地人』であれば、言われたことは何でもすべきであった。外国籍雇われ人、いわゆるお雇い外国人と当時の発展途上国の雇用主たちとのあいだの緊張については、日本における事例が一番しっかりと記録に残っており、こうした問題が今も昔も普遍的にみられるのは興味深い。発展途上国の人びとと一緒に仕事をする者はみな、見知らぬ外国人からの情報に頼る以外に選択の余地がない人びとの感受性を理解しなくてはならない。つねに緊張感があり、すぐに敵意にまで発展しかねない。協同でおこなう気持ちが足りないと、援助計画全体が損なわれたり、だめになりかねないが、実際、よくそうなるものである。」

けっきょく、ブラントンは「日本で優れた仕事をしたにもかかわらず、有能な日本人の同僚と親しい友人関係を築けなかった」。「それができていれば、かれの日本での歳月は豊かで実りの多い経験となったであろうし、日本を離れた後でも、日本では貴重で自己形成につながるような経験をしたという満足感を与えたことであろう。」

(3)

ブラントンについては、数多くの研究文献がある（武内 博『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』日外アソシエーツ、1995、383頁参照）。そのうち、R. H. ブラントン（徳力真太郎訳）『お雇い外国人の見た近代日本』（講談社学術文庫、1986）は、日本でのお雇い技師時代の体験記であるだけに注目される。正確に言えば、ブラントンが執筆した草稿を、その死後、W. E. グリフィス（William Elliot Griffis, 1843-1928）が購入し、それを「整理し、内容を圧縮し、注釈をつけて出版の準備をしていた」（同訳書、271頁）原稿

のうちの、第二部を訳出したものである。

同訳書では、「灯台建設以外にも多方面の仕事に関係」したこと（同書、8頁）、近代技術移植の先駆者として異国の地でさまざまな苦悩を体験したことが、描かれている。帯には「日本の海に初めて西洋文明の灯を点じた英国技師の日本見聞録」とあり、またブックカバーには、「本書は政府役人と近代技術移植の先駆者との人間関係を通じて開化期日本の姿を描いた貴重な見聞録である」と位置づけられているが、ブラントンの貢献として、もう一つ注目すべき点がある。「大過なく灯台の維持管理の良きシステムを組織」したこと（訳書190頁）、あるいは「よく整備された灯台管理の制度の確立」（同133頁）という点である。灯台建設の技術指導だけでなく、灯台守の職場規律を確立したということである。「ブラントンを首班としたイギリス技術団が残したイギリスの灯台技術と職場の規律は日本に受継がれ、日本の灯台の伝統となり、古い灯台守たちはこれを日本流に守灯精神と称して僻地での不自由と寂寥な灯台守の生活に耐える心のよりどころとした」（同訳書、訳者あとがき、267頁）というのだから、これは日英交流史上、見落とすことのできない重要な点となる。チェックランド論文には、この点についての指摘はみられないが、技術の移転、知識の伝達に加えて、規律の確立とか態度の形成とかいう面における貢献は、お雇い外国人研究において忘れられがちな点であるように思われる。

なお、本稿の原著論文には、図1から図5までの資料が収録されている。その内訳は、灯台の図面が4点、地図が1点であり、それぞれの資料に付されている解説文のみを順に記すると、つぎのとおりである。

図1 観音埼灯台。煉瓦造、1869年1月竣工、総工費8,182ドル。

図2 神子元（みこもと）の石造灯台断面図。高さ60フィート、1871年1月竣工。総工費107,539ドル。

図3 角島の石造灯台正面図。高さ87フィート、1873年12月竣工、総工費52,000ドル。

図4 烏帽子島鉄製灯台。高さ44フィート、1876年竣工、総工費69,100ドル。

図5 日本各地の灯台。ブラントンがみずからの論文「日本の灯台」（『英

国土木技師協会議事録，1876年度』第一部，1-41頁）を説明するために作成した地図。

本論文の原題は「リチャード・ヘンリー・ブラントンと日本の灯台1868-1876年，有能で摩擦の多いエンジニア」であるが，内容にかんがみて表記のような題名に変更して紹介した。訳文中に付したIからVという見出し区分は原文になく，訳者があたらしく設けた。翻訳にさいし，宮田学先生（名古屋市立大学）よりご教示をいただいたので，記して多謝する。

著者：Olieve Checkland（慶応義塾福澤研究センター，リサーチフェロー）

原題：'Richard Henry Brunton and the Japan Lights 1868-1876, a brilliant and abrasive engineer', The Newcomen Society for the Study of the History of Engineering and Technology, Transactions, Vol. 63 (1991-2) pp. 217-228.

補 節 ヘンリー・ダイアーの結婚

1. ダイアー・シンポジウム

ヘンリー・ダイアー (Henry Dyer, 1848-1918) はいつ、どこで結婚したのか。こんなことが、どうも気になっている。日陰の人がいたとか、日本人妻がいたとかいった話ではない。日本で結婚したのか、英国で挙式したのかということである。

ダイアーといえば、明治初年に工部省の招きで来日したお雇いスコットランド人教師である。工学寮ならびに工部大学校 (いまの東京大学工学部) という、工業技術の人材養成を目ざした専門教育機関の教育経営の責任者となり、日本の工業教育制度の創始に多大の貢献をした。帰国後は、グラスゴウを拠点にして、日英間の財政・経済と教育文化の交流を推進した人物でもある。

そのダイアーにはいいなずけがいた。マリー・ファークソン (Marie Euphemina Aquart Ferguson) といったその人と結婚するのだが、二人はいつ、どこで挙式したかについては、諸説ある。一つは、お雇い教師として来日してから一時帰国して結婚したという説である。たとえば、北政巳『国際日本を拓いた人々』(同文館)には、

「明治七(一八七四)年にグラスゴウに一時帰国し、マリィ・ファークソン (Marie Ferguson) と結婚した記録がある。」

と記されている。しかも、一時帰国のさい、かれは「工部省や工部大学校に必要な資材の調達に動いたことであろう」し、また「明治九(一八七六)年からの工学寮の教壇に立つ第二次の教師団の採用に当たった」のでであろうと、推測されている。これらの用務を兼ねての帰国といわれてみると、当時の状況からみて、確かにそうかと思われる。

その一方、ダイアー「先生の日本へ来られたる時已に家妻を有して携へ来られたる」、とも伝えられている。工部大学校時代の教え子のなかでもとくにダイアーとの親交が深く、帰国後のダイアーをグラスゴウの自宅に二度まで訪ね

た田邊朔郎の記述であるだけに、捨てがたい。

もう一つ、これらとは別のあたらしい主張をする向きもある。「東京で結婚した」というのである。それも、ダイアーの子孫の方がいわれる説であり、一族のあいだではそう伝えられているというのである。先般開かれたヘンリー・ダイアー・シンポジウムの席上でも、おおよげに発表されたのだから、注目したいと思う。

ヘンリー・ダイアー・シンポジウムというのは、「日本の工学の先達ヘンリー・ダイアーの業績を評価し、21世紀に向けて工学教育と技術移転を広く討議するための日英相互交換シンポジウム」である。1996年と1997年の二回、日英両国で開かれている。1996年は、グラスゴウのストラスクライド大学で、4月14日から16日まで開かれた。ダイアーが徒弟修業中に学んだアンダソン・カレッジを前身にもつ、同大学が創立200周年にあたるのを記念して開催されたのである。1997年は、工部大学校が設立されて120年目にあたるのを記念して、同校の後身である東京大学工学部の主催で、3月18日と19日の両日、東京大学で開催された。

ダイアーの結婚をめぐる話は、この第二回シンポジウムの、「ヘンリー・ダイアー——使命を帯びた男」と題する報告のなかで触れられた。報告者はR. ハンター (Robin Hunter) とL. ハート (Lesley Hart)。ふたりはダイアーの妹ジャネット (Janet Dyer, 1850-1916) のひ孫にあたる方である。筆者の10年来の共同研究者でもある。

かれらがいうところによると、ダイアーは日本にむけ出帆するさい、

「私生活の整理を待つ間もなく、また、いいなずけのマリーさえも伴わずに旅立った。スコットランドを離れる前に結婚して、日本への船旅で新婚旅行をゆうゆう楽しむよりもむしろ、単身で出発し、艦上にいる時間を新設大学の規則書の準備に使う途を選んだ。マリーの両親はヘンリー・ダイアーがすぐに出発したことにいささか狼狽し、娘のそばからそっと逃げ出すことがないようにと、急いで次の船に娘を乗せた」

のだった。その後、ふたりは「東京で結婚し、子どもを5人もうけたが、その

うち長子は子どものときに亡くなった。」

ダイアーが単身来日したのを追うようにマリーがやってきて、東京で結婚したというのである。しかし、裏付けとなる史料まで示されているわけではない。実は、先に紹介した「一時帰国して結婚した」とか、来日のさいすでに妻を帯同していたとかいう所説についても、確たる記録が認められないのが、どうにも気にかかる。

2. ダイアーとマリーの来日

ダイアーの来日時期については、いくつかの資料に記されている。まず、ダイアーが工部卿代理人のH. マセソンと結んだ条約書には、1873年の「四月一〇日にイングランド出帆の郵船にて直接日本に出立すべきこと」とある。後年、叙勲されたときの奉職履歴概略には、「明治六年六月三日東京ニ著シ」とある。サザンプトンの港をたち、2カ月に近い船旅ののち、やってきたのである。

じっさい、同年の6月3日、横浜についた船の乗客名簿には、かれと思われる名前がみられる。ピー・オー汽船会社 (Peninsular and Oriental Steam Navigation Co.) の「アヴォカ (Avoca) 号」という蒸気船で、香港からやってきた。同社は英国の東洋海運を代表する企業である。1864 (元治元) 年に横浜と上海のあいだに定期航路を開設し、76年には新線を設けている。このアヴォカ号の乗客として、つぎの諸氏の名があがっており、そのうちのDyerこそわがH. ダイアーにちがいないであろう。

「Messrs. Dean, Wylie, Hyash, Marshall, Dyer, Ring, Jacquet, and Roberts, and 12 deck passengers.」

ここにある Hyashとは林董であって、岩倉使節団に随行して渡欧中、工部省工学寮の教師の選任に従事し、雇い入れる英国人教師を同伴して帰国したものである。また、Marshallとは工部大学校の数学教授となるD. H. マーシャルであろう。

この乗船名簿でみるかぎり、重要な点が二つある。第一は、工部大学校教師の第一陣は同じ船で一緒にやってきたのではなかった、ということである。事

実、たとえば、化学教授になるE. ダイヴァーズと英語・英文学教授になるW. クレイギィは、アヴォカ号の次の便でやってきた。つまり、ダイアーらに乗せてきたアヴォカ号は11日に香港へむけて横浜を出港するが、それが引き返して7月1日に横浜に戻ってきた便に、ダイヴァーズとクレイギィと思われる名前がみられるのである。また、物理学教授となるW. E. エアトンのばあいは、6月30日、太平洋郵船会社所属のクアン・セ (Quang Se) 号で横浜に来着した。サンフランシスコを経てやってきたのであり、妻マルチダを伴っていた。

もう一つ重要なのは、マリー嬢の名前がみられないということである。やはり彼女は遅れて来日したのであろう。ダイアーの「次の便」で出立したというから、来日もダイアーよりそれほど遅れることはなかったであろう。そう思って、当時の乗船名簿を調べてみるのだが、なかなか確認がとれない。

スコットランドと日本の両方で手分けして調査を始めたところ、やがて興味深い事実が判明した。二人が挙式したのはダイアーが来日した年ではなくて、翌年の5月23日、それも東京ではなくて横浜であったのである。とすれば、マリーの来着はそれよりも少し前のことであろうと予想がつく。

3. 横浜での挙式

ダイアーとマリーの結婚にかかわる情報源のひとつに、『グラスゴウ・ヘラルド』紙がある。1784年に創刊された伝統ある日刊紙である。その1874年の6月9日号の第一面にある結婚欄に、次のような記事が出ている。

「日本国横浜の英国公使館にて、先月23日、ウィリアム・パリー尊師により、英国公使ハリー・パークス卿ご陪席のもと、江戸・工部大学校校長土木工学士ヘンリー・ダイアー氏と、グラスゴウ市ペズリー通ヘイブロック・テラス8番地のダンカン・ファグソン氏の令嬢マリーさんが挙式。」
かれらの挙式は、東京でなく、横浜の英国公使館でおこなわれたというのである。それも、1874 (明治7) 年というから、ダイアーが来日した翌年の5月23日のことであった。『結婚許可書』にも確かにその旨明記されているし、同僚の数学教授D. H. マーシャル、英語教授W. クレイギィをはじめ4名が立会

人として出席し、署名している。

ダイアーの結婚記事は、日本側の資料にも出ている。『ジャパン・ガゼット』、『ジャパン・デイリー・ヘラルド』、『ジャパン・ウィークリー・メール』など、当時の在日外国人相手に創刊された英字新聞をみると、各紙の「結婚欄」に確かにかれらの記事が認められる。各紙の文面は、いずれもほとんど同じである。ただし、日本側の英字新聞では、マリー嬢の住所番地まで明記されておらず、「D. ファーグソン氏の長女」と記されているだけである。おそらく、これらの英字新聞が、『グラスゴウ・ヘラルド』紙の結婚記事の情報源であったと思われる。

それでは、マリー嬢はいつ来日したかという、5月19日と思われる。この日、横浜に入港した「ベハー (Behar)」号の乗船名簿には

「Mis Sym, Miss Ferguson, and Mr. Slirkell」

とあり、このMiss Fergusonこそマリー・ファーグソン嬢と思われる。ダイアーの来日から二人の挙式までのあいだの乗船名簿を調べてみても、管見のかぎり、ほかに彼女と思われる名前は見あたらないからである。このベハー号もピー・オー汽船会社が所有する蒸気船であり、やはり香港からやってきた。

以上のような調査によると、マリー嬢は「ダイアーの次の便」で出立したといわれているが、どうもそうではなくて、ダイアーより10カ月以上も遅れてやってきたのである。しかし、5月の19日に来日して挙式は23日というから、花嫁の到着を待ちに待って執りおこなわれたことになる。

とにかく、ダイアーはせかされるようにして出立し、単身で来日したのであった。けれども、婚約者や家族を同伴せずにやってきたのは、ダイアーだけではなかった。前出のダイヴァーズやクレイギィのばあいも同じであって、来日した年の9月になると、兩名とも、残してきた人を呼び寄せるために、学校側に旅費と支度金の前借りを願い出ている。そのさいの関連文書のなかに、「英国ヨリ赴任ノ際家族引連れ出発ノ筈ナリシガ、急ヲ要セシタメ、後ヨリ家族引纏ノ儀」とか、「兼テ約束之妻有之候處至急英国発途仕候而婚姻之余暇ヲ得ズ候」とかいう一節があり、注目される。ダイアーら日本に招かれた英国人教師たち

は、すばやい決断と出立をもとめられていたのである。

4. ダイアーの帰国

ダイアーは一人でグラスゴウを出立し、林董に付き従われて日本の土を踏んだ。明治6年6月3日のことである。しかし、任務が終了して日本を離れるときは一人ではなかった。9年余の在日中に、いいなずけのマリー嬢を迎え入れ、やがて子どもにも恵まれたのだった。明治15（1882）年7月14日、横浜を出港する英国蒸気船「アラビック（Arabic）」号に乗りこんだとき、家族は6名になっていた。

アラビック号は、サンフランシスコ行き的大型蒸気船（2788トン）である。その乗船名簿のうちのグラスゴウまでの乗客名のなかに、

「Mr. and Mrs. Henry Dyer, 4 children and servant in cabin」

とある。来日は南回りの香港経由であったが、帰国は太平洋をわたりサンフランシスコを経由しての旅であったのである。この乗客名簿には子どもが4名とあるが、実際は、ダイアー夫婦は、日本滞在中、4男1女に恵まれていた。1875年7月12日に長子がさずかり、ジョン・ファークソン・ダイアーと名付けられたのだが、かれは同年11月26日に死去したのであった。

ほかの子どもたちはどうかというと、4名ともダイアーの母校であるグラスゴウ大学に学んだのち、第二子のチャールズ・ヘンリーは牧師になった。第三子のロバート・モートンはグラスゴウと香港の造船業で働いたし、第四子ジェイムズ・ファークソンはインドの行政機関で活躍した。かれら三兄弟は結婚したけれども、いずれも子どもに恵まれることがなかった。

第五子のマリー・ファークソンは、離日直前の1882年6月15日に誕生している。彼女は生涯未婚であり、子どもがいなかった。したがって、ヘンリー・ダイアーには直系の子孫はいないのである。

補 節 ヘンリー・ダイアーの胸像

(1)

『博士の肖像』という一風変わった図書があらわれた。東京大学で教鞭をとった人たち（外国人関係者2名も含む）の、肖像画と肖像彫刻を選んで編まれた図録である。いずれの像も同大学のキャンパス内に飾られている。しかし、図録といっても単なる基本台帳ではない。制作年、寸法、技法、材質、額や台座に記されたキャプション、所蔵先・所在地などといった基礎データだけではなく、それぞれの像主および作者の略歴が付されている。この略歴紹介が、味があっておもしろい。

本書に登場する像主は総勢 121名。ここには外国人教師も含まれている。おもに東京大学の発足期にやってきて礎をきずいた諸氏である。「お雇い教師」と称される彼らを数えてみると、10名にのぼる。J. コンドル（工部大学校造家学科）、J. K. スクリバ（医科大学）、E. ベルツ（東京医学校・医科大学）、J. L. ヤンソン（駒場農学校・農科大学）、O. ケルネル（駒場農学校・東京農林学校・農科大学）、W. E. エアトン（工学寮・工部大学校）、C. D. ウェスト（工部大学校）、L. ハーン（文科大学）、E. ダイヴァース（工学寮・工部大学校・理科大学）、K. ミュルレル（大学東校・東京医学校）といった面々である

このなかに、どうしても加えてほしかった教師がいる。H. ダイアー(Henry Dyer)である。工学寮や工部大学校（工学部の前身）の都検（教頭）ならびに土木・機械工学教授として工学専門教育の組織化に貢献した、お雇いスコットランド人教師である。実学重視という工学教育理念を日本に残したし、工学部を草創期から大学のなかに位置づけるという日本工学教育制度の生みの親であるといってもよい。

この工部大学校でダイアーとかかわりあった人たちは、何人かが収録されている。同僚としては、物理学教授エアトンと化学教授ダイヴァース。教え子としては的場中、三好晋六郎、山川義太郎、中野初子、井口在屋らの諸氏である。

かれら日本人教師は、同校での修学と海外留学をへて母校の教壇にたったものがおおい。かれらのなかに、ダイアーの面影が見えないのは誠に残念である。

(2)

『博士の肖像』は、東京大学総合研究博物館の特別展「東京大学コレクションVIII 博士の肖像」の図録として作成されたものである。同展は昨年10月1日から11月15日まで開かれたのだが、実は、この展覧会の直前にダイアーの胸像が東京大学に寄贈されていたのだった。英国大使館とICLジャパンから寄贈されたもので、7月29日に贈呈式がおこなわれている。現在は、工学部列品館の学部長応接室にたいせつに安置されている。

そもそもダイアーの胸像が制作されたのは、かれへの関心の高まりと再評価の機運のなかで実現したものである。

かれの偉業をしのぶシンポジウムが日英両国で開かれたのも、そうした機運のあらわれとして特筆される。まず1996年4月にグラスゴウのストラスクライド大学で、ついで翌年3月には東京大学で、それぞれ開催されている。ストラスクライド大学といえば、かれの母校のひとつであり、その創立200周年を記念して、「産業の国際化、問題点・戦略・事例研究」というテーマで開かれたのだった。日本のばあいは、工部大学校が明治10(1877)年に開校してから120年目にあたるのにちなんで、「工学および工学教育の現代と未来における役割の評価」というテーマで開催された。このシンポジウム開催が契機となり、また日本全国で展開された英国祭UK98の一環として、このたびの胸像の制作と贈呈に至ったものである。

英国祭UK98は、日英友好関係の促進に寄与することを目的として企画された。1998年一年間、日本各地で八百近くの英国関連・日英交流のイベントがあり、草の根レベルでの交流にも力がそそがれたのだった。

もう一つ、ダイアーの主著『大日本、東洋の英国 (Dai Nippon, the Britain of the East, a Study in National Evolution)』(1904)の邦訳が企画されたことも、ダイアー関心の高まりとして特記される。その訳書は、平野勇夫訳『大日本、技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』(実業之日本社、

贈呈者 駐日英国大使 サー・デービッド・ライト

平成十年七月二十九日

寄贈者 ICL, 英国大使館

彫刻家 ケイト・トムソン

」

式典には、大学や産業界から多彩な人びとが出席し、そのなかにはストラスクライド大学を代表したチェンギ・クオ教授の顔もあった。東京大学管弦楽団によって、ヨハン・シュトラウス「ウイーン的生活」、モーツァルト「アダージョとフーガ」、エルガー「愛の挨拶」という弦楽四重奏が奏でられると、宴はいっそうの盛りあがりを見せた。そのなか、日英間の科学技術の交流の歴史に話がはずみ、ダイアーの遺徳が永遠に伝えられることになったことを口々に喜びあった。この模様は、東京大学の『工学部ニュース』などに報じられているから、知るむきもおおいであろう。

(4)

ストラスクライド大学のばあいは、11月16日の午後5時から式典がおこなわれた。会場の評議会室には、日英の関係者が100名ほど集い、ここでも、ダイアーを介した両国の歴史的な絆の深まりを喜びあった。そのなか、同大学のサー・ジョン・P. アーバスノット学長のあいさつに始まり、同学長と林貞行駐英日本大使の手で胸像が除幕された。つづいて、永野健日本工学会会長、ならびに工学・物理学研究協議会会長のアラン・ルッジ博士による記念講演が、それぞれおこなわれた。東京大学工学部長の中島尚正教授もあいさつに立ち、最後にはストラスクライド大学工学部長のA. ヘンドリー教授が謝辞をのべている。

式典での祝辞ないし記念講演では、ダイアーを介した日英間の交流とダイアーの日英における偉業が、口々に称賛されている。たとえば、アーバスノット学長のばあいは、演題からして『ヘンリー・ダイアーの偉業』とあり、ダイアーの経歴紹介につづいて、顕著な貢献をたたえている。

アーバスノット学長のいう第一の貢献とは、日本での体験をもとに、ストラスクライド大学の前身である「グラスゴウ・西部スコットランド工科大学の教

育プログラムの進展に影響をあたえた」ことである。とりわけ、工部大学校で実施した、実習と理論学習を交互に組みあわせるサンドイッチ課程は、同大学の教学の基本方針である実学教育の重視策のなかに具体化されていることが、注目された。

第二に、「『グローバルゼーション』という考えがまだほど遠かった時代に、世界中の旅行とコミュニケーションの機会が増大すれば人びとの生活に重大な影響をおよぼすであろうと予見した」ことである。ダイアーは、「工学という学問こそがテクノロジー、経済、社会の変化を進展させる鍵になるであろうと強く確信した」のだった。

第三は、帰国後も、日本と英国間の良好な関係の進展に寄与したことである。日本政府の代理人になったし、グラウゴウにやってくる日本人留学生の支援には顕著なものがあった。

永野健日本工学会会長の講演のばあいは、『西暦2000年後の社会と工学教育』と題している。ここでもやはり、ダイアーが練りあげた構想と工部大学校の特色が紹介され、称賛された。

ダイアーの構想というのは、教室内での授業、実験室での実験実習、現場での実習体験をむすびつけるという「革新的なエンジニア教育構想」のことである。これは、若いころグラスゴウの造船所で実習した体験と、グラスゴウ大学の学生時代に恩師のランキン教授から学んだことに由来するものであった。

工部大学校の特長とは、「今日の水準からみてもユニークな教育制度」を擁していたことであり、具体例として2点あげられた。第一は、「大学の学位を授与する学校であった」ことである。とくにヨーロッパの諸大学では工学部がなかなか大学のなかに位置づけられなかったのだから、あきらかな対比をなしている。第二は、英語学習を含む基礎課程、実験室授業を重視した工学専門課程、工部省の工場での実習体験と卒業論文作成にむけた実地の調査研究に、それぞれ2年間をあてるという6年間の教育課程を提供したことである。永野会長の講演はこれだけにとどまらず、工学教育の今後のあり方にまで説きおよんだところが出色であった。

「次の千年間の、工業化した国々における工学の教育・研究のあらたな使命とはいったい何でありましょうか」。このように問いかけ、ダイアーの時代とちがい、激変しつつある現代社会の複雑さを反映して3つの使命があるという。「教育のグローバルゼーション」、「工業化を推進する高度工学教育」、それに「資源を枯渇させないこと」の3点である。なかでも「資源を枯渇させないということが、まちがいなく工科大学のあらたな使命である」と力説した。

「太陽エネルギーを除けば、天然資源が有限であることはだれもが知っています。大量生産と大量消費をただ続けるのみということではすまされません。また、地球温暖化やオゾン層の破壊などといった環境問題についても知っております。不確定で、未知で、予知できないことが数おおくありますが、エンジニアができる唯一のことは、最良で有益な知識を地球の維持のために役立てることです。」というのである。

このような使命が期待されている工学教育は、今後どうあるべきか。ダイアーだったらどうするであろうか、だれでもきっと関心をもつことであろう。というのも、かれは「わずか24歳という若さで、かつてどこにもみられない革新的な教育構想を打ちだし」、「当時としては最良の進路を目ざしていた」。そうした先見性の持ち主であったからである。

「今、ヘンリー・ダイアーの胸像は私たちに眺め、次の千年間にむかう正しい道はどちらなのかを私たちに問うております。」と永野会長も問いかけ、次のようにつづけている。

「これまでテクノロジーが世界に変化をもたらしてきましたし、これからも変化をもたらすことでありましょう。産業革命以降、エネルギー革命と情報革命を通して、わたしたちの社会はますます変化のスピードを加速化してきております。わたしたちの大学制度はこれに遅れずについていき、エンジニアを先導し、必要な手段を提供することができるのでしょうか。また、次の千年間の工学教育をしっかりと確立するための、健全で強固な哲学的基盤が、わたしたちにはあるのでしょうか。

ヘンリー・ダイアーはスコットランドから何をもたらそうとし、実際に

何をなしとげたのか。また、わたしたちの教育活動は次の千年間の工学教育にはどんなあたらしい使命があるのかははっきりさせるべきであるということについて、今こそ考える好機であるように思います。

当地と東京大学にある、ヘンリー・ダイアーの二体の胸像こそが、これについて考えさせてくれるとわたしは強く確信するものであります。」

このように結びおえると、深い感銘をあたえたようで満場の喝采をあげた。以上のことは、式典の出席者に配られたパンフレット『ヘンリー・ダイアー胸像除幕式と特別講演』に詳しい。

ダイアーの胸像は、しばらく、ストラスクライド大学付属図書館、すなわちアンダソン図書館に収蔵されていたが、現在はヘンリー・ダイアー・ビルディングにある船舶学科 (Department of Ship and Marine Technology) の玄関に置かれている。台座の銘文は、「贈呈者 駐英日本国大使 林貞行 平成十年十一月一十六日」とあるところが、東京大学の胸像と異なっている。

第2章 英国留学生の派遣

第1節 南清のスコットランド留学

(1)

明治のはじめ、わが国では教育の近代化と自立化がめざされた。その方策のひとつに、外国人教師の雇い入れとそれにつづく留学生派遣政策がある。お雇い外国人教師から西洋の学術技芸を学んだ者のうちより、成績優秀者を選んで西洋に留学させ、教育の仕上げをし実地経験を積ませる。帰国後、外国人の学校教師や技術者にとって代わらせるというもくろみである。

わが国最初の、工業化のための人材養成機関である工部大学校（のちの東京大学）のばあいは、英国、とくにスコットランド出身の教師の主導をうけて、西洋式の教育がおこなわれた。土木・機械工学のH. ダイアーやJ. ペリー、数学のD. H. マーシャルなどの諸氏である。

明治12年11月にいよいよ第一回の卒業生23名を送り出すとき、学芸拔群の者11名が選ばれ、同月25日付けで留学を命ぜられている。次の面々である。

南清（土木学）

高山直質（機械学）

三好晋六郎（造船学）

荒川新一郎（紡織学）

志田林三郎（電信学）

辰野金吾（造家学）

近藤貴蔵（鉱山学）

石橋絢彦（燈臺学）

高峰讓吉（化学）

小花冬吉（冶金学）

栗本廉（地質学）

そのうち、南清（1855－1904）はのちに鉄道事業の功労者となる人物である。「日本鉄道の父」と称えられてもいる。神田孝平や箕作秋坪の塾、さらには慶応義塾、開成学校に学び英学を修めていたが、転じて工部大学校（入学時の正確な名称は工学寮）に入学する。6年間、スコットランド風そのままの学校生活をおくり、学理と実地を兼備した教育を受けたのだった。定期試験をまっとうし、卒業時には同校土木科「第一等及第」の榮譽をえている。

日本交通協会編『鉄道先人録』や『明治期鉄道史資料』（日本経済評論社）などによると、南は日本鉄道史上に特異な位置を占めている。留学から帰国後、鉄道の技術者、経営者、さらには鉄道民営論を展開した論策家として活躍したのである。具体的にいえば、山陽鉄道の技師長をへて、阪鶴鉄道や唐津鉄道の社長として私鉄企業の経営にたずさわった。『鉄道経営の方針』（明治32年）を上梓して、急曲線・急勾配の是正、複線化、橋梁の強化など技術面の改善策を提示したにとどまらず、政府の鉄道政策を批判し「自由競進こそが鉄道発展の原動力」であることを説いた。『鉄道経綸の刷新——帝国縦貫鉄道の成立』（明治35年）、『鉄道経営策——北陸幹線の整理』（明治36年）といった共著もあり、ここでは全国的鉄道体系を構想している。

日本工学会の『工学叢誌』にも、「鉄道論」「東海道鉄道」「天龍川鉄橋質疑ノ答」「東海道鉄道幹線」といった論説および報告（雑誌）を發表している。

（2）

南清をはじめ、工部大学校の卒業生のなかから選ばれた派遣留学生11名は、いずれも英国に学んでいる。工部大学校で指導を受けた外国人教師たちの母国である。その英国にむけて出帆したのは、明治13（1880）年2月9日のことであつた。横浜から、香港いきのフランス蒸気船ヴォルガ号（1502トン）で旅立っている。南の旅券番号は8765番、「土木学修業トシテ欧州行」という申請理由で、1月24日づけで手にしていた。

南が選んだ留学先はスコットランドのグラスゴウ大学である。1451年創立というから、英国で4番目に古い伝統をもっている。当時、工学教育の先進校のひとつであり、わが国とは、幕末以来、外国人教師の雇い入れと留学生の派遣

を通して緊密な提携関係にあった。

グラスゴウ大学へは、このとき南と一緒に志田林三郎（電信学）、高山直質（機械学）も留学している。志田林三郎といえば電気思想の普及に尽力し、現代の高度情報化社会を予測したことで有名であり、高山直質もまた「オーストラリア近海から真珠を輸入して養殖することを提案した」ことで知られている。ふたりは後年ともに帝国大学工科大学教授になっている。

南は、グラスゴウ大学に入学するとき、一枚の登録証（Matriculation Album）を作成している。その登録証は年度ごとに綴じられ、簿冊となって同大学のアーカイブズに保存されている。すでに北政巳『国際日本を拓いた人々』（同文館）で紹介されていることであるが、その入学登録簿をくってみると、1880年度の登録証 900番が南のものである。太めのペンで、

「Kiyoshi Minami」、

25歳と書きこみ、希望する専攻分野は「工学」、受講科目は「工学の全科目」と申請している。出身地は「日本の会津」、父親の名前は「とねり」、職業は「士族（Gentleman）」と記し、現住所欄にはウィルソン・ストリートのマークランド・テラス18番、日本の住所欄には東京の工部省、と書き添えてもいる。

記名簿とでもいうべき文書（Glasgow University Album）にも、南の登録記録が残っている。こちらの場合は、父親の職業欄に「士族（Samurai Gentleman）」と書き込んでいる。

南は工学の全科目に受講申し込みをしたというから、具体的にいえば、「土木工学・機械学」の初級および上級コース、「工学の実習・実地調査」の初級および上級コースへの受講を申し出たことになる。『グラスゴウ大学便覧』の1880年度版によれば、各コースの受講料はそれぞれ3ポンド3シリングであり、その学習内容は次のようになっている。

最初の「土木工学・機械学」初級コースは、11月から4月までの毎週月・水・金曜日の11時から12時まで開かれた。土地測量・水準測量の原理と方法、経緯儀と水準器の原理と使用法、計測（とくに線路の土工事関連）、鉄道線路とその軌道の設計、トンネルの掘削、土木工事契約の明細書、建築入門などが扱わ

れている。

上級コースの方は、土曜日をのぞく毎日午後4時から始まる。上級であるだけに、細かな学習課程が用意されていたが、ここでは初級コースの復習と継続学習に加えて、主として次のようなテーマが取りあげられている。物質の弾性と強度、建造物の強度・安定性・堅さ、構造物の支柱、エネルギー・機械力・馬力、摩擦と応用力学上の諸問題、水力学原理、河川と流水の測定、熱力学の基本原則、蒸気機関・水車・タービン、揚水用の遠心ポンプと送風機、造船学原理と求積法、陸橋と高架橋、排水工事と上水道事業、建物内の換気装置その他の衛生設備、鉱山における換気・排水・水処理。

「工学の実習・実地調査」の初級コースのばあいは月曜日と水曜日の午後1時から3時まで、上級コースは火曜日と木曜日の同じ時間帯に、それぞれ開かれた。コースごとに学習程度はちがっているが、いずれも、画法幾何学・正射図法・等測投影法・遠近法の講義と実習、工学建築学製図・土地測量・水準測量・土地区画・測定法一般の実習、工学研修旅行が用意されていた。そのほか、土曜日などに、一定の時間、室内もしくは室外で実際に就業してみることが求められていた。

これらコースの履修ぶりはどうであったのか、とても興味深いけれども、それほど詳しいことまで分からない。しかし、南の成績がすこぶる良好であったことは確かである。村上享一『南清伝』（明治42年）には

「二百五十人内外の同級生中、君は曾て七 八番以下に降りしことなかりき」とある。実際、「工学の実習・実地調査」上級コースは2番、「土木工学・機械学」は7番、それに、工学を学ぶ優秀な学生に贈られるウォーカー賞やジョージ・ハーヴィ賞も獲得している、という記録が残っている。

南の学業成績の優秀さは、ウィリアム・トムソン教授がなした一場の演説でも称えられている。それは学位授与式における演説であって、1881年4月29日、ギルモアヒルにあるグラスゴウ大学の博物館ホールで開かれた。その模様は、翌日付けの『グラスゴウ・ヘラルド』紙や『ノース・ブリティッシュ・デイリー・メール』紙などで報じられている。

そのうち、『グラスゴウ・ヘラルド』紙が詳しく伝えるところでは、トムソン教授はこの式典の席上、博物学クラスの優秀賞を授与するさいに挨拶し、「このクラスは光栄にも自分が教授に選任されてから見てきたなかで最大の自然哲学クラスであるばかりか、これまでグラスゴウ大学で開かれた自然哲学のなかの最大のクラスであった」と述べた。しかも、「これまで体験したかぎり、この学級はどうまく指導でき、とても満足をおぼえた学級は記憶にない」と言い添えている。なかでも「日本から来た三人の学生」の優秀さと学習ぶりは、とりわけ感銘をあたえたようで、次のように報じられている。

「彼らは文字どおり母国の誉れとなったのであり、彼らがいかに心から迎え入れられたかを見て、彼はとても満足したのであった。しかし、勉強しにやって来て一緒に同じ机を並べ、世界の反対側にある国にヨーロッパの学問を持ち帰ろうと一心になっているこれらの日本人学生たちを、スコットランドの若者たちが非常に親切に歓迎しとても好意的に迎え入れてくれたということは、まったく予期できなかつたことである。この三人の日本人学生の並外れた優秀さについて注目すべきことがあった。いずれのクラスでも彼らには仲間たちの全員一致でもって賞が与えられたのだが、彼らは筆記試験に秀でていたのみならず、口頭試験にもきわめてずば抜けていたのである。これは、話がすべてわかるという優れた理解力のあらわれであった。また、英語が彼らにとって外国語であることを考えるとき、英語で自分の考えをはっきりと力強く表現できる能力を示すものであったが、この点はトムソン教授のまったく思いもよらぬところであった。」

ここにいう三人の日本人学生とは、南清、志田林三郎、そして高山直質のことであることはいうまでもない。

「グラスゴウ大学、学位授与式」と題するこの記事は、のちに『工学会誌』を通じて紹介されている。日本工学会が刊行した雑誌であり、その53巻（明治19年5月31日）にある雑記「高山直質氏之小傳」がそれである。筆者は真野文二、彼もまた工部大学校を卒業後の1886年にグラスゴウ大学へ留学し、数学・自然哲学・工学を履修している。

『朝野新聞』でも、右の学位授与式のあった年の6月26日の紙面ですでに報じられていた。各人の等級と賞品がつぎのように紹介されている。

「○去る十二年四月工部大学校に於いて工学士の証帖を受け英国へ留学を命ぜられざる南清（土木学），高山直質（機械学），志田林三郎（電信学）の三氏ハ過日蘇格蘭グラスゴウの学校に於いて試験の節左の等級及び賞品を得ざる由実にこよ無き面目と謂ふべし工学部土木并器械科上級（二）高山○室内事業井野外上級（二）南○筆記試験賞品乙（三）南，（四）高山○ジョージハーウェー賞品高山，同乙南○物理学科（科中生徒の投票を以て優劣を定む）一年生徒（一）志田（二）南○高等数学科二年生徒（一）志田」

（3）

グラスゴウ大学に留学中、南は大学内での勉学に励むだけでなく、学外に出て実地に研修をつんだということも注目される。これができたのも、同大学の学習課程は年間を通して開設されていたわけではなく、冬学期のみ開かれていたからである。夏学期になれば会社や工場に入って研修を受けることができたのである。

大学当局も、当時この実地研修を奨励していた。もっとも、産業界と学校とが協力して実習と学習を交互におこなわせるというこの制度がいつ始まったのか、不確かなところがあり諸説ある。「グラスゴウ大学工学部が1840年に設置されて以来、学生は半年間を自由に自分の望む専門の実習にあててよかった」という説をなすものもいるが、どうも確かな記録はみあたらない。しかし、1865年になると、弟子入り制度や徒弟奉公制度を妨げないように配慮し、「大学の学習課程の履修は、学生の都合によって、弟子入りないし徒弟奉公の前後でも途中からでもよい。これによく合うと思われる履修の組み方は、冬期を大学の勉学に、夏期を工学実習にあてることである。」という記録があらわれてくる。さらに、『グラスゴウ大学便覧』に見るかぎり、1878年度版から、この制度についての明確な規定があらわれ始める。「工学専攻生は、可能ならば、本学在籍中の二夏か三夏、土木工事か建築業の営業所、作業所、あるいは鉄道や

水道、港湾など敷設中の事業に勤めることが望ましい」というのである。そして1880年度版以降になると、それを強く「推奨」という文字がみえる。

南は、サンドイッチ制度と呼ばれるこの実地研修の機会を逃さず、積極的に活用した。まず最初に、P. アンド W. マクレラン鉄工所に入り、職工たちに伍して鉄橋の組み立て作業に従事している。市内のトロンゲイトにあった鉄工所であり、鉄道の貨車製造、橋梁やボイラー製作のほか、鉄製器具や鋼製品の卸売、金属細工、機械製作、ボルト・ナット・リベット・鎖の製造、ブリキ製造、ガス工事などをあつかっていた。このときの職工頭は、神戸・京都間の線路を敷設するさいに招かれ、職工頭として指導したことがある人物であったという。そのような縁から、南は研修中すくなくならず便宜をえたようである。その職工頭とは、工部省お雇い建設師であったE. G. ホルサムのことであろうか。

マクレラン鉄工所のほかにも、クライド川の築港工事の実務に従事したし、カレドニアン鉄道会社に入って実地の研修をつんでもいる。この鉄道会社における実習では、グラハムという技師長と一緒に各方面に出張し、ときには一方の業務を担当することもあったと伝えられている。

このような実地研修は、南にとって初めてのことでない。工部大学校に在学中、すでに経験済みであった。『工部大学校学課並諸規則』（明治10年3月）によれば、6年間の在学中、最初2年間は学校内において修学するが、そのこの2年間は「毎年六ヶ月間校中ニ於テ修学シ六ヶ月間ハ実地ニ就キテ各志願ノ工術ヲ修業セシメ」る。それから最後の2年間になると、「全ク実地ニ就テ執業セシム」ことになっていたのである。じっさい南の記録をみると、たとえば、6年次にあたる明治11年度には、10月7日から大坂にでむき翌年6月16日に帰京している。出典は『工部省第四回年報（工作・燈台・營繕）』二である。

修学と実地修業を交互に組みこむというこの教育課程が成ったのは、同校の都検ヘンリー・ダイアーの発案と指導によるものであった。かれは1868年から1872年までグラスゴウ大学に在学したのだから、そこにおける先駆的实践に学

んで工部大学校の教育経営に取り入れたのであろう。また、近年の研究が明らかにしているように、「成功的なエンジニアになりうるような人材を養成する」ためには、大陸諸国にみられる学理を重視する工業教育方式と、英国にみられる実践重視の方式との「賢明なる結合」が必要であるというのが、彼の基本的な工業教育観であったのだから、まさにそれを具体化したものであったといっ
てよい。実際、かれは自著『大日本・東洋の英国』（1904）や『大局的にみたエンジニアの教育と実務に関する提言』（1905）のなかで、「エンジニアの教育における理論と実践の結合の方法は私が日本に導入した」と明記している。

（4）

入学時の登録証によれば、南はグラスゴウにおける現住所を市内ウィルソン・ストリートのマークランド・テラス18番と届けている。留学仲間の志田と高山もやはり同じ住所を記しているから、三人の宿所が一緒であったことになる。

その宿所は、グラスゴウ大学キャンパスのすぐ近くにあった。いま、大学の正門からユニヴァシティ・アヴェニューを東に行くと、工学部のランキン記念ビルがあり、その前を東北方向に入るオークフィールド・アヴェニューがある。このオークフィールド・アヴェニューこそ当時のウィルソン・ストリートにほかならない。1925年ころ今の名前に変わったのだが、それは当時市内に同名の通りがいくつかあったので、混乱を避けるために名称変更されたもようである。

そのオークフィールド・アヴェニューを進み、成人継続教育学部の前をさらに行くとグラスゴウ・ストリートに出る。この通りとつぎのグレイト・ウエスタン・ロードまでのあいだの道路の西側に、南清の宿舎マークランド・テラスはあったと思われる。現在、4階建の建物が残っており、フラットとして使用されている。黄土色の煉瓦に四角い窓枠がみえるから、ジョージア朝風の建物である。

もっとも、南は当初からこのテラスに居住していたかという点、どうもそうではないようである。南は、前記のように、明治13（1880）年2月9日に横浜をたって英国に着き、グラスゴウに入るが、最初は、入学登録証に記したマークランド・テラスとは別のところにいたと思われる。この年度の入学登録は10

月18日から11月30日まで受け付けられており、この間にマークランド・テラスという宿所を申告するまでどこにいたかというところ、どうもかれはコーリン・ブラウン宅に寄留していたと考えられる。当時の『グラスゴウ郵便局ディレクトリ』によれば、そのブラウン宅はヒルヘッドのセントジェムズ・プレイス1番地にあった。現在でいえば、グラスゴウ空港の南のギルモア駅あたりである。

かれブラウンはジャーディン・マセソン商会の代理店をつとめていた。マセソン商会といえば幕末からわが国と商取引を続けており、また伊藤博文、井上馨、山尾庸三ら長州藩士の英国留学を支援したこともあった。しかも、ブラウンは同社社長の友人ということから、南たちはこのブラウン氏に託されていたのであろう。山尾庸三も1866-68年にグラスゴウのアンダソンズ・カレッジ（今のストラスクライド大学）に学んだとき、このブラウン宅に寄宿していたことが知られている。

ところが、ブラウンは、日本の貧困士族のように、紳士としての身分はありながら暮らし向きははなはだ不如意であったという。そのうえ、10歳から30歳までの女子4人、10歳から20歳までの男子2人を抱えており、家は手狭のうえに粗末であったようである。南らにとり、政府から支給された月額12ポンド（当時日本円にして120円ほど）の留学費のうち8ポンドも下宿代として引かれたのに、その待遇といえば、狭い一室に押し込められたうえに、相応の食事を賄われることがなかった。しかも、一杯のウィスキーすら口にすることを許されなかったというのであるから、かれらはすこぶる不自由を感じていた。数カ月たつと、ようやく土地の事情に通じてくる。そうなると、待遇がはなはだ不当であることを看破し、「大枚8磅の下宿料を支払ひながら、斯る不都合なる賄を受くるのみか、万事に干渉さるゝこそ愚の極みなれ、断然転居すべし。」という南の発案で、とうとう下宿を変わることにしたのであった。

もっとも、すんなりことが運んだわけではない。かれらは、日本人留学生の後見人ともいべきマセソン商会とのあいだで、のべ40回、じつに3カ月にわたって、転居の許可を取りつける書簡をやり取りしたのであった。

「再三の御手紙なれども、諸氏の身の上に就ては、御本国の先輩より、懇々

御依頼の次第もあれば、当商会に於ては、徳義上監督者なき下宿屋へ任意に転居せしむることに同意する能はざる。」というマセソン商会の回答にたいし、折り返し、南らは「年齢既に二十五歳を重ね、経歴は本国に於て大学をも卒業せしものなれば、一々子供の如く御干渉下さらずとも、貴意を労するが如きことなきを確信せり。」と言い放ち、ついに転居を断行したのだった。その転居先が先記のマークランド・テラス18番であった、と考えられる。

右のことは前出の村上享一『南清伝』に詳しい。本稿が成ったのも、同書ならびに前掲の北政巳著に負うところが大きい。中野実氏（東京大学史史料室）からもご教示をえた。

第2節 福沢三八のグラスゴウ留学

(1)

福沢三八といえば福沢諭吉の三男第八子。海外留学へは、明治33(1900)年、慶應義塾大学の文学科3年のとき、中退して旅立った。最初はスコットランドのグラスゴウ大学に、ついでドイツのライプチヒ大学に学んでいる。

このうち、グラスゴウ大学への留学は近代日本留学史上とくに興味深いものがある。福沢の申し出に端を発して日本語の資格試験がはじまったからである。すでに北政巳による先駆的研究⁽¹⁾があるので、それを活用しながら、少しばかり調査してみた資料をもとに考察する。

(2)

福沢が旅立ったのは1900年5月5日のことである。横浜から日本郵船会社の讃岐丸(3682トン)で出帆した。ロンドンとアントワープ行きの汽船であった。特命全権公使として英国に赴任する、林董に同行しての渡英である。海外旅券付与明細表にも「林公使ニ随ヒ」とある。福沢の旅券は4327番であり、4月19日付けで手にしていた。乗船名簿には「J. デ・レーケ夫妻と子ども5名」という記述もみえる。これは、お雇いオランダ人土木技師ヨハネス・デ・レーケにちがいない。在職29年ののち帰国の途についたものである⁽²⁾。

福沢が留学先に選んだグラスゴウ大学といえば、1451年に創立された古い伝統をもつ大学であるが、18世紀の後半から科学教育が推進され、実学主義的な変容をとげていた。福沢の留学当時、工学教育の先進校であり、また、幕末以来、教師の派遣と日本人留学生の受け入れを通して、日本とはとても緊密な関係にあった。北政巳の調査によると、それまでに30名近い日本人が留学していた。1876年度と77年度に学んだ谷口直貞、増田礼作にはじまり、志田林三郎、高山直質、南清、本木小太郎、三好晋六郎、内藤政共、渡辺嘉一、真野文二、岩佐武弥太、進経太、須田利信、後藤牧太、三好文太、田中館愛橘、範多龍太郎、山本長方、平田重太郎、佐野藤次郎、大久保立、藤井光五郎、小島門弥、小田切延寿、サトウコウジ、スズキヨシオ、寺野精一、モリイガ、竹田政盛、

風間篤次郎，中島與曾八の諸氏である⁽³⁾。

かれらの多くは，わが国の殖産興業につながる自然諸科学を受講している。とりわけ工学（エンジニアリング）を修める者がおおく，ついで造船学，自然哲学，数学の受講が目立つ。福沢のばあいも，後述のように，数学，自然哲学のほかに化学を集中的に選択している。

グラスゴウ大学に入学するとき，福沢は一枚の登録証を作成している。1900年度の登録証99番が福沢のものであって，次のように届け出ている⁽⁴⁾。

氏名	[Sampachi Fukuzawa]
年齢	[19]
出生地	[Tokyo Japan]
父親の名前	[Ukichi]
父親の職業	[Editor]
専攻分野	[Science]
受講希望科目	[Natural philosophy(ordinary). Intermediate Math.]
現住所	[38 Sutherland Terrace, Hillhead.]

このうち，福沢が受講申請をした「自然哲学の普通クラス」は，毎日9時から開講され，初級力学と物質・音・熱・光・磁気・電気の特性について，実験をふんだんに取りいれながら説明された。「中級数学」のほうは，月曜日から金曜日までの10時から11時まで開かれ，平面三角法，円錐曲線論，微分法，積分法初歩について説明された。

ただし，この年度に福沢が受講したのは，この二科目だけではない。夏休み（1901年夏期講習）に開講された，数学（チュートリアル・クラス），自然哲学，物理学実験にも登録しているから，これらも実際に受講したにちがいない。これについての情報は，登録証ではなくて，『学級名簿（Class Catalogue）』から得ることができる。登録証は受講者自身が書き入れて提出した一枚の文書であるのに対し，この『学級名簿』は登録者を科目別・学級別に整理して一覧表を作成し，それを年度ごとに印刷して刊行したものである⁽⁵⁾。

つぎの1901年度も事情は同じで，年度はじめに提出した登録証には数学（上

級), 化学(講義), 化学(分析)を申請したが, 冬期には化学(分析)に, 夏期には物理学実験, 数学(上級)のチュートリアル・クラス, 化学(分析)に, それぞれ登録している。このうち, 化学(講義)クラスの受講者名簿のなかには, 日本人留学生の岩根友愛と岩崎秀弥の名もみえる⁽⁶⁾。

1902年度のばあいは, 天文学, 自然哲学(上級数学A)のほか, 冬期には化学(分析)を, 夏期には化学(冶金), 化学(有機, 上級)をそれぞれ登録している⁽⁷⁾。1903年度になると, 自然哲学(上級数学A)および自然哲学(上級数学B)に登録したほか, 冬期には化学(分析)に登録したのだった⁽⁸⁾。

学業中, 福沢は「ある教授にみとめられ, 教師になってグラスゴーに落ちつき研究を続けなかと, すすめられた」といわれる。けれども「既に数学へ転向する決心をしていたので, ことわってドイツに渡った」のであった⁽⁹⁾。

福沢が受講登録をした科目は以上のとおりであるが, これを『学級名簿』にある原語でもって示すと, 別表のようになる。

こうして, 所定の教育課程を修了した福沢は, 理学士号を取得することができた。1904年4月18日, ギルモアヒルにある大学のビュート・ホールで卒業式が開かれ, 博士号が7名に, 修士号が78名に, 学士号が62名に, 工科学資格証明書が8名にそれぞれ授与されたさい, 福沢は理学士27名のうちの一人として式典にのぞんだ。そのさい, その栄誉がとくにたたえられたのだった。『グラスゴウ・ヘラルド』という地元紙は, 卒業式を報じた記事のなかで,

「理学士のひとり日本人の福沢三八であり, かれが壇上にあらわれると拍手喝さいで迎えられ, それは長く続いた」

ことを伝えている⁽¹⁰⁾。『イブニング・タイムズ』でも, 福沢のことがとくに報じられている。

「式典に出た理学士のひとりに日本人・福沢三八がいた。かれが壇上にあらわれると拍手喝さいで迎えられ, 長く続いた。それは学友による称賛のしるしであり, また, かれの国籍や科学の学識に対する賛辞とも解されるであろう。」⁽¹¹⁾

年度	受講申請科目
1900	Natural Philosophy Mathematics, intermediate honours Mathematics, tutorial honours-intermediate Natural Philosophy, preparatory non-qualifying Physical Laboratory
1901	Mathematics, advanced honours Chemistry, systematic Chemistry, analytical Physical Laboratory Mathematics, tutorial honours-advanced Chemistry, analytical
1902	Astronomy Natural Philosophy, higher mathematical class (A) Chemistry, analytical Chemistry, metallurgical Chemistry, organic, advanced
1903	Natural Philosophy, higher mathematical class (A) Natural Philosophy, higher mathematical class (B) Chemistry, analytical

グラスゴウ大学日本人留学生で学士号を取得して卒業したのは、福沢が最初ではない。谷口直貞、増田礼作、渡辺嘉一、岩佐武弥太、範多龍太郎、山本長方、サトウコウジについて8人目にあたる。

なお、前記のように、入学時の登録証では、父親の氏名は「Ukichi」と記されている。次の1901年度、1902年度のばあいも同じ表記であるが、1903年度になると「Yukichi」とつづって届けている。

(3)

グラスゴウにおける福沢の留学生活は1900年から1904年までにおよんだが、この間、身辺ではいろいろな出来事があり、さまざまな体験をした。

まず、グラスゴウにやってきた翌年の1901年2月3日には、父論吉を失っている。3か月ほどたった5月になると、「福沢先生追悼会」に出席のためロンドンに向かった。追悼会は、11日の夜、ロンドン郊外のストリーサム・ヒルにある中井芳楠宅にて催されたもので、ロンドン在住の日本人20名をふくめ39名が出席した。そのなかには林董、岩崎小弥太、堀江帰一、大谷光瑞らの顔がみえる⁽¹²⁾。

グラスゴウ哲学協会に招かれて講演したことも特筆される。卒業後の1904年4月27日のことであるから、「理学士・福沢三八」と紹介されている。講演の題目は「地理的見地から見た日本の将来」であり、その内容は協会の『会報』に収録された⁽¹³⁾。すでに翻訳紹介されたことがある⁽¹⁴⁾から、周知のかたも多いであろう。海洋国日本の前途について論じたもので、次のように結ばれている。上記の翻訳からの引用である。

「日本は発展するのに非常に有望な環境にあり、しかも、それに順応していくだけの能力も持っている。したがって、日本の未来は約束されたものである、と結論すべきであろう。日本人の目的と責任は自国が地理的に有利な位置にあるのを無にしないことであり、また東洋の英国になることであり、人類の繁栄のために西洋文明をアジアに導入することである。」

グラスゴウ哲学協会で日本人留学生が報告したのは、福沢がはじめてではない。すでに高峰讓吉が1882年2月6日に、後藤牧太が1889年11月20日におこなっている⁽¹⁵⁾。しかし、グラスゴウ哲学協会といえば、地元の名士から構成され、グラスゴウというまちの活発で知的な雰囲気をよく象徴している協会である。その協会で講演したことは、福沢にとって名誉な体験であったにちがいない。

グラスゴウ留学中の出来事で、とくに注目されることがもう一つある。入学してまもなく、資格試験(Preliminary Examination)の選択科目に日本語を取り入れるよう、大学当局に申しでたことである。

この資格試験というのは、入学試験（Entrance Examination）のことではない。短期間在学するだけなら必要ないが、学位を取得して卒業しようとする者が合格しなければならない試験であった。学則の第6条第1項には、「すべての資格試験に合格しなければ、どのクラスの受講者も卒業の資格はない」とある。

福沢の申し出は容れられて、日本語が選択科目の一つに指定されることになる。その最初の試験委員に任命されたのが夏目金之助（漱石）であったのだから、興味深い。漱石が英国に留学中の明治34（1901）年のことである。

（4）

グラスゴウ大学で日本語資格試験がはじまったのは、福沢三八の申し出に端を発している。福沢が入学した当時、所定の課程を修めて大学を卒業するには、年に二度、秋季と春季におこなわれる資格試験において、次の四科目に合格することが課せられていた。

1. 英語,
2. ラテン語もしくはギリシャ語,
3. 数学,
4. ラテン語もしくはギリシャ語（いずれかが未修であれば）、フランス語、ドイツ語、イタリア語、力学のうちのひとつ。

そのさい、いくつかの緩和策があり、受験に際しての配慮がなされてはいた。たとえば、志望する学科によっていろいろな合格水準が決められたり、自分の得意科目を生かして入学資格をとることができるようになっていた。また、英語の学力は英語を母国語としない者のばあい、合同試験委員会が認めた程度でよい、などという規定もあった。

しかしながら、フランス人やドイツ人なら、上記の第4受験科目に定められた科目のうち母国語を選択することができるというのに、日本人留学生のばあいはこれができなかった。福沢はこの点を突いて、日本語試験の実施という緩和策を願い出たものである。申し出たのは、入学後最初の資格試験にあたる1900年秋季試験（9月10日に実施）以後のことと思われる。

グラスゴウ大学文書に関連の記録があらわれるのは、管見のかぎり、翌1901年1月からである。まず、1月17日（木）、教授会は

「日本から来た学生・福沢三八が純正科学の理学士として卒業するため、次の10月より遅れることなく資格試験に完全に合格するという条件で、今学期中に数学と自然哲学の両クラスに出席してよいと許可した。」

という記録がある。教授会の事務官ウィリアム・スチュワートから大学理事会の書記官アラン・E. クラパートンにあてた、1月21日付けの書簡のなかの記述である。この書簡では、「福沢氏はすでに資格試験の数学に高得点で合格済みであります。」ということも言い添えられている⁽¹⁶⁾。福沢が合格した資格試験というのは、上記の、入学して最初の資格試験にあたる1900年秋季試験のことである。

理事会の方は、条件緩和をした理由を教授会にただしたので、教授会は1月24日付けで次のように答えている。

「福沢三八の件について条件緩和をする理由は、(1) 英国に最近到着したばかりの外国人学生であるので、かれは資格試験について本学が求める条件を準備するために、本国の学生と同じ機会をもたないこと、および、(2) かれは資格試験の数学を高得点で合格したので、現在受講中の数学クラスと自然哲学クラスの授業の成果を吸収するにふさわしい教育を受けてきていることを立証した、ということであります。」⁽¹⁷⁾

さらに、2月の7日になると、『教授会議事録』には次のような記述が認められる。

「当事務官は、日本人学生・福沢三八が、人文科学課程と自然科学課程の資格試験で、フランス語もしくはドイツ語にかわり日本語を取りたいとの意向を知らせてきたといい、また、福沢は合同試験委員会からヘンリー・ダイアー博士にあてた、『合同委員会は、日本人学生が、自然科学の資格試験で、フランス語もしくはドイツ語に代わり日本語ないし中国語を選択できることを満場一致で承認した』旨の手紙を提出したといった。さらに事務官は、この件を処理する権限は合同委員会にはなく、学則148条第

1項により、かかる代替を認める権限は教授会にあることを指摘した。そこで教授会は、書記官のこの提案について、日本人が、本年の自然科学の資格試験のさいの第4試験科目として、日本語をとることを認めた。また、大学理事会に対し、春季試験の試験委員が遅れることなく任命されるよう要請した。」⁽¹⁸⁾

日本語資格試験という、日本人留学生に対する緩和策が実現するについては、ダイアーが尽力していたのである。かれは、資格試験を管理監督する合同試験委員会に働きかけをしていたのだった。その働きかけが功を奏し、ダイアーが合同試験委員会から受けとった、日本語試験を承諾する旨の書簡を添えて、福沢は大学に申し出たのである。

このダイアーとは、かつて日本で活躍したことのあるお雇い外国人であった。グラスゴウ大学を卒業後、他のスコットランド人教師たちとともに日本政府から招かれ、林董に引率されて来日した。明治5年から15年まで滞在し、工部大学校（のちの東京大学）の都検（教頭）として工業教育の基礎づくりに貢献している。福沢の留学当時は、故郷のグラスゴウに戻っており、グラスゴウ・西部スコットランド・テクニカル・カレッジ（現在のストラスクライド大学）の理事などの要職にあるかたわら、日本とスコットランドの交流と親ぼくを促進することに活躍していたのだった。

2月12日になると、上記のような教授会の決定を受けて、教授会のシュワート事務官は理事会のクラパートン書記官あてに書簡を送り、日本語試験委員の任命と、日本語での受験志願者の試験をおこなうよう、指示している。

「大学理事会に対し次のことを報告するよう指示を受けましたので、お知らせいたします。受験申し込みが外国人学生一名からありましたので、教授会は前回の会議で、本年は理学科資格試験中の第4受験科目として日本語を認めることに同意しました。この科目の件は、学則11条第3項I（学則148条第1項により修正済み）および理学科卒業に関する諸学則内の関連諸節において認められているとおりであります。したがって、日本語の試験委員を任命して、日本語受験志願者の試験をおこなうことが大

学理事会の任務となるでしょう。」⁽¹⁹⁾

2月14日の教授会でも取りあげられ、『教授会議事録』には次のように記されている。

「教授会の事務官から1月21日付けの書状が提出された。そこには、福沢三八の件について、規程第11条第10項にもとづき教授会は条件緩和をおこなう、と報じている。」⁽²⁰⁾

ここに出てくる1月21日付けの書状については、既述のとおりである。

(5)

資格試験の選択科目として日本語が認められたので、今度の課題は試験委員を選任することであった。その要請を受けた大学理事会は、グラスゴウ在住の日本通から情報を集めるなどして人選にのりだし、難航のすえ、荒川已次に委嘱することにした。当時、在ロンドン領事館の一等領事であった。

ところが、荒川は任命通知と試験問題作成上の具体的な指示まで受けとったものの、ほどなくして辞退してきた。3月27日、グラスゴウ大学理事会書記官あてに電報をうち、

「Sorry I am unable to accept your appointment to Examiner. Can I recommended Prof. Matsume. Reply soon.」

とわびている⁽²¹⁾。マツメ教授と読めるが、かれこそ夏目金之助すなわち漱石にちがいない。

「試験委員拜命の件、受諾しえず、遺憾。夏目教授の推薦可能なりや。返求む。」

とでも訳すことができるであろう。

荒川の推薦は容れられ、漱石が試験委員に任命された。そして、1901年4月の春季試験と同年10月の秋季試験の二度にわたって、学外試験委員をつとめた。このうち、1901年4月の春季試験で漱石が出題した日本語の試験を、福沢は受験したのである。このとき、日本人留学生の鹿島龍蔵、サトウコウジも福沢と一緒に受験し、合格している。

もっとも、試験委員になったといっても、漱石はグラスゴウに出向いたわけ

ではない。ロンドンの宿所で試験問題を作成し、資格試験を所管する教授会あてに送ったのだった。このグラスゴウ大学日本語試験委員のことについて、当の漱石は日記に少しばかり書き残している。ただし、どんな試験問題であったのか、残念ながら、目下のところ不明である。

なお、漱石が帰国してからも、日本語の受験希望者があらわれるたびに試験委員が任命された。たとえば、1902年秋季試験には、ロンドンに留学していた東京高等師範学校の岡倉由三郎が任じられている。

福沢三八の申し出ではじまった日本語資格試験制度は、そのごもながく存続した。『グラスゴウ大学要覧』の1970年度版まで関連の規定がある⁽²²⁾から、1971年3月の春季試験まで、日本語はグラスゴウ大学資格試験の認定語でありつづけたことになる⁽²³⁾。

[注]

- (1)北政巳「グラスゴウ大学と福沢三八」『福沢手帖』28(昭56)1-8頁, 同『国際日本を拓いた人々』(同文館, 昭59)ほか。
- (2)The Japan Weekly Mail (12 May 1900) pp.473-474. 「海外旅券下付(付与)返納表進達一件(含付与明細書)」(外務省外交史料館蔵)
- (3)北政巳『国際日本を拓いた人々』前出, 第6章。
- (4)University of Glasgow, Matriculation Album, Session 1900-1901, No. 99.
- (5)University of Glasgow, Class Catalogues Session 1900-1901, 1901, pp.24, 28; Ibid., Session 1901-1902, 1902, pp.27, 29, 31; The Glasgow University Calendar for the Year 1900-1901, 1900, pp.75-76
その他。
- (6)University of Glasgow, Matriculation Album, Session 1901-1902, No. 76; University of Glasgow, Class Catalogues Session 1901-1902, 1902, pp.23, 44-45, 47; Ibid., Session 1902-1903, 1903, pp. 27, 31, 50.
- (7)University of Glasgow, Matriculation Album, Session 1902-1903, No.

- 83; University of Glasgow, Class Catalogues Session 1902-1903, 1903, pp. 29, 34, 51; Ibid., Session 1903-1904, 1904, pp. 53-54.
- (8) University of Glasgow, Matriculation Album, Session 1903-1904, No. 833; University of Glasgow, Class Catalogues Session 1903-1904, 1904, pp. 29-30, 52.
- (9) 清岡暎一「福沢論吉とその子供たち(二)」『福沢手帖』35号, 4頁。
- (10) The Glasgow Herald (19 April 1904), p. 9.
- (11) The Evening Times (18 April 1904), p. 5.
- (12) 『堀江帰一全集』第10巻(改造社, 昭4)744頁: 玉置紀夫「堀江帰一のロンドン」『近代日本研究』7(1990)53頁。
- (13) 'The Future of Japan from the Geographical Point of View', Proceedings of the Royal Philosophical Society of Glasgow, Vol. XXV (1903-04) pp. 289-300.
- (14) 中条潮・淑子訳「地理的見地から見た日本の将来」『三田評論』819(昭和56年11月)78-84頁。
- (15) ただし, 高峰讓吉の留学先はアンダソン・カレッジ(現在のストラスクライド大学)。後藤牧太はグラスゴウ大学に留学中であった。北政巳『国際日本を拓いた人々』前出, 186, 194頁参照。
- (16) Minute of Meeting of the University Court, of the University of Glasgow (14 Feb. 1901).
- (17) Ibid. 判読・翻訳については, 松村好浩先生(姫路獨協大学教授)の指導をうけた。記して多謝する。以下の(18)(19)も同じ。
- (18) Glasgow University, Minutes of Senate 1898-1901 (7 Feb. 1901) p. 333.
- (19) Minute of Meeting of the University Court, of the University of Glasgow (14 March 1901).
- (20) Glasgow University Court, Minutes 1900-1901. p. 36 (14 Feb. 1901).
- (21) Minute of Meeting of the University Court, of the University of

Glasgow (28 March 1901)所収。

(22)The Glasgow University Calendar for the Year 1970-71. Glasgow, 1970, p. 106.

(23)拙稿「明治期におけるグラスゴウ大学日本語資格試験」（篠田弘・鈴木正幸編『教育近代化の諸相』名古屋大学出版会，1992，201-221頁）でも，本テーマについて詳論しているので，参照されたい。本文（5）の注は，この拙稿と重複するところがあるので大幅に省略した。

第3節 Soseki Natsume, Examiner in Japanese at Glasgow University

1. Preliminary Examination at Glasgow University

The University of Glasgow in Scotland, founded in 1451, is the fourth oldest university in the United Kingdom. Along with its long tradition, it has a unique history of having accepted the Japanese language as a selective subject for an entrance examination. What makes it more interesting is that the first examiner in Japanese was Soseki Natsume (born Kin-nosuke Natsume). It was in 1901, when he was studying in Great Britain.

To be accurate, the examination was a preliminary examination, not an entrance examination. As IV (1) of the then Ordinance of the University provided that 'Attendance on any class shall not qualify for graduation, unless the whole Preliminary Examination has been passed,' the students had to pass all the subjects of a Preliminary Examination before graduation, if they wanted to enter on the curriculum for a degree, not just to study temporarily at the University.

The Preliminary Examination was required for the students who major in Arts, Science, or Medicine, and was conducted under the supervision of the Joint Board of Examiners. The examination questions were made by the examiners appointed from the suitable people inside and outside of the University Court. The Joint Board of Examiners had sixteen members in total, comprising two professors or lecturers and two extramural members that each University Court of the four Scottish Universities (Glasgow, Edinburgh, Aberdeen, and St. Andrews) had

selected.

The whole process of including the Japanese language in the Preliminary Examination subjects had been started by a request of Sampachi Fukuzawa, the third son of Yukichi Fukuzawa. He left Keio University in 1900, when he was a junior (third-year student) of the literature course and accompanied Tadasu Hayashi, who was to be the Japanese minister in UK. Sampachi Fukuzawa was then studying at Glasgow University. After entering it, he proposed that the University should adopt Japanese as a selective subject of the Preliminary Examination⁽¹⁾. According to his matriculation album (No. 99) in the session 1900-1901, he paid a pound and a shilling for a year as an admission fee and applied for Natural Philosophy (general) and Mathematics (intermediate).

At the time, if a student would accomplish a certain course to graduate from the University, he or she had to pass a Preliminary Examination held twice a year, in autumn and spring, in the following four subjects: '1. English, 2. Latin or Greek, 3. Mathematics, 4. One of the following: -- Latin or Greek (if not already taken), French, German, Italian, Dynamics'⁽²⁾. Various measures were taken to consider the conditions of students, such as providing both higher and lower standards on which candidates could pass the Examination according to what courses they were applying for, or allowing them to make full use of their strongest subjects in the Examination. Furthermore, some students could enjoy more relaxed rules, as exemplified by the case that a student whose native language was not English could be qualified if he passed English on a certain standard the Joint Board of Examiners deemed sufficient. In spite of these measures, the Preliminary Examination was very difficult and a source

of worry for the Japanese students.

In this connection, let us go over the details of the major examination subjects. Though it was named 'English', the first subject included Literature, Geography, and History as well as Grammar and Composition. Taking the Examination held in 1900 as an example⁽³⁾, the questions were set to examine candidates' knowledge of: 'Shakespeare, Richard III.; Thackeray, Esmond; Scott, Marmion.' Geography included 'a general knowledge of the Geography of the World, and a special knowledge of the Geography of the British Empire,' and History included 'a knowledge of the outlines of the History of both England and Scotland from 1603 to the Union of the Parliaments in 1707.'

Latin comprised 'grammatical questions, translation into English from Latin....and translation....from English into Latin....,' and French comprised 'grammatical, literary, and easy philological questions, translation into English from French....and translation from English into French.....' Mathematics on the lower standard comprised -- '(a) Arithmetic, including Vulgar and Decimal Fractions, Proportion, Percentage, Square Root, Simple Interest; (b) Algebra, including Fractions, Factors, Square Root, Equations of the First Degree, Simultaneous Equations of the First Degree, Easy Quadratic Equations, Problems leading to the above Equation; (c) Geometry; Euclid, Books I, II, And III....with easy deductions.' Mathematics on the higher standard comprised 'in addition to what is included on the lower standard, Euclid, Books IV, VI, and the first twenty-one propositions of Book XI....with Deductions, Quadratic Equations, Trigonometry to the Solution of Triangles inclusive, and the use of Logarithmic Tables.' Dynamics' included Kinematics, which is an area of Mechanics, Kinetics, Statics, and Hydrostatics.

All the Japanese who studied at Glasgow University during the Meiji era were the students majoring in Science and Engineering, so that they found no problem with Mathematics and Dynamics, but inevitably experienced hardship in English. A Japanese student who received a Bachelor of Science from the University a little later, in 1916, recalled his college life as follows: 'I was absolutely helpless at a Foreign Language and History. I don't think English is a foreign language, but I had to select a language from among French, German, Greek, or Latin. History was confined to British History, but I had to write about it in English in a short time. To be honest, these two subjects were really too much for me' (4).

What Sampachi Fukuzawa questioned was the fourth subject of the Preliminary Examination. If a student was French, German, or Italian, he could choose his native language which was included in the fourth category, but a Japanese student could not do the same. Pointing out this disadvantage, Sampachi Fukuzawa demanded that the University should ease conditions for Japanese students by including the Japanese language in the Preliminary Examination.

Sampachi Fukuzawa might have made such a request after the autumn Preliminary Examination in 1900, which was his first Preliminary Examination after he entered the University, and around January in the following year, 1901, related records began to appear in the documents of Glasgow University. Among such documents, a letter dated 24 January 1901, which was sent from William Stewart, clerk of the Senate, to Alan E. Clapperton, secretary of the University Court, explains the reasons for easing the conditions in response to Sampachi Fukuzawa's request as follows: '(1) that, being a foreign student only recently arrived in this country, he had not the same opportunity as home

students to learn beforehand the requirements of the University in regard to preliminary examinations and (2) that, having passed on the higher standard in preliminary Mathematics, he has given evidence of training which should fit him to benefit by the teaching of the Mathematics and Natural Philosophy Classes which he is now attending'

(5)

In realising Sampachi Fukuzawa's proposal that Japanese should be included in the Preliminary Examination as a selective subject, the support from Henry Dyer could be obtained. After graduating from Glasgow University, Dyer was invited by the Japanese government and led by Tadasu Hayashi to visit Japan together with other Scottish teachers. From 1873 to 1882, he served there as one of so-called foreign teachers in the government's employ. And as Head Teacher of Kobu-Daigakko (Imperial College of Engineering, Tokyo, which was a forerunner of the University of Tokyo), he played an active part in laying foundations of engineering education in Japan. Back in Glasgow, then, he occupied such important posts as Director at Glasgow and West of Scotland Technical College or a member, and latterly the chairman, of the Glasgow School Board. He was at the same time making efforts to promote exchange and deepen friendships between Scotland and Japan.

To help realise relaxed measures for the Japanese students, Dyer worked upon the Joint Board of Examiners which supervised the Preliminary Examinations. To respond to his appeal, the Joint Board of Examiners deliberated it. As a result, 'the Board unanimously agreed to allow Japanese students to take either Japanese or Chinese in place of French or German for the preliminary examination in Science' and sent a letter to that effect to Dyer. Sampachi Fukuzawa submitted the letter to the University Court to express his will to take Japanese

instead of French or German for the Preliminary Examination. This development was reported at the Senate on February 7, 1901⁽⁶⁾.

Thus Dyer succeeded in getting the approval of the Joint Board of Examiners, but the supreme legislative organ to deal with university education was the Senate of each university. The secretary of the University Court of Glasgow University clearly pointed out, at the Senate meeting held on 7 February 1901, 'that it was not the province of the Joint Board to deal with this matter, but that under Ordinance No.148, Section I, the power of approving of such a substitution was given to the Senate.' On the suggestion of the secretary, 'the Senate agreed to approve for the present year of Japanese being taken as the fourth subject in the Science preliminary examination.' At the same time, the Senate requested the University Court (the supreme organ in charge of general administration of a university) to promptly take necessary steps, such as the appointment of an examiner for the approaching spring examination and the implementation of the examination⁽⁷⁾.

Revised regulations of the Preliminary Examinations were announced to the students. The Glasgow University Calendar, from the year 1901-02 version and onwards, clearly provided that Japanese (together with Spanish) had been approved as a subject for the preliminary examination. It also stated that 'Any candidate who proposes to be examined in Japanese or Spanish or in any other language than the six mentioned in the Ordinance is required to make intimation to the Senate before 1st February or 1st July for the Spring and Autumn Examinations respectively'⁽⁸⁾.

2. Selection of an Examiner with Difficulty

Although the University authorities had decided to approve Japanese as one of the fourth subjects for the Preliminary Examinations, the selection of an examiner in Japanese did not go smoothly.

At the request of the Senate, the University Court quickly collected information from people in Glasgow who were well acquainted with Japanese affairs. Among such people was Albert Richard Brown. He had stayed long in Japan before. During his stay there, he was engaged in the shipping business at the Communication Ministry and also occupied the post of general manager of Japan Mail Steam Ship Company. As Honorary Japanese Consul in Glasgow since 14 June 1889, he had continued to provide support for enhancing the friendly ties and exchanges between Japan and Glasgow. Residing at 34 West George Street, Glasgow, he was also commissioned to act as agent for both Japan Mail Steam Ship Company and Tokyo Marine Insurance Company, Limited.

When Alan E. Clapperton, secretary of the Glasgow University Court, sent a letter to Brown on 26 February 1901, asking whether he knew someone fitted for the job, Brown replied in his letter dated 27 February 1901 as follows: 'There are some thirteen Japanese residents in this city, but I am quite ignorant as to their qualifications for the position of Examiner.' This was typed on a sheet of letter paper with the letterhead of A. R. Brown, McFarlane & Co., Ltd., and on the back of this paper we can read a scribble by pencil⁽⁹⁾. It is a note concerning the selection of an examiner and contains names and addresses of three individuals. The names can be identified as Dr. Dyer, Katsujiro Hirano, and Mr. Arakawa. It is probable that the University authorities did not give up and tried to get more information from Brown about people suitable for the position or

anyone who could recommend them.

Among these three names, Dr. Dyer is considered Henry Dyer, who has been already mentioned above. He was then committed to the promotion of technical education in his native land, Scotland, making good use of his experience to systematize engineering education in Japan. He was also beginning to vigorously write essays on Japan from the unique viewpoint of a person who had experienced another culture, which was going to bear fruit in the form of books entitled Dai Nippon, the Britain of the East (1904), Japan in World Politics (1909), and so on. It was quite natural that he was asked to give his opinion as one of the authorities on Japan. At the time, Dyer lived at Highborough Terrace on Dovan Hill near the University.

The next person appearing in the note is Hirano, who was a Japanese correspondent for A. R. Brown McFarlane. The name is followed by his address, 24 Barington Drive, Glasgow.

The last person named Mr. Arakawa seems to refer to Mitsugu Arakawa, who then was the first Consul in London (after the Consulate was raised to the status of Japanese Consulate General on 1 October 1902, he was promoted to Consul General). Born in Kagoshima Prefecture, he graduated from Kobu-Daigakko (passed the mining course on the second grade) in 1880. After working for the Mining Bureau, the Ministry of Public Works, and the Japanese National Railway, he became a diplomat to be stationed in London. As he was a member of the second graduating class of Kobu-Daigakko, Dyer and other teachers who had worked there, soon after Arakawa came to London, 'visited the Japanese Consulate General joyfully on such occasions as the Emperor's birthday, wearing a decoration awarded by the Japanese government and had a very good time' (10).

From among those three people, Arakawa was chosen and commissioned to be Examiner. It is written in Glasgow University Court, Minutes of 14 March, 1901, that 'The Court appointed M. Arakawa, Japanese Consul General, 84 Bishopgate Street, London, Examiner in Japanese.....for the forthcoming Preliminary Examination.' A record to the same effect is also found in the Minutes of Senates of 21 March 1901, and on the following day, 22 March 1901, Clapperton, secretary of the University Court, sent a letter to Arakawa as below⁽¹¹⁾. The letter indicates the standard of the examination in Japanese. A Japanese candidate who the letter said had presented himself for the examination must have been Sampachi Fukuzawa.

'Before entering the University candidates are required to pass a Preliminary examination in the following subjects: (1) English, (2) Latin or Greek, (3) Mathematics, (4) Modern Languages. In the event of a candidate appearing whose language is other than European he is allowed to substitute his native language for the last subject.

A Japanese candidate has presented himself for examination and in accordance with above rules Japanese will be accepted instead of a modern European language. The University Court have therefore appointed you examiner in Japanese for the forthcoming examination on 2nd April.

The standard required for modern languages is stated in the Ordinances as follows:

"French, German & Italian that comprise grammatical, literary & easy philological questions, translation into English from French, German or Italian authors not previously prescribed, and

translation from English into French, German, or Italian, and the standard shall not be lower than that previously adopted for the higher grade leaving certificate of the Scotch Education Department”.

You are asked to set a paper in Japanese of a similar standard, and to correct the answers: attendance in Glasgow is not required.

For your information I enclose a former paper in French from which you will see what is required.’

Arakawa, who was appointed as Examiner and received a guidance for setting a paper in Japanese as cited above, however, soon declined the appointment. The reasons were unknown, but he sent a telegram addressed to the secretary of the University Court, 91 Regent Street, Glasgow, from a post office at Streatham Hill, London, stating that ‘Sorry I am unable to accept your appointment to Examiner.’ The telegram⁽¹²⁾ (see Appendix 1) was sent at 7:20 and received in Glasgow about an hour later, namely at 8:18. The office stamp shows that it was received on 27 March 1901 by the post office numbered 159, which is Glasgow Central Post Office. The post office still stands in the south of George Square and close to the City Hall, Glasgow.

Interestingly, the apology in the above telegram is followed by a sentence: ‘Can I recommend Prof. Matsume. Reply soon.’ The original reads Matsume, but actually it means Kinnosuke Natsume, who is none other than Soseki Natsume. At the time he was staying in London after he had been ‘ordered to study English in the United Kingdom for two years’⁽¹³⁾. To the best of the present author’s knowledge, the telegram sent by Arakawa was the first document that referred to Kinnosuke Natsume as Examiner for the Preliminary Examination for Glasgow

University.

The University Court and Senate decided to follow Arakawa's recommendation to appoint Soseki Natsume as Examiner. This was clearly written in the Minutes of both 28th March and 11th April, 1901. Glasgow University Court, Minutes of 28th March reads as follows: 'the Secretary reported that he had received a reply from the Japanese Consul-General that he could not accept the appointment of Examiner in Japanese. The Court appointed Professor Natsume, the University of Tokio, and presently travelling in this country, as Preliminary Examiner in Japanese for the forthcoming Preliminary Examination.'

Thus, Soseki Natsume became Preliminary Examiner in Japanese for Glasgow University. Some correction, however, must be made in the Minutes above. As is commonly known, Soseki was not a professor at the University of Tokyo at the time, but at the Fifth High School, and he was not travelling, either. It would still be some time before he made a trip to Pitlochry in Scotland and stayed there for a while. It is said that Soseki had never left London before that except visiting Cambridge.

Following the decision of the University Court, Secretary Clapperton sent Soseki a notice dated 2nd April. The notification of appointment Soseki receive dmust have been as follows ⁽¹⁴⁾ :

Professor K. Natsume,
6 Flodden Road, Camberwell,
New Road,
London, E. C.

2nd April 1901

Dear Sir,

I have the pleasure of informing you that the Court have appointed you as Preliminary Examiner in Japanese for the forthcoming Preliminary Examination in this University at a fee to be afterwards fixed. Further communications will reach you from the Clerk of Senate.

Yours faithfully,
Alan E. Clapperton
Sec. Glas. Univ. Court'

6 Flodden Road, Camberwell, New Road, London, was the address of Soseki's third lodging, which was situated near Oval Station of the underground.

This address of Soseki's must have been given by Arakawa. On 29 March 1901, the day after the University Court had decided to appoint Natsume as Examiner, Clapperton sent a letter to Arakawa. After confirming that he had surely received Arakawa's telegram to decline the appointment and that the University Court had appointed Professor Natsume as his successor, following Arakawa's recommendation, he asked Soseki's address, writing that 'Please let me have his address in this country.' There is also a record that Arakawa replied by sending his letter dated 1 April to inform Clapperton of Soseki's address⁽¹⁵⁾.

To be precise, Soseki's surname was still written as Professor Matsume in Clapperton's letter dated 29 March. His surname had never been spelled correctly until Arakawa notified Clapperton of Soseki's address, and the letter dated 2 April cited above seems to be the first document that spelled out his surname correctly. To be more

precise, his name was already spelled correctly as Natsume in University Court, Minutes of 28 March. Minutes of Senate and Letter Book were handwritten, whereas University Court, Minutes were printed, so that it may be considered that the correct spelling was confirmed later than the date of the Minutes of the University Court.

It is written both in University Court, Minutes of 28 March and in the notification of appointment sent to Soseki that he was appointed as Examiner 'for the forthcoming Preliminary Examination,' which was the spring Preliminary Examination held in April 1901. In fact, however, he was again commissioned as Examiner outside the University for the autumn Preliminary Examination held in October 1901⁽¹⁶⁾. By that time, he had moved to 81, The Chase, Clapham Common, London. It was the lodging run by Miss Reel which is situated opposite the Soseki Museum in London and close to the Clapham Common, where Soseki was said to practice riding a bicycle.

It is in this Common that Shinjuku Ward, Tokyo, had planned to erect a bust of Soseki. It was at one time frustrated, as the local residents reportedly voiced against it, saying it was cultural aggression by Japan. The plan went through a public hearing arranged by the local authorities of Lambeth Borough. After all the plan was not realized.

3. 'Preliminary Examination' Described in Soseki's Diary

Soseki himself wrote down a little about his appointment as Examiner in Japanese for Glasgow University in his Diary⁽¹⁷⁾. On Wednesday, 27 March 1901, he wrote that 'Moroi from the Japanese Consulate visited me to talk about Examiner.' As it was 27 March, First Consul Arakawa may have had Moroi visit Soseki, whom he had recommended to Glasgow

University on the same day as he declined his appointment by telegram. Mr. Moroi must have been Rokuro Moroi, Deputy Consul for Japanese Consulate in London. He was from Saitama Prefecture and would later hold various posts such as Consul General in Honolulu and Minister Extraordinary and Plenipotentiary in Argentina.

On Friday, 29 March 1901, Soseki wrote that 'Received a telegram from Consulate in the evening. I was appointed as Examiner for Glasgow University. Immediately worked out questions and sent an examination paper to Consulate.' This was done in response to his appointment by the University Court on 28 March cited above. He was so quick to prepare questions: he wrote that he sent out the paper soon after he had received the telegram. It seems that he started to prepare questions when Moroi visited him on 27 March. The reason he wrote in his diary for 28 March that 'So busy that I declined Mr. Ihara's invitation to dinner' seems to have something to do with the preparation of examination questions.

Again on Saturday, 30 March, he wrote that 'Replied to Secretary Clapperton at Glasgow University, that I would accept the position of Examiner. At the same time I sent examination questions to Addison. It was a half past nine.' Clapperton is, of course, A. E. Clapperton, University Court secretary as mentioned above. Addison refers to W. I. Addison, who did clerical work for the University Senate in charge of the Examination.

Finally on Wednesday, 3 April, Soseki received an official announcement of appointment, which has been shown above. He wrote that 'Received an official written notification of appointment as Examiner.'

This notification states that 'fee to be afterwards fixed,' but how

much was Soseki actually paid? Soseki himself wrote on Thursday, 2 May, that 'Received a bill from Messrs. Hill & Hoggan at Glasgow. Sent a letter to Mr. Moroi' and on the following day, Friday, 3 May, 'Sent a receipt to Glasgow. Received a reply from Mr. Moroi.' This seems to be about the fee as an extramural examiner, but Soseki didn't enter the amount in his Diary. The University document that concretely refers to the amount of the fee is University Court, Minutes of 6 November 1901 after the autumn examination, and it says that 'Professor Natsume, Preliminary Examiner in Japanese in April and October, 1901, £4.4.'. Following this decision, Secretary Clapperton sent the following notice dated 15 November, which again says that the fee for spring and autumn examinations was £4 4s respectively: 'The Court have fixed your fee for conducting the Preliminary Examination in Japanese in April and October of this year at £4.4/- and I have instructed the Factors, Messrs. Hill and Hoggan, 194 Ingram Street to remit you this sum' ⁽¹⁸⁾.

The fee amounting to £4 4s was 'his only extraordinary income during his stay in London,' and '£1 was then valued about ¥10, and he was paid ¥150 a month to study in London' ⁽¹⁹⁾.

The above notification suggests that the University had not decided the amount of the fee to remit for both spring and autumn Examinations until November, so there arise questions about for what the bill Soseki received on 2 May was paid and how much that was. Does this mean that Soseki received the fee for the spring Examination beforehand? One explanation may be that since 'it was possible that facts proceeded a decision by a meeting' at the then Glasgow University, 'we should think that a part of the fee had already been paid' ⁽²⁰⁾, but still it is not fully clear. Soseki's diary for 1901

ends on Wednesday, 13 November, so that it does not mention Clapperton's letter dated 15 November which notified him about the fee.

As to the autumn Examination, he wrote on Saturday, 21 September that 'Glasgow University sent me a letter to ask me for a paper of questions,' and on Monday, 23 September that 'Sent a letter to Glasgow.' Preliminary Examination was under the University Senate's jurisdiction, so this may have been an exchange of letters with a person in charge of clerical matters of the Senate just like in spring. Unfortunately, however, it is unknown for the present what questions Soseki made for both spring and autumn examinations.

Four people took and passed the examination in Japanese which Soseki had made. We can pick them up from 'Preliminary Examination for Degrees in Arts and Science' included in both The Glasgow University Calendar for the Year 1901-02 and The Glasgow University Calendar for the Year 1902-03. They were Sampachi Fukuzawa, Tatsuzo Kajima, and Kouji Satou, all of whom passed the spring Examination in Japanese held in April 1901, and Iwane Tomochika, who passed the autumn Examination in Japanese held in October 1901. Besides Japanese, Fukuzawa and Kajima passed English, Advanced Mathematics, and Dynamics, and Iwane passed Intermediate Mathematics and Dynamics. Satou passed only Japanese ⁽²¹⁾.

4. Difficulties Continued

The date when Soseki was appointed as Examiner in Japanese for Preliminary Examination by Glasgow University Court was 28 March 1901, so it seems to have been more than a month since they started to select a suitable Examiner. And the Court again faced difficulties in selecting a successor of Soseki.

There were no students who wanted to be examined in Japanese for the spring Preliminary Examination in 1902, the year after Soseki went back to Japan, but for the 1902 autumn examination, there appeared applicants. A. R. Brown, Honorary Consul of Japanese Consulate in Glasgow, was again asked for recommendation, so he proposed two people. And a three-year contract was signed with one of them, John Harrington Gubbins. It was on 12 June 1902⁽²²⁾. After coming home from Japan, where he had been stationed as Secretary for British Embassy, he then was engaged in the study of Japanese culture. Soon, however, he resigned his post as Examiner because of his official position⁽²³⁾, and T. Kumakura from Osaka Technical College was appointed at the Court meeting held on 10 July. His term was to be a year from that date. Judging from University Court, Minutes of 10 July 1902, which states that 'presently resident in Glasgow,' it must have been Toru Kumakura, who was an assistant professor at Osaka Technical College (later became a professor at Kyushu Imperial University).

Kumakura, however, also declined. Furthermore, S. Suehiro, who must have been recommended by Kumakura, also declined⁽²⁴⁾. Suehiro seems to have been Shigeo Suehiro, assistant professor of law at Kyoto Imperial University, who was then studying in London. Finally, Y. Okakura, who was recommended by Suehiro, accepted the position. Since he is described as 'Professor of English and Japanese in Tokyo Higher Normal School, presently resident in London' in University Court, Minutes of 4 September 1902, he must have been Yoshisaburo Okakura, known as the editor of Shin-Eiwa Daijiten (New English-Japanese Dictionary) (Kenkyusha, 1928). Okakura served as Examiner for two years including this year and the next year. The notification sent to 147 The Grove, Hammersmith, London, as of 18 September 1902, includes

the similar contents to those in the letter sent to Arakawa before: they refer to the nature of the examination and the standard and matters of the examination questions⁽²⁵⁾.

From then on, whenever there appeared an applicant who wanted to be examined in Japanese, Examiner was appointed at Glasgow University. For example, in the case of the 1905 autumn Examination (one applicant), J. Takakusu was appointed; the 1909 autumn Examination (one applicant), J. H. Gubbins; the 1912 spring Examination (the number of candidates is unknown, but the fee was £2 12s 6p), Prof. Keisuke Kubota; and the 1915 Spring (the number of candidates is unknown, but the fee was £5 5s), Prof. Joseph Henry Longford⁽²⁶⁾. Prof. Longford had come to Japan in 1869 as a diplomat. During his long stay in Japan, he had served as Consul at various British Consulates in Japan. At the time when he was appointed as Examiner, he was Professor of Japanese at King's College, London. He wrote many books on Japan, and had actively engaged in the Japan Asian Society in Japan just like J. H. Gubbins⁽²⁷⁾.

This Preliminary Examination in Japanese had continued to be administered for a long time since then. The Glasgow University Calendar for the Year 1970-71 still contained related regulations, so it can be considered that Japanese had been a language in which candidates could be examined for Preliminary Examination until the spring Examination held in March 1971.

The Japanese government paid attention to this favorable treatment given by Glasgow University and put the following announcement on the Kanpou(Official Gazette) dated 29 March 1901: 'Scottish Universities' Joint Board of Examiners has agreed to allow Japanese students to take either Japanese or Chinese in place of French or German for the Prelimi-

nary Examination in Science.'

Notes

- (1) Glasgow University Court, Minutes 1900-1901, p. 36 (14 Feb. 1901).
- (2) The Universities (Scotland) Act, 1889 together with Ordinances of the Commissioners under the said Act. James MacLehose and Sons, Glasgow, 1915, p. 20.
- (3) Ibid., pp. 20-21: The Glasgow University Calendar for the Year 1900-1901. Glasgow, 1900, pp. 160-163, etc.
- (4) Yoshinobu Katsura, Innin Nijuyuikunen (Twenty Some Years of Endurance), A private press edition, 1958.
- (5) Minutes of Meeting of the University Court, of the University of Glasgow. 14 Feb. 1901.
- (6) Glasgow University, Minutes of Senate 1898-1901, p. 333 (7 Feb. 1901).
- (7) Ibid.
- (8) Six languages are English, Latin, Greek, French, German, and Italian. The Glasgow University Calendar for the Year 1901-2. Glasgow, 1901, p. 164.
- (9) University Court, Glasgow, Letter Book, No. 18. p. 255: Minutes of Meeting of the University Court, of the University of Glasgow. 14 March 1901.
- (10) Mitsugu Arakawa, 'Kyukobudaigakkou Kaikoroku (Memoirs on the Imperial College of Engineering, Tokyo)', Kyukobudaigakkou-Shiryo Huroku (An Appendix to Materials on the Imperial College of Engineering, Tokyo). Toranomon-Society, 1931, p. 65.
- (11) University Court, Glasgow, Letter Book, No. 18. pp. 378-379.
- (12) It is in the Glasgow University Archives & Business Records Centre.
- (13) Appeared in Monbusyo-ryugakusei-kankeizakken (Miscellaneous Items

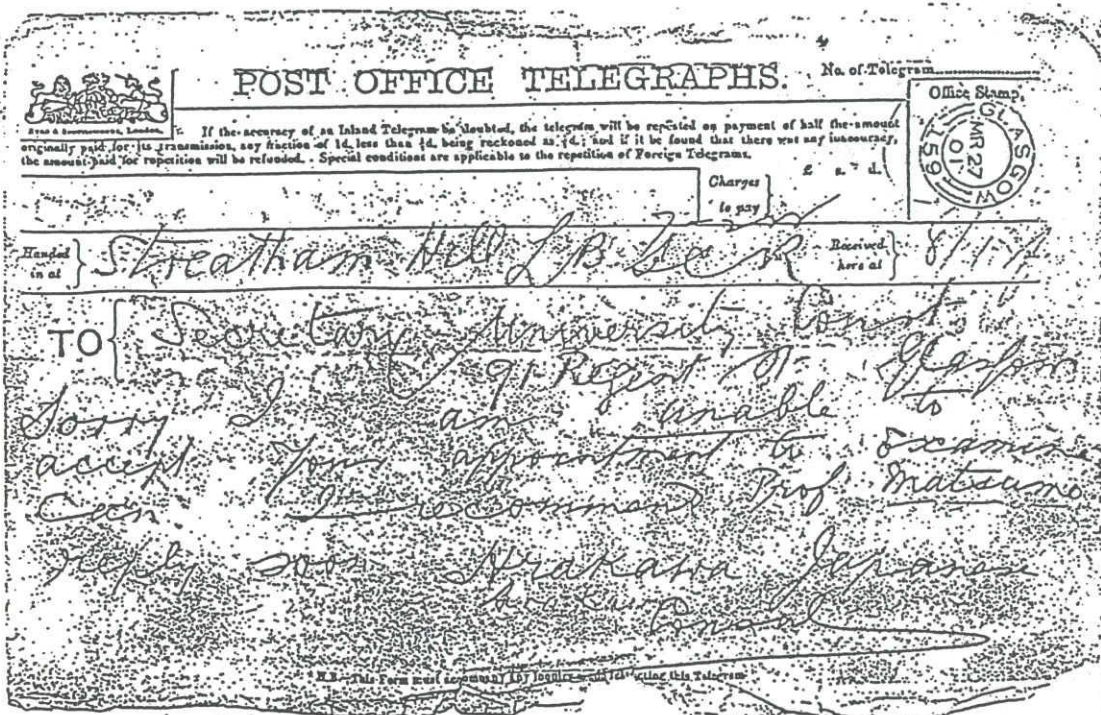
on Students Sent Abroad by the Education Ministry), Vol. II. [Owned by The Diplomatic Record Office of the Ministry of Foreign Affairs, Japan]

- (14)University Court, Glasgow, Letter Book, No. 18. p. 409.
- (15)Ibid., p. 405, & p. 408.
- (16)Glasgow University, Minutes of Senate 1901-04, p. 33(25 Oct. 1901):
Glasgow University Court, Minutes 1901-1902, p. 14 (6 Nov. 1901).
- (17)Toshio Hiraoka ed., Soseki Nikki (Soseki's Diary), Iwanami-bunko, 1990, pp. 49-76.
- (18)University Court, Glasgow, Letter Book, No. 19, p. 276.
- (19)Toshio Hiraoka ed., op. cit., p. 240.
- (20)Toshiaki Tsukamoto ed, Soseki to Eikoku (Soseki and Britain), Sairyusha, 1987, p. 220.
- (21)It is presumed that Kajima was Tatsuzo Kajima, who would become a founder of Kajima Corp. and Iwane was Tomochika Iwane, who would become a professor at Osaka Technical College. The subjects they took at the University and their personal histories are dealt with in Masami Kita's Kokusai Nihon o kizuita Hitobito (People who paved the way for internationalized Japan). Do-bunkan, 1984.
- (22)University Court, Glasgow, Letter Book, No. 20, p. 343 (10 June 1902)
:Ibid., p. 470 (23 June 1902): Glasgow University Court, Minutes 1901-1902, p. 83 (12 June 1902).
- (23)Glasgow University Court, Minutes 1901-1902, p. 92 (10 July 1902).
- (24)University Court, Glasgow, Letter Book, No. 20, p. 588 (14 July 1902): Ibid., p. 615 (30 July 1902), p. 633 (7 Aug. 1902).
- (25)Ibid., No. 20, pp. 639-640(11 Aug. 1902), p. 725 (18 Sept. 1902).
- (26)Ibid., No. 24, p. 450 (17 Jan. 1905), p. 642 (16 Feb. 1905): Glasgow University Court, Minutes 1905-1906, p. 5 (5 Oct. 1905) & p. 22 (6

Dec. 1905): Glasgow University Court, Minutes 1909-1910, p. 17(3
 Nov. 1908): Glasgow University Court, Minutes 1911-1912, p. 78 (1
 May 1912): Glasgow University Court, Minutes 1914-1915, p. 60 (21
 Apr. 1914).

(27) Who Was Who, Vol. II, 1916-1928. Adam & Charles Black, 1967, p. 642.

* This article has been written under the kind and frequent guidance of Professor Manabu Miyata (Nagoya City University), to whom I pay my sincere thanks.



Appendix 1

A telegram appointing Soseki Natsume to be Examiner in Japanese

第4節 竹鶴政孝のスコットランド留学

(1)

竹鶴政孝といえばニッカ・ウキスキーの創業者。ウイスキー造りを、最初に本場スコットランドへ行って学んできたことでも知られている。

そのスコットランド留学について、竹鶴は、かつて『日本経済新聞』に掲載された「私の履歴書」のなかで回想している。それによると、最初エディンバラ大学にいったが、ウイスキー研究に適当な専攻科がなかったので、大正7年(1918)にグラスゴウ大学の「応用化学科に入学を申し込むと外国人の聴講生という形ですぐ許可になった」。このグラスゴウ大学では「応用化学科の看板教授ウィリアム博士」と知り合い、勉学の上でも実習先の上流工場の紹介の点でも親身の世話をうけたのだった。

『ウイスキーと私』(ニッカウキスキー)と題する自伝のなかでも、これと同文の記述がみえるし、同書の第8版(昭和56年)に添えられた略歴欄にも、大正7年7月「英国に赴きグラスゴウ大学に留学」、同10年11月「同大学応用化学科を専修して帰朝」とある。

竹鶴のスコットランド留学は日本・スコットランド教育文化交流史上の興味あるひとこまであるだけに、筆者は、先頃スコットランドに滞在していた折、関係者の協力をえて少しばかり調べてみたことがある。その調査をもとに、竹鶴が回想するところをすこし補足してみたいと思う。

(2)

まず、竹鶴が最初に学んだところはグラスゴウ大学ではなくて、同じグラスゴウにあるロイヤル・テクニカル・カレッジであったと考えられる。同校は、ジェムズ・ワットの発明を助けたことで知られるグラスゴウ大学自然哲学教授ジョン・アンダソンの遺策をもとに、1796年に開学したカレッジであって、とくに勤労者に対する実業教育を提供した長い伝統をもっていた。複雑な発展過程を経て、現在のストラスクライド大学に至っている。アフリカ探検家D. リヴィングストン、テレビの開発者J. L. ベアドがここに学んだし、日本の工

業教育とも興味深い関連がある。

明治6（1873）年に来日し、工部大学校（東京大学の前身）の都検として活躍したお雇い教師ヘンリー・ダイアーが、若き日に学んだアンダソンズ・ユニバシティ、さらには、お雇い解除後スコットランドに戻ってから日本での教育実践の成果を移し入れようとしたグラスゴウ・西部スコットランド・テクニカル・カレッジを、その前史にもっているからである。竹鶴がやってきた当初、そのダイアーはまだ同カレッジの理事に名を連ねていた。

そんなことから、竹鶴以前にも、このカレッジには理工系の日本人留学生が少なくなかった。たとえば、山尾庸三、高峰讓吉、山本長方、小田切延寿、風間篤次郎、中島與曾八、浦野喜三郎、岩根友愛、岩崎秀弥、堤佐久間、杉山文七、松田清一、近藤滋弥などの面々である。ストラスクライド大学のアーカイヴズには、各人の年令、現住所、職業、受講科目、受講状況、学習成績などの記録が学年度ごとに残されており、北政巳『国際日本を拓いた人々』（同文館、昭59）には諸氏の主たる略歴が紹介されている。

前記の諸氏につづいて竹鶴がロイヤル・テクニカル・カレッジに学んだことの記録は、同カレッジの『1918年度学生簿（Register of Students 1918/19）』のなかに、マイクロフィルム化されて残っている。学生証 931番が竹鶴の分であって、氏名、住所、生年月日に続いて受講記録がでている。

それによると、この年度の夏学期に、1ポンド11シリング6ペンスの聴講料を支払って「有機化学II」を受講。「無機化学I」も同時に受講している。有機化学IIの授業では、月曜日から金曜日まで毎日12時から1時間、炭素化合物に関する入門的な講義がおこなわれ、とくに環式化合物のことが重視されていた。無機化学Iの方は毎日11時半から1時間ひらかれ、「実業準備教育もしくは大学入試用に化学の学習を始める者に適した課程」と位置づけられている（『1918年度昼間クラス案内』による）。受講状況はどうかというと、竹鶴は学期途中に入学したためであろうか、有機化学IIは44授業時間のうち23時間を、無機化学Iは59授業時間のうち47時間をそれぞれ受講している。ただし、試験は受けておらず、課題や実習の記録もつけられていない。したがって、何の評

定も出ていないし「修了証書」の欄も空白のままになっている。

住所欄には「カーカンテロフのミドルクロフト」とある。グラスゴウの郊外にあって、ここにはやがて竹鶴と人生を歩むことになるリタ（本名ジェシー・ロベールタ・カウン）が住んでいた。ふたりがはじめて出会ったという、まちの中央の教会近くにあったリタの屋敷は、その後カーカンテロフ町役場として使われたようだが、今はもうない。森瑤子の小説『望郷』（学習研究社、昭和63年。角川書店、平成2年）には、そのふたりのラブ・ストーリーが描かれている。「スコットランドから北海道・余市まで、二人の愛の足跡を現地取材」したというのが同書の謳い文句だが、川又一英『ヒゲのウキスキー誕生す』（新潮社、昭和57年）に比べると、あまり調べは尽されていないように思われる。

竹鶴が学んだロイヤル・テクニカル・カレッジの校舎は、グラスゴウ市庁舎のすぐ北側、ジョージ通りに面して今も残っている。モダンな建物のおおいストラスクライド大学のなかであって、石造りの荘重なたたずまいは往時の面影がしのばれる。今は化学・電気工学・薬学・生理学などの教室や研究室が入っている。

(3)

それでは、竹鶴はグラスゴウ大学に学ばなかったかということ、そうではない。グラスゴウ大学のアーカイヴズには、入学申込書をとじた厚手の小さな簿冊（Matriculation Album）があって、それを捲ってみると、竹鶴はロイヤル・テクニカル・カレッジに学んだ翌年の大正8年（1919）の夏学期に、10シリング6ペンスを支払って登録している。入学申込書の番号は432番。やや黄ばんだ紙面に、

「Masataka, TAKETSURU」

24才、と力強く書きこみ、理学部の有機化学（講義）クラスへの受講を申し出ている。

現住所欄にはここでもカーカンテロフのミドルクロフトと記入したほか、日本の住所（Takehara, Hiroshimaken, Japan）、父親の名前（Keiziro）と職業

(Chemical Engineer) なども書き添えている。その書きぶりは、ほかの日本人留学生に比べてなめらかで力強い。

ただし、入学登録はあるけれども、じっさいに受講したことの記録はなかなか見あたらない。このころ、グラスゴウ大学では『開講科目・受講者一覧 (Class Catalogues)』が毎年刊行されているので、教科目ごとの受講者名が分かるのだが、これにもあいにく竹鶴が受講登録をした1919年夏学期分は見つかっていない。

どうも、竹鶴は受講したとしてもそれほど真面目には出席しなかったのではないかと考えられる。というのも、自伝『ウイスキーと私』には「グラスゴウ大学の講義そのものは、すでに日本で勉強したことの繰り返しであった」とあるし、『ヒゲと勲章』（ダイヤモンド社、昭和41年）においても、竹鶴は

「喜び勇んで、翌日から通学したが、先生の話そのものは、たいして参考にもならないのだ。つまり、すでに日本の学校でマスターした応用化学講座英語版で、実習が教課に組まれるわけでもない。ただ、英語の勉強にはなった。このうちは、先生と親しくなって、その紹介で、ウイスキー工場に実習生に入れてもらえるよう、そのチャンスをねらうだけであった」と記されているからだ。

「大学での講義は実際的でないので、あまり役に立たなかった。」そこでどうしたかというところ、「図書館にこもって、ことにウイスキーに関係のある書物は一冊のこらず目を通した」のだった。なかでも、J. A. ネットルトン著『ウイスキー・酒精製造法』（1913）を、「ウイリアム博士の推薦で入手し、当時繰り返し読んだ」という。本文 606頁という大著である。北海道余市にある竹鶴資料館にはその本が大切に保存されており、竹鶴がいかに本書に親しんだかを示す痕跡が随所に残されているということである。

竹鶴は、ローゼスやキャンベルタウンにある蒸留工場での実地研修にも忙しかったにちがいない。この実習中、

「習ったこと、見たこと、感じたことはどんなことでもその日のうちに、ノートに字と絵で書きとめていった」

と竹鶴は語っているが、じっさい、その成果は、『実習報告』と題する二冊のノート（コクヨ製A5判）に結実している。表紙には「20年5月、在キャンベルトン」とあるから、スコットランド西部の港町キャンベルタウンのヘーゼルバーン蒸留工場での実習時代にまとめたものであろう。目次、および「ポットスチル・ウキスキー製造方法に就て」と題する序に続いて、原料、麦芽製造、糖化、冷却、醗酵、蒸留、ウキスキー貯蔵に関する事項、ウキスキー税額、ウキスキー価格、製樽工場に就て、総括という項目を順におこして詳論したあと、さらに付言として、労働問題、社員待遇問題、販売方法に至るまで説きおよんでいる。写真が10枚はりつけられ、絵図や表も23個所にみられる。筆者はニッカ・ウキスキー広報部のご好意でこの『実習報告』（複製）を読んできたが、とてもていねいで誠実な筆様である。その紙面は、竹鶴がスコッチに匹敵するウイスキーづくりの実現をひたすら夢みながら、どれだけ精力的に学んでいたか、ひしひしと伝わってくるようだ。手にするたびに肅然たる気持ちになる。

（4）

ところで、蒸留工場での実習が体験できたのも「ウイリアム博士」の尽力によるものだった。博士はグラスゴウ大学の「応用科学科の看板教授」であって、学習や生活の面でも「いろんな面倒や、親身のお世話をいただいた」と、竹鶴は『ウイスキーと私』のなかで述懐している。ところが、不思議なことに、『大学要覧』等を調べても、当時のグラスゴウ大学の化学教授にはウイリアムという人物は見られない。ロイヤル・テクニカル・カレッジの方も、当時の科学教室はG. G. ヘンダーソン教授と5名のスタッフから構成されていて、ここでも該当者は確定できない。

「ウイリアム」博士は通名であったとも考えられるが、それでは実際に誰を指したのかということになると、目下のところはっきりしない。前出のヘーゼルバーン蒸留工場の工場長ウイリアム・イネー氏ではないかと考えるむきもあるようだが、これもまた確かな証拠は見あたらない。もう少し調べを重ね、詰めなければならないところがある。

第5節 竹鶴政孝をめぐるスコットランドとの交流——ウイスキー醸造と国際結婚（翻訳・解説）

竹鶴政孝は、1918年12月、第一次世界大戦が終わるころグラスゴウにやって来た。スコットランドでおこなわれていた、本場のスコッチ・ウイスキーを製造する方法を学ぶ目的で、大阪の雇い主から派遣されたのである。かれは十分な教育を受けた化学者であり、日本では、種々の香料や着色料を水と混ぜて人造の蒸留酒を製造するのに従事していた。当時、日本の市場では、この「代用品」である人造蒸留酒が唯一の「ウイスキー」であった。かれは1920年の秋までスコットランドに滞在し、いろいろなウイスキー蒸溜所で短期の見習い修業を何度も体験した。日本に戻ってから、サントリーの創業者・鳥井信治郎に10年間雇われることになる。鳥居は、京都の近くにある山崎に、サントリー初の本物のウイスキー蒸溜所を創設した専門の技術者である。1934年になると、竹鶴はみずから事業に乗り出した。日本の北のはて北海道の余市に自社のウイスキー蒸溜所を建てたのである。かれの会社は、苦難の戦時期を乗り越えて、一大ウイスキー製造業者であるニッカ・ウイスキー醸造会社となった。

スコットランドに滞在中、竹鶴はある中流家庭の、医者の子息の未亡人宅に住んでいた。かれはその長姉のリタ・カウンと恋におち、1920年1月8日に結婚した。竹鶴リタは、自分が生まれた国と縁組みをした国とが戦争をした1941年から1945年までの過酷な時期も含めて、日本に40年間住みついたのである。

リタ・カウン

竹鶴政孝は、グラスゴウに到着してから自信をなくし、さびしさを感じていた。よそから来た者にとって、新年はとりわけ堪えがたかった。新年は、スコットランドでも日本でも、昔から家族で祝うときであったからである。かれが交際を始めた一人に、グラスゴウ大学の医学生イザベラ・リリアン・（エラ）・カウンがいた。彼女に連れられて、かれはカーカンテロフの彼女の家を訪ねることになる。

ロビーナ・カウン夫人は、夫のサミュエル・キャンベル・カウン医師が1918年6月22日に48才で亡くなり、未亡人となっていた。カウン夫人は、アダム・スミスとデイヴィッド・リカードの思想を発展させた、著名なスコットランド

人政治経済学者ジョン・ラムゼー・マカロック（1789-1864年）の孫娘にあたった。カウン家は、カーカンテロフの中心地に、一番大きくて立派な家屋の一つミドルクロフトを構えていた。カーカンテロフは、グラスゴウの北東にある小さな町で、かつて周囲には炭鉱がいくつもあった。カウン夫人とその子どもリタ、エラ、ルーシー、キャンベルには、不運にも、カウン医師が死去すると、邸宅を維持し家族を養っていくには収入が足りなくなってしまう。

竹鶴はエラ・カウンと知り合いになったとき、女性が大学生でありしかも医学生であることを知って驚いた。目鼻立ちの整ったがっちりした青年で、髪が黒くてとても魅力的であったかれは、孤独でもあった。しかし、かなり立派な英語を話し、1918年12月には、二人は数分間話をかわした。クリスマスの直前に再会したさい、エラが母に代わって政孝を、クリスマスの祝日にカーカンテロフを訪れるようにと、招いたのかもしれない。

おそらくは1918年のクリスマスから新年にかけて、そして1919年にはまがいがなく、政孝はカーカンテロフのカウン家の人たちと一緒にあった。クリスマス・プディングに隠された「景品」のなかから、竹鶴は輝く6ペンス銀貨を、またリタは指貫きを手にした、という話がある。かれがいつミドルクロフトのカウン家に居を構えたかは知られていないが、1919年の3月4日にはすでにそこに住んでいた。このとき、かれは化学の夏期授業の登録をするさい、グラスゴウ大学には現住所としてミドルクロフトをあげていたのである。賄いつき下宿代としてかれが定期的に支払った金は、カウン夫人にとって、有益であったにちがいない。夫人がミドルクロフトの大きな住宅を売却できるときが来るまでは、そこで家族を養う以外に選択肢がなかったからである。

竹鶴は、あたらしい「家族」からいつでも必要な支援を受けられる体制が整っている世帯の一員であることを喜び、受け入れてくれたこの家の広さと壮観さを十分に味わった。しかし、世帯のほぼ全員が女性の、スコットランドのこの快適な家庭に生活していることに、一介の若い日本人青年として（1919年という時代でもあり）、驚きもした。

これには興味深い後日談がある。さまざまな出来事が起こった50年ほどのちに、政孝が自伝を執筆していたときのことである。日本を発つ前の1918年6月にはサミュエル・カウン医師が死去していたという事実にもかかわらず、かれは、カウン医師がまだ存命中で、政孝をミドルクロフトに招いてくれたかのよう書いたのである。カウン家のハイティー〔訳注：午後遅くまたは夕方早く

の軽食で、紅茶とサンドイッチをとることが多い]に招かれ、カウン医師と日本について話し合っているうち、同医師が更新されたばかりの日英同盟の支持者であったことを知った、と記している。日英同盟は1902年にはじめて締結され、1918年に更新されたのである。竹鶴は家長であるカウン医師がいないことに少し違和感を感じていたのだろうか。カウン医師が生きていたなら、一家の財政的・社会的状況からすれば、外国人の下宿人を引き受けることなどきつとなかったであろうに。

竹鶴は、広島市の東部にある竹原の名家の出であった。古くからの製塩業者であったが、同家の分家がこの地域ではよく知られた日本酒の醸造業を引き継いでいた。旧家の出である政孝の母親は、9人という大家族ではあったが、伝統ある上流の女性にみられるさまざまな趣味と技能を備えており、そのなかには日本の弦楽器つまり三味線や琴の演奏と、華道や茶道があった。

政孝とリタがおたがいに強く引かれていると感じ始めたのがいつのころであったのかは、わからない。リタが、自分の家での生活できわだった位置を占めるようになった、元気で精力的なこの青年に引きつけられたのには十分な理由があった。この一家では、政孝はエラの友人と考えられたが、政孝の関心を引いたのは、物静かで思索好きのリタの方であった。おそらく竹鶴は、医学生のエラは医療を生涯の仕事とすると考えたのであろう。いずれにせよ、日本でも、スコットランドでも、娘が何人もいるところでは、長姉が最初に結婚するものと期待されていたのだった。

竹鶴は1919年11月7日にヨーロッパ旅行からイングランドに戻ったとき、リタへの贈り物として香水を一瓶もって来た。彼女は、お返しにロバート・バーンズの詩集を贈った。「最愛の日本の友人へ、わたしのお気に入りの詩集を」と記されていた。1919年の晩秋のころ、政孝とリタは一段と親密な仲になった。リタは、婚約した相手が中東に配属させられてダマスカスで死去してしまったことを政孝に打ちあげたが、政孝は、彼女がなぜこのことを話してくれたのか不思議に思った。

1920年1月に、「化学専攻生」で「未婚の男性」竹鶴政孝は、グラスゴウのカルトン登記所において、「未婚の女性」ジェシー・R・カウンと「愛を誓って」結婚した。この「内々の」結婚を認めた証書には、ラナークシャの州裁判所判事補の署名があった。リタの16歳になる妹とその友人ジェシー・ヘンダーソンが立会人となった。祝賀の宴がグラスゴウのステーション・ホテルでもた

れ、そこでの結婚パーティーにはロイヤル・カレッジのウイルソン教授も出席した。リタも竹鶴も21歳以上であり、したがって結婚に対する親の承認は必要ではなかった。二人の立会人もともに16歳以上であり、スコットランドでの法律上の成人であった。

カウン夫人がこの結婚の知らせを聞いたときには驚いて、「この結婚は取り消すべきです」と言った。結婚の知らせはやがて日本に届いたが、そのときはすでに手遅れであった。日本人は自分たちを特別な民族だと考える傾向がある。だから、他民族と結婚するという考えは好ましいものではなかった。とにかく、結婚はたいてい見合いで決められるもので、家族や友人たちからふさわしいと考えられる二人が祝福されるのであった。政孝は三男であったけれども、若者がこのようにして結婚するのは、やはり不幸なことであった。家族は政孝の雇い主の阿部喜兵衛に相談し、阿部があわててスコットランドへ旅立った。

リタ自身は、23歳のときに容姿端麗な日本人青年と結婚したのだから、満足するだけの訳があった。彼女には、自分が外国人の妻であるがためにいろいろな困難が待ちうけていることがわかっていなかったし、日本では嫌悪や敵意さえも引き起こしかねないとは予感できなかった。政孝の姿勢は違っていたが、恋する自分を優先させて、スコットランド人の妻と結婚したのだった。

スコットランド西部には数多くの日本人学生が働き学んでいたのだが、かれらは下宿先のスコットランド人女性の世話になりながら、さびしい生活を送っていた。竹鶴の場合は違っていた。政孝は中流の一家庭と親しくなり、その家族の一員として暮らしたのである。これによって、何か月にもわたる親しいつきあいが必然的に生じることになる。リタは23歳。当然ながら、彼女はこの魅力的な、若さあふれる日本青年に、外へ連れ出してくれる人として目を向けたのである。かれは精魂を傾けて研究したが、彼女はかれに難解な英語の解釈をする手助けをした。そうするなかで、二人の親密さが増したのである。

政孝が結婚を申し込んだのは驚くべきことなのかもしれないが、かれがプロポーズをすると、それにリタが温かく応じたのですべては決まった。諸事情を考慮に入れると、普通のやり方ではこの結婚はあげえなかったであろう。だから、二人を結びつけたのはリタの決断であったと結論づけなければなるまい。結婚したとき政孝は26歳であった。かれは、外国人との結婚は不幸を招くと日本人が考えることをよく知っていたけれども、強烈な思いで実行したのだった。

リタの立場は、まったく違っていた。政孝が日本について説明してくれたこ

とを別にすれば、自分が帰化することになる国のことは何も知らなかった。しかし、彼女は貧乏になった医師未亡人の、手に職をもたない娘として、自分に残された将来の展望は結婚にあるということがわかっていた。彼女はハンサムな若い日本人に魅せられ、そのかれが外に出る道を開いてくれたのであった。いろいろ反対があったけれども、彼女はひたむきに、また全力をつくしてこの好機を捕らえた。何年もたってから、また死の直前になって、彼女は故郷にあてて手紙を書き、「年をとっていくのはさびしいものです。けれども、自分の意志でこの人生を歩んできたということを忘れないでおこうと思います」と言っている。

ウイスキーの見習い修行

政孝は、雇い主の阿部喜兵衛によってグラスゴウに送り出された。阿部が必要なお金を支給してくれたのである。1919年3月23日に、政孝は「送金を請う」という電報を日本に送った。見習い修行には思っていたよりも金がかかることをほのめかしたと思われる。金が届いてから、かれはスコットランド北東部にある、エルギンやスペイサイドというウイスキーの産地へとおもむくことができたようである。

1919年4月、かれの最初の実地研修は、エルギンから3マイル南の、スペイサイドのロングモーン蒸溜所（現在のロングモーン・グレンリヴェット）でおこなわれた。日本人が蒸溜所で働こうとするのは珍しいことであったであろうが、ロングモーン蒸溜所の経営者と労働者たちは竹鶴をたいへん親切にあつかい、ウイスキーの製造工程に関する貴重な洞察力を身につけさせてくれた。よく目立つ白衣を身にまとい、竹鶴はできるだけすべてを学びたいという決意をもって働いた。ロングモーンのつぎに竹鶴が働いたのは、スコットランドの中央低地地域にあるいくつかのウイスキー蒸溜所であり、いずれのところも一週間で普通であった。そのなかには、カフェと呼ばれるピラー・スチル〔訳注：ウイスキー蒸留器の一種〕が作動している蒸溜所もあった。最後は、1920年1月から5月まで、キンタイア半島にある、アーガイルシャのキャンベルタウンに住んで働いた。ハーゼルバーン蒸溜所に毎日出勤したのである。このハーゼルバーン時代に、竹鶴は仕事で得たみずからの体験について、手書きの日記をしたためた。たいへん詳細なこの研究物は、後年、日本に戻り、サントリー山崎蒸溜所を建設するとき、かれのバイブルとなった。

日本のリタ

1920年9月18日、ロンドンで、「夫とともにアメリカ経由で日本への渡航を許可する」という日本語のパスポートの発給を受け、リタ・カウンは日本における外国人妻としての将来に胸をふくらませた。日本男子として確かな地位にあった夫が、母国日本における妻たちの現状について彼女に教えようとしたとしても、リタはバラ色の眼鏡を通して日本をみていたので、ちゅうちょすることはなかったであろう。

日本では、男子が跡取りとなって家系を継いでいくことが重視されている。リタは外国人だったから、政孝の婚姻は竹原にある竹鶴家の正規の戸籍に載せられることはなかった。だから、政孝は自分のあたらしい「家系」の筆頭者になって、自分とリタの名を記載した。外国人を母にもつ子どもが家系を継ぐことはできないので、出産可能な若い女性であるリタの立場はやっかいなものであった。リタに子どもが一人もできなかったことは、竹鶴家にとっては幸いなことであっただろうか。彼女は（1930年から）養女を一人育てたし、さらに戦後は成人した男子を一家の養子にとった。

パスポートがロンドンで発給されるときにリタが感じた不安は、新生活の準備に躍起になっているうちに難なく忘れられていった。まず大西洋を渡り、ついで合衆国を横断し、最後に太平洋を渡る旅は、若い妻にはすばらしい体験であった。

二人は神戸に上陸した。リタは身を震わせながらタラップを降りて波止場へと歩いて行ったが、胸を張り、ほほ笑みながら、確かな足取りで日本の土を踏んだ。夫はすぐに、ダークスーツを着た男性、家族、同僚など、迎えにやって来た大勢の人びとに取り囲まれて姿が見えなくなった。なかにはカメラをもつ人もあり、だれもが彼女には礼儀正しかったが、興奮した叫び声はすべて日本語であったので、彼女はまごつきながらそこにたたずんでいた。

政孝の帰国とリタの来日を歓迎する祝宴には、リタとほかに女性が一人、それに男性18人が出席したが、本当のことをいうと、心身の疲れる苦しい試練となった。彼女は一番上等のビロードの服を着ていた。もう一人の女性は、伝統的な着物を着ていた。晩年にはリタ自身もしばしば着物を身につけ、自分で日本の衣装を正しく着るというむずかしい着付けの技術を習得したのだが、それをはじめて見たこのときは、やっかいなものだと感じた。彼女の隣の席に座っ

た青年を含め、男性3人は日本伝統の着物を着ていた。たいていの客は洋服を着ていたが、タキシードを身にまとった彼女の夫がとてもしりしく見えたことは、疑いがなかった。リタはこのような大勢の日本人のなかにいると、不安で落ち着かなかった。出席している宴会は陰気としかいいようのないもので、帰郷を祝うパーティーにつきものの自然な陽気さがまったくなかったのである。

スコットランド人の妻を日本に連れて来ることが途方もないことだったと竹鶴が思いしらされたのは、ホテルでの食事のさいであった。リタがそこにいなかったら、みんな打ち解けてふるまったであろうが、その晩のわざとらしい雰囲気はそれとはかけ離れたものであった。脇には不安そうで悲しげな女性があり、また親類や仕事仲間たちは堅苦しい洋服を着て、しゃちこぼって落ち着かない様子だったので、この外国人との結婚が自分の人生を取り返しのつかないほど変えてしまった、と確信することになった。

日本に戻ったとき、政孝は、リタが働き過ぎないように、また日本の家庭生活のきつい仕事にふりまわされないように、自分が守ってやらないといけなさと考えた。結婚し夫婦として歩んだ40年のあいだずっと、政孝は妻を守った。どのようなときも、政孝はなんとかして住みよい場所に快適な家屋を建て、洋風の家具を備え、ときには裕福な日本人の隣りに住めるようにした。かつて竹鶴がグラスゴウ郊外の、カーカンテロフの中心部で一緒に住んだカウ家は、評判のよい開業医にふさわしく、御影石の大邸宅で豪華な暮らしをしていたということを思い起こすとよいであろう。

竹鶴がスコットランド人の若い妻を愛情深く大事にしたことにかわりはないが、竹鶴リタが日本の日常生活に慣れようと試みたときのカルチャー・ショックを正しく理解することはむずかしい。帝塚山にはリタと「まっさん」用の洋式の浴室設備と洋式ベッドがあったけれども、屋敷の大部分は和式のものであったであろう。リタは日本に落ち着くと、夫をまっさんと呼び始めた。政と、日本で名前をていねいに呼ぶときにつける「さん」との合成語である。まっさんは、リタだけでなくスコットランドの彼女の家族のあいだでも用いられた呼び名であった。

来日してすぐ、リタは何か教える仕事を探そうと決めた。彼女は英語やピアノを教えられる自信があった。彼女は、1921年3月20日付の履歴書（住所は当時、大阪市住吉手塚497番地であった）を美しい筆跡で書いた。その履歴書に、父は医師、グラスゴウ大学内科学士・外科学士サミュエル・キャンベル・カウ

ン、母はロビーナ・マクドナルド・カウンと記している。

いくつかの照会を経て、彼女は、長いあいだセント・アンドリューズ中学（現在の桃山大学）にかかわってきた、ジョージ・ウィリアム・ローリングス牧師（1868-1933年）と出会うことができた。ローリングス家は大阪で教育とキリスト教の布教におおいに献身してきたのだが、このローリングス牧師がリタを喜んで英語教師に雇ってくれた。竹鶴リタは、1916年に開校した帝塚山学院の英語教師にも雇われたと考えられている。彼女が1922年9月1日から1924年12月31日まで、どちらの学校でも毎日1時間、生徒たちと一緒に活動したことは、はっきりとわかっている。

ウイスキー製造の専門家・竹鶴政孝

竹鶴政孝は1920年の後半に帰国してから、以前の雇い主である摂津酒造の阿部喜兵衛のところにもどって働いた。しかし、人造の蒸溜酒を造ることは、本物の蒸溜ウイスキーの製造法を知った者にとっては、しだいに気が進まない仕事になった。竹鶴は、阿部自身が本格的なウイスキー蒸溜所を建設する財力がないと気づいたときに、辞職した。山崎ウイスキー蒸溜所へ専門的技術を提供してほしいという鳥居信治郎の提案に安堵の気持ちで応えたのは、1924年のことであった。同蒸溜所は日本最初の本物のウイスキー蒸溜所であり、これによってサントリーの名が日本のウイスキー製造の筆頭にあがることになった。

あいにく竹鶴と鳥居はいつも意見を同じくしたわけではない。1929年には竹鶴は山崎から横浜に移り、鳥井が購入したばかりの蒸溜所の管理運営にあたるよう要請されたのだった。この左遷を機に、竹鶴は自分の将来を再検討することになった。独立して事業を始められるかどうかと、ますます自問するようになった。

1934年になり、竹鶴と鳥井信治郎との10年間の契約が終わった。この年から、竹鶴は、北海道の小樽近くの余市にウイスキー蒸溜所を建設するという夢を実現し始めた。北のはて余市であれば、スコットランドと同じような理想的なウイスキー作りの諸条件が手に入ると、確信したのだった。かれはつねに余市をウイスキー蒸溜所とするつもりであったが、おそらくサントリーと敵対することを避けるために、最初に乗り出した事業はりんごジュースの製造であった。この事業は、大日本果汁株式会社という名前のもとで始められた。竹鶴は、スコットランドの蒸溜所での厳しい実習によって、ウイスキー製造についての知

識はあったが、りんごジュースの製造についてはほとんど知らなかった。その専門的な知識・技術については、1931年にグラスゴウで購入していた小さな本、C. W. ラドクリフ・クック著『サイダーとペリー酒』を頼りにしたが、それだけでは十分ではなかった。このりんごジュース事業は、竹鶴の会社にとってはほとんど致命的であった。やがて、1940年から、また戦時中の苦しい時期に、余市ではウイスキーが貯蔵されるようになった。そのなかには、とくに日本帝国海軍の将校たちに売られたものもあった。

戦争が終わると、会社は繁栄を迎えた。1950年代までに、1954年に社名変更したニッカ・ウキスキー会社は事業の拡張を考えることができた。瓶詰工場が、1952年には東京の麻布に、もう一つが神戸近くの西宮に1959年に開設された。西宮工場はその後拡張され、1962年にはニッカ・カフェ・スチル（グラスゴウのブレア・キャンベルとマクリーンズから輸入された蒸留器）を収めた。もう一つの大きなニッカ工場は本州北部の仙台にある。そこには、1960年代後半と1970年代に大規模な複合蒸溜施設が建てられた。ニッカ・ウキスキーの大拡張は、竹鶴政孝の存命中におこなわれたのである。

リタの子どもたち

リタと竹鶴政孝には実子がいなかった。リタは夫の世話をし、その仕事を支えつづけたが、子どもがなかったことで悲哀を味わった。日本では養子縁組がときどきおこなわれるが、それは多くの場合、大家族の子どもたちにより恵まれた機会を与えるか、あるいは男子の跡取りをもうけて家名を存続させるためである。1930年のある時、竹鶴夫妻は、1930年3月生まれの女の赤ん坊である房子を養女に迎えた。リタが英国旅行のために1931年6月にパスポートを発給されたとき、そのパスポートの写真には、彼女が15か月になる元気な赤ん坊の房子を抱いているのが見える。この子はリタとまっさんの子どもであることから、房子という名前は捨ててリマとなる。リマははじめは温暖な南逗子で、その後1950年ころまでは、寒くて雪深い余市で、リタとまっさんに育てられた。それから、看護婦の教育を受けるために家を離れた。

結婚生活の前半、竹鶴リタにはスコットランドを訪れる機会が、1925年と1931年の2回あった。1925年のはじめ（1月29日）には、リタは大阪でパスポートを取得し、日本から（セイロンのコロンボ経由で）ロンドンに向けて出帆し、ロンドンには3月20日に到着した。知られている限りでいうと、彼女は10月ま

でスコットランドで家族のもとにいた。夫も、8月にはグラスゴウとスコットランドに滞在した。かれらは一緒に、1925年10月末に東回りで帰国の途についた。

1931年には、リタは若い養女を抱いて意気揚々と帰国した。1930年代後半には、まっさんが遠大なウイスキー事業に乗り出したために金銭的にきつくなり、また戦争に向かう世界情勢にあったので、故郷を訪れることはもうなかった。しかし、リタは母には定期的に、妹たちにはときおり手紙を書いた。

リタと政孝の結婚生活は、少なくとも1940年までは、幸せな結婚であった。リタははじめのうち外国人として好奇の的となったが、一生懸命勉強して日本語が流暢になった。日本的なりっぱな主婦として、彼女は、日本のイカの固い組織を取り除くのに、日本人がするように縦に切るのではなく、しっかり横に切って料理することができるという、とくにほめられた。リタはたいていお手伝いを一人おいていたのだが、冬に備えて種々の食物を塩漬けにするという大仕事を含めて、自分で数々の家事を引き受けたのだった。

リタと政孝の日本人とスコットランド人の国際結婚は、40年以上もつづいた。その前半期はリタにとってきわめて苦難に満ちたものであったが、それでも幸せであった。1941年から1961年1月に63歳でリタが死去するまでの後半期は、さらに辛いものであったにちがいない。彼女は1950年代なかばからは、しだいに病気がちとなり、けっして元気といえるような状態ではなかった。

1941年12月に、アメリカ合衆国、英国、中国、日本のあいだの戦争が勃発したことは、竹鶴リタにとっては自分の身にふりかかる災難であった。それまでの彼女は幸いにも外国人妻としては完全に日本社会に溶け込んでいたのであるが、戦争の熱にうかされたような状況は、日本人の外国人嫌いを増幅させたのである。夫のまっさんは彼女をできるうるかぎり守ったが、長くきびしい年月にならざるをえなかった。リタは「帰化」して日本人になっていたもので、戦時中も自宅にとどまることが許されていた。夫は、彼女のことをこう語っている。「わたしのどこが悪いの。わたしの心は日本人になったのよ。髪の毛と眼が黒く、鼻がもう少し小さければいいのと思うわ」と、みずから嘆いたことに憎悪の念をいだいて苦しんだ。まっさんは、彼女の戦時中の「とてもひどい体験」について書いている。日本の警察は強権的に外出先のリタのあとをしっかりとつけたし、余市の街に出かけるとだれかからつばをかけられたようだというのである。しかし、このように容疑をかけられることは戦争にはつき物の副産物

であって、けっして日本に限ったことではいということ、強調しておかなければならない。

リタが母国に戻ることにについて長年迷っていたことは明らかである。1956年の母の死後、彼女は妹あてに「もうずっと前にお母さんにさようならを言ったわ」と書き送っていたが、晩年には「もし帰れるものならもう一度」と書いたのだった。

二人には授からなかった息子・竹鶴威

戦争が終わったとき、まっさんは50歳を越え、リタも48歳であった。だれが事業を継ぐのか、将来のことを考えなければならなかった。実の息子がいないので、政孝の姉の息子である威（たけし）を養子にすることが決められ、威は20歳のとき法定相続人になった。この青年が一家に加わったことで、リタはおどろくほど元気づいた。威はエンジニアとして札幌の北海道大学に通ったが、自宅の余市にはリタとまっさんがいて、かれは二人に喜んで迎えられたのだった。

リタはこの威の存在におおいに慰められた。かれは愛情に満ちた息子で、つねに支えとなってくれた。威は大学を卒業してから、余市蒸溜所に正社員として雇われ、徐々に業務全体をとり仕切るようになった。1951年、27歳の時、日本銀行支店長の妻の関野夫人により、威と歌子との結婚の手はずが整えられた。歌子の家族は当時小樽に住んでいたが、東京に親類があった。リタの母、カウン夫人は大喜びでリタに手紙を送り、ローリングス夫人が「ウタコのウタは歌、コは子どもを意味し、ウタコという名前は良家の子女につけられる」と話してくれたと、述べている。リタは、息子の妻がいつも優しく思いやりがあったので、幸運だった。

威と歌子に息子孝太郎が1952年に生まれ、1954年10月29日には娘みのぶが生まれたとき、リタは喜びにあふれた。「おばあさま」となったリタは本領を発揮し、この幼い子どもたちのためにつくすようになった。病気になり、子どもたちから長らく離れているようなことになると、リタには苦痛の種となった。東京に近い逗子の家から妹あてに、「余市に戻って、この子たちに会いたい。・
・わたしたちがここに来てから一年もたつ。こんなに長く幼な子の時期に会えないのは、辛いものです」と書き送っている。

余市に戻り（1960年1月27日）、孫たちの近くにいられることをおおいに喜び、「孝太郎とみのぶは、実にかわいい」と書いている。

リタの晩年

元気でいたいと懸命に努力するのだが、竹鶴リタの人生最後の5年間は、病気が絶えることがなく、気力と体力が奪われるにつれて、徐々に衰弱に向かった。リタの健康の衰えは、結核、ガン、喉の腫瘍、不断に続く発熱など、さまざま深刻な病気によるといわれたが、結局は肝臓病で死去した。最後の数年間は、いろいろな病院に数週間あるいは数か月間にわたって入院をくり返したため、経費は相当額にのぼったにちがいない。

しかし、1959年は、リタが書いているように、「素敵な年」であった。とりわけ妹が5月に来日したからである。カウン家の姉妹は、叔母が死んだのでそれぞれが遺産を相続している。リタはその金を使って保育園を設立し、同園は今もなお余市の重要な資産になっている。一方、妹は日本への航空券を買ったのである。リタは妹が東京の羽田空港に到着したさいに出迎えたと思われる。姉と妹は余市にも逗子にも滞在した。二人が最後に会ってから28年ぶりのことであった。妹の訪問はすばらしい一時であったにちがいない。

また、夫は不在であったけれども、リタは12月4日に「すばらしい誕生日」を迎えた。「威と歌子が、素敵なセーターを贈ってくれました。黒と白のチェック模様で、わたしの新しい毛皮の黒いコートをはおると、よく似合います。孫たちには、かわいいグレーの手袋をもらいました」とある。それまでクリスマスと新年の休日を3回、いずれもあちこちの病院で過ごしたが、1959年は家族と一緒に家にいたという点でも特筆される。しかし、リタは、「(妹の)あなたが帰ったあと、少しずつ以前の状態に戻ってしまいました。食事はいつも台所でわたし一人で食べます」と述べている。

日本のウイスキー王

竹鶴政孝は、妻リタが1961年1月17日に亡くなったとき66歳であった。人生の最盛期にあり、経営するウイスキー事業は大規模で、盛大で、拡大していた。そのため、かれは長期にわたって家を留守にしていた。

しかし、ウイスキー会社を設立して名を成すというかれの賭けは成功した。日本のウイスキー市場の約70パーセントはサントリーが保持してはいたが、ニッカは市場の20パーセントほどを占め、日本で二番目に大きな高級ウイスキー製造者だといえるようになった。アサヒビールの支配下で、住友銀行の融資を受

ける複合企業の一つとして、ニッカ・ウキスキーはつねに品質の向上を目指してきたといえる。

1963年の春、竹鶴政孝は息子と一緒に、思い出の巡礼の旅に出かけ、ヨーロッパ、連合王国、スコットランド、グラスゴウをふたたび訪れた。グラスゴウではステーション・ホテルに滞在し、リタ・カウンを妻に迎えた1920年1月の薄暗い日のことを思い出した。竹鶴政孝が余市にある墓地の丘の頂上に見晴しのよい一区画を購入したのは、1965年のことであり、そこにかれはリタを埋葬した。この丘の彼女のところにかれが加わったのは、1979年のことであった。今ここで二人は、北の海と、おそらくはるか遠くのスコットランドを眺めながら横たわっている。

日本の蒸溜ウイスキーとスコッチ・ウイスキーとのあいだに「親密な関係」がみられるのは、竹鶴政孝の断固たる決意によるものであった、ということを確認なくてはならない。1919年から1920年にかけてスコットランドでウイスキー製造に一身をささげて取り組んだ結果、かれは日本における練達したウイスキー製造業者としての生涯を送ることになったのである。かれは、帰国後60年かけて技術を完全なものにし、みずからのウイスキー・ブレンダーとしての優れた腕前をとりわけ誇りに思っていた。この日本人ウイスキー王と、さらにはスコットランド人の妻が成しとげた功績に、人は称賛を惜しまない。

[訳者解説]

(1)

竹鶴政孝といえば、ニッカ・ウキスキーの創業者である。1918年に、「本場のスコッチ・ウイスキーを製造する方法」をスコットランドに学びに出かけ、国産のウイスキー醸造を事業化したのである。

本論文は、その竹鶴政孝を介した日本とスコットランドとのあいだの交流と関係の物語である。交流と関係の内身は二つあって、一つはスコットランドのウイスキー醸造技術の移転、もう一つはスコットランド人女性との国際結婚をめぐる諸問題である。

まず、第一の主題については、竹鶴は、グラスゴウ大学 [およびロイヤル・テクニカル・カレッジ] に「化学専攻生」として学んだばかりではなく、スコットランド各地のいくつものウイスキー蒸留所で実地研修をつんだことが注目される。大学のキャンパス内での学習だけでなく、実際の現場に入って実地に研

修するという、実学重視の学習スタイルは、当時のスコットランド留学生のおおくが体験したが、竹鶴の場合は、実地研修の体験の方をより重視し、意欲的に活用したのだった（拙稿「竹鶴政孝のスコットランド留学」『学鏡』88巻2号、1991年2月、30-33頁参照）。ただし、本論文では、グラスゴウ大学などにおける修学ぶりについてはまったく、また実地研修についても、実習先が明記されてはいないが、ほとんど分析されていない。ハーゼルバーン蒸留所における体験をこと細かに記した竹鶴の『実習日誌』についての言及はあるが、その内容については考察されていない。

史実を丹念に追わないということは、竹鶴を介して移転された醸造技術の内容に対して問題関心がみられないことにもあらわれている。本場スコットランドのウイスキー醸造技術と竹鶴が生み出した醸造技術との関係ぶり、すなわち、まるごとの技術移転なのか、竹鶴の創意はなかったのかなどといった関心は、本論文にはうかがわれぬ。「日本の蒸留ウイスキーとスコッチ・ウイスキーとのあいだに『親密な関係』がみられる」という指摘にとどまっている。

(2)

本論文には、文末に注が付されておらず、本文でも史実の典拠が明示されることがない。けれども、日英交流史という視点からみたばあい、本論文には、竹鶴政孝研究においてあたらしい史実ないし指摘が認められる。

第一は、竹鶴のグラスゴウにおける下宿先にかかわる指摘である。明治のはじめ以来、「スコットランド西部には数多くの日本人学生が働き学んでいたのだが、かれらは下宿先のスコットランド人女性の世話になりながら、さびしい生活を送っていた」。そのなかであって、「竹鶴の場合は違っていた。政孝は中流の一家族と親しくなり、その家族の一員として暮らした」のだった。この下宿先での「何か月にもわたる親しいつきあいが必然的に生じることになり、やがてリタとの結婚に至ることになる。

その下宿先について、竹鶴は、自伝のなかで、自分が「日本を発つ前の1918年6月にはサミュエル・カウン医師が死去していたという事実にもかかわらず、かれは、カウン医師がまだ存命中で、政孝をミドルクロストに招いてくれたかのように書いた」、という指摘は興味をそそる。これは、竹鶴が「家長であるカウン医師がいないことに少し違和感を感じていた」からかもしれない、と解されている。

第二は、1920年1月、グラスゴウのカルトン登記所で結婚登録をしたあと、

ステーション・ホテルで開かれた「結婚パーティーにはロイヤル・カレッジのウイルソン教授も出席した」という記述である。ウイルソンとは、竹鶴が学んだロイヤル・テクニカル・カレッジ（現在のストラスクライド大学の前身）の無機化学教授 F. J. ウイルソン（Forsyth J. Wilson, 1880-1944）である。このウイルソン教授が結婚パーティーに出席したということは、重要な意味をもつ。それほど親しい間柄であったというなら、竹鶴は同教授からどのような指導と支援をうけたかが、とうぜん問われなければならないが、本論文ではこれについての関心はみられず、論及されていない。

概して、本論文は、スコットランドにおける学習および実地研修についても、竹鶴とリタとの恋と結婚について大きな関心が注がれている。つまり、第二の主題である国際結婚をめぐる話が大きく展開されている。竹鶴とリタの結婚は「40年以上もつづいた」が、とくにその「前半期はリタにとってきわめて苦難に満ちたものであった」ことを示す話が、くりかえし描かれている。

異文化の狭間で泣き、異郷でのつらい待遇に耐えながらも、夫のウイスキーづくりへの情熱と事業を陰で支えようとする、リタのいじらしいほどの努力の数々は描かれるのだが、それだけでは単なるエピソードの域を出ない。ほかの国際結婚の例と比較し、数々ある国際結婚のなかにリタの体験を位置づけてみる、などという視点は本論文にはみられない。

要するに、本論文は分析的というより概説的といつてよい。けれども、竹鶴政孝のウイスキー醸造技術の移転と国際結婚を介した、日本とスコットランド間の交流と関係について、かなり網羅的に展望したところに、本論文の功績があるように思われる。

(3)

本論文は、概説的な内容であるけれども、2年後には、一段と充実されて著書となり、Japanese Whisky, Scotch Blend: The Story of Masataka Takesuru, his Wife, and the Japanese Whisky Industry (Scottish Cultural Press, 1998) と題して上梓された。出版社が用意した広告ビラには、次のように謳われている。

「本書は、一人の男が固い決意をもって事業と愛の両面で成功した物語である。一人の乙女が、見なれない慣習と聞いたことすらない言葉をもった、はるか遠い土地に移り住み、数々の喜びや悲嘆にくれた物語でもある。しかも、ウイスキーが育まれた『本場』から何千マイルも離れて、どのよう

にして完成されたものに仕上げられるかという信じられないような物語であり、また、ウイスキーが今日まで日本で普及する歴史でもある。挿絵入り。」

同書は早くより邦訳が企てられ、原著が出版されたのと同じ1998年に、和家洋子訳『リタとウイスキー、日本のスコッチと国際結婚』（日本経済評論社、1998）として刊行されている。関係者へのインタビューや確かな史料調査に裏づけられた、ていねいな論述がゆっくりと展開されている。「竹鶴政孝の生涯の伴侶・リタ婦人に焦点を当て、彼女の人生を切り口に当時の国際結婚の実態や日本におけるウイスキー造り、また戦争による苦しい生活などの事実を丹念に追う。竹鶴についてより深く多角的に知ることができる」。ニッカ・ウイスキー（株）のホームページのなかの記事「リタと政孝」には、このように紹介されている。

なお、本論文の著者チェックランド夫人は、上掲書をはじめとする一連の日英交流史研究の功績により、2001年4月、第7回「ジャパン・ソサエティ（ロンドン）賞（The Japan Society Awards）」が贈られた。受賞理由は、つぎのように報じられている。

「チェックランド夫人は、日本にかかわる著書、とりわけ明治日本に貢献した英国人に関する著作を、数々執筆してきている。工学の分野、日本赤十字社の活動、イザベラ・バード、そして竹鶴（「ウイスキー王」）に関する著作である。これらの著書は、商業ベースにのるものではけっしてなかった（したがって、夫人は収益をあげるつもりはまったくなかった）けれども、日英関係の進展について幅広く理解するのにおおいに貢献した。また、チェックランド夫人は本協会が刊行した『人物評伝(Biographical Portraits)』3巻本の各巻に寄稿しているし、つぎの巻にも寄稿することになっている。この寄稿者たちには、執筆して本を一冊受けとる以外、何の見返りもない。しかも、夫人は、これまで何度も本協会のために興味深い講演をしている。目下、『全英人名辞典(Dictionary of National Biography)』のアドバイザーをつとめ、東アジア地域の人物の伝記を担当している。」(The Japan Society, Proceedings, No.137, Summer 2001, p.73)。

なお、竹鶴政孝とリタの、日本とスコットランドにわたる生涯は学術研究の対象としてだけでなく、小説としてもとりあげられている。たとえば、川又一

秋『ヒゲのウキスキー誕生す』（新潮社，昭和57年），森瑤子『望郷』（学習研究社，昭和63年：角川書店，平成2年）などがそれである。ほかにも，竹鶴の著述にもとづいて構成された回想録（ダイヤモンド社編『ヒゲと勲章，ウイスキー革命は俺がやる』ダイヤモンド社，1966）や，竹鶴自身による半生記（竹鶴政孝『ウイスキーと私』ニッカウキスキー，1972）も有益である。

最後になったが，本稿もまた，原著者チェックランド夫人および日英協会の許可をえて訳出した。原題は「日本のウイスキー王とスコットランド人の妻」であるが，日英交流史研究の一篇として本論文を位置づけたい訳者は，「竹鶴政孝をめぐるスコットランドとの交流，ウイスキー醸造と国際結婚」と題して紹介した。訳出するにあたり，宮田学先生（名古屋市立大学）から懇切な指導をうけた。記して多謝する。

著書：Olieve Checkland（慶応義塾福澤研究センター，リサーチフェロー）

原題：‘The Japanese Whisky King and his Scotch Wife’, The Japan Society, Proceedings, No.128 (Winter 1996) pp.41-50.

第3章 使節団・調査団の英国視察

第1節 岩倉使節団の英国視察（翻訳・解説）

岩倉使節団⁽¹⁾のおかげで、英国の企業経営者たちには、1872年秋の数ヶ月の間、自国の製品がほかのどの国よりも優秀であることを示す、これまでにないほどよい機会が与えられた。まさに千載一遇の好機であって、意欲的な企業家たちはこの機会をうまく利用したものだ。

使節団の一行は1872年の8月17日にリヴァプールに上陸し、12月16日にはロンドンを発ってドーヴァー海峡とフランスに向かった。4カ月におよんだこの英国滞在中に、かれらが訪問した産業の現場は枚挙にいとまがないほどである（しかも、かれらは、國中至るところで、町の高官たちからうんざりするほどのもてなしを受けたのだ）。これとは対照的に、1873年1月のフランス訪問と同年3月のドイツ訪問は慌ただしいものであった。フランスは1873年当時、1870年から71年の独仏戦争の痛手から回復しつつあったが、戦時中ドイツはフランス皇帝を捕虜にとったばかりか、降伏までの数ヶ月間にわたってパリを包囲した。平和の訪れはフランス国民にとって高い代償を伴うものだった。というのも、ドイツ国民へ莫大な賠償金を支払っただけでなく、フランスの石炭と鉄の主要産地であるアルザス・ロレーヌの大部分を、ドイツへ割譲するよう求められたからである。ドイツは、フランスを打ち負かしたことでその統合構想を完了させたが、それより前にはオーストリア国民とともに対デンマーク戦争を起し、その結果、デンマークからシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の大部分を奪っていた。ついでドイツは、オーストリア国民が統一ドイツをけっして支持しないのではないかと懸念して喧嘩をしかけ、サドワの戦いでオーストリアを大敗させたのだ⁽²⁾。ドイツは強力な工業国になる態勢を整えていたが、岩倉使節団の日本人一行はドイツの潜在力を判断することはとてもで

きなかった。使節団が1872年1月から8月までアメリカ大陸にいたことは確かであるが、アメリカ合衆国は1864年に終結した破壊的な南北戦争を切り抜けてからまだ間もない状態にあった。この「兄弟戦争」をした結果、武器製造業への道を開く事業がいくつも試みられたことは確かである。とりわけ合衆国の小銃産業は、あとで説明するように、どこにも負けなかった。ただそれ以外の合衆国の諸産業は、巨大な潜在能力をもっていたけれども、まだ歩き始めたばかりであった。

英国において、使節団の一行は、製鉄・製鋼業に関連した数々の工場施設を訪問したばかりか、紡績工場、染色工場、毛織物工場、絨毯工場も訪れたのだった。かれらは案内されて産業面での数々のすばらしい成果を嘆賞したが、それが実に広範囲にわたっていることに圧倒されたにちがいない。使節団の訪問には主要な成果が二つあった。英国の産業が日本市場への支配力を強めたことであり、また、これもやはり重要なことだが、日本国民が自国を工業化する決意を一段と固めたことである。

本論文の目的は、製鉄や製鋼関係の産業を視察したことが使節団に与えた成果を、より詳細に調べることにある。すなわち、鉄道、船舶、銃器を製造した英国の産業力を構成する諸要素についてながめてみたいと思う。

1872年の秋、伊藤博文は「足をのぼして立ち寄った」先の一つ、グラスゴウ大学において、J. M. マッコーン・ランキン教授に、「ランキン教授、日本で銃器を造る工場をどうやって設立すればよいか、教えて下さらないか？」と尋ねると、マッコーン・ランキンは、日本は若者を技術者に養成するためのカレッジを設立するのがよかろう、と答えたのだった⁽³⁾。本論文で論じるのは、岩倉使節団には、全体としても、またその一行の面々にも幾多の目的があったのだが、当面の目的は、鉄道車両、蒸気船（商船用であれ軍艦用であれ）、兵器（軍艦の武器であれ小型の武器であろうと）の供給に関わる目的であったということである。

英国の輸出貿易は40年以上もの間大きな利益をえたのであるが、日本の立場から見れば、それは中間点であったということを強調すべきであろう。日本人

は、そこからさらに進んで国内でやはり英国の支援をうけて、自国の重工業を確立しようとしたのである。それはやがては世界市場で競争し、成功をおさめるものであった⁽⁴⁾。

鉄 道

日本では、最初の鉄道である新橋・横浜線の建設に乗り出すことが賢明かどうかをめぐって、激論がなされたことがあった。明治の偉大な指導者の一人、木戸孝允は近代化推進派の見方であったのだが、こう書いている。「今日、私たちは試験運転の蒸気列車に乗った。蒸気鉄道の件は、一昨年来、国内で熱い論争を掻き立ててきている。その結果、何度もこの事業を断念しようとした。私は同事業の推進のために政府内で内々に動いていた。……今日の運行は、わたしたちが成功の途上にあることを十分に証明するものであった」⁽⁵⁾。

岩倉使節団の英国での鉄道の旅は、全国至るところにおよんだが、英国製造業のすばらしさを実際に次々見せてくれるものであって、それ故に大いなる宣伝効果をもたらした。かれらはいろいろな蒸気機関車製造場（グラスゴウのデューブ社 [10月10日]，マンチェスターのシャープ・ステュアート社 [10月12日]）やクルーの機関車修理工場（ロンドン・北西鉄道） [10月3日]，さらには、すでに開業していたロンドンの鉄道ターミナル，すなわちヴィクトリア駅 [1860年開業]，チャリング・クロス駅 [1864年]，キャノン・ストリート駅 [1866年]，セント・パンクラス駅 [1868年] も訪れた⁽⁶⁾。

かれらが移動に用いた鉄道網は、今日私たちがよく知っているのとだいたい同じである⁽⁷⁾。木戸は、「尤迅速なる蒸気車に乗り一字に六十哩を馳云わゆる飛脚車なり」と報告している⁽⁸⁾。普通列車に臨時の専用の客車が連結されることがしばしばあり、また、その客車が時には待避線へ転轍されることもあったので、産業視察をなすことができたのだった。

効率的な鉄道システムの確立に必要な最高級の鉄道機関車，レールその他の製品が英国において調達できたので、英国内のこうした関連産業に輸出景気もたらされた。たとえば、1870年から1914年に第一次世界大戦が勃発するまで

の間に、英国は大量の鉄道設備を日本に輸出し続けていたのである。

1871年から1911年の間に、日本に輸出された英国製の鉄道蒸気機関車は千輛以上を数えている⁽⁹⁾。

表1 英国の製造業者により日本に輸出された蒸気機関車：1871～1911年

エイヴォンサイド・エンジン	ブリストル	4
バグナル	スタフォード	1
ベイヤ・ピーコック	マンチェスター	194
デューブス	グラスゴウ	170
ケア・スチュワート	ストウク・オン・トレント	2
キットソン	リーズ	27
マニング・ワードル	リーズ	3
ネイズミス・ウィルソン	パトリクロフト, マンチェスター	138
ニールソン	グラスゴウ	97
ノース・ブリティッシュ	グラスゴウ	335
シャープ・スチュワート	マンチェスターおよびグラスゴウ	24
スティーヴンソン	ニューカスル	4
ヴァルカン・ファンドリー	ニュートン・ル・ウィローズ(マンチェスター)	23
ヨークシャ・エンジン	シェフィールド	1
計		1023

典拠：P. J. English, British Made, Industrial Development and Related Archaeology of Japan. pp. 13-14.

19世紀の末でもドイツとアメリカ合衆国はすでに英国の強力な競争相手になっていたが、それでも英国は膨大な注文を受けていた。以下のような報告がある。

「1899年に、ノース・ブリティッシュ機関車製造元は、デューブ社とシャープ・スチュアート社（いずれもグラスゴウにあった）に支援を要請して、機関車 168台分の契約（これまでで最大の単独受注数の一つである）を成

立させた。その一方、1893年には、マンチェスターのベイヤー・ピーコック社が選ばれて、たいへん出来のいい炭水車をさらに72輛も製造していた。その多くは東武鉄道で運行されることになっていた。」⁽¹⁰⁾

機関車が走るレールもまた日本に輸出された。このレールの取引だけは、岩倉使節団が訪問して何年かしてから重要になったものである。そのころ、日本における鉄道建設の進度が1880年代なかばになって加速し始めた時期にあっていたのである。

表2 英国から日本へ輸出されたレール

1886年	7,305トン
1887年	21,106トン
1888年	105,313トン
1913年	162,014トン

典拠：P. J. English, British Made. 1982, 15頁より抜粋。

著者イングリッシュは、1913～1935年および1937～78年分の

「レールを含む完成鋼」についてのその年の数値を示している。

この取引は長年にわたって続いた。たとえば、1929年には「完成鋼」146,769トンが日本に輸送されている。日本人が、機関車と鉄鋼レールを国内で自力で製造するという最終目標を達成したのは、ようやく1930年代に入ってからのことだった。英国が日本市場を席卷した何年もの間は、バロー・ヘーマタイト鉄鋼会社がレール製造業者のなかで最上位にあった。そのレールには「バロー」という印章が押されたが、このレールは品質が最高であることを、日本人や他のだれもが知っていた。もう一つ、高く評価された製造業者がチャールズ・キャメル社であり、これはシェフィールド、グライムソープ、ペニストンで鉄鋼レール、兵器、重金属鋳物を製造していた⁽¹¹⁾。

19世紀末までに、アメリカ合衆国の製造会社（ユニオン、カーネギー、テネシー製鋼所）やドイツの製造会社（ティッセン、クルップ、ブラウンシュワイ

ク)が、英国の会社にとって代わろうと懸命になっていた。大いなる蒸気の時代はやがて終わり、今度はあたらしい電気技術が英国の競争相手に日本で成功する大きな機会をもたらすであろう、ともいえた。

これまで言われてきたように、明治天皇の専用の客車こそが英国のなした偉業を讃えている。その客車は「注文に合わせて設計された、板張が胡桃材の、バーミンガム製の客車であって、ランカシャー製の綿クッションが備え付けられ、最上級のノッティンガム製のレースで装飾されていた。それはフォックス社(リーズ)製のボギー車の上に静かにバネで支えられており、バロー社やシェフィールド社で製造された圧延レールの上を疾走し、マンチェスターで製造された蒸気機関車によって牽引されていた。転轍機と信号機はすべて英国製であった。」⁽¹²⁾

日本では、英国人鉄道技術者は日本の鉄道の建設だけでなく、その効率的な運行に対しても献身的に働いていた。ロンドンにある土木技術者協会の幹事ジェイムズ・フォレストは、日本での進捗状況について、英語で書かれた詳細な報告書を数点受けとっている。ベンジャミン・フレデリック・ライトは神戸の機関車・客車・貨車部門監督者事務所から書き送り、つぎのように報告している。

「1881年に、神戸では9名の英国人が雇われていました(外国人はほかにいません)。機関車の運転士はすべて日本人でした。ただし、2名の英国人が監督役に雇われていました」。

日本の鉄道について日本で執筆された論文が数点、ロンドンの協会に(筆者の友人たちによって)報告され、その後、『英国土木技術者協会会報』に発表された⁽¹³⁾。

英国人が、また北海道ではアメリカ人が多大な貢献をしたのだけれども、日本人は自足できるようになることを常に目ざしていた。日本は幸運なことに、かつての長州五人組の一人で、「日本の鉄道の父」として知られる井上勝⁽¹⁴⁾が、その技術専門家としての生涯をかけて日本の効率的な鉄道システムの確立に尽力した。井上のねらいは、当初から、日本の鉄道システムを真に日本的に、しかも外国人に依存しないようにすることにあつたのである。

電 気 鉄 道

英国の蒸気鉄道工学は、岩倉使節団の訪問から数年のうちに日本市場を支配し、輸出面でめざましい成果をあげたけれども、ほかの面での進展があったため、やがて英国の競争相手たちがもうけることになった。1895年には京都電気鉄道⁽¹⁵⁾が、最初の乗客を北野神社から鉄道駅まで、この古い都市の街のなかを運び、新しい時代の幕開けを告げた。それは起こるべくして起こった進展である。高島炭鉱や三池炭鉱（ともに九州にある）に見られるような石炭資源の活発な採掘もおこなわれたけれども、日本は常に石炭が不足していた。もし値段の安い水力発電が開発され、山がちな日本の急流河川を有効利用することができるならば、電気機関車の方が安いだけでなく空気をよごすこともない。ドイツもアメリカ合衆国も電気工学技術の分野が進んでいたため、この両国とも魅力的な日本市場に参入することを切望したのであった。

1900年が終わると、エスリンゲン（ドイツのシュトゥットガルト）のAアンドG社機械工場とは日本国内で運行する電気鉄道機関車12輛を設計し製造する契約が、また、カーティスG. E. 社（アメリカ合衆国）とは電気エネルギーの補給のために日本国内に専用の発電所一基を作り上げる契約が、結ばれた。日本自身は、ボイラー装置と冷却装置を自力で製造しようとしていた。この事業むけの補助モーターのなかには、イングリッシュ・エレクトリック社が製造し供給したものもあった。

第一次世界大戦後になると、日本の鉄道をすべて電化する決定が下された。

日本帝国海軍の装甲船舶（1904-05年の日露戦争前）

グラスゴウを訪問中は、ブランティア卿の邸宅であるアースキン・ハウスに滞在した。クライド河畔から数ヤード内にあったその邸宅で、大使一行が驚きの目を見たのは、「数十隻ノ蒸気日々上下セリ」⁽¹⁶⁾という様子であった。岩倉使節団がグラスゴウとクライド川、それにニューカスル・アポン・タインを訪問中、手厚くもてなされたことは間違いない。ニューカスルでは、こう報じ

られている。1872年10月22日、火曜日、

「10時少し前に、ウィリアム・アームストロング卿が、一行をエルシク機関車・兵器工場へ引率するために、ステーション・ホテルを訪れた。市長の馬車は岩倉の好きなように利用できたし、ウィリアム・アームストロング卿やノーブル大尉の馬車も駆り出された。工場では、ノーブル大尉とレンデル氏も合流してきた。組み立て・部品取り付け部門、橋梁工場旋盤・穿孔現場をくまなく案内された。多数の銃をさまざまな条件で念入りに調べた。9口径のカノン砲の砲身が打ち鍛えらる模様を観察した。ガトリング銃が実射されるのを見た。ついで、鋳物の作業場と溶鉱炉を『ざっと目を通した』のちに、昼食がふるまわれた。」⁽¹⁷⁾

当時は日本政府雇いの灯台技術者であったスコットランド人リチャード・ヘンリー・ブラントン（1841-1901年）も、その一行に加わった。かれが言うには、

「大使一行は……ニューカスルに到着し、ウィリアム・アームストロング卿の工場を視察する機会をえた。日本は、それ以降、この工場から多数の艦船や軍需品を輸入することになった。工場のいたるところに備え付けられた水力機械や器具は、ウィリアム・アームストロング卿自身が一行に解説してくれた。これまでに製造されたなかの初代のガトリング銃（銃身が10本あり、一分間に250発を発射する）の一丁が実射された。」⁽¹⁸⁾

ウィリアム・ジョージ・アームストロングが広く著名になったのはクリミア戦争（1854-56年）のときであって、このとき政府はアームストロング銃やマンチェスターのジョウゼフ・ホイットワースの大砲が優秀な製品であることを知ったのだった。エルシク兵器工場がニューカスル・アポン・タインの西方、タイン河畔に設立された。アームストロングとその相棒のアンドリュー・ノーブルは、二人とも科学者・技術者としてこの事業にかかわり、すぐれた技術と献身とでもってきりまわした。

日露戦争（1904-05年）の時点で、日本は戦艦9隻、装甲巡洋艦9隻、防護巡洋艦17隻を所有していた。全部で35隻の艦船である。アームストロング社は、

戦艦9隻のうちの3隻を、装甲巡洋艦9隻のうちの4隻を、防護巡洋艦17隻のうちの4隻をそれぞれ建造している。アームストロング社は、これらの艦船の建造に加えて、英国内の別の造船所で建造されたほかの戦艦や巡洋艦の装甲も手がけていた。

日本むけの船舶の建造にかかわった英国の造船所には、ほかにもクライド河畔にあるクライドバンクのジョン・ブラウン社、ロンドンのテムズ製鉄所、バロー・イン・ファーニスのヴィッカーズ兄弟社などがあるということも、述べておくべきであろう。R. H. ブラントンも、使節団一行が「クライド河畔の大きな造船所をいくつも訪問した」と報告している。

表3 帝国日本海軍：戦艦（1905年現在）

艦名	年	建造所	場所	川
鎮遠	1882	ヴァルカン工場	ステチン	オウダー川
(もと中国船)				
八島	1896	アームストロング・ミッチェル社	エルシク	タイン川
富士	1896	テムズ製鉄所	ブラクウォール	テムズ川
敷島	1898	テムズ製鉄所	ブラクウォール	テムズ川
朝日	1899	ジョン・ブラウン社	クライドバンク	クライド川
初瀬	1899	アームストロング・ミッチェル社	エルシク	タイン川
三笠	1900	ヴィッカーズ兄弟社	バロー・イン	ファーニス川
香取	1904-06	アームストロング・ホイットワース社	エルシク	タイン川
鹿島	1905	ヴィッカーズ兄弟社	バロー・イン	ファーニス川

注：中国の戦艦「鎮遠（Chin-Yen）」は1895年2月12日威海衛（Wei-Hai-Wei）で引き渡され、その後は日本帝国海軍に譲渡され「鎮遠（Chin'en）」となった。

典拠：H. Jentschura, D. Jung, P. Michel, Warships of the Imperial Japanese Navy 1869-1945（ドイツ語版から A. Peston, J. D. Brownによる翻訳）、London, 1977, から引用した資料。

表4 帝国日本海軍：装甲巡洋艦

艦名	年	建造所	場所	川
千代田	1888-90	ジョン・ブラウン社	クライドバンク	クライド川
浅間	1896-99	アームストロング・ホイットワース社	エルシク	タイン川
常盤	1898	アームストロング・ホイットワース社	エルシク	タイン川
吾妻	1898-99	ロアール造船場協会	セント・ナゼール	
出雲	1898-1901	アームストロング・ホイットワース社	エルシク	タイン川
磐手	1899-1901	アームストロング・ホイットワース社	エルシク	タイン川
日清	1902-04	G. アンサルド社	サストリ・ポウネンテイ	ジェノア川 (もとイタリア船)
春日	1902-04	G. アンサルド社	サストリ・ポウネンテイ	ジェノア川 (もとイタリア船)

注：「日清」と「春日」はイタリア軍により「ポカ」および「ミトラ」として建造された。その後アルゼンチンに売却され、ついで1903-4年に日本軍によって購入された。

典拠：H. Jentschura, D. Jung, P. Michel, Warships of the Imperial Japanese Navy 1869-1945 (ドイツ語版からA. Peston, J. D. Brownによる翻訳), London, 1977, から引用した資料。

表5 帝国日本海軍：防護巡洋艦（1905年現在）

艦名	年	建造所	場所	川
和泉	1881-84	アームストロング・ミッチェル社	エルシク	タイン川
浪速	1884-86	アームストロング・ミッチェル社	エルシク	タイン川
高千穂	1884-86	ロウ・ウォーカー社	エルシク	タイン川
巖島	1888-91	鉄工所・造船場協会	フランス(エイミール・バルタン)	
松島	1888-91	ラ・セイン	フランス(エイミール・バルタン)	
橋立	1888-94	横須賀海軍工廠	日本	

秋津洲	1890-94	横須賀海軍工廠	日本
吉野	1892-93	アームストロング・ミッチェル社	エルシク タイン川
須磨	1892-94	横須賀海軍工廠	日本
明石	1894-99	横須賀海軍工廠	日本
千歳	1896-98	ユニオン鉄工所	サンフランシスコ
笠置	1896-98	ウィリアム・クランプ社	フィラデルフィア
高砂	1896-98	アームストロング・ミッチェル社	エルシク タイン川
対馬	1901-04	呉工海軍廠	日本
新高	1902-04	横須賀海軍工廠	日本
音羽	1903-04	横須賀海軍工廠	日本

典拠：H. Jentschura, D. Jung, P. Michel, Warships of the Imperial Japanese Navy 1869-1945 (ドイツ語版からA. Peston, J. D. Brown による翻訳), London, 1977, から引用した資料。

英国の造船所は日本の戦艦全隻（もと中国船籍でありシュテティンで建造された1隻は除く）と装甲巡洋艦全隻（イタリア製で既製品として購入された2隻は除く）を建造したということも、特筆すべきであろう。

日本人自身はどうかというと、軍艦の建造者として懸命に修得した技術を、戦艦や装甲巡洋艦よりも容積トン数の小さな防護巡洋艦の方から、活用しはじめた。海外で勉強しただけでなく英国の造船所でも働いたことのある、日本の軍艦造船技師と軍艦設計技師がこの分野の先駆者であり、先進的な技術を日本に持ち帰ったのである。1880年代後半までに、横須賀工場にはこの任務を処理できるような設備が整えられた。ただし、建造第一号の艦船「橋立」（1888-94年）は完成までに6年以上も要した。「秋津洲」「須磨」「明石」は1900年以前に横須賀工場で建造されていたが、「新高」と「音羽」は1904年になって完成した。1904年までに日本が所有していた防護巡洋艦18隻のうち、三分の一はこの横須賀工場で建造されている。呉工場もこの任務のための設備がなされており、「対馬」が1904年にここで完成している。これらの艦船に必要な資材

は大半が輸入されていた。もちろん英国からである。

1900年までに、日本人は自国の防護巡洋艦を自力で建造していたにとどまらず、英国以外の造船所へも発注していた。何年も前（1868年以前）に横須賀で働いたことのあるフランス人船舶設計士エミール・ベルタンは、「巖島」と「松島」を建造する設計および監督責任者であり、両艦は1891年にフランスで完成されたのである。さらに、1898年には、アメリカ合衆国の二つの造船所、すなわちサンフランシスコのユニオン鉄工所とフィラデルフィアのウィリアム・クランプ社が「千歳」と「笠置」をそれぞれ完成させていたのである。

日本帝国海軍の異常なほどの増強により、日本は財源を逼迫させるほど多額の投資をすることに巻きこまれたのだが、そうした増強を進めたのは多数の優先事項があったからである。日本はしきりに英国海軍と張りあおうとしていたし、また日本帝国海軍を駆使して東アジアで日本の国力を示そうとしたのだった。英国海軍は、とくに1902年の日英同盟の締結後には、日本の海軍力のこのような増強に水を差すようなことはしなかった。日本の船舶にシナ海で活動させておく方が有益であった面もいくつかあったのである。したがって、日露戦争前に日本が海軍艦船に多額の投資をしていたのも熟慮のうえのことであった。英国はむしろこうした増強を支援し、そうすることで英国の造船業が繁栄を極め、利益をえたのである。

小銃

ある分野、つまり小銃製造の分野においては、英国人は競いあう力がなかった。アメリカは、南北戦争（1861-64年）によって、両陣営とも携帯銃の性能を改良する必要性に迫られていた。岩倉使節団はスプリングフィールド銃工場を1872年6月20日に訪問していた⁽¹⁹⁾。南北戦争で北軍を勝利に導いたのは、そのスプリングフィールド製のライフル銃であったかもしれない。英国で、使節団はバーミンガムの「小銃工場」を訪問したことになるが、たぶんバーミンガム小銃工場（BSA）のことであろうと思われる⁽²⁰⁾。

使節団がティン河畔のアームストロング社の工場を訪問中に、リチャード・

ブラントンが、「銃身が十本あり、一分間に 250発を発射する」ガトリング銃に言及したということは、特筆すべきことである。しかし、リチャード・ジョーダン・ガトリング（1818-1903年）はノース・カロライナの出身であり、かれの銃は、アメリカ南北戦争の結果を左右するには遅すぎたけれども、1870年以降に認可を受けてタインサイドで製造されていたのである。

武器製造を刷新させた大人物は、メイン州出身のアメリカ人ヒラム・マクシム（1840-1916年）であった。マクシムの銃は「あたらしい薬莢を銃身のなかに入れ、順にこの薬莢を爆発させるのに」⁽²¹⁾ 武器のはねかえりを利用したものである。これが兵器を革新させた機関銃であった。マクシムは自分からヴィッカズ社に話を持ちかけて、彼の会社は1897年にヴィッカーズ社（バロウ・イン・ファーネスにあった）に買収された。ヒラム・マクシムは英国市民となり、1901年にはナイト爵に叙せられている。

使節団は使命を果たしたか？

岩倉使節団一行は、他にも関心をよせることがあったかもしれないが、英国の産業力を間近かに見てそれに深く影響を受けたということ、これまで述べてきたつもりである。また、英国はある意味で自国の工業を進展させることを決断していた日本にとっては、模範とすべき国と見なされた、という風にもいうことができるであろう。ヘンリー・ダイアーは東京での貴重な十年間の任務を終えて、1880年代はじめにはグラスゴウに戻っていたが、ほかの人たちと同じように、日本を「東洋の英国」と呼んだのであった⁽²²⁾。

広い意味でいうと、産業面では、1870年代後半から第一次世界大戦までの時代は、英国にとって優位が終わった時代だと確信をもっていわれてきた。このころは、ドイツおよびアメリカが英国と競合して成功を収めたのである。

鉄道、船舶、銃への需要が日本からたえまなくあったのは、岩倉使節団一行が1872年に英国製造業に好印象を受けたことと関係していたかもしれないが、この需要は英国製造業が凋落する速度を遅らせたのだろうか？ なるほど、1890年代には日本向けに「富士」と「敷島」を建造したこともあるテムズ製鉄所

(ブラックウォールにある)が、1912年に閉鎖され廃業に追いやられたのは、テムズ河畔への工場集中のせいだけでなく、高い賃金、高い賃貸料、高い税率が原因であったことは確かである⁽²³⁾。

英国の凋落は強調しすぎることはないよう留意すべきであろう。指導性を発揮した面がまだたくさんあったからである。グラスゴウ大学のバーおよびストラウド両教授⁽²⁴⁾は海軍省コンペを制し、英国海軍の艦船用の距離測定器を製作したのだった。日本帝国海軍の軍艦には、この測定器が日露戦争前に装備されていた。この新技術は日本が1905年5月の対馬の戦闘に勝利するのに役立ち、この戦闘によって戦争は日本にとって有利な終結をむかえたのである。

東京の靖国神社の裏にたっている日露戦争の記念碑は、一連の(浅浮き彫りの)レリーフで引き立っている。ここには海軍のとった軍事行動の様子が描かれている。その中でも、大砲が標的(この場合はロシア戦艦である)を探索するのを可能にした、例の距離測定器を装備した日本の戦艦がきわだっている。

対馬海戦の勝者・東郷平八郎大將は1911年7月13日グラスゴウを訪れて、バー・ストラウド社の労働者に感謝し、「対馬の戦闘で私を勝利に導いてくれたのはあなた方であります」と述べたのだった。これより30年以上も前の岩倉使節団一行なら、東郷の気持ちをよく理解し賛意を表したことであろう。

[注]

- (1) D. W. Anthony氏および G. H. Healey氏には、The Itinerary of the Iwakura Embassy in Britain. University of Sheffield, November 1996の写しを提供していただいた。
- (2) A. Ramm, Germany, A Political History (1967)参照。
- (3) 工部省の管轄下で独立の機関であった(1873年から1886年まで)東京工部大学校は、東京帝国大学工学部になった。O. Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan (1989)を参照。東京の法政大学出版局の日本語版〔杉山忠平・玉置紀夫訳『明治日本とイギリス』……訳者注〕(1996年)もある。

- (4) 筆者は1981年に長崎の三菱造船所をはじめて訪問したが、その後、その跡地内にあった古いレンガ造りの機関庫の一つに立派な博物館が設立された。1997年には、そこにパーソンズ社の最初の船舶蒸気タービン機関が最上段に設けられている。日本人がタインサイドのパーソンズ社から許可を受けて自力で製造したものである。O. Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan (1989)を参照。同書の日本語版（法政大学出版局，東京，1996）もある。
- (5) S. D. Brown and A. Hirota, The Diary of Kido Takayoshi（これ以後，Kido's Diaryと記す），第二巻（東京，1985）1871年9月20日の項，参照。興味をそそることであるが，兵部大輔の前原一誠は鉄道に対して口やかましく反対した。実は，日本の軍部は日清戦争（1894～95年）まで鉄道網の便宜性を理解することができなかった。
- (6) J. R. Kellett, The Impact of Railways on Victorian Cities (1969)を参照。
- (7) グラスゴウ大学経済社会史学科のトム・ハート(Tom Hart)に感謝する。
- (8) Kido's Diary（1872年11月9日の項）参照。10月4日，金曜日，かれらの車両はランカシャのセント・ヘレンズにあるロンドン・マンチェスター平ガラス会社の工場の側線に入れ換えられた（Anthony and Healey, p. 27参照）。
- (9) Peter J. English, British Made, Industrial Development and Related Archaeology of Japan, Rail Transportation (Aalste Waalre, Netherlands, 1982).
- (10) P. J. English, British Made..... (1982) p. 14.
- (11)（高速電車の需要にとって代わられた）これらのレールは，（もし注意深いなら）普通は東京・大阪間の木製の駅舎の屋根を支えているのがときどき見られる。
- (12) P. J. English, British Made..... (1982) p. 16.
- (13) Proceedings of the Institution of Civil Engineers, Vol. LVI

(Session 1878-79)および Vol. LXVII (1880 ?) 参照。

- (14)Y. Yamamoto, 'Inoue Masaru—Father of Japanese Railways', Ian Nish ed., Britain and Japan, Biographical Portraits, Vol. II (1997) 所収。
- (15)P. J. English, British Made.... (1982) pp.18-33参照。
- (16)Kido Diary, 1872年11月9日の項, 参照。
- (17)D. W. Anthony and G. H. Healey, The Itinerary of the Iwakura Mission, p.33.
- (18)R. H. Brunton, Building Japan, 1868-1876 (1991) p.120.
- (19)太田昭子に感謝する。
- (20)D. W. Anthony and G. H. Healey, The Itinerary of the Iwakura Mission. p.40.
- (21)J. D. Scott, Vickers, A History (1962) p.38. R. C. Trebilcock, The Vickers Brothers; Armaments and Enterprise 1854-1914 (1977)も参照のこと。
- (22)H. Dyer, Dai Nippon, the Britain of the East, A Study in National Evolution (1905).
- (23)S. Pollard and P. Robertson, The British Shipbuilding Industry 1870-1914 (1979) p.64. ヤーロー社 (1908年) とソーニークロフト社はテムズ川から移り, それぞれスコッツタウン (クライド河畔) とサザンプトンにうまく移転したということに注目すべきである。
- (24)M. S. Moss and I. Russell, Range and Vision. The First Hundred Years of Barr and Stroud (1988).

[訳者解説]

(1)

岩倉使節団が、英国を訪問したのは1872 (明治5) 年のことであった。8月17日 (旧暦7月14日) にリバプールに上陸し, 12月16日 (旧暦11月16日) にドーヴァーからフランスに向かうまでの4カ月間, 英国各地を視察した。それから

125年目にあたる1997年、英国では記念の催しがいくつか開かれた。そのうち、マンチェスター、ニューカスル・アポン・タイン、ロンドンにおける記念行事が注目される。

まず、第一の催しは、グレイター・マンチェスター日本研究センター（The Greater Manchester Centre for Japanese Studies）の主催で、1997年9月26日に開かれたフォーラムである。「大阪・マンチェスター・フォーラム」と題するこのフォーラムは、「大阪・関西とマンチェスター・北西イングランド両地域のビジネス交流を促進する」フォーラムであって、大阪・京都・神戸の商工会議所ならびに関西経済連合会から組織された78名の経済使節団もこれに参加している。マンチェスター地区にある日英共同事業（projects and enterprises）の見学に続いて、「グレイター・マンチェスターと関西地区の関係」に関するシンポジウムが開かれた。そのシンポジウムの内容は、『日本と北イングランド（Japan and North England）』と題する小冊子から知ることができる。ここでは、当時と現在の綿織物業における日英関係の進展ぶりがたどられている。

同シンポジウムについては、日本側資料として、大阪商工会議所国際部編『欧州経済使節団報告書』（1997年11月）がまとめられている。これによると、この「大阪・マンチェスター・フォーラム」は「関西と北西イングランド間のビジネス・貿易・投資拡大を目指して」企画された。両者は、岩倉使節団が1872年に当地を訪れたという因縁だけでなく、それより前の1865年に、五代友厚（のちの大阪商工会議所初代会頭）が当地を訪れ、「木綿紡績機械を購入するとともに、英国人技師7名を日本に招き、大阪で本格的な紡績業を興した。お陰で、大阪は我が国紡績業の中心地となり、やがて機械、金融、造船、化学などの工業も発達して、日本の産業革命をリードするまでに成長した」（『欧州経済使節団報告書』、20頁）という事情にもよる。

第二の催しは、ダラム大学とノーサンブリア大学（ニューカスル）の共催で開かれたセミナーである。同セミナーの企画者であるダラム大学のジョン・ウエスト博士と慶応大学・ケンブリッジ大学の太田昭子博士、マリー・コンテ・

ヘルムの三氏が論文を発表している。125年前に、岩倉使節団がニューカスルに到着しロイヤル・ステーション・ホテルに宿泊した10月21日に、開催された。これには多数の日本人ビジネスマンが出席している。

第三に、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (London School of Economics and Political Science) にあるサントリー・トヨタ国際センター (Suntory and Toyota International Centres for Economics and Related Disciplines) では、12月6日にシンポジウムが開催された。この日は「岩倉大使一行がヴィクトリア女王の謁見をうけた記念の日」ということで設定された、とシンポジウム議長は述べているが、女王謁見の日はその前日の12月5日 (旧暦11月6日) が正しい。

同シンポジウムには75名ほどの出席者があり、ジャパン・ソサエティや日本大使館からも参加があった。4編の研究報告がなされたことが注目される。それらは『1872年英国の岩倉使節団 (The Iwakura Mission in Britain, 1872)』と題する小冊子にまとめられ、翌1998年3月、サントリー・トヨタ国際センターの国際研究叢書のひとつとして公にされた。

この小冊子に収録された4編の報告論文は、以下のとおりである。このうちの第3論文が、本稿で翻訳紹介した論文である。

1. Andrew Cobbing, 'Life in Victorian London through the Eyes of Kume Kunitake, Chronicler of the Iwakura Mission'.
2. Akiko Ohta, 'The Iwakura Mission in Britain: their Observations on Education and Victorian Society'.
3. Olive Checkland, 'The Iwakura Mission: Industries and Exports'.
4. John Breen, 'Public Statements and Private Thoughts: the Iwakura Embassy in London and the Religious Question.'

岩倉遣欧米使節団の125周年を記念する催しは、ヨーロッパ大陸でも開かれている。そのひとつ、ハンガリーのブダペストでは、1997年8月に、日本研究ヨーロッパ協議会 (European Association for Japanese Studies) の会議が開かれている。その成果は、『欧米の岩倉使節団、あたらしい評価』(I. Nish

ed., The Iwakura Mission in America & Europe: A New Assessment. Richmond, Surrey; Japan Society, 1998) となって公刊された。

同書では、岩倉使節団の全体的な目標、成果、訪問国にたいする影響について、検討されている。具体的には、編者による序論に続いて、訪問国（アメリカ、英国、フランス、ベルギー、ドイツ、ロシア、スウェーデン、イタリア）ごとに考察した論文と、使節団の日本への影響、使節団の記録者である久米邦武の評価に関する論文から、成っている。

(2)

本稿で紹介したチェックランド論文は、前述のように、1997年12月6日に、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのサントリー・トヨタ国際センターで開かれた、岩倉使節団訪英 125周年記念シンポジウムにおいて報告された論文である。『1872年英国の岩倉使節団』と題する小冊子に収録されている。

本論文では、岩倉使節団の英国訪問のなかでも、とくに産業技術面の視察旅行をめぐってとりあげられている。『岩倉使節団、各種産業と輸出品』という原題が示しているように、使節団一行が「英国の産業力を間近に見てそれに深く影響を受けた」ことをめぐる考察が、主題になっている。

主要な内容と特徴をまとめてみると、以下の諸点が重要であろう。

第一は、英国の産業のなかでも、とくに鉄道、船舶、銃器を製造した産業現場の視察とその成果について、とりあげられている。

まず、鉄道については、①英国での移動に鉄道網を活用したことが大きな宣伝効果をもたらしたこと、②いくつかの蒸気機関車製造場、機関車修理工場、鉄道ターミナルを訪問し、効率的な鉄道システムの確立に必要な最高級の鉄道機関車だけでなく、機関車が走る鉄鋼レールも日本に輸出されることになったことで、英国内の関連産業に輸出景気をもたらされたこと、が指摘されている。また、③英国人の鉄道技術者も来日し、彼らは「日本の鉄道の建設だけでなくその効率的な運行に対しても」貢献したこと、④「英国の蒸気鉄道工学は、岩倉使節団の訪問から数年のうちに日本市場を支配し」たが、やがて電気鉄道が普及するようになる19世紀末には、ドイツとアメリカ合衆国が日本市場に参入

して優勢をしめるようになったこと、などについても論及されている。

船舶についても事情は同じであって、①使節団はニューカスル・アポン・タインやグラスゴウの造船所をいくつも訪問したこと、②それらの造船所で建造された戦艦、装甲巡洋艦、防護巡洋艦が帝国日本海軍によって購入されたし、艦船に必要な資材も大半が英国から輸入されたこと、一方、③日本人が英国留学と英国の造船所で技師として働くことをとおしても、先進的な技術が日本に持ち帰られ、「1880年代後半までに」は横須賀工廠や呉工廠で自前で艦船を建造することができるようになったこと、また、④英国の造船業は日本海軍の艦船の増強を支援することで繁栄を極めたこと、などが論じられている。

小銃製造については、短文ながら、英国はアメリカの後塵を拝していたが、それでも訪英中に岩倉使節団一行はバーミンガムの小銃工場を訪れたこと、しかも、アームストロング社を訪問中に銃の製造に関心を向けたことが、注目されている。

第二に、産業現場を視察したことの成果については、「英国の産業が日本市場への支配力を強めたこと」、および「日本国民が自国を工業化する決意を一段と固めたこと」を指摘した。しかも、とくに「鉄道、船舶、銃器への需要が日本からたえまなくあったのは、岩倉使節団一行が1872年に英国製造業に好印象を受けたことと関係していたかもしれない」こと、「英国はある意味で自国の工業を進展させることを決断していた日本にとっては、模範とすべき国と見なされた」ということも、指摘している。

以上の諸点は当然考えられる指摘ではあるが、かならずしも説得的ではない。日本からの需要ならびに日本市場における英国の支配力については、5つの表を添えるなどして説明されているけれども、たとえば、「好印象を受けた」こと、ならびに「模範とすべき国」と見なしたことを裏づけるに足る材料は、十分に用意されているわけではない。論証が不十分なのである。

本稿の著者チェックランドは、すでにBritain's Encounter with Meiji Japan, 1868-1912 (Macmillan, 1989. 杉山忠平・玉置紀夫訳『明治日本とイギリス』法政大学出版局, 1996) と題する日英交流史研究において、岩倉使節団に

一章をあて、その使命、視察の行程と内容、評価などについて論じている。当時の英国は各国からおおくの訪問者を受け入れており、「彼らは目の前に示される産業上の驚異に舌を巻いていた。しかし岩倉使節団ほど、イギリス産業の力を包括的に秩序立てて視察する機会を与えられた人々はいなかったと言ってよい」（上掲訳書、141頁）と、興味ある指摘をしている。本稿でとりあげた論文でも、丁重なもてなしを受けながら「包括的で秩序立った（comprehensive and well-ordered）」産業視察旅行が続けられたことを描いているが、本論文では「製鉄や鉄鋼関係の産業」の視察にかぎって個別的・具体的な説明をしていることが特徴である。それだけに、一段と生彩のあるものになっている。

なお、翻訳にあたっては、宮田学先生（名古屋市立大）のご教示をえた。故田中祐司君（学部指導生）の協力をうることもできた。記して多謝する。

著者：Olive Checkland（元グラスゴウ大学名誉フェロウ）

出典：'The Iwakura Mission, industries and exports', The Iwakura Mission in Britain, 1872（The Sutory Centre, Suntory and Toyota International Centres for Economics and Related Disciplines, London School of Economics and Political Science. Discussion Paper No. IS/98/349, March 1998）pp. 37-51.

第4章 学術文献の輸入・紹介

第1節 東京大学所蔵「ヘンリー・ダイアー関係図書」

1. 褒賞制度

ヘンリー・ダイアー (Henry Dyer, 1848-1918) といつて、明治はじめに英国から招かれたお雇い外国人がいる。工学寮ならびに工部大学校という官立専門学校の都検 (教頭) として、また土木・機械工学教授として、明治6年 (1873) から15年 (1882) まで在任し、工学専門教育の組織化を指導した。日本の工学教育制度の基礎を築いた人として知られている。

ダイアーはお雇い外国人としての契約を解除されてからも、日本と緊密な関係を保ちつづけ、日英の交流を促進した点でも注目される。故郷のグラスゴウに帰ってからは、日本研究を推しすすめ、その成果を『大日本、東洋の英国』や『世界政治のなかの日本』などという大著⁽¹⁾にまとめて世に問うた。明治35 (1902) 年には日本政府の帝国財政及工業通信員に任ぜられたし、グラスゴウに留学してきた日本人学生の生活と教育を支援してもいる。外遊の機会に立ち寄った教え子には、指導と激励をなすこともあった⁽²⁾。

東京帝国大学名誉教授の称号を受けたり、勲三等旭日中綬賞、さらには勲二等瑞宝賞が授与されたのも、そうした功勞による。叙勲調書には、工部大学校の創業にあたり、「先ツ学課並諸規則ヲ選定シ而シテ又校舎ノ構造教場ノ位置等ヲ計画シ及ヒ工学ニ関スル一切ノ器械書籍等ヲ装置スルノ準備」をなしたとある。また、帰国後は「本邦ヨリ英国ニ渡航スル諸学校教授文部省留学生等ニシテ同国ニ滞在中同人ノ為メ種々盡力ヲ受クルモノ少ナカラス殊ニ日露戦役中ハ終始克ク帝国政府ニ対シ好意ヲ表シ絶ヘス有益ナル諸報告ヲ為シ大ニ利益ヲ与フル」と記されてもいる⁽³⁾。

ダイアーが指導した工学寮ならびに工部大学校は、工業技術の実務的な人材

養成のための専門教育機関であり、いくつかの変遷を経て現在の東京大学大学院工学研究科に至っている。それだけに、同大学にはダイアーにかかわる種々の資料や事物が残されている。図書、申報という年間授業報告、胸像⁽⁴⁾などである。

そのうち、図書は総合図書館ならびに大学院工学研究科の図書室に保存されている。なかでも、成績優秀者に賞品として授与された図書でダイアーの署名が入った図書、ならびにダイアーの日本再訪をめざした歓迎費と記念事業資金をもとにして購入された図서가、とくに注目される。本稿でいう「ヘンリー・ダイアー関係図書」とは、この二種類の図書をさす。これらは、工部大学校という明治はじめの学校における褒賞という教育慣行を考察するうえで有益であるし、何よりも日本の工学教育の発足期におけるダイアーの指導性の証左となるからである。

2. ダイアー署名入り図書

(1)

成績の優秀者に賞品ならびに賞状を授与するという、教育慣行がある。この褒賞の慣行は、今も昔も、内外を問わずおこなわれている。

わが国の場合、賞品として、かつては懐中硯、石盤、大筆などの学用品が多かった。男子には帽子、女子にはかんざしを与えたという記録もある。金銭を授与したところもあった⁽⁵⁾。なかでも、書籍を与えるところは実に多かった。すでに江戸時代に、昌平坂学問所では「勤学の御褒美」として年末に「官版の書籍など」が下されていた。明治時代に入っても、多くの小学校では『小学修身訓』『地誌略』『習字手本』『小学問答』『小学算術』などといった書籍が与えられている⁽⁶⁾。とくに書籍が貴重であったころだけに、褒賞による勉学の奨励という効果は大きかったにちがいない⁽⁷⁾。

(2)

褒賞として贈られた書籍は、和書に限ったわけではなく、洋書も授与されている。工部大学校においても、勉学の奨励という意図から洋書が賞品として贈

呈されていた。

同校では、しっかりした褒賞規定があって、明治10（1877）年3月の『学課並諸規則』の場合には、夏季に、学級のなかで俊秀な生徒3名を選び、一等には10円、二等には8円、三等には7円に相当する書籍か器具が、それぞれ賞品として授与される。また、全生徒のなかから「予科諸学ノ試問ヲ受ケ毫モ失誤ナキ者」2名に対し、特賞として30円および20円相当の賞品を贈る、という制度であった⁽⁸⁾。

明治18（1885）年4月に改正された規定では、毎年冬期の終わりに、予科と専門科の各学級から優秀生を数名えらんで、「書籍或ハ器具ノ賞品ヲ與フ」ことになっていたし、予科2年生のなかから最優秀者2名に「特別ノ賞品」が授与されていた⁽⁹⁾。

これらの規定にもとづいた褒賞の記録は、『工部省年報』に具体的に収められている⁽¹⁰⁾。たとえば、『工部省第三回年報』には、「明治十年冬期試験生徒賞典」と題して、「普通学科優等賞」ならびに学科ごとの賞典記録がある。前者は優等賞として二名の学生に「チャンブル氏インサイクロペジヤ」がそれぞれ授与された、という記録である。後者は、学科別・学年ごとの第一等から第三等までの記録であって、のべ70名の学生に種々の賞品が授与されている。

『工部省第四回年報』の場合には、「明治十一年ヨリ十二年ニ至ル冬期試験賞典」の記録である。まず、「予科学優等特別賞典」の項は、下記のように記されている。

「第一	一チャンブル氏、エンサイクロペジヤ十冊	田邊朔郎
第二	一チェンバー氏、エンサイクロペジヤ十冊	宇治橋嘉一
第三	一ランキン氏、土木学壺部 一同氏応用重学壺部	水上彦太郎
	一同氏蒸気機関論壺部 一同氏工学法式并諸表壺部	
	一スマイルス自助論壺部 一同氏品行論壺部	
	但シ例年貳名ノ処今年ハ点数ノ差太タ少ナ	
	ルヲ以テ三名トス	」

ついで、学科別・学年ごとの賞典の部では、第一等から第三等までのべ70名

の学生が褒賞されている。

そのさい、賞品は図書（洋書）がほとんどであるが、とくに図学科の場合は、「器具」もあわせて授与されたことが特筆される。製図器械、図引器械、スタンレー製小形図学器械、彩色器械、絵具、象牙尺度などと記された教具である。ちなみに、第三回年報にある、図学科一年生の賞典記録を示すとつぎのとおりである。

「第一等	一ジョンソン氏プラクチカル、ツレートメント	宇治橋嘉一
	一製図器械一箱	
第二等	一ウイントル氏ゼラメトリカル、ドローイング	水上彦太郎
	一インチニールン、ドローイング	一製図器械一箱
第三等	一グブイツトソン氏遠景画術書	田邊朔郎
	一マキストン氏工学上図学書	
	一タレン氏平面幾何図学書	一製図小器械一箱

褒賞の規定があり、実際に賞品が授与されたという記録があるなら、つぎに考察すべき課題は、授与された図書を具体的に確定し検討することである。

東京大学総合図書館にはこうした賞品として授与された図書が所蔵されており⁽¹¹⁾、褒賞の具体的な内容と方式について知ることができる。たとえば、下記の三書がそれであって、各書の表紙裏の板紙にその旨を示す賞状が貼付されているから、それとわかる。賞状の大きさはまちまちである（図1の賞状は縦172ミリ、横110ミリ）が、いずれも、工部大学校の校章の下に、趣旨、受賞者、授与者が英文で記されている。この授与者欄に、ダイアーの署名が入っているのである。ただし、賞状の形式は一様ではない。工部大学校の存続期間中、褒賞の字句および形式に若干の変容がみられるから、具体的に取りあげてみる必要がある。

①W. J. M. Rankine, A Manual of the Steam Engine and Other Prime Movers. Charles Griffin and Company, London, 1874, 7th ed..

②W. J. M. Rankine, A Manual of Machinery and Millwork. Charles

Griffin and Company, London, 1873, 2nd ed..

③J. Perry, An Elementary Treatise on Steam. Macmillan and Co.,
London, 1874. ⁽¹²⁾

まず、第一書と第二書に貼られた賞状は下記のような文面である（図1参照）。「1876年3月におこなわれた普通・専門課程の予科試験で、安永義章にこの一等賞を授与する」というのである。安永義章は機械科の一等賞として受賞したのだが、この両書は機械科だけでなく、他の学科でも第一等賞および第二等賞の賞品として贈呈されており、『工部省第三回年報』のなかの賞典の記録には、それぞれ「ランキン氏蒸気機関論」、「ランキン氏マシネリー、エンド、ミルウオルク」と記されている⁽¹³⁾。ちなみに、著者のランキン（W. J. M. Rankine, 1820-1872）とはグラスゴウ大学教授で、ダイアーの指導教授でもあった人である。

「 Imperial College of Engineering,
Tokai,
At the pass examination in the General
and Scientific Course held in March 1876
the First Prize was awarded to
Yasunaga Yoshiaki
Henry Dyer Principal.」

それが、第三書になると、賞状の文面は下記のように変わっている（図2参照）。「1877年度末」、すなわち1878（明治11）年5月におこなわれた試験において、「機械工学クラス二等賞の安永義章に本書が授与された」というのである。『工部省第三回年報』によると、同書は「明治十年冬期試験」の賞品であり、安永はその第4学年機械学科41名のなかの第二等を占めたので、表記のような「ペリ氏スチーム」をはじめ8冊の洋書をたしかに贈られている⁽¹⁴⁾。ちなみに、同書の著者ペリー（John Perry, 1850-1920）とは工部大学校の「土木学並機械学」教授である。

「At the examination of Students held at

the close of Session 1877-8 this book
was awarded to

Yasunaga Yoshiaki

being the Second Prize in the
Class of Mechanical Engineering]

Henry Dyer Principal.」

受賞者の安永義章（1855-1918）は、工部大学校の機械科に学び、明治13（1880）年5月に卒業した学生である。八幡製鉄所の技師として活躍した。のちに、兵器製造を学びにドイツおよびフランスへ留学している⁽¹⁵⁾。

上掲の賞状の文面のうち下線部分がペンで書きいれられている（図1、図2参照）が、ダイアーのセルフ・ポートレート裏面にみられる署名、あるいはダイアーの書簡などに徴してみると、いずれも授与者ダイアーの直筆と思われる。署名もダイアー自身のものにちがいない⁽¹⁶⁾。

なお、工部大学校の賞品として授与された図書は、ダイアーの署名入り図書だけに限らない。それとは別に、「担当教師の署名入りの書籍や学用品が賞品として与えられた」ことも注目される。この種の図書として、東京大学には、
T. Alexander, Elementary Applied Mechanics. Macmillan and Co., London, 1880.

という一書が所蔵されている。ただし、同書は同大学総合図書館ではなく、大学院工学研究科社会基盤工学専攻図書室（土木工学科図書室）に所蔵されている⁽¹⁷⁾。

同書にも、前出の三書と同じように、表紙裏の板紙に賞状が確かに貼付されている。ただし、その文面も形式も前出の三書とは異なり、下記のようになっている（図3参照）。サイズも縦190ミリ、横125ミリという大きさである。

「 Imperial College of

Engineering,

Токеи,

At the examination of Students held at

the close of Session 1883-4 this book
was awarded to

Nakayama Hidesaburo

part of

being the first (devided) Prize in the

Class of Mechanics for

second year Student

Thos. Alexander C. E.

Prof.

」

1883-84 (明治16) 年度末というから、ダイアーが離日した翌年の試験において、「機械学」クラス第一等賞として、土木工学2年生の中山秀三郎 (1864-1936) に、アレキサンダー教授から贈呈されたものなのである。アレキサンダー (Thomas Alexander, 1843-1933) は明治12 (1879) 年から明治18 (1885) 年まで在任し、機械工学を担当したお雇い教師である。そのかれが、刊行されて間もない自著を賞品として贈呈したという訳である⁽¹⁸⁾。

(3)

褒賞として図書を授与するという工部大学校の教育慣行は、卒業生の遺品や関係資料をとおしても具体的に裏づけることができる。たとえば、琵琶湖の疎水工事を計画して水力発電の事業のパイオニアとして知られる田辺朔郎 (1861-1944, 明治16年土木学科卒) の場合は、在学中、毎年度受賞している。

『工部省年報』には、毎年度ではなく、第三回年報および第四回年報に1年次および2年次の受賞記録が記載されており、かれの1年次には3学科で図書12点と器具1点を、2年次には図書10点と器具1点を、それぞれ受賞している⁽¹⁹⁾。

朔郎の在学中の受賞図書のうち、遺品として残っている図書は、表1にまとめた26点 (厳密には25点) である⁽²⁰⁾。同表は田辺家資料のなかから筆者が確認しえた受賞図書の一覧であり、ここから具体的な図書名を知ることができる。

遺品として残るこれらの受賞図書をそれぞれ調査してみると、まず第一に、

表1. 田辺家資料における田辺朔郎の受賞図書一覧

年度	受賞クラス	授与者	受賞図書
1876	幾何学優等賞	R. O. R. P.	A. Smith, <u>A Boy's Ascent of Mont Blanc</u> (Ward, Lock and Tyler, London, [?])
1877	自然哲学一等賞	H. Dyer	A. F. Weinhold, <u>Introduction to Experimental Physics, Theoretical and Practical, including Directions for Constructing Physical Apparatus and for Making Experiments.</u> trans. & ed. by B. Loewy (Longmans, London, 1875)
	自然哲学一等賞	H. Dyer	J. N. Lockyer, <u>Elementary Lessons in Astronomy</u> (Macmillan, London, 1877 new ed.)
	自然哲学一等賞	H. Dyer	W. Thomson & P. G. Tait, <u>Elements of Natural Philosophy. Part I</u> (Cambridge U. P., Cambridge, 1872)
	数学一等賞	D. H. Marshall	B. Stewart, <u>The Conservation of Energy being an Elementary Treatise on Energy and its Laws</u> (Henry S. King & Co., London, 1877 4th ed.)
	数学一等賞	D. H. Marshall	D. Brewster, <u>The Life of Sir Issac Newton</u> (William Tegg, London, 1875, revised & ed.)
	数学一等賞	D. H. Marshall	B. Stewart, <u>An Elementary Treatise on Heat</u> (Clarendon Press, Oxford, 1876 3rd ed.)
	数学一等賞	D. H. Marshall	I. Todhunter, <u>A Treatise on Plane Co-ordinance Geometry as Applied to the Straight Line and the Conic Sections, with New Examples</u> (Macmillan, London, 1874 5th ed.)
1878	自然哲学二等賞	D. H. Marshall	[賞状のみ。受賞図書は不明]
	自然哲学二等賞	D. H. Marshall	J. F. W. Herschel, <u>Outlines of Astronomy</u> (Longmans, London, 1878)
	自然哲学二等賞	D. H. Marshall	P. G. Tait, <u>Sketch of Thermodynamics</u> (David Douglas, Edinburgh, 1877 2nd ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	R. A. Proctor, <u>The Sun: Ruler, Fire, Light, and Life of the Planetary System</u> (Longmans, London, 1876 3rd ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	I. Todhunter, <u>A History of the Mathematical Theories of Attraction and the Figure of the Earth, from the Time of Newton to That of Laplace. vol. I</u> (Macmillan, London, 1873)
	数学一等賞	F. Brinkley	I. Todhunter, <u>A History of the Mathematical Theories of Attraction and the Figure of the Earth, from the Time of Newton to That of Laplace. vol. II</u> (Macmillan, London, 1873)
	数学一等賞	F. Brinkley	R. A. Proctor, <u>The Moon, Her Motions, Aspect, Scenery, and Physical Condition</u> (Longmans, London, 1878 2nd ed.)
	化学二等賞	E. Divers	W. A. Miller, <u>Elements of Chemistry: Theoretical and Practical. Part I, Chemical Physics.</u> revised by H. McLeod (Longmans, London, 1877, 6th ed.)
化学二等賞	E. Divers	W. A. Miller, <u>Elements of Chemistry Theoretical and Practical., Part II, Inorganic Chemistry.</u> revised by C. E. Groves (Longmans, London, 1878, 6th ed.)	
1879	特別賞	T. Alexander	T. N. Talfourd, <u>The Works of Charles Lamb: Complete in One Volume, with A Sketch of His Life</u> (J. B. Lippincott & Co.,

	自然哲学三等賞	E. Divers	Philadelphia, 1870) J. Wolfe, <u>Railway Appliances, a Description of Details of Railway Construction Subsequent to the Completion of the Earthworks and Structures Including a Short Notice of Railway Rolling Stock, with illustrations</u> (Longmans, London, 1878 2nd ed.)
	応用工学三等賞	T. Alexander	W. J. M. Rankine, <u>A Manual of Applied Mechanics</u> , revised by E. F. Bamber (Charles Griffin and Company, London, 1877 9th ed.)
	自然哲学三等賞	D. H. Marshall	A. Guillemin, <u>The Heavens, An Illustrated Handbook of Popular Astronomy</u> , ed. by J. N. Lockyer (Richard Bentley & Son, London, 1878)
	field work三等賞	A. W. Thomson	W. J. M. Rankine, <u>Useful Rules and Tables Relating to Mensuration, Engineering, Structures, and Machines</u> , revised by E. F. Bamber (Charles Griffin & Company, London, 1876 5th ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	O. C. D. Ross, <u>Air as Fuel; or, Petroleum and Other Mineral Oils Utilized by Carburetted Air and Rendering It Inflammable</u> (E. & F. N. Spon, London, 1875 2nd ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	W. B. Scott, <u>Gems of Modern German Art, A Series of Carbon-Photographs from the Pictures of Eminent Modern Artists, with Remarks on the Works Selected, and an Essay on the Schools of Germany</u> (George Routledge and Sons, London & N. Y., 1873)
1880	基礎工学一等賞	H. Dyer	A. P. Deschanel, <u>Elementary Treatise on Natural Philosophy</u> , tran. & ed. by J. D. Everett (Blackie & Son, London, 1880 5th ed.)
	土木工学一等賞	A. W. Thompson	S. Smiles, <u>Lives of the Engineers, the Locomotives, George and Robert Stephenson</u> (John Murray, London, 1879, new & revised ed.)

いずれの図書も刊行されてまもない、いわば新刊本であったことが注目される。第二に、そのうち、ダイアーの署名入りの賞状が添付された図書は4点含まれており、また、担当教師の署名入りの図書は22点にのぼっている。担当教師とは前出の機械工学教授T. アレクサンダーのほかに、数学・自然哲学教授D. H. マーシャル (David Henry Marshall, 1848-1932), 数学教授F. ブリンクリー (Francis Brinkley, 1841-1912), 化学教授E. ダイヴァーズ (Edward Divers, 1837-1912), 土木機械学教師A. W. トムソン (A. W. Thomson, ?-?) の各氏である。そして第三に、受賞図書に添付された賞状の形式ならびに字句は、図4および図5からわかるように、上述の東京大学所蔵図書とほとんど同じである⁽²¹⁾。工部大学校において褒賞として図書を授与する方式は、先に示したような方式であったのである。

そのほか、菅原恒覧(1859-1940, 明治 年土木科卒)といて、丹那トンネルなどの鉄道建設に多大の業績を残した土木界の改革者の場合は、『自叙伝』のなかに受賞記録が明記されている。それによると、明治14年に一年生から二年生に進級するさいの試験で、英語科の一等賞として英書3冊、理学科は二等賞として英書1冊を、それぞれ贈られている。二年生の下半期には、英語科二等賞として英書3冊、化学科二等賞として英書2冊、高等数学科は二等賞として英書1冊、和漢学は特別賞として『康熙字典』一部を、それぞれ受領している。さらに、三年生から四年生に進級するとき、「地質学科にて一等賞として英書三冊、金石学科にて一等賞として英書三冊、測量科にて二等賞として英書一冊を賞賜」せられたのだった⁽²²⁾。

(4)

工部大学校において褒賞規定があることに注目して、「学生への褒賞として書籍を与えるのはスコットランド独自の教育的伝統である」と指摘するむきがある⁽²³⁾。『東京大学百年史』でも、「これは英国でもとくにスコットランドの伝統といわれ」る、と記されている⁽²⁴⁾。しかし、この記述はかならずしも正確ではないように思われる。同校ではスコットランド人教師で都検(教頭)でもあったH. ダイアーの教育構想が大幅に受け入れられたし、グラスゴウ大

学などスコットランドの高等教育機関に学んだ教師が多かったこと、そして校内では英国式の教育と生活がおこなわれていたことは確かであるけれども、当時の他の官立学校や各地にある種々の学校でも、同じような事例が認められるのである。

たとえば、駒場農学校がそうであって、試験成績の優秀者に書籍が贈られている。同校といえば、工部大学校と同じところに創置された、農学の高等専門教育機関である。アメリカ人教師の指導のもとにあったのだが、同校でも、たとえば明治11（1878）年の場合、優等第一の学生には『ウェブストル英語大辞典』かまたは『ボルン農書』が、優等第二の学生には『附音挿図英和字彙』または『タングリソン薬名辞書』が授与されていたのである⁽²⁵⁾。『附音挿図英和字彙』とは「500余の図解を本文及び巻末に添えたことで日本で最初の本格的な英和図解辞典」として知られる。「明治前期の英和辞書としては最も優れたもの」であり、明治6（1873）年に刊行された洋装本である⁽²⁶⁾。

工部大学校や駒場農学校という中央の高等専門教育学校だけに限らない。地方の、たとえば愛知県公立医学校（名古屋大学医学部の前身）でも、明治11年の規則のなかに、一期末ごとの定期試問（口述試験）の成績上位者に「金銀書籍器械等」の褒賞を与えるという規定があった⁽²⁷⁾。

同じ愛知県の洋学校（愛知県立旭丘高校の前身）になると、明治5（1872）年5月20日におこなわれた仏学クラスの成績優秀者への賞与式で、お雇いフランス人教師のP. J. ムリエ（Pierre Joseph Mourier, 1827-?）自身が、「平素格別勉強進歩之効拔群」の最優秀生に洋書一部（25円）を授与している。名古屋の物価指数でいえば、1円で米二斗九升（43.5キロ）が買えたころの話であるから、いかに高価な洋書であったかがわかる⁽²⁸⁾。度会県（現在の三重県伊勢市）にあった宮崎外国語学校という半官半民の学校でも、優等生に種々の英書、たとえばパーレー万国史、スイントン万国史、チャンブル万国史、チャンブル窮理書などを与えて勉学が奨励されたし、洋紙一折不いし半折が褒賞として与えられることがあった、という記録がある⁽²⁹⁾。なお、工部美術学校といって、工学寮および工部大学校に付設された官立美術学校の場合は、

イタリア人教師の指導下にあったのだが、ここでは「油絵具、銀時計、水画（絵）具、水画紙横文入、図引紙、図引器械、鉛筆」が、「『進歩』や『精勤』（『勉勵』）の賞品として与えられた」ことが知られている⁽³⁰⁾。

(5)

当時、書籍は高価であり、なかでも洋書を手に入れ学習に活用することは容易でなかったはずである。それだけに、舶来の書籍を褒賞として授与されるということは、たいへんな名誉であったにちがいない。

名誉の賞品であるなら大切に保存されたであろうが、その一方、代表的な洋書なら最新の知の成果が盛り込まれているはずだから、あたらしい情報を素早く食欲に汲みつくそうとした者もいたはずである。前出の東京大学所蔵図書の場合、全編にかなりの書きこみが認められ、実にたんねんな勉強ぶりがうかがわれる。

書きこみは、本文のなかや小口に、ペンおよび鉛筆でていねいに加えられている。本文の補説、間違いの修正や指摘（たとえば、「Wrong?」と書き添えられている）、参照ないし関連の頁数の記入もある。索引のなかにも、見出し項目の追記および記載頁がひとつづつていねいに書き加えられている。

前出の『ペリ氏スチーム』，すなわち J. Perry, An Elementary Treatise on Steam (1874) の場合、本文にはのべ38カ所の書きこみがあり、索引にも見出し項目と記載ページの追記が数多くなされており、実にたんねんに活用されたことがうかがわれる。ランキン著『蒸気機関論』（第7版），すなわち W. J. M. Rankine, A Manual of the Steam Engine and Other Prime Movers (1874, 7th ed.) の方は本文 575頁という大著だが、のべ38頁にわたって補説や修正、参照個所などの書きこみがみられる。そうとう長文の補説も何カ所かみられ、それも実にていねいな英文で書きこまれているのである⁽³¹⁾。

3. ダイアー博士記念図書

(1)

お雇い外国人は明治日本を建設する助っ人として招かれたが、任務を終え雇

用契約が解かれれば母国に戻るものが多く、あくまでも一時的な学術文化の伝来者であった。しかし、帰国したのち、ふたたびなつかしの日本を訪れた者も少なくない⁽³²⁾。かつて若いころ、近代化を促進する手助けにやってきた日本が、期待にこたえて文明化されつつある国に変身していく姿を見てみたいと思ったにちがいない。

ダイアーは、日本再訪を切望しながらとうとうかなえられることがなかった。明治6年(1873)6月、24歳のとき単身で来日し、翌年にはいいなずけを迎え入れて横浜で結婚。新家庭をきつき、10年近くにおよぶ滞日中に4人の子どもに恵まれた⁽³³⁾。職務の面でも、自分の思い描いた工学教育構想の実現に力を発揮し、日本が「東洋の英国」になるようおおいに尽力することができた。やがて日本がいよいよ「東洋の英国」に近づきつつあったころ、しかも、かつての教え子たちが育ってきて日本が指導的人材を自家養成できるようになったころ、かれら指導的人材のなかから、恩師ダイアーの日本再訪を実現しようという計画がもちあがったのであった。

その際、工部大学校の卒業生がおこした虎門会と、グラスゴウ留学のさいに同地に在住していたダイアーから支援と励ましを受けた諸氏が中心になって組織したグラスゴウ会の有志とが相はかって、ダイアーを日本に招くことが準備され、募金が呼びかけられたのである。

ダイアー自身も日本再訪を望んでいた。大正時代のはじめに「日本へ再遊ノ意志」があったのだけれども、折あしく第一次大戦となり、やむなく来日を見合わせていた。

「おそろしい戦争が終結するのはまだまだ近そうではなく、権勢ある人たちは長期戦になるといっています。日本訪問が延期になり、わたしはとてものがっかりしています。戦争があまり長引かず、日本を訪れることができますよう祈っています。」

大正6年(1917)11月15日付けで、教え子の田邊朔郎にあてた書簡で、ダイアーはこのように記している⁽³⁴⁾。

ダイアー歓迎事業は、実は、これより二年以上も前に計画されていた。朔郎

は、すでに大正4（1915）年2月10日付けでダイアーへあてた書簡のなかで、虎門会の会合においてダイアーの「日本訪問は戦争のため延期された」ことを伝えた模様である。ダイアーは同年の4月7日付けで田邊にあてた書簡で、そのことを明らかにしている。

「2月10日付けのお手紙をいただき、虎門会の会合のことを知りました。日本訪問が戦争のため延期されたことは、大変がっかりです。会員の皆さまのご好意に感謝し、戦争が終わってから訪問できることを大いに期待して待っていることを伝えたいと思います。しかし、戦争は長引くのではと思います。」

「戦争が長引く」のではと懸念しながらも、ダイアーは日本再訪を心待ちにしていた。それは、『大日本、東洋の英国』あるいは『世界政治のなかの日本』などにつづく、あたらしい日本研究の企画のためでもあったようで、同上の書簡でつぎのように書き送っている。

「わたしは今、極東、とりわけ日本と中国の事態の進展についておおいに関心をもって研究しています。日本に行ったら、太平洋地域の出来事の進展ぶりと、同地域と日本との関連について、もう一冊執筆するための資料をいっぱい手にしたいと思います。世界史において将来もっとも重要な出来事はこの地域でおこるであろうと確信しますので、これからおこるいろいろな進展について慎重に研究すべきなのです。」

ダイアーは掛け物についても関心をもって、「日本を訪れたら掛け物を探す」つもりだとも伝えていた⁽³⁵⁾。

ダイアーは、再来日できることを強く待ち望んでいたのだが、残念ながらついに実現をみることはなかった。大正7（1918）年の9月25日に死去してしまったのである⁽³⁶⁾。

（2）

ダイアーを招待する計画はとうとう実現しなかった。けれども、その代わり、歓迎事業は形を変えて成果を生みだした。藤金をもとにして歓迎費と記念事業資金が用意されてあったので、その残部が東京帝国大学工科大学（工部大学校

の後身)に寄付され、工学関係図書が購入されることになったのである。この事業計画は、石橋絢彦(1853-1932)が中心になってすすめられた。石橋は、後述のように、この計画の「総代」あるいは「代表者」と当時の記録に記されている。かれは工部大学校の第一期卒業生であって、灯台学を専攻し、同校の第一回派遣留学生に選ばれた11名のうちの一人であった。明治13年に英国へ赴き、灯台技師長ダグラスのもとで灯台工事や海上工事を学んでいる。横浜市内に日本最初の鉄筋コンクリート橋を建設したことで知られる⁽³⁷⁾。

ダイアー先生歓迎事業費でもって購入された図書は、洋書122冊と伝えられている。そのさい、「工学部各科に必要な図書を備へ、之に故ダイエル先生の写真及小伝を貼付し永遠に先生の我国工学及工業の開発に対する功績を記念すること」が図られた⁽³⁸⁾。大正15(1926)年の6月から9月にかけて、納入と分配、そして登録がなされている。

それでは、どのような図書が購入され寄贈されたのか。また、それらの図書に貼付された「ダイエル先生の写真及小伝」とは、具体的にどのようなものであろうか、考察すべき重要な課題となる。しかしながら、『東京帝国大学図書館寄贈図書目録』1-10(大正12年~昭和2年)に記載されるとか、類似の寄贈目録でもあれば造作はないが、依拠すべきこの種の目録はみあたらない。しかも、寄贈図書は一括して保管されているわけではなく、実は工科大学の各学科に分けられたのだった。そこで、東京大学工学部『図書受入原簿』などを手掛かりにして、大学院工学研究科(旧工学部)各学科の図書室の所蔵図書を、具体的に調べてみることにした。その結果、これこそ「ダイアー博士記念図書」だと確定できる図書に出あうことはできた。けれども、その数はそれほど多くはなく、現在のところ、20数冊を数えるにとどまっている。別掲の表2のとおりである。

ダイアー博士記念図書が贈呈されたころ、東京帝国大学工科大学は冶金学、土木学、機械工学、採鉱学、航空学、建築学の6学科から構成されていた。そのうち、まず、当時の冶金学科には、ダイアー博士記念図書として6冊配本された。いずれも1924年か25年に出た、英語およびドイツ語の新刊本である。図

表2. 東京大学における「ダイアー博士記念図書」(判明分)一覽

配本先 (所蔵先)	配本数	ダイアー博士記念図書 [請求番号・登録番号]
冶金学科 (大学院材料工学専攻 図書室)	6冊	① H. J. Gough, <u>The Fatigue of Metals</u> . Scott, Greenwood & Son, London, 1924. [z-g-02-00, T6662] ② G. H. Manlove, <u>Scrap Metals, Study of Iron and Steel Old Material, its Preparation and Markets</u> . The Penton Publishing Co., Cleveland, O., 1925, 2nd ed.. [o-m-02-01, T6664] ③ J. W. Mellor, <u>A Comprehensive Treatise on Inorganic and Theoretical Chemistry</u> . Longmans, Green and Co., London, 1925. [b-m-01-60, T6665] ④ I. P. Oberhoffer, <u>Das Technische Eisen, Konstitution und Eigenschaft</u> . Verlag von Julius Springer, Berlin, 1925. [q-o-03-01, T6666] ⑤ C. F. Wade, <u>A Manual of Fuel Economy, For Engineers and Others in Charge of Boiler and Furnace Plants</u> . Chapman & Hall, Ltd., London, 1924. [h-w-09-00, T6667]
土木学科 (大学院社会基盤工学専攻 図書室)	8冊	① C. F. Harding, <u>Electric Railway Engineering</u> . McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1926. [LM-h-09, T6169] ② E. H. Salmon, <u>Columns, A Treatise on the Strength and Design of Compression Members</u> . Henry Frowde and Hodder & Stoughton, London, ?. [AA-s-30, T6170] ③ P. Frank & R. v. Mises, <u>Die Differential-und Integralgleichungen der Mechanik und Physik</u> . Druck und Verlag von Friedr, Braunschweig, 1925. [HI-r-09, T6171] ④ T. R. Agg, <u>The Construction of Roads and Pavements</u> . McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1924, 3rd ed. [MA-a-0102, T6174] ⑤ W. Gehler, <u>Der Rahmen, Ein Hilfsbuch zur Berechnung von Rahmen aus Eisen und Eisenbeton mit Ausgeführten Beispielen</u> , Verlag von Wilhelm Ernst & Sohn, Berlin, 1925. [AE-g-13, T6175]
機械工学科 (大学院機械系3学科図 図書室)	8冊	① R. v. Mises, <u>Die Differential-und Integralgleichungen der Mechanik und Physik</u> . Druck und Verlag von Friedr. Vieweg & Sohn Akt.-Ges, Braunschweig, 1925. [Bg-12-12, T6299] ② G. A. Hool & N. C. Johnson (eds.), <u>Handbook of Building Construction, Data for Architects, Designing and Constructing Engineers, and Contractors</u> . Vol. I, McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1920. [Xi-4-11, T6301]

		<p>③ G. A. Hool & N. C. Johnson(eds.), <u>Ibid.</u>, Vol. II, McGraw-Hill Book Company, Inc, N. Y., 1920. [Xi-4-21, T6301]</p> <p>④ I. A. Gessner, <u>Mehrfach Gelagerte Abgesetzte und Gekropfte Kurbelwellen Anleitung für die Statische Berechnung Mit Durchgeführten Beispielen aus der Praxis.</u> Verlag von Julius Springer, Berlin, 1926. [He-18-11, T6302]</p>
採鉱学科 (大学院地球システム工 学科図書室)	7冊	<p>① H. F. Bulman & Sir R. A. S. Redmayne, <u>Colliery Working and Management Comprising the Duties of a Colliery Manager the Superintendence & Arrangement of Labour & Wages and the Different Systems of Working Coal Seams.</u> Crosby Lockwood and Son, London, 1925, 4th ed., Thoroughly Revised and Much Enlarged. [9-7-4, T6391]</p> <p>② A. B. Thompson, <u>Oil-Field Exploration and Development, A Practical Guide for Oil-Field Prospectors and Operators, With Which Is Incorporated a Discussion of the Origin and Distribution of Petroleum, and Notes on Oil-Field Legislation and Customs, Vol. I, Oil-field Principles.</u> Crosby Lockwood and Son, London, 1925. [T7135]</p> <p>③ A. B. Thompson, <u>Ibid.</u>, Vol. II, Oil-field Practice. Crosby Lockwood and Son, London, 1925. [4-75-2, T6390]</p> <p>④ R. H. Richards & C. E. Locke, <u>A Text Book of Ore Dressing.</u> McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1925 (2nd ed. Completely Revised and Rewritten. [12-65, T6392]</p> <p>⑤ J. Joly, <u>The Surface-History of the Earth.</u> Clarendon Press, Oxford, 1925. [2-163, T6393]</p> <p>⑥ R. W. Phelps & F. W. Lake, <u>Petroleum Engineering.</u> Gulf Publishing Company, Houston, Texas, 1924. [4-76, T6394]</p> <p>⑦ R. H. Rastall, <u>The Geology of the Metalliferous Deposits.</u> Cambridge U. P., Cambridge, 1923. [3-97-2, T6395]</p>
航空学科 (大学院航空宇宙学科図 図書室)	32冊	<p>① J. Pryde (ed.), <u>Mathematical Tables Consisting of Logarithms of Numbers 1 to 108000 Trigonometrical, Nautical and Other Tables.</u> W. & R. Chambers, London, 1872, new ed. [91-C7(1), 6486]</p>
建築学科	なし	

書原簿⁽³⁹⁾には

「左記六種六冊価格金百〇壱円七拾錢也故ヘンリー，ダイエル氏記念図書トシテ元工部大学校卒業生並ニグラスゴー会ノ有志総代工学博士石橋絢彦氏ヨリ大正十五年六月十六日附ニテ当教室用トシテ寄附セラル。」

とあるが，6冊のうちの1冊は行方がわかっていない。現在の大学院材料工学専攻（旧冶金学科）図書室には，「ダイアー博士記念図書引」という張り紙があるのは，H. J. Gough, The Fatigue of Metals (Scott, Greenwood & Son, London, 1924)をはじめ，5冊を確認できる。「ダイエル先生の写真及小伝」というのは，この張り紙のことを指す。

土木学科（現在の大学院社会基盤工学専攻）の場合は，8冊贈呈された。大正15（1926）年8月に「ダイエル博士記念図書工学部事務室ヨリ分配」され，9月16日付けで登録されている。購入価格は合計85,800円であった⁽⁴⁰⁾。ただし，「ダイアー博士記念図書引」が貼付されている図書は，8冊中，6冊しか確認できない。

機械工学科の図書室になると，「ヘンリー・ダイエル博士寄贈記念図書」として8種類9冊が備えつけられ，大正15年7月29日付けで登録されている⁽⁴¹⁾。現在の機械系3学科図書室で確認できるのは，そのうち8冊である。G. A. Hool & N. C. Johnson, Handbook of Building Construction, Data for Architects, Designing and Constructing Engineers, and Contractors (McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1920) という二巻本も含まれている。

採鉱学科の場合は6種7冊が分配され，現在も大学院地球システム工学科図書室にすべて保存されている。H. F. Bulman & Sir R. A. S. Redmayne, Colliery Working and Management Comprising the Duties of a Colliery Manager the Superintendence & Arrangement of Labour & Wages and the Different Systems of Working Coal Seams (Crosby Lockwood and Son, London, 1925, 4th ed. Thoroughly Revised and Much Enlarged) という，何度も版を重ねている図書も含まれている。同室の『図書原簿』には，「寄贈，ダイエル博士記念，代表者石橋絢彦」と記されており，ダイエル博士記念図書

贈呈事業は、石橋絢彦が中心であったことがわかる。各冊の価格が記入されているので計算してみると、合計 138ポンド80ペンスとなる⁽⁴²⁾。

航空学科（現在の大学院航空宇宙学専攻）はどうかというと、工学部の大正15年度『図書受入原簿』からすると、4種類32冊も分配されたと推定される⁽⁴³⁾。けれども、「ダイアー博士記念図書引」が貼られた図書となると、目下のところ、1冊を確認するにとどまっている。

建築学科の場合は、該当の図書はみあたらない⁽⁴⁴⁾。目下のところ、確認するに至っていない。

(3)

ダイアーを記念した寄贈図書は、「ダイエル博士記念図書引」という見出しの貼り紙（図6参照）があるから、それとわかる。いずれの図書についても、おもて表紙の裏側の見返しに貼られている。引とは、はしがき（序）の意味である。

「此書ハ元工部大学校卒業生並ニグラスゴー会ノ有志相謀リ元工部大学校都検ヘンリー・ダイエル博士ノ記念トシテ大学ヘ献ジタルモノニシテ後進勸学ノ一助トナラバ博士並ニ有志ノ満足スル所ナリ」

と始まり、ダイアーの略歴を記したあと、とりわけ日本での工学人材の育成における貢献と、帰国後における日英交流への寄与とについて、称えている。具体的に紹介すると、大略、つぎのとおりである。

ダイアーは、1848年8月16日、スコットランドのボスウエルに生まれた。グラスゴウ大学に修学し、成績優等により「ウイツトウオルス受賞生」に選ばれるなど、顕著な名声を残している。明治4（1871）年、工部省に工学寮（のちに工部大学校と改称）が置かれ、6年から授業が開講される時、「大学ノ都検」として招聘され、数名の教師とともに来日した。

明治11（1878）年に明治天皇が同校に臨まれたさいには、上奏するという榮譽をになっている。そのさい、「本校設立ノ目的ハ貴国無限ノ物産ニ拠テ公衆ノ便益ヲ起スベキ工師ヲ教育スルニ在リ」と述べた。「人民ノ進歩ヲ助クル無数ノ機械器具アリ諸般物品製造ノ技術アリ加之後來公私ノ工事ヲ管理シ又後進

ノ先導トナリ貴国歴史ニ新彩ヲ添フル人傑ノ輩出スルニ及ンデ或ハ我等ノ致ス所ノ功績ナリト言ハルルヲ得バ外臣等ノ幸ナリ」，とも評している。明治15（1882）年5月には，技術者養成の功により，明治政府から勲三等に叙せられ旭日中綬章が授与された。任期が満了になると，都検職をE. ダイバーズに譲って帰国した。

工部大学校は明治19（1886）年に帝国大学に移管されるが，この時までの入学者は493名で，そのうち退学者は111名，死亡8名，卒業生206名，修業生5名を数えた。これは帝国大学理学部の卒業生90名の2倍余にのぼっている。

ダイアーは帰国後も工学教育の振興等に尽力し，グラスゴウ大学から名誉法学博士の学位を贈られた。また，『大日本，東洋の英国』などの著述をなしたり，「在留邦人ヲ扶掖スルコト甚ダ」しかった，ということが特筆される。

ダイアーの日本と英国での貢献を以上のように称えたあと，図書の寄贈に至る経緯と事情についても，つぎのように述べられている。ダイアー自身，大正時代の初年に「日本へ再遊ノ意志」があっただけに，虎門会とグラスゴウ会が合同してダイアーを歓迎しようということになったが，第一次世界大戦のぼっ発とダイアーの死去とにより，とうとう計画は実現をみることはなかった。

そこで，有志はダイアー夫人の意向に沿うて，図書を寄贈することになった。歓迎費ならびに記念資金でもって「工科ニ必要ナル図書」を購入し，これを大学に贈って「工学啓発ノ資」に供するとともに，あわせて「日本ニ於ケル工学ノ開祖トシテ先生ノ偉績ヲ永ク後生ニ伝エン」とした，というのである。ダイアーの歓迎計画が転じて購入されたこれらの記念図書を通じて，今もなお，その遺徳を偲ぶことができる。

なお，この記念図書の贈呈という事業は，既述したように，恩師ダイアーを慕う虎門会とグラスゴウ会の有志が企画したものであるが，虎門会の面々は，これより前にも，ダイアーへの謝意を表する贈り物をしている。アルバムを二冊作成し，これを豪華な漆箱に入れ，ロンドンの駐英日本大使を通じて贈呈したのである。アルバムには自分たちの写真，とりわけ日本産業界の指導者たちの人物写真が含まれていた。かれらはダイアー先生の薫陶をうけたおかげで今

日あることを報告し、心からの謝意を表しようとしたのであった。このアルバム贈呈の趣旨は、「恩師だいえる博士へ記念品進呈ノ件ニ付稟告（第三回虎ノ門会ニ於テ発起）」と題する、明治40（1907）年4月付けで発せられた呼びかけ文⁽⁴⁵⁾に詳しい。その本文は、つぎのように記されている。

「へんりー、だいえる博士ハ旧工部大学校都検ノ職ニ在ルコト十有余年終始一貫能ク其任務ヲ尽クサレタリ当時我國ノ工業極メテ幼稚ニシテ所謂手工ノ時代ニ属シ欧米人ヨリ之ヲ視レバ殆ンド工業ナカリシナラン隨テ吾人工学生タル者数理、理化学ノ觀念ニ乏シク今ヨリ当時ヲ追想スレバ吾人ヲ教授スルノ労苦ハ或ハ小学兒童ヲ教育スルニ均シカリシヤモ知ルベカラズ然ルニだいえる師ハ能ク堪ヘ能ク忍ビ悠々迫ラズ慈父ノ愛ヲ以テ吾人ヲ誘掖薰陶シ一毫モ倦厭ノ色アルヲ見ズ吾人其温容ニ接スルヤ恰モ温室ニ入ルノ感アリシハ吾人ノ尚ホ記憶スル所ナリ今ヤ我国ノ工業駸々トシテ進ミ駟モ尚ホ及バザルノ隆運ニ達シタルニ對シテハ吾人亦全ク功ナキニ非ズト信ズ而シテ其本源ニ溯レバ之ヲだいえる師ニ帰スベキヤ論ヲ待タズ今日師弟ノ情誼殆ンド廢滅ニ帰シ師ハ学ヲ売リ弟ハ之ヲ買フ者ノ如シ而モ師弟ノ情誼ハ決シテ廢滅スベキニアラズ是ニ於テ同志相謀リあるばむヲ特製シ吾人ノ肖像ヲ挿入シ之ヲ恩師ニ進呈シテ聊カ誠意ヲ表セント欲ス冀クハ同感ノ諸彦此舉ヲ贊助セラレンコトヲ

明治四十年四月

石橋絢彦 小花冬吉 辰野金吾

委員 玉木辨太郎 真野文二 的場 中 三好晋六郎 下瀬雅允 』

この記念品贈呈のことは、「日本人エンジニアとヘンリー・ダイアー博士」という見出しで、『グラスゴウ・ヘラルド』紙（1909年2月24日）にも報道されている⁽⁴⁶⁾。

4. ダイアー関係図書の意味

近代日本の発足期に創置された工部大学校という工学の高等専門教育機関では、基本的に英国人教師が英語の教科書を使用して英語でもって指導していた。

そのさい、同校では、早くからひんぱんに試験を実施し、その成績にもとづく進級制度とともに、金品を授与する褒賞制度が確立していた。

褒賞制度の一つとして、洋書が賞品として贈られ、これに賞状が添えられたことが注目される。その賞状の一つは都検（教頭）であるダイアー自身が記入した賞状であり、賞状は賞品の図書に貼付された。ダイアーは工部大学校の都検（教頭）であり、当時の工学教育の先導者であっただけに、勉学のいっそうの進展を図るという褒賞の効用は絶大であったと思われる。

一方、ダイアー博士記念図書は、日本近代教育の発足期に、工学教育用の当時としては希少な洋書の教材を提供したという点で重要である、というだけにとどまらない。ダイアー自身の近代日本工学教育に対する指導性を裏付ける点でも、注目される。虎門会ならびにグラスゴウ会という、当時の主に工学専門職者たちの最高レベルの組織体の面々がこの記念図書の寄贈計画を具体化したということは、工部大学校における工学教育ならびに日本人のグラスゴウ留学に対して、ダイアーがいかに大きな影響力を及ぼしていたかを、物語るに十分である。

ダイアー署名入り図書ならびにダイアー博士記念図書は、日本近代工学教育の発足時におけるダイアーの先導性を裏づけるものなのである。

〔注〕

- (1) H. Dyer, Dai Nippon, the Britain of the East. Blackie & Son, London, 1904. 平野勇夫訳『大日本、技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』実業之日本社, 1999: Do, Japan in the World Politics: a Study in International Dynamics. Blackie & Son, London, 1909.
- (2) 三好信浩『ダイアーの日本』福村出版, 1989: 拙稿「ヘンリー・ダイアーと田辺朔郎」『UP』340号(2001年2月) 6-11頁ほか参照。
- (3) 梅溪昇編『明治期外国人叙勲史料集成』第一巻(思文閣出版, 1991) 281, 426頁に再録。
- (4) 拙稿「ヘンリー・ダイアーの胸像」『UP』319号(1995年5月) 25-30頁など参照。

- (5) 斎藤利彦『試験と競争の学校史』平凡社，1995，160－163頁。
- (6) 進士慶幹校注『旧事諮問録，江戸幕府役人の証言』下，岩波書店，1986，131頁：天野郁夫『試験の社会史，近代日本の試験・教育・社会』東京大学出版会，1983。
- (7) 夏目漱石の『道草』にも，健三が小学校時代に褒美をもらったときの喜びようが描かれている。ある日，父が残しておいた書付の束を開くうちに，小学校の卒業証書や賞状を見つけだしたことから，さらに「勸善訓蒙だの輿地誌略だのを抱いて喜びの余り飛んで宅（うち）へ帰った昔を思い出した」，という一節である（夏目漱石『道草』岩波文庫，昭和44，99頁）。『勸善訓蒙』とはフランスのL. C. ボンヌ（Louis Chales Bonne, 1819－?）の道徳教科書の翻訳書，『輿地誌略』は世界各国の地誌の概要を記したものであって，いずれも明治はじめの小学校教材である。
- (8) 「工部大学校学課並諸規則」第7章第5節，旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料』虎之門会，昭和6，231－232頁所収。
30円か20円もする特賞の賞品とは，明治10年度と11年度の場合，チェンバース百科事典（Chambers's Encyclopaedia）であった（『工部省第回四年報工作・燈台・營繕』二，所収，頁数なし）。1859年から68年にかけて出版されたばかりの，スコットランド生まれの百科事典である。当時は全10巻（改定新版は15巻本になる）から成り，もっとも望まれた高価な本であったのであろう。
- (9) 「工部大学校学課並諸規則 明治十八年四月改正」第20章第11節および12節，同上，292頁所収。
- (10) 以下の褒賞記録は，『工部省第三年報 自明治十年七月至同十一年六月中』および『工部省第四年報工作・燈台・營繕二』所収。頁数なし。
- (11) 滝沢正順「工部大学校書房の研究(1)」『図書館界』Vol. 40, No. 1 (May 1988) 7－8，11頁：同「工部大学校の書房と蔵書」東京大学編『学問のアルケオロジー』東京大学出版会，1997，199，234－235，292頁参照。
- (12) それぞれの請求番号と登録番号は以下のとおり。①U200/138, B64131,

②U200/139, B64130, ③U200/137, B64128。受け入れ期日は、いずれも昭和5年10月22日。

(13)『工部省第三回年報 自明治十年七月至同十一年六月 中』前出、所収。

(14)同上。

(15)富田仁編著『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985、593頁。

(16)ダイアーのセルフ・ポートレート(サイズは縦105ミリ、横64ミリ。横浜本町通および東京九段坂にあった写真館「鈴木真一」製)の裏面にある署名(「With truly yours Henry Dyer, 1882」), ダイアーの書簡(University of Strathclyde, University Archives and Record Centre蔵, 所蔵番号M51-18-4ほか), あるいは後出の注35)の書簡など参照。

(17)滝沢正順「工部大学校の書房と蔵書」前出、238頁。同書の請求番号はAA/a/30, 登録番号は T30289。

(18)同書の著者の肩書として、「Professor of Civil Engineering in Imperial College of Engineering at Tokei, Japan」とある。中山秀三郎は河川港湾学の権威で、後年、東京帝国大学教授として土木学を講じた。富田仁編著、前出、441頁参照。

(19)一年生(明治十年冬期試験生徒賞典)の受賞記録はつぎのとおり。

「図学科第三等 グブイットソン氏遠景画術書

マキストン氏工学上図学書

タレン氏平面幾何図学書

製図小器械一箱

数学科第一等 ブルヘマルト氏ニュートン一代記

スチワルド氏非消力論

スチワルド氏熱論

トッドハントル氏代数幾何即截錯

ケラント并テート氏クオトルニヨン

理学科第一等 ウェインボルト氏試験上理学書

タムソン并テート氏理学書巻編

ターチープ氏器械学理論

ツツキヤル天文学初歩

二年生（明治十一年ヨリ十二年二至ル冬期 試験賞典）は、つぎのとおり。

「予科学優等特別賞典第一等

チャンブル氏エンサイクロペジヤ 十冊

図学科第二 図引器械及尺度 各一

数学科第一 プロクトル氏太陰ノ説巻冊

同氏太陽ノ説巻冊

トドホントー氏方程式之理巻冊

トドホントー氏ヒストリー、オフ、セヲリー、オフ、
ユトラクション、エント、ヒクール、オフ、ヲフ、
セ、オールツ式冊

理学科第二 ハーセル天文概論巻冊

ステハルト氏理学階梯巻冊

テート氏熱学原理巻冊

ニウトン氏プリンシピア巻冊

化学科第二 ミラー氏理化学書巻冊

同氏無機化学書巻冊

『工部省第三回年報 自明治十年七月至同十一年六月 上』および『工部省第四回年報 工作・燈台・管繕 二』前出，所収。頁数なし。

(20)田辺家資料（京都市水道局総務課管理，琵琶湖疎水記念館蔵），分類番号F-41，10～32。表1のうち，1876年度の図書は工学寮時代の受賞図書であり，下記の文面の賞状が貼付されている。

「 Preparatory School

Kogakurio, Tokei.

This prize was awarded to

Tanabe Sakuro

for proficiency in

Geometry, being 1st
in examination held in
Dec. 1876

R. O. R. P.」

また、1878年度にある第一書は所在不明である。

- (21) 図4はA. F. Weinhold, Introduction to Experimental Physics, Theoretical and Practical. Longmans, London, 1875 (分類番号はF4-1-8-6), 図5はS. Smiles, Lives of the Engineers. John Murray, London, 1870 (分類番号はL-M-1-32) に、それぞれ貼付された賞状。
- (22) 「第十一章 工部大学校時代(上)」『菅原恒覧自叙伝』上(複製本, 刊年不祥, 財団法人土木学会附属土木図書館蔵)所収, および高崎哲郎『鶴高く泣けり, 土木界の改革者菅原恒覧』鹿島出版会, 1998, 60-61頁参照。ただし, 筆者はこれらの受賞図書 of 具体的な調査を試みていない。
- (23) 北政巳『国際日本を拓いた人々, 日本とスコットランドの絆』同文館, 1984, 102頁。
- (24) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一, 東京大学, 昭和59, 691頁。ただし, 単に「褒賞として書籍を与える」というだけでなく, 「各期末毎の各教科の成績優秀者には, ほとんどの場合担当教師の署名入りの書籍や学用品が賞品として与えられた」(同上)と, より限定した場合どうかということについては, 筆者はまだ十分な考察を深めていない。
- (25) 滝沢正順「工部大学校書房の研究(1)」前出, 8-68頁: 安藤圓秀『農学事始め』東京大学出版会, 1964, 246-247頁。正確にいうと, 「毎学期ノ終リ大試験ヲ施行」し, 諸学優等第一の者には金10円, 諸学科優等第二には金8円, 一学科優等第一には金4円という, 「賞与金額ニ相当スル書籍或ハ器具ヲ購求シ之ヲ下賜」することがおこなわれた。安藤圓秀編『駒場農学校等史料』東京大学出版会, 1966, 252頁より再引。
- (26) 大阪女子大学附属図書館編『大阪女子大学蘭学英学資料選』大阪女子大学, 1991, 154頁: 日本の英学一〇〇年編集部編『日本の英学一〇〇年 明治

編』研究社，1969，20頁。

(27)田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育』名古屋大学出版会，1995，
166頁より再引。

(28)「本県仏蘭西学賞典式」『愛知新聞』第15号付録（明治5年6月）4－5
丁：拙稿「司法省お雇いフランス人教師 P. J. ムリエ」『書齋の窓』No.
453(1996年4月)59－68頁，No. 454(1996年5月)55－63頁参照。

(29)『宇治山田市史資料』教育編二：西田善男『明治初期における三重県にお
ける外語学校』三重県郷土資料刊行会，昭和47，108－109頁：拙稿「お雇
い教師フレデリック・サンデマン」，日本英学史学会『英学史研究』33号
（2000年10月）121－136頁。

(30)滝沢正順「工部大学校書房の研究(1)」前出，8頁より再引。

(31)東京大学総合図書館の所蔵図書（請求番号および分類番号は前出の注12参
照）を，検討した。

(32)たとえば，静岡学問所および開成学校のお雇い教師 E. W. クラーク
（Edward Warren Clark, 1849－1907）は明治27(1894)年に東京を再訪。
福井藩の藩校明新館および大学南校のお雇い教師 W. E. グリフィス
（William Elliot Griffis, 1843－1928）は昭和2（1926）年に福井を再
訪。富岡製糸場お雇い技師 P. ブリューナ（Paul Brunat, 1840－1908?）
は明治40（1907）年に富岡を再訪している。E. W. クラーク（飯田宏訳）
『日本滞在記』講談社，昭和42，解説241頁：W. E. グリフィス（山下
英一訳）『明治日本体験記』平凡社，1984，解説334頁：武内博編著『来
日西洋人名事典 増補改訂普及版』日外アソシエーツ，1995，388頁，参
照。

(33)拙稿「ヘンリー・ダイアーの結婚」『UP』304号（1998年2月）16－20頁
参照。

(34)旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料附録』前出，100-101頁所
収。

(35)1915年4月7日付けの，ダイアーから田邊朔郎あての書簡。田辺家資料

(京都市水道局総務課管理, 琵琶湖疎水記念館蔵), 前出, のなかにある
複写物より。

(36) 'Death of Dr Dyer, Notable Engineer and Educationist', The Glasgow Herald (26 Sept., 1918) p.4; 'Death of Dr. Henry Dyer', The Scottish Co-operator, Vol.26, No.1041 (27 Sept. 1918) p.415, その他, 参照。

(37) 富田仁編『近代日本の先駆者』日外アソシエーツ, 1995, 82頁。

(38) 旧工部大学校史料編纂会編, 前出, 102頁。

(39) 冶金学科『図書明細』□頁。以下の「ダイアー博士記念図書」の調査にさいしては、とくに滝沢正順(東京大学工学部機械系三学科図書室)、周郷啓一(同大学工学部社会基盤工学科土質地盤研究室)、須永雅子(同大学附属図書館情報サービス課参考調査掛)の各氏からご協力をえた。記して多謝する。

(40) 土木学科『図書原簿』1, 162-163頁。

(41) 工学部機械工学教室『図書備付證』93頁。

(42) 『図書原簿』第巻号(東京帝国大学工科大学採鉱学科図書室)246-247, 250頁。

(43) 東京大学工学部『図書受入原簿』大正15。

(44) 『建築学教室図書目録』(建築学科教室, 大正15)

(45) 田辺家資料, 前出より。

(46) 全文はつぎのとおり。

「 JAPANESE ENGINEERS AND DR HENRY DYER

Dr Henry Dyer, of Glasgow, has received through the Japanese Ambassador in London, two handsome albums with richly embroidered covers enclosed in a fine lacquered box, containing the photographs of the graduates of the Imperial College of Engineering, Tokyo, Japan (of which he was the first Principal), from the foundation of the college till it became a college in the Imperial

University of Tokyo. The albums have been got up by the Institution of Engineering of Japan, which was founded by Dr. Dyer, and contains the portraits of the men who have been the leaders of industry in Japan and who have taken this method of showing their gratitude for the education which fitted them for their work, and their kindly remembrance of the man who planned and directed it.]
The Glasgow Herald (24 Feb. 1909) p. 8.

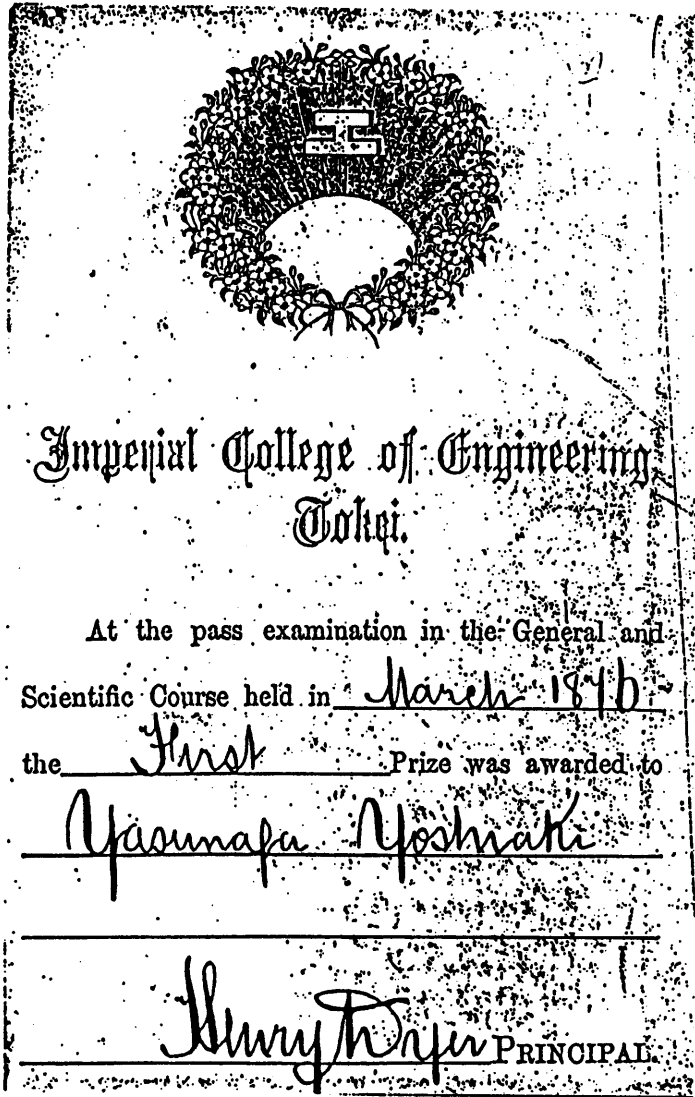


図1 H. ダイアー署名入りの賞状 (その1)

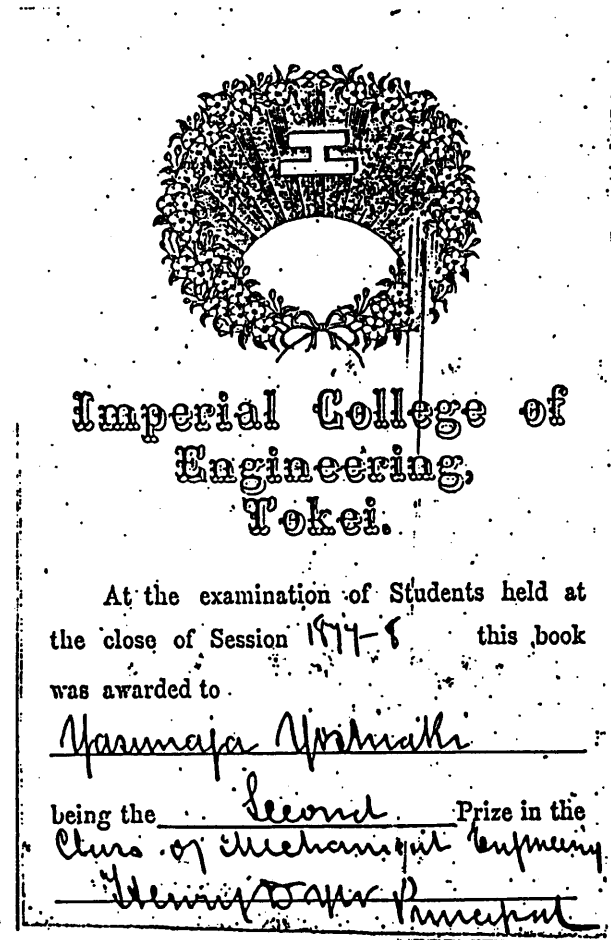


図2 H. ダイアー署名入りの賞状 (その2)

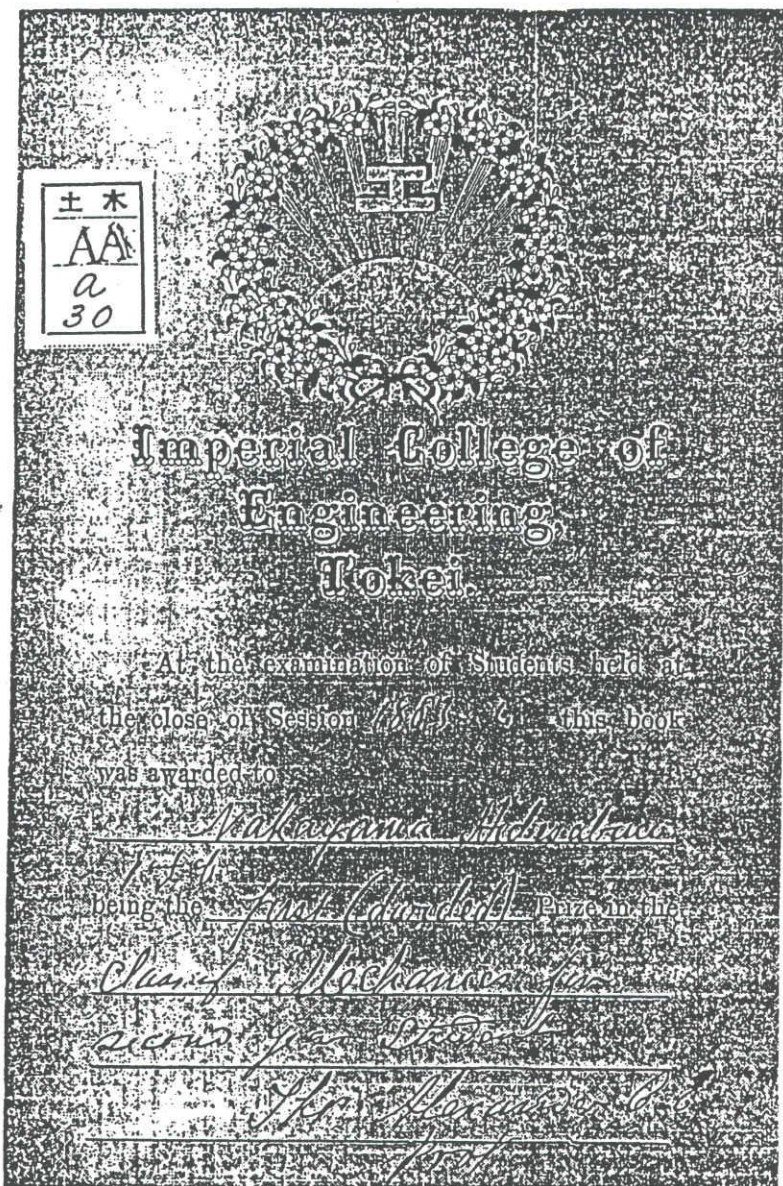
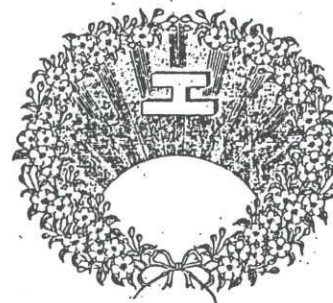


図3 T.アレクサンダー署名入りの賞状



Imperial College of
Engineering,
Tokyo.

At the examination of Students held at
the close of Session 1874-75 this book
was awarded to

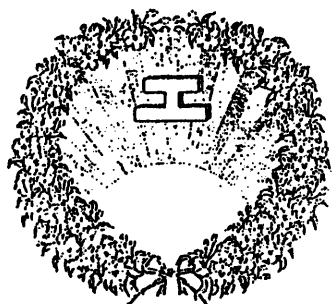
Tanabe Sakuro

being the First Prize in the

1st Year Nat. Phil. Class

Henry Dyer
Principal

図4 田辺家資料のなかのH.ダイアー署名入りの賞状



Imperial College of Engineering Tokyo.

At the examination of Students held at
the conclusion of the Session of 1880-1.

This book was awarded
to Yamabe Wakusa
being the 1st Prize in the
Class of Civil Engineering
Arthur K. Thomson

図5 田辺家資料のなかのT.アレクサンダー署名入りの賞状



ダイエル博士記念図書引

此書ハ元工部大學校卒業生並ニダラスゴイ合ノ有志相謀リ元工部大
學校部員故ヘンリー・ダイエル博士ノ記念トシテ大掛ヘ贈リタルモ
ノニシテ後述勸學ノ一助トナラバ博士並ニ有志ノ満足スル所ナリ
ダイエル博士ハ西曆千八百四拾八年八月十六日蘇州水スウエルニ生
レダラスゴイ大掛ニ入り成績優等ヲ以テウイットウオルス受賞生ニ
シテ名聲益々ナリ明治四年工部省ニ工學寮後工部大掛ト改稱セ
ラレテ同カレ六年ヨリ教授ヲ開始ス此時博士ハ大掛ノ部員トシテ招
聘セラレ數人ノ教師ト共ニ來朝シ其任ニ當ル十一年東亞視察アラセ
ラル其時ノ上英文ノ略ニ曰ク本館設立ノ目的ハ實國無限ノ物産ニ鑄テ公衆ノ便益ヲ起スベキ工師ヲ教育スルニ在リ云
々人民ノ進歩ヲ助ケル無數ノ機械器具アリ諸般物品製造ノ技術アリ加之後來公私ノ工事ヲ管理シ又後述ノ先導トナリ
貴國歴史ニ新彩ヲ添フル人傑ノ輩出スルニ及ンテ或ハ我等ノ致ス所ノ功績ナリト言ハル、テ母ハ外臣等ノ申ナリ云
々、十五年五月廷議技術家養成ノ功ヲ賞シ勳三等ニ叙セラレ旭日中綬章ヲ授ケラル次テ任滿テ職ヲ下ドワルド・ダイ
エル氏ニ讓リ歸國ス十九年工部大掛ヲ帝國大學ニ移サル、時迄ニ入校者四百九拾參人ノ内退學者百十一人死亡八人ア
リテ卒業生二百六人佐業生五人ニ上ル之ヲ理學部ノ卒業生九十八人ニ比スレバ二倍餘ヲ出シタリ、博士ハ歸國後工學寮
育及其振興ニ盡力セラレダラスゴイ大掛ヨリ名譽法學博士ノ學位ヲ授ケラレ又 Japan, Great Britain, & East 等ヲ著シ又在
留邦人ヲ扶掖スルコト甚ダ固シ此輩ダラスゴイ合ヲ興シ又工部大掛卒業生曾テ虎門會々興ス大正初年博士日本ヘ再遊
ノ意志アリニ會員合開シテ先生ヲ歡迎セントス偶歐洲大戦起ル先生同事ニ奔走シ遊期ヲ短フシ初志ヲ果サシコトヲ約
シ七年九月二十五日病シテ歿ス是ヲ以テ有志相會シ今因ノ意志ヲ繼キ歡迎員及紀念賞金ヲ合シテ工料ニ必要ナル
圖書ヲ購ヒ之ヲ大學ニ獻ジ工學寮發ノ資ニ供シ併セテ英文ニ撰書セラレタル如ク日本ニ於ケル工學ノ開闢トシテ先生
ノ偉績ヲ永ク後生ニ傳ヘントス

図6 「ダイエル博士記念図書引」

第2節 明治日本における経済学の到来（翻訳・解説）

1. 「虚」学

日本の権力機構は1868年に自己主張の強い少数独裁政治家の一群にとって代わられたが、かれらは皇室から賛意をえて自分たちの政権を正当化したのだった。かれらは、乱暴で高圧的になりかねないようなやり方でもって、それまで堅固で閉塞的な体制の制約下におかれてきた、多くの日本人のうっせきしたエネルギーをうまく解き放ったのであった。経済学という西洋学問は、数多くの学問研究の一つであった。それは、徳川時代の閉鎖経済ではほとんど役立たなかったであろうが、日本が西洋にためらいながら門戸を開放したとき、悪化した経済問題について有益な見識をあたえてくれるように思われた⁽¹⁾。

1858年、エルギン卿は妻にあてた手紙のなかで、日本の封建制度⁽²⁾について、見たままをこう書いた。「天皇（かれは御所をけっして離れない）から最下層の勤労者に至るまでだれもが、法律と慣習で定められた、きびしい規則のもとで生きている。また、政府は、大勢の情報要員によって、一人一人の動きに厳しい監督の目を光らせている。そのなかには多数の密偵が、正しくは監視官が（というのもそのやり方には秘密性が皆無であるからだ）いる」⁽³⁾。エルギン卿のこの所見は、規律の維持と保守的価値の擁護がそれ自体目標となるような社会による束縛が思い起こされる。しかし、W. W. ロストウが指摘したように、変化は近代社会にかならずみられるものであるが、徳川政権下の日本人には考えおよばなかった考え方であったであろう。ロストウは、そうした変化をひきおこす前提条件となるであろう多数の要因をあげるさい、基礎科学を進展させること、新機軸を受け入れること、消費者需要を増大すること、子どもをもつこと、経済のために科学を応用することの必要性を述べている⁽⁴⁾。本書が取りあげるのはこの最後の目標なのである。

近代日本における経済学原理の受容と論議は、商業と商人がたいした威信ももたず、表むきは職人や農民よりも低く位置づけられた封建時代の日本の意識

のなかで、経済競争に対する態度と利益追求欲が考えられたので、それだけ注目に値する⁽⁵⁾。西洋の経済学者の思想を信奉した人びとは、孔子の教えに具体化された何百年にもわたる優先事項を顧みなかった。大胆にも西洋思想と東洋思想を区別して、「実」学と「虚」学と呼んだのは津田真道であった。これまでなじんできた思想や伝統とは一致しないところがあるという事実にもかかわらず、津田は、文明開化を「実学」（かれのいうには西洋の天文学、化学、医学、経済学、ギリシャ哲学を指す）と同一視することによって、日本人が別の思考体系を受け入れるよう駆り立てていたのだった。

伝統的な日本思想と西洋思想との不一致は、自然についての理解と解釈の違いによるものであった⁽⁶⁾。西洋の語彙では、自然とは一体系であり、規則正しく動くものであり、人間とはまったく関係がないものである。しかし、人間は地上のもっとも知的な生物であるから、好奇心を働かせてかならず自然を理解し解釈し思いのままにしようとした。このような自然への干渉は、東洋精神にとってはさしでがましいことだと考えられた。なぜなら、自然の法則は不変であることを認めるように訓練されていたからである。東洋精神にとって、人間は、小さくて傷つきやすいものであるがゆえに、ほかの生物と同様にしっかりととらえられていたからである。

自然が、孔子の言葉にあるように、「偉大なる親」であるとすれば、人間は宇宙のなかのほんの小さな一部にすぎず、全体の一部である人間生活の基礎にある道徳的諸原理を守らなければならない。西洋流に、自然が既定の一連のルールにしたがって作動するエンジンか機械であったとするなら、人間はそのルールを理解し、しかも、知恵を働かせて自分たちに有利になるようにルールを巧みに操るよう努めなければならない。儒教で奨励された受動性と西洋の宇宙理解によって求められる活動性とは概念上の根本的な違いがあるため、津田たちは古い中国の学説を「虚」学だと考えるに至った。その「虚」学とは、無用かあるいは何の役にも立たない学問という意味であった。これら両派の思想にみられるアプローチの違いは根本的であって、それらを一致させたいと思う人たちの間では相当に精神的な重荷になった。

津田たちが東洋の思考様式を「虚」学と呼ぶことは、ある意味では津田を異端視するものであるが、それでも役にたった。日本人は、積極的に探究心をもって自然科学を受け入れるよう奨励されねばならなかった。その西洋科学の一つが経済学であって、これは経済事情を整理する原理原則の学問である。ずっと信奉してきた信念をこのように脇にのけて、主流となる思潮にとって望ましいからといって他の信念にとって代えることは、必要だが難しいプロセスである。この二つの対立の調和ということが本書の中心課題になる。哲学であれ経済学であれ他のどんなものであれ、西洋思想のあたらしい解釈はある意味では古い思考様式からの決別をあらわすものであったからである。

再調整にはいろいろ難しいところがあって、日本人はこれに立ち向かい、このために西洋は日本人を創始者というよりむしろ模倣者だときめつけることになるのだが、津田、西その他の人たちは知識の借入という尊ばれた伝統にならっていた。儒教やその他多くの主題は、日本の偉大なる隣人である中国からやってきたものである。日本が西洋から借用しているのは、かつての伝統との断絶でなくてむしろその拡張であった。

当初、西洋諸国が日本の海岸を脅かしたので、日本人の気にかかったのは思想や哲学、さらには経済学ではなくて、近代的な防御の武器であった。日本人は、防御の武器を適所におけばしつこい外国人を寄せつけなくておくことができると考えたのである。だが、あたらしい工業技術をただちに移転することなどありえず、したがって最初の目標はいやおうなしに棚上げにされたのだった。重々しい防衛体制をとらなければ、西洋人が入りこむことは容易であった。外国人の目的は実に単純であって、かれらは領土の野心などまったくなく、もうかる商売をしきりに開拓したがっていたのである。

西洋世界の商業の攻勢に対して、当初日本は態勢が整っていなかったことを示す鮮やかな事例は、ローレンス・オリファントからえられる。かれは、1858年のエルギン卿の日本への派遣について触れて、「外国の貨幣を日本の流通紙幣と交換するための用に供せられている」長崎の建物の機能について、こう述べている。

「入念に磨きあげられた階段を登ると、最上段に日本のスリッパが並んでいる。二階の部屋には、威厳のある三、四人の両刀を差した役人がテーブルを囲んで坐っている。そのテーブルの上には箱が二つ置いてある。一方には貨幣が、他方には流通貨幣がいっぱいつまっている。日本人の店番に外国の貨幣を受け取らせようと、説得に努めても無駄である。たとえ大型の、魅力のある貨幣でもだめである。政府は、政府の印章を捺した小さい長方形の紙片のほかは、どんなものでも外国人から受け取ってはならないと禁じている。そこでどの外国人も、使用できる通貨を手に入れるためにこの小さな部屋にしげしげと通わざるを得ない。」⁽⁷⁾

奨励するよりもむしろ妨害し邪魔をしようとするそうしたやり方は、税が米で支払われる閉鎖的な制度に不可欠な要素であり、また、分配と交換という基本的な経済過程は固定的で保守的なものであった⁽⁸⁾。

鎖国していた数世紀の間、日本の政府と役人たちは西洋の商取引の方法や西洋の経済論議をほとんど知らなかった。各国は、重商主義によって、望ましい貿易均衡を維持しようと努力したのだが、その考え方は、それと対立するアダム・スミスの「自由主義貿易」論議によって補正された。しかし、この重商主義をめぐる17世紀の論議は、日本経済が閉鎖されたままであったから大きな影響はほとんどおよぼさなかった。ヨーロッパでリカードその他の人びとによって始められたナポレオン戦争をめぐる通貨論議は、インフレの弊害と下落した硬貨や紙幣がはびこる日本では、心情に訴えるところがあった。実は、地方での生活のなかで受け入れられた藩札を安易に発行することは、将軍家により発行される硬貨とともに、昔からいわれていたグレシャムの法則を証明することになることがあった⁽⁹⁾。ただし、藩庁が「貨幣の供給を立て直し」たときもあった⁽¹⁰⁾。

偶然だが、外国干渉がもたらした当初の成果の一つに日本人にきびしい教訓を教えたことがある。いくつかの条約港が1859年に開かれたとき、外国人たちは金の値打ちがひどく過小に評価されていることに気づいた。あたらしい交換規則を不当につかって、外部の者が日本人から備蓄金をたちまちのうちに巻き

あげたのだった⁽¹¹⁾。このような出来事は日本人の弱点とさらにいえば日本人の無知をはっきり示すものであり、これが刺激になって、日本人は学習して不利を有利に転じなければならぬと決意したのである。

エルギン卿とその側近たちは、日本で現に起こっていることに無知であったがゆえに、何も知ることができないことがあった。それは、1850年代の長崎の港が、精神面でも世俗面でも中心地であった京都と江戸のどちらからも離れていたけれども、西洋のことが知りたくて遠くからやってきた大勢の日本人でにぎわっていたということである⁽¹²⁾。長崎は日本人が西洋教育を直接に学ぶために、西洋に向けてなんとか出帆できる中心地でもあった。より進んだ学問を目ざしてオランダやフランスや英国に出かけた人たちの数々の事例は、本書でもいくつか示されているのだが、日本ではペリー提督の黒船があらわれるよりも前に、すでに変化への強大な要求が高まりつつあったということをも物語るのである。

一世代もたたないうちに、日本では、一握りの日本人学者が経済学の原理と理論を教えていた。たいていは成人の学生であったが、彼らは欧米で経済学理論を学んでいた。実は、1881年以降、松方正義⁽¹³⁾のような日本政府の大臣はインフレに敢然と戦っており、西洋の政治家のように、安定したデフレ経済政策原理をそのインフレ対策に用いていた。では、どのようにして、日本人はそれほど短期間のうちに態度と期待を変えることができたのであろうか。

その答えは多面的かつ複雑であることはいうまでもないが、答えとして、日本人は他国との関係において不利な立場に立つことを好まないこと、日本人がもっている強烈な国民意識と結びついた持ち前の平等感ないし優越感、それに、他国民がいかにうまくやっけて行くかということに対する好奇心などがみられる。

2. 経済学の導入

本書の何章かで日本の近代経済・政治思想の導入におけるパイオニアとして登場する何人もの人びとが、かつて1868年以前の激動期に長崎に居住していた人たちであった⁽¹⁴⁾。かれらは外国人とも日本の同胞とも交際したことから、

日本人は西洋の思考様式についてもっと知る必要が緊急にあると感じていた。

こうした動向の指導者が福沢諭吉であった。「かれは日本の文明開化における多方面にわたるチャンピオンになった」し、どんな官職も一貫して断り、ずっと政界の外にいた⁽¹⁵⁾。政界の派閥争いとそれにともなう内紛を免れていたの
で、執筆活動と教育活動によって自説を広めることだけに専念することができたのだった。福沢は三度の海外旅行を体験したので、考え方が変わった転向者で啓蒙家という呼び名がはられることができた。1860年にはアメリカ、1862年にはヨーロッパ、そして1867年にはふたたびアメリカを訪れたのである。広く海外旅行をしたことから、かれはたいていの日本人よりも優位に立ち、おのれの考えに大きな影響を受けたし、西洋の思想をもっとも簡潔で理解しやすい言葉で説明することができた。

福沢の基本的な考え方や日本におこりつつあることについてのかれの理解ぶりを説明するには、二つの例をあげることができよう。37歳のとき、福沢は後年かれの信条とみなされることになる著作の第一編を出版した。『学問のすすめ』が1872年に日本で発行されたのである。この出版は、天皇家が京都での政治的孤立から離れて新首都・東京の中心にある江戸城に移り、封建領主が廃絶されて県が設けられ、少なくとも大都市の人口密集地では動揺と変革の空気があったあとのことであった。

『学問のすすめ』の初編はこう始まっている。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働を以て天地の間にあるよろづの物を資り、以て衣食住の用を達し、自由自在、互に人の妨をなさずして各安楽に此世を渡らしめ給ふの趣意なり。」⁽¹⁶⁾

この冒頭の数行にみられる注目点は、そのざん新さではなくて、むしろここに示された理想を日本社会へ適用するということである。その日本社会では、天皇が神のような特性をもっていたし、これまでは万能であった強大な封建社会が、個人の権利と要求を認めることの少ない厳しい階層制度にもとづいてい

たのだった。福沢の所見は、個人の自由というものが正当な目標になることを少なくとも示すものなのである。

福沢に見られる実際的な良識の第二の例は、1885年3月の「脱亜論」からあげることができる。そこでかれはこう書いている。

「世界交通の道、便にして、西洋文明の風、東に漸し、到る処、草も木も此風に靡かざるはなし。……苟も世界中の現状を視察し……者は、世と推し移りて共に文明の海に浮沈し、共に文明の波を揚げて共に文明の苦楽を興にするの外ある可らざるなり。」⁽¹⁷⁾

福沢のなかには幾多の矛盾点を含めて考えるべき点がたくさんみられるから、杉山氏は福沢の「悲しむべき矛盾の体系」を概説したと言っているが、水田氏が説明するように、「注意深い読者なら、かならず福沢の著作の行間に、西洋列強に包囲されるなかで独立した近代国家を創造しようと懸命に努力していた一知識人をみるであろう。」⁽¹⁸⁾

福沢は日本は西洋と対等に接しようとする必要があると認識し、しかも基本的人権を擁護したことから、かれは明治日本の偉大なる啓蒙家と考えられるに至った。しかし、留意すべき日本の過去と関係を断つ決断ではなく、むしろ過去からの連続体としての思想の発展をめぐる考えを強調することである。福沢の根本思想は、「国内的には自由放任主義、国外的には帝国主義的拡張」と要約することができるであろう。

経済学の学問的発展に大きな影響を与えたもう一人の人物は、大隈重信である⁽¹⁹⁾。佐賀藩出身の大隈は、長い生涯のうちに首相の職（1898年と1914年に就任）を含めて数多くの官職についたが、かなりアウトサイダーのところがあった。これは、一つには、薩摩・長州の友人に恵まれたけれども、当時の主流であったこの二つの閥に直属していなかったからであり、また一つには、明治時代のほかのどの日本人指導者よりも、基本的に見解が民主的であったからである。日本人に政治上の発言権をもっと与えるという大隈の穏当な考えでさえ、不信の念を抱かれたのだった。かれは日本の戦後民主主義を心から歓迎した先駆者とみなされうるけれども、自分の思想を試してみる機会をもつことは一度

もなかった。北海道の官有地の売却をめぐる疑惑から火がついたが、実際は対立する派閥間の権力闘争であった1880～81年の一大政争ののちに、大隈は辞職したのだった。弟子の小野梓とともに東京専門学校（のちの早稲田大学）を創設したのは、この間のことであった。この学校が盛大であったのは、大部分がこの事業に献身した小野のおかげであったにちがいない。

もう一人、国際的によく知られた政治家に森有礼がいた。かれの関心事には、経済学が教えられる高等教育機関を設立することが含まれていた⁽²⁰⁾。森の貢献は、「日本国家存続の手段だとかれが考える経済的、社会的、教育的、道徳的向上を増進するために」⁽²¹⁾、一橋大学（商法講習所）の創立者の一人となったことである。

五代友厚は、薩摩出身の森と同じく、若いころ西洋で経験した教育と旅行を有効に活用して、大阪の実業界の指導者になり、大阪実業界が近代世界に参入するよう奨励し主導したのだった⁽²²⁾。かれが先導した一つに、大阪商業講習所、今の大阪市立大学が1880年に設立されたことがある。実業界の指導者のための商業教育の重視は大阪と東京の商科大学（一橋大学）で顕著であったが、それは、日本の初期の指導者たちはきちんと教育を受けた実業家が必要であることをいかにしっかり認識していたかを、思い起こさせる。

これらのあたらしい学校は最高の理想の実現が動機となった人たちによって設立されたけれども、学校としては小規模で、貧弱で、ひどく資金が不足していた。政府の公的な資金と援助は、一教育機関に投入された。すなわち、しばらくのあいだ帝国大学と知られた東京大学である。1897年には京都帝国大学が設立された。東京大学は、主として、急成長する明治新政府の官僚制の役人になる者を養成するという西洋の方針にならって、1877年に設立された。最初、同大学は法学、医学、自然科学、一般教養の4学部から構成されたが、1886年には当初の4学部に加えて工学部と農学部が加わり、帝国大学と名を改めた。この大学は多額の公的資金を受け、東京や国内のほかのところに設けられた五つの高等中学校（のちの高等学校）出身の学生が送り込まれた。経済学は、これらの「学部」、学校、大学のすべてにおいて、いろいろなやり方で教えられたのだっ

た⁽²³⁾。

それでは、前記の熱心な人たちはどのようにして西洋の経済学思想を日本に導入し始めたのであろうか。学生としてであれ教師としてであれ、これに関与したすべての者にとって第一の課題は、外国語をできるだけ完璧に理解することであった⁽²⁴⁾。そのような予備的な学習に何年もついやし、それから本格的な学習がおこなわれることができたのだった。外国人教師が日本に招聘され、少数のひたむきな学生たちを教えた。フランス語かドイツ語か英語を母国語とする教師がやってくると、これはさらに面倒なことになった。すでに教育を受けて一つの外国語に堪能となった学生たちは、その言語による教育でしか学びとることができなかつたからである。ある意味で、日本人はいろいろな国籍の教師を雇うことを望んだが、これにより特定の教師集団に依存することが少なくなつた。しかし、外国人たちは言い争って自国語と自分みずからを売り込もうとしたため、そうした多様性のせいでどの教育機関においてもうまくいかなかつた。

そうであっても、経済学を教えるために来日した第一世代の教師は、さまざまな素姓をもつた外国人であつたが、たいていはアメリカ人であつた。福沢が慶応に学校を創設したばあいは、ハーバード大学の学長から推薦されたアメリカ人の何人かは、ユニテリアンであつた⁽²⁵⁾。ギャレット・ドロップアーズは慶応大学で熱心に勤務し、9年間、経済学だけでなく政治論も教えたのだった。かれは日本語で直接教えたのだが、慶応の学生たちを養成することに成功し、やがてその学生たち自身が代わつて担当教科を引き継いだのであつた。東京大学はE. F. フェノロサを含む一連のアメリカ人研究者を招聘した。早稲田大学で経済学の授業を始めた日本人は、そのフェノロサの教え子たちであつた。

アーネスト・フランシスコ・フェノロサはハーバード大学の出身者で1874年に卒業したが、勧められて1878年に東京へやつてきた。かれは経済学と政治学(1878-80年)、および倫理学と哲学(1880-86年)を教えた⁽²⁶⁾。かれのその後の名声と評判は、伝統ある日本美術を保存し展示したり、日本美術の知識をアメリカと西洋に伝播する技術と熱意によるものであつたが、それはかれ本

来の関心事を反映したものである。たぶんエール大学卒業生の田尻稻次郎と帝国大学でも経済学を教えたドイツ人のラートゲン教授のほうが、もっと教育と研究に関与したのであろう⁽²⁷⁾。

日本人教師の第一世代は外国人のもとで勉強したかもしれないが、19世紀後半に経済学を教えた他の諸大学は外国人教師を雇うことはなかった。ごく最初のころは日本人でない者が経済学者の著作を直接に説き明かすこともあったのだが、それを別にすれば、日本では、経済学のほぼすべての教育が、日本語をもって、日本人教師によっておこなわれたのである。憶測にすぎないかもしれないが、儒教思想の心得のある日本人教授は、経済学その他のことについて西洋の教授たちとは、たぶん異なった解釈をしたであろうと思われる。

外国人教師がいなくなってしまうと、日本人の経済学教授たちは日本語に翻訳された本を頼りにした。みずから翻訳出版に着手する者も多かった。このようにして、英国、アメリカ、フランス、ドイツの著者の手になる政治学および経済学のたいていの主要な著書が、日本人学徒の目にとまることになった。J. S. ミル『経済学原理』、フランシス・ウェイランド『経済学原理』、アダム・スミス『国富論』、W. S. ジュヴォンズ『経済学原理』を含む、きわめて幅広いテキストの翻訳書が日本で用いられたのである。

これらの「大」著は日本語に翻訳されたけれども、概念の点だけでなく、論述の複雑さのために、その多くは英語で理解するのが難しかった。それどころか日本語でも難しかった。英語で用いられた単語や語句に「ふさわしい」日本語表現を見つけだすにも、いろいろ難しさがあったのである。実に興味深くて特筆すべきことがある。福沢は、エディンバラのウィリアム・アンド・ロバート・チェンバース社から1852年に匿名で出版された『政治経済学、学校用および個人教授用』を見つけた。その本は、題名にもかかわらず、広く経済学、社会学、国際関係論という諸分野にまでおよんでいるごく普通の本である。かれは同書を翻訳しただけでなく、「社会経済」について書かれた一部分を、自著の『西洋事情』の外編に収めようとも決めたということである。ハーバード大学のアルバート M. クレイグはもの見事に推理に富んだ研究をこころみて、

同書の執筆者は、のちに作家、伝記作者、歴史家として有名になる「三文文士」ジョン・ヒル・バートンであることを見つけだしたのだった⁽²⁸⁾。アバディーン大学（1494年創立）文学修士のバートンは、哲学、理学、教養（古典）諸学の基礎をしっかりと身につけていた⁽²⁹⁾。スコットランド啓蒙の哲学的思想の幾分かは、福沢がジョン・ヒル・バートンのこの著書を翻訳することを通して、日本に輸入されたのであろう⁽³⁰⁾。バートンは、著作が日本語に翻訳されたもう一人の経済学者ヘンリー・ダニング・マクレオッドとも親しかった⁽³¹⁾。

帝国大学の授業ではドイツ思想が優勢になりつつあると分かったので、私学は、英国とフランスから入ってくる経済学の世界を広げるほうを選んだ。1873年から1895年まで日本にいた、ギュスターヴ・ボアソナードを含む外国人教師のなかには、このような方法で考えを転じさせるのが自分たちの使命だと思うものが、何人かいたことは確かである。私立の法学校は「討論会」を展開した。最初の討論会は1888年にでき、当初は1500名をひきつけた⁽³²⁾。そうした討論会は二カ月ごとに開かれ、有名出版社の名前で会報が出された。

こうした形態の討論会は自校の宣伝のためにも意義があった。実際、多くの学校は自校の授業の範囲と質のよさでもって、学生となってくれそうな人たちを引きつけようとしていた。これらの学校の何人かの教師は、自由民権運動の指導者でもあった。

私立の法学校が急増したことに政府は驚いたので、政府はその法学校を東京大学総長の管轄下におくことを決めた。その授業とシラバスが次第に注目を浴びるようになった結果、そこの卒業生は余分の試験を受けなくても国家公務員の下級職員に受け入れられるという特権が認められた。ある意味では、これによってより統一的な制度が生まれたことは確かであるが、まだ不統一の跡が残ったことを認めることもやはり重要である。「私立」の法学校と大学の個性を見分けることは難しいかもしれないが、そうした個性が存在しないと思うことはおかしいであろう。

大学と同じように、政府の各省庁もまた自分のところの新人たちに経済学を教えたのだった。官庁は洋書の蔵書をもっていた。最初は英語の本が主流であっ

たが、1880年代中ごろ以降はドイツ語の本が急増した。若い役人たちは、商法と国際法を含んだ法律学、財政、課税、政治学を教えられた。J. W. ギルバート著『銀行原理と実務』が18部残っているということは、そうしたテーマを教える必要があったことの名残りである。英国の銀行家で、大蔵省に雇われている間に1873年刊行の『銀行簿記精法』を著したアレクサンダー・アラン・シャンドのような人物は、若い世代の日本人銀行家を養成し感化をおよぼした。

政府は中央からうまいぐあいに管理を強化したけれども、体制の外では、自分なりの日本社会改造案を提出しようとした熱心な人がたくさんいた。かれらは何らかのジャーナリズムを通してはけ口を見だし、あらゆる種類の新聞、一般誌、専門誌を刊行したのである。明治日本のどの文筆家も、新思想や現行の思想を広めるために刊行された数多くの一般誌や専門誌のひとつを編集したか利用したようである。もっとも有名な「ジャーナリスト」には次のような人たちがいた。まず、当初『明六雑誌』に執筆した後は、『時事新報』という自分の日刊紙上の社説を、自分の所見や思想を発表する場として活用した福沢諭吉。1881年に『東洋自由新聞』を創刊し、みずから編集した中江兆民。それに、1887年創刊の『国民之友』に健筆をふるった徳富蘇峰、である。

日本の読者に大量の情報や論評をもたらしたこれら専門的でない出版物はさておいて、専門家である経済学者自身も怠けていたわけではない。A. A. シャンドは、ロンドンで創刊され、世界中に読者がいた『エコノミスト』誌を田口卯吉に見せたことから、田口を促して『東京経済雑誌』が創刊されるに至ったと信じられている⁽³³⁾。

明治天皇が君臨した44年間に、西洋の優位に対抗したいと切に望む人たちによって経営された、私立の教育機関や新聞・雑誌が急増した。本書とかかわりのある教育機関のなかには、東京の慶応大学になる慶応義塾、早稲田大学になる東京専門学校、専修、明治、中央、法政の各大学になる法学校がある。大阪では、商科大学と関西法律学校が有力になった。京都には、同志社大学が1875年に同志社英学校として発足し、同志社政法学校が1891年に開校した。また、立命館大学がまず1869年に私塾として開校されたのだが、普通は京都法政学校

になった1900年を起源としている。これらの学校は、どれも政府の公的な支援を受けた学校ではなかった。政府は1886年に帝国大学を、つづいて京都帝国大学（1897年）と東北帝国大学（1907年）を創設し、これらの大学を通して高等教育は公費補助を受けたのである⁽³⁴⁾。政府が新生日本の経済を拡充するために開拓庁を創設した（1869年）北海道の札幌には、札幌農学校が設立された。そのほかの学校はすべて民間から資金提供を受けたので、明治時代にはおおむね基盤が貧弱であった。とはいっても、経済学が最初に教えられたのは、これら民間の学校と政府が支援した学校においてであった。これに関与した外国人教師が大勢いたけれども、もともとは日本人が尽力した事業であった。

3. 日本の学校施設

日本では、洋学すなわち「実」学の有用性が気づかれ、さまざまな思想を安易に受け入れたが、それは日本の土壤に根付いたものではなかったことを、遺憾に思うものがおおくいた。およそ1881年ころから、政治的には西洋の自由思想が後退した。さまざまな筋から、たくさんの西洋思想が自由に入ってくるにつれ、しばしば思想の対立がみられた。日本人は中立のままでいることはできなかった。信ずべき資料を自分で調べて、日本人の素性や歴史にもっともふさわしい体系を選ばざるをえなかった。

日本人がどんな決断をしたかを理解するのに重要なことは、西洋の陳列窓にはどんな思想が売りに出ているかをよく認識することである。その際、英国とヨーロッパ大陸諸国との相違点が強調されなければならない。ある研究者が述べているように、「大陸の、フランス、プロシア、オーストリアその他では、国の活動と監視の伝統が根強く、けっしてなくならなかった。逆に、英国は17世紀に中央集権主義をやめてしまい、18世紀後半にはとくに国際貿易に影響をおよぼす重商主義的な政策がたくさん実施されていたのだけれども、中央では強力な干渉主義的政府は存在せず、官僚制のわずかな萌芽がみられただけである。」⁽³⁵⁾

アメリカのモデルはまた違っていて、それは本質的にチェック・アンド・バ

ランスの体系である。中央政府もそれを構成する各州も、両者は互いに気を配りあいながら、自己権力の強化をめざす相手のどんな動きにも監視の目をそらさなかったのである。

したがって、本質的には、日本人は英国をモデルにして不干渉主義国家を選ぶか、国家が数おおくの活動に対して統制管理をし続けるほうを選ぶのか、決めなければならなかった。この意味では、両モデル間の対立は事実上「無競争」であった。一般の人びとは、何世紀も中央や地方政府の強力な管理を受けることになれていた。その歴史を考えれば、一種の封建制度からあらたに解き放たれた人びとを統治する者たちは、英国で行われていた自由のモデルを国民に提供する方を選ぶとはとても考えられない。いずれにせよ、連合王国の何人かは、19世紀末までに、種々の経済的な難問に迫られて、自国の中央政府の弱点に気づいたので、とりわけ社会福祉の面では官僚制を強化しはじめつつあった。

日本では保守主義の強化へと逆行する動きがあったことは、よく知られている。伊藤博文の占める地位は、権力と影響力をますます増大した。有名な1882年から1883年までのドイツ・オーストリア巡歴の間に、伊藤は、自分が描く日本の理想とうまく合致したドイツ政府による強力な中央管理が重要な意味をもつことに気づいたのだった。こうして、日本政府は国民に対する高圧的な干渉主義の姿勢を展開した。このような体制下では、大衆的無産主義への動きはまったくありえなかった。ますます国家主義的になる日本は、どうしても個人の自由の犠牲を必要としたからである。明治政府を近代的な方針にもとづいて再編したこのような保守的な再建の動きこそ、おおよそ日本国民が求めたものであった。早くから西洋思想を信奉した多くの人たちは、やがて自分たちは早くから急ぎすぎてしまったと思うに至った。全国的な名士で、若い青年のころの熱したような自由主義を、晩年になってもそのまま保っている者は少なかった。

たとえば、森有礼は、若いころの強烈な自由主義が先輩たちを憤慨させたものだが、1889年に42歳で暗殺される時まで一步一步右翼のほうに移っていった⁽³⁶⁾。若々しい自由思想のジャーナリストであった徳富蘇峰は、国家主義的で軍国主義的な姿勢がいつそう極端になってきた政府を、歓呼して迎えるのに

急であったので、物事を全体的に見通す力をまったく失ってしまった⁽³⁷⁾。晩年になっても自由主義者であった福沢でさえも、日本人が1894-95年の戦争で中国を打ち負かしたとき、国家主義の感動によい反応を示したのであった。古参の政治家で、心が広くて寛大であった大隈は、「非公式の日本のスポークスマンとして、国際理解という目的のためにすぐれた貢献をなした」⁽³⁸⁾のである。

だが、政治的な拘束がどれほどきつくても、経済学思想の論議と教育はずっと最重要事項であった。これを理解するには、「西洋諸国に立ち向かうために西洋文明を学ぶ必要を強調した」福沢について論じた、杉山にもう一度言及することが有益であろう。福沢はつぎのような見解を強調した。「外国貿易が始まって以来、外国人のなかには、われわれを改善することで、金持ちになりたいと願う者が何人もいる。それゆえ、われわれが日中の古典に関心をもち続け、あたらしい風俗よりも古い風俗を好み、したがって外界の諸状況に通じることなしに貧しく愚かな状態に陥るなら、外国人をもうけさせ喜ばすだけであろう。この時かれらが恐れるのは、われわれが洋学に関心を向けることである。わが国が優秀さを勝ちとる方法は、西洋から入ってくる書物をできるだけ多く読んで、世界の实情によく通じるようになることである。」⁽³⁹⁾福沢はおおくを分かっていたのである。日本政府は、熱狂者たちに経済学を学び教えるよう勧めるさいに、そのようなことが重要だとみなした。

それでは、日本人はいかにして経済学の教育を組織化したのか、また、その教育活動は、健全かつ有益なという趣旨に沿いながら、政治・教育および法曹界の若き指導者をいかにうまく教えたのであろうか。

いくぶんかドイツの伝統に負うた組織内で1886年におこなわれた東京大学の再編制は、厳重な中央管理体制にむかう日本の大きな動きの一つであった。政府にとってみれば、東京の帝国大学の構内においてこそ、公的に容認できる最良の教育がおこなわれていたのであった。また、東京では、招かれていたアメリカ人教授たちが去った後、経済学教育の責任者になったのは和田垣謙三であった。和田垣は、ドイツの歴史学派の感化を受け、経済思想史を経済学教育の中

核として定着させることに成功した。かれの教え子や門弟、またついには大学教授となった後継者たちは政府からドイツ留学に派遣され、それから東京で一生の仕事についたのだった。ほかのカレッジや高等教育機関でも、経済学の教育は盛んでありつづけた。学者たちは西洋から入ってくる大量の経済学思想をよく検討したので、日本では片寄った見方は見られなかった。

政府、教育界、法曹界の責任ある地位につくことになる、かなりの数の青年に経済学を広く教えたことから、経済学や経済問題に関連した数々の事柄をめぐって活発な論議が展開されたのだった。

経済的自由主義と保護貿易論にかかわる事柄ほど、物議をかもし白熱する議論になりそうなものはなかった。このころの日本における議論は、非常に多方面にわたっていた。保護貿易論者は、読者に「自由貿易を口うるさく支持する者たちは、英国は自由貿易で繁栄しているとみなし、われわれもそれにならうべきだと考えている。しかし、両国の貿易には何ら共通したところはみられない」⁽⁴⁰⁾ことを思い起こさせた。当時支配的であった英国の方式で貿易の自由化を唱導した人たちは、じょじょに守勢に立たされた。

急上昇して自由貿易の面で経済的に優位にたった英国においてさえ、国際市場での競争が激化したので英国製品を保護しなければならないと主張する、強力な圧力団体があった。もっとも、ジョセフ・チェンバレンによる雄弁なキャンペーンでも、連合王国における自由貿易という強力な合言葉を取り除くには十分でなかったのだが。何世紀間もよく統制された日本では、大学の何人かの経済学者の論議はあったけれども、自由貿易は成功の見込みのないものでしかなかった。日本人は、1911年に関税自主権を獲得したときに国内市場を保護し、同時にとくに極東にある海外市場を開拓することでもって外国貿易を拡大するという、保護貿易計画にもとづいた古典的重商主義に乗りだした。

明治時代の終わりまでには、日本は自立を遂げた。条約港⁽⁴¹⁾とそこの居留地が取り戻され、関税自主権が導入され、しかも何よりも重要なことに、この国は金本位制に変わったのであった⁽⁴²⁾。

もちろん日本人は西洋から知識の借入を当てこんでいたから、ある意味では

ドイツの諸制度に親近感を抱いた。だが、英国との間で1902年に日英同盟が結ばれた⁽⁴³⁾。その前年に死去した福沢は、ひとつの世界を心に描いた。「絶遠の東洋に一新文明国を開き、東に日本、西に英国と、相對して後れを取らぬやうになられまいものでもない。」という世界である⁽⁴⁴⁾。「英国の政治と英国の諸制度をことのほか好んでいた」⁽⁴⁵⁾大隈もまた、西洋の英国と東洋の日本の絆が強化されることを喜んだのだった。

日本政府は、大多数の識者から励まされて、「富国強兵の必要性」（国を富ませ軍隊を増強すること）を強く感じた。中国（1894-95年）およびロシア（1904-05年）の陸海軍が意外にも敗北したことで、強烈な国家主義的な優越感が生まれ、これは1920年代と1930年代に急激に膨張して過酷な軍国主義に走った。日清戦争が1895年に終わってから福沢が述べたように、「新日本の文明富強は都て先人遺伝の功德に由来し……たやうなものに違ひはない」⁽⁴⁶⁾。第二次世界大戦が終了した1945年後になってはじめて、アメリカ人は日本が議会制民主主義を採り入れることを保証できた。

幾世代もの日本人学者は、1868年以来、「虚」学と「実」学の構成要素を結びつけて、統一性を生み出さなければならなかった。かつては誰もが漢学の徒であったが、今は誰もが洋学の徒である。福沢が述べたように、「それは一つの肉体に二つの生命が生きているか、一人の人間に二つの肉体がある」⁽⁴⁷⁾やうなものであった。しかし、だれもがきつ抗する力を調和させなければならない。それに成功すれば力が生まれるのである。

日本人は、あきらかに異質で対立する要素から強力な国家を作ることに成功している。経済学思想は、本書の紙面でみられるように、日本にうまく導入されはしたが、二つの対立はいぜんとして存在する。アダム・スミスの自由な企業の考えが、規制の厳しい経済体制のなかでも盛んになることなど、どこかほかにあるであろうか。経済学の点からみれば、日本人は矛盾を調整していく術にたけた人間であることを証明したのである。

【注】

西川俊作教授と玉置紀夫教授には、たいへんご親切にも建設的なご意見と

ご助言をいただいた。水田教授および杉山教授だけでなく、今はなき夫シドニー・ジョージ・チェックランド教授との、長年におよぶ貴重な語り合いにも、感謝をささげたい。解釈や史実の誤りがあるだろうが、責任はわたしだけにある。

- (1) 経済学には数多くの定義がある。ごく簡単には、「富の生産と分配、ならびに一国の物質的繁栄に関連する国の条件をあつかう実学である」。経済学の初期の著作には、Sir James Steuart, An Inquiry into the Principles of Political Economy (Edinburgh, 1767), およびAdam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations (1776) がある。スコットランド諸大学の経済学部は今もなお政治経済学部と呼ばれている。
- (2) 「封建的」という用語は便宜上使われている。福沢(1890年ころ)やほかの多くの者は、日本の封建制という概念は西洋の封建制度といちじるしく違ふと論じてきた。
- (3) T. Walrond, Letters and Journals of James, Eighth Earl of Elgin (London, 1873) p. 270.
- (4) W. W. Rostow, The Stages of Economic Growth (Cambridge, 1960), 同 The Economics of Take-off into Sustained Growth (London, 1963), および同 How It All Began (London, 1975) 参照。
- (5) W. G. Beasley, The Modern History of Japan (London, 1963); R. Dore, Education in Tokugawa Japan (London, 1965); P. Francks, Technology and Agricultural Development in Pre-War Japan (New Haven, 1984) を参照。
- (6) C. Blacker, The Japanese Enlightenment: A Study of the Writing of Fukuzawa Yukichi (Cambridge, 1964) を参照。
- (7) L. Oliphant, Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the Years 1857, 1858 and 1859. 2nd ed. (Edinburgh, 1860) vols. I and II. vol. II, pp. 53-54. [訳文は岡田章雄訳『エルギン卿遣日

使節録』雄松堂書店，昭43，50頁より引用。]

- (8)規制の撤廃について，次のように言われてきている。「幹線道路の検問所はすべて撤去された。同業組合は解体された。職業移動の制限は撤廃された。それに，農民は売りたい穀物をなんでも作っていいし，農地を買うことも許された。」Nishikawa Shunsaku and Saito Osamu, 'The Economic History of the Restoration Period', M. Nagai and M. Urrutia eds., Meiji Ishin: Restoration and Revolution (Tokyo, 1985) p.178より。
- (9)グreshamの法則という語句は，「悪貨は良貨を駆逐する」の意味である。つまり，高率あるいは低率の金ないし銀含有量の貨幣，すなわち「良」貨と「悪」貨が同時に流通するところでは，人びとは「良」貨を蓄え，「悪」貨は流通するに任せるであろうということである。
- (10)Nishikawa and Saito, op. cit., p.183.
- (11)日本政府は何を「強奪的な不法行為」[訳文は山口光朔訳『大君の都(上)』岩波書店，1978，406頁より引用。]だと見なしたかについては，数多くの説明がある。R. Alcock, Capital of the Tycoon (London, 1863), vol. I, pp.281-82を参照。
- (12)1859年以後の長崎の刺激ある，にぎわった生活ぶりについてのたいへん生き生きした様相は，ケンブリッジ大学図書館のジャーディン・マセソン文書「長崎ボックス」の調査研究から知ることができる。
- (13)Matsukata Masayoshi, Report on the Post-Bellum Financial Administration of Japan (Tokyo, 1900). 松方は1878年にパリで過ごしたことがあった。かれは，1880年代の日本でインフレをうまく規制する努力をしたあとで，フランスの大蔵大臣レオン・セイから感化を受けたことに対し賛辞をおくったのだった。
- (14)C. Sugiyama, 'The Development of Economic Thought in Meiji Japan', Modern Asian Studies, II,4 (1968) pp.325-41.
- (15)Blacker, op. cit.; Fukuzawa Yukichi, An Encouragement of Learning (D. A. Dilworth and U. Hirano 翻訳紹介) (Tokyo, 1969); E. Kiyooka

- 訳, The Auto-biography of Fukuzawa Yukichi (new ed., 1960);E.
Kiyooka 訳編 Fukuzawa Yukichi on Education (Tokyo, 1985)を参照。
- (16)Fukuzawa, An Encouragement of Learning, p.1. [訳文は「学問のすすめ」
『福沢諭吉全集』第3巻, 昭34, 岩波書店, 29頁より引用。]
- (17)Fukuzawa Yukichi, 'On De-Asianization', Meiji Japan through Con-
temporary Sources, vol.III, 1869-94 (Tokyo, 1972), p.129. [訳文は
「脱亜論」『福沢諭吉全集』第10巻, 昭35, 岩波書店, 238頁より引用。]
- (18)H. Mizuta, 'Historical Introduction', p.15.
- (19)J. Iddittie, Marquis Okuma, a Biographical Study in the Rise of
Democratic Japan (Tokyo, 1956) 参照。
- (20)I. P. Hall, Mori Arinori (Cambridge, Mass., 1973) 参照。
- (21)I. P. Hall, 'Mori Arinori', Kodansha Encyclopedia of Japan, vol.5,
p.249.
- (22)'Godai Tomoatsu', Kodansha Encyclopedia of Japan, vol.3, p.39.
- (23)当時の日本の教育に関する, 簡潔で興味深い紹介が, H. Norman, The
Real Japan (London, 1892) pp.95-106. でなされている。A. Stead,
Japan by the Japanese (London, 1904) も参照。
- (24)外国語で教育を受けたこの第一世代の日本人学生たちは, 日本語だけで学
んだかれらの子弟たちよりも外国語がよくできたのは, もっともであろう。
- (25)ユニテリアン派は長老派非国教会系のキリスト教派の一派であり, 唯一
の神を信じて, 三位一体説を排する。具体的にいうと, 欧米では精力的な
小グループの会衆たちが有力な教会共同社会を作っている。アメリカ合衆
国ではこのころW. E. チャニングとセオドア・パーカーに率いられてい
た。
- (26)E. F. フェノロサについては, V. W. Brooks, Fenollosa and His
Circle (New York, 1962); W. W. Chisholm, The Far East and American
Culture (Newyork, 1963) を参照。
- (27)田尻稻次郎は大蔵省で大隈の次官をつとめ, のちに専修大学(専修学校)

を設立した。

- (28) A. M. Craig, 'John Hill Burton and Fukuzawa Yukichi' 『近代日本研究』第1号(近代日本双書)(慶応大学福沢研究センター, 東京, 1984)。
- (29) ジョン・ヒル・バートン(1809-81年)はアバディーン大学マーシャル・カレッジに通った。かれは1823-27年度生の最初の3年課程と1825-29年度生の4年次課程を履修し、後年には文学修士号を取得して卒業した。
- (30) スコットランド啓蒙をめぐる簡単だが刺激的な論議については, D. Daiches ed., A Companion to Scottish Culture (London, 1981) 所収の N. E. Phillipson 論文340-344頁を参照。
- (31) ヘンリ・ダニング・マクロード(1821-1902年)はケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに学び、そこで1843年に文学士号を取得して卒業した。かれの著作は数多くの大学図書館に所蔵されている。エディンバラの国立スコットランド図書館は、かれの書簡を多数所蔵している。銀行史に関する、1860-62年のジョン・ヒル・バートンあての書簡はMS. 9396, ff. 72-75, 79, 92-95, 110, 136, 172, 229; 1870, MS. 9398, f. 165; 1871, MS. 9399, f. 104; ブラックウッズあての書簡は1872, MS. 4279; 1892, MS. 4590; ジェムズ・S. フレミングあての書簡は1877, Adv. MS. 81. 5. 7., ff. 26-31参照。マクレオッドは大学教授という安定した地位につきたかったけれども、体制の外側にずっといた。マクレオッドは1863年にケンブリッジ大学経済学教授に応募したが、このときはヘンリ・フォーセットが任命されたし、フォーセットの死後、1884年にも再応募したが、このときもアルフレッド・マーシャルが選ばれたのである。
- (32) 私立の法学校、すなわち専修(1880年)、法政(1881年)、明治(1881年)、早稲田(1882年)、中央(1885年)はのちに大学になった。
- (33) 福沢はすでに西洋式簿記の教材を日本語に翻訳していたし、ほかの邦訳書もたとえば商法講習所で使用されていたが、西洋の商取引法を学習する人たちにA. A. シャンドが関与したことは重要な意味をもつ。とりわけ、日本人翻訳者と違って、かれは簿記の実務経験からその任務に応えたから

である。

(34)第一次世界大戦後に、北海道（1918年）、大阪（1931年）、名古屋（1939年）の各帝国大学が設立されたが、人文科学あるいは社会科学の学部はなかった。

(35)S. G. Checkland, British Public Policy (Cambridge, 1983) p. 2.

(36)森有礼が1880年代にロンドンでハーバート・スペンサーと親交を結んだことから、スペンサーは森に対し自由主義政治思想の日本への導入にはおおいに慎重であれと忠告した。D. Duncan, Life and Letters of Herbert Spencer (London, 1908) p. 161を参照。

(37)J. D. Pierson, Tokutomi Soho, 1863-1957: A Journalist for Modern Japan (Princeton, 1980).

(38)Idditie, op. cit., p. 355.

(39)C. Sugiyama, 'Fukuzawa', p. 44.

(40)C. Sugiyama, 'The Development of Economic Thought in Meiji Japan', Modern Asian Studies, II, 4 (1968) p. 332. 西村茂樹からの引用。

(41)J. E. Hoare, 'The Japanese Treaty Ports 1868-1899, a Study of the Foreign Settlements' (Ph. D. [Thesis], University of London, 1971) ; J. E. Hoare, 'Japan Undermines Extraterritoriality: Extradition in Japan 1885-1899', I. Nish and C. Dunn eds., European Studies on Japan (Tenterden, 1979) pp. 125-29を参照。

(42)N. Tamaki, 'Economists in Parliament', 本書に所収, p. 223 ff; J. Soyeda (Soeda), 'The Adoption of Gold Monometallism by Japan', Political Science Quarterly, 8, no. 1 (Boston, 1898) pp. 60-90. ; E. Foxwellによる Count Masayoshi Matsukata, Report on the Adoption of the Gold Standard in Japan (H. I. J. M.'s Minister of Finance)の書評, Economic Journal, 10, no. 38 (June 1900) pp. 232-45を参照。

(43)I. Nish, Anglo-Japanese Alliance (London, 1966).

(44)The Autobiography of Fukuzawa Yukichi, p. 334. [訳文は星野和七校訂・

- 福沢諭吉『福翁自伝』復元版，角川書店，昭41，22版，293頁より引用。]
- (45) Idditie, op. cit., p. 334.
- (46) The Autobiography of Fukuzawa Yukichi, p. 335. [訳文は星野和七校訂・福沢諭吉『福翁自伝』前出，294頁より引用。]
- (47) E. Kiyooka 訳編 Fukuzawa Yukichi on Education (Tokyo, 1985), p. 104.
-

【訳者解説】

(1)

本稿は，O. チェックランドによる日英交流史研究のなかの一編である。『明治啓蒙期とそれ以後，経済学の到来と伝播』とでも訳すべき著書 (Enlightenment and Beyond, Political Economy Comes to Japan) に収録された論文を，翻訳紹介したものである。

同書は，もともとは「経済学の制度化，ヨーロッパ・北アメリカ・日本の諸大学への導入と受容」という国際研究プロジェクトの一環として開かれた，研究集会での報告論文をもとにしている。研究集会は1985年4月パリ，および翌1986年4月にはイタリアのサン・ミニアト (San Miniato) で開かれている。会議の終了後，杉山忠平と水田洋の両氏により報告論文をもとに編集され，1988年に，東京大学出版会から表記の題名で刊行された。

同書には，両氏を含めた9名 (日本人7名，英国人2名) から寄稿された16本の論文が，5部門に分けて配され収録されている。歴史的導入，啓蒙と経済学：その先駆者たち，高等教育における経済学の制度化，教育機関以外における経済学，西洋の視点から，という5部門である。

本論では，啓蒙および経済学の先駆者 (福沢諭吉，西周，津田真道) をめぐる考察につづいて，19世紀なかば以降の日本で経済学が制度化される様相を，関連の人物 (知識人，学者，政府要人，ジャーナリスト) と教育機関，ならびに教育機関以外の学術団体などを個別にとりあげて，明らかにしている。教育機関としては慶応大学，東京帝国大学，札幌農学校，専修学校，法政大学・明治大学・中央大学の各法学部，東京商科大学，東京専門学校，大阪商法学校が，

教育機関以外では政府・議会・ジャーナリズムにおける活動がとりあげられている。最後は、西洋の視点から見た日本の経済学の特質をめぐる論稿から、構成されている。チェックランドによる本論文は、最後の「西洋の視点から」という部門に収められた一編である。

(2)

本論文が含まれる『明治啓蒙期とそれ以後』の意義と特徴はどこにあるのか。当該領域の研究史のなかでどのような位置を占めるのか。訳者解説というなら、本論文が収録されている同書の基本的な意義と特徴についても、検討すべきであろう。訳者はこれをよくなしえないので、書評論文の紹介をもって代えたいと思う。

同書の書評は、たとえば、以下の各誌にみられる。このうち、①はわずか16語の紹介、②④もそれぞれ128語、90語から成る短評であり、内容構成および執筆者の単なる紹介の域を出ていない。③⑤が署名入りの書評論文になっている。

- ① Business Horizons, vol. 31, no. 6 (Nov. 1988) p. 78.
- ② Journal of Economic Literature, vol. 27 (March 1989) p. 151.
- ③ Ibid., vol. 27 (Dec. 1989) pp. 1681-1682.
- ④ Ibid., vol. 28 (March 1990) p. 133.
- ⑤ The American Historical Review, vol. 96, no. 1 (Feb. 1991) pp. 237-238.

まず、③『経済学文献雑誌』では長文の論評記事がみられる。主要な論点をあげれば、次のとおりである。

第一に、『明治啓蒙期とそれ以後』が「二つの大きな空白を一度に埋めようとしている」ことを特記している。すなわち、「一つは、日本の明治時代(1867-1912年)の知性史上の空白であり、経済学はその時代にどんな役割を果たしたのかということである。もう一つは、経済思想史上の空白である。経済思想はいかにして、またどのような形態で日本に広まったか。日本人はその経済思想を何から何に発展させたのか、ということである。」しかしながら、詳細

かつ多面的に論じられてはいるけれども、「ティームとして執筆者たちはいずれの空白も埋めていないのではないか」と、評されている。

むしろ、同書は「目録のような好古趣味」の域を出ておらず、「明治初期の『文明開化』中と、その後の明治天皇の死去から第一次世界大戦をへた期間中における、西洋経済思想の日本への影響をうわべだけ論じたにすぎない」。教育課程や教科書の名前、教師と翻訳者の氏名、主だった蔵書の内容について教えられるところがあるし、個々の大学をとりあげた章、のちに大学のステイタスを獲得した教育機関、法学校、商業・経済雑誌、政府の部局、インフォーマな経済団体をあつかった章もあるけれども、「慶応大学の創立者・福沢諭吉の事例を除けば、経済思想の質、レベル、特色について知るところはわずかである」、というのである。

第二に、知性史研究としてどうかというと、本書の記述内容は「二流の悲劇物語」のように思われる。まず、A. スミスとJ. ミル、あるいはその普及者たちが日本に紹介された。それから、「ロマンチックで歴史主義的な傾向のある、忘れられたドイツのお歴々に次々として代わられた。そのなかには、社会立法と軍隊の拡張にかかわるホーエンツォレルン連合の代弁者が含まれる。そうした見解は、本書では、スミスとミルの見解よりも明治日本の諸事実の方に適していたと記述されている」。しかし、「正確には、どの程度、またどんな理由からなのか。それは、第二次世界大戦の騒々しい体験の後でさえも、あまりに明白だから説明の必要はないのかもしれない。どんな問題であれ、同じ論議は今日もあてはまるのか。」といった問題は、詳細には論じられていない。

本書を読むかぎりでは、「明治時代の経済論議は政治的スローガンの作成と新聞の社説で論じるレベルでの論議であって、経済的な考察は社会哲学と政治的便宜ほど重要でないとして位置づけられたのであった。しかし、不況の十年間という犠牲を払ってインフレの四分の一世紀の方向を変えた、松方正義とその助言者たちは、1880年代中にもっと高いレベルで活動していたのでないか。（松方は本書でしばしば言及されているが、経済問題の解答者というよりもむしろ質問者として取りあげられている。）」。

このほかにも、批判的な指摘がいくつか認められる。田口卯吉の扱いをめぐり、かれは「1章を充てるに値すると思われる」のに論及が十分でないとか、『進歩と貧困 (Progress and Poverty)』の著者である「ヘンリー・ジョージやジョージ主義者があつかった諸問題がもつ、都市日本に対する重要性を考えれば、もっと考察を深めるに値するのは確かである。」、などといった指摘である。

しかしながら、この書評は厳しい論評に終始しているわけではない。たとえば、本書の基調である「好古趣味はけっしてすべて悪いわけではな」く、読みごたえのある魅力的な章が数多くあるという指摘もみられる。「日本の諸大学は、オックスフォードがケンブリッジと、ハーバードがイエールと異なっている以上に、たがいに明確に異なっている」ことが分析されている。個々の大学の分析のなかでも、現在の一橋大学の誕生の歴史をあつかった9章がとくに推奨される。ここでは、「事務員と簿記系の養成に満足したアメリカの影響を受けた人たちと、より高度な専門的実業家の養成を希望するヨーロッパの影響を受けた人たちとの間で、長い争い（経済的な戦いではない）がみられた」ことが、詳しく分析されている。

最後に、お雇い外国人の貢献について注目されている。たとえば、「本務以外の面によく知られた経済学者として、アーネスト・フェノロサ（東京帝国大学で経済学を教える間に日本美術への愛好心を深めた）や、カール・F. H. ロessler（1889年の明治憲法に対する中心的な外国人アドバイザーであり、独逸学協会で経済問題を論じた）にも出会うことができる。（来日前に、ロesslerは学術誌で『資本論』を論評した（1869年）最初の大学人であったと思われる。）」という指摘がみられる。

⑤の『アメリカ歴史評論』になると、ここでも、③『経済学文献雑誌』と類似の書評がみられる。『明治啓蒙期とそれ以後』は、内外の9名の執筆者による16編からなる論文集であるだけに、「スタイルの統一と単著がもつ知的明快さに欠けている。また、記述・説明しようとする内容の展開にまとまりの欠けているところがよく出てくる」。また、「何人かの執筆者は、経済学の学問的

発展を記述しようとするさい、ある特定の学校で読まれたり教科書にされた本の題名を列挙する手を用いることが実におおいが、使用された意味が利用者全員に明らかであろうと暗黙のうちに決めこんでいる。」と指摘されているのである。

しかしながら、その一方、「こうした欠陥はあるけれども、同書は、歴史家や経済学者のみならず、日本がいかにしてこれほど豊かになったか不思議に思う熱心な読者によっても、注意深く吟味されるに値する。労をいとわず注意深く本書を読む人は、日本が成功した多くの要因は現今の戦後時代よりもはるか昔にさかのぼるということを、今一度気づかされるであろう。」という位置づけもなされている。

(3)

日本における経済学を受容と制度化、到来と伝播の歴史という本論文の主題については、たとえば、松野尾 裕「日本における経済学の制度化——経済学的思惟の形成・定着過程——」（『大学史研究』7号、1991年8月）でも論じられている。また、同論文の引用注および参考文献欄のなかにも、類似の研究文献があげられている。同論文や上掲の書評論文にみるかぎり、ここに紹介したチェックランド論文には、格別の論点はないように思われる。

しかしながら、チェックランド論文では、明治時代の日本における「経済学の到来と伝播」をめぐる、実にさまざまな諸相が総論的に描かれている。すなわち、日本人指導者（福沢諭吉、大隈重信、森有礼、五代友厚）による導入と啓蒙活動、お雇い外国人教師（G. ドロップァーズ、A. F. フェノロサ）の招請、外国経済書の輸入と翻訳紹介、経済学雑誌の創刊、官立の大学・私立の法学校・政府の各省庁による経済学講義の開設、民間ジャーナリスト（『明六雑誌』『時事新報』における福沢諭吉、『東洋自由新報』における中江兆民、『国民之友』における徳富蘇峰、『東京経済雑誌』という専門誌における田口卯吉）による経済思想の普及などという諸経路を通して、経済学が到来し伝播する諸相である。

なお、本論文の原題は「明治日本における虚学の衰退と経済学の到来」と訳

すべきであろうが、その主題にかんがみ、表記のような題名に変更して紹介した。翻訳紹介にあたっては、宮田学先生（名古屋市立大学）、松村好浩先生（姫路獨協大学）、水田洋先生（元・名古屋大学）からご教示をえた。ここに記して多謝する。

最後に、本論文は、既述のように、杉山忠平・水田洋編『明治啓蒙期とそれ以後、経済学の到来と伝播（Enlightenment and Beyond, Political Economy Comes to Japan）』（東京大学出版会、1988）に収められた一編である。この一編をここに翻訳紹介することができるのも、論文の著者O. チェックランド夫人、『明治啓蒙期とそれ以後』の編著者・杉山忠平先生（刊行当時は東京経済大学）、そして東京大学出版会から許可を与えていただいたからこそである。なかでも、杉山先生には、東京大学出版会への照会の労をとっていただき翻訳許可をえていただいた。厚く感謝申しあげる次第である。

著者：Olive Checkland（グラスゴウ大学名誉フェロウ）

出典：‘“Vain” Learning and the Advent of Political Economy in Meiji Japan’, C. Sugiyama & H. Mizuta eds., Enlightenment and Beyond, Political Economy Comes to Japan. University of Tokyo Press, 1988, pp. 257-271, 320-322.

第3節 絵師・河鍋曉斎（1831-89年）と英国人（翻訳・解説）

河鍋曉斎（1831-1889年）は、海外から事実上遮断された日本の旧体制下に、芸術家・画家として育てられ教育をうけた。37才となった1868年に天皇が復位され、新日本の誕生を期待させる大変化の時代が到来した。このあらたな挑戦に対する曉斎の対応ぶりを探るのは、興味深いことである。かれが英国人とかわり合いをもったのは、身辺でおこる日本の諸変化に対するかれなりの答えであったのだろうか。

新生日本には不安定なところがあったのだが、曉斎は、あくまでも伝統的な日本画家として、みずからの技巧にふけた。それは、一日中開かれた書画会のなかで時おり示された。かれはその書画会の花形であり、会が開かれているときに、料金をとって一気に絵を次々と書きあげてみせた。すると、うっとりで見物していたパトロンたちがすぐさまそれを購入してくれた。たいていの日本人と同様に、曉斎も当初は外国人を毛嫌いしていたが、やがてかれの見方は和らいだようである。宮内庁職員・山口融（18?-1893年）がジョサイア・コンダーを曉斎に紹介したと考えられる。コンダー（1852-1920年）はお雇い外国人、すなわち、1877年に工部大学校の造家学教授として日本政府より雇用された人物であり、その余生を日本で送ることになった。当初は拒んだけれども、曉斎は、このジョサイア・コンダーの、弟子にしてほしいという頼みを受け入れた。コンダーとやはり日本に永住したフランク・ブリンクリーとを介して、英国ばかりかフランスからやって来たほかの外国人画家や美術史家も、曉斎は受け入れたのだった。注目すべきことに、曉斎と曉斎の作品をめぐる論文が100年以上前の英国の美術誌に掲載されたのである。19世紀末ころの英国の美術家たちにとって、曉斎は、たしかに、当時、もっともよく知られた当代日本人画家であったと言ってよいであろう。

曉斎の名前と作品は、コンダーが活着している間は、大衆の注目を集めていた。しかし、コンダーが死去した1920年以後になると、曉斎の作品は知られなくな

り、世間の目から消えうせてしまった。最近になって、河鍋暁斎は偉大な画家としての復権がみられるが、それはひ孫娘である河鍋楠美の献身と決断によるものである⁽¹⁾。暁斎の作品の展覧会を西洋で開くという彼女の夢は、1993年12月から1994年初頭までの間に、大英博物館が『絵画の悪魔、河鍋暁斎の美術』という展覧会を開いたとき実現をみた⁽²⁾。その展覧会目録は暁斎の作品の幅の広さだけでなく、かれの多面的な画法を明らかにしてくれる。日本では、このひ孫娘が東京の北西にある蕨（埼玉県）というところに、暁斎記念美術館を開いている。彼女はそこに暁斎の作品を展示するだけでなく、暁斎の作品について解説をする数々の講演も企画している。暁斎の「常軌を逸した才能」は、アメリカ人美術史家ブレンダ・ジョーダンの関心を引きつけてもいる。ジョーダンは暁斎の特性とその美術を研究し、この画家を理解するためのあたらしい側面をつけ加えたのである⁽³⁾。

暁斎の修業

暁斎は、1831年下総の国の古河というところに生まれた。両親はかれを周三郎と呼んだ。父親は「藤原氏の家来にされたときに」⁽⁴⁾、家名を河鍋と変更したらしい。だれに聞いてもかれは神童と言われていた。幼年のころから「観察力が鋭く、精神的に持ち前のやり方を失わないでいた」。才能が傑出していたので、父親はこの次男が芸術家になることをはじめのうちは認めようとしなかったのだが、7歳のとき、かれを江戸へ連れて行って、一勇斎国芳の画塾に入門させた。国芳は7歳の暁斎の面倒を引き受けてくれた。かれは、この偉大な師匠のところで2年間学んだのだった。

暁斎の異形なものへの関心は生涯ずっと続いたのだが、それは子どものころのおそろしい話にみられる。髪の毛が生えたままの人の首が神田川に浮かんでいるのを見つけ、それを釣り上げたというのである。父親はそれを見つけると、息子のこのぞっとするような獲物にひどく衝撃を受け、川に戻せときびしく言った。戻されはしたのだが、その時までには少年はその首の素描を書いていたのだった。

11歳のときに、両親はかれを狩野洞白の画塾に入れてもらうことができた。狩野派の面々は伝統的に徳川幕府の専属絵師であり、いくつもの流派があったが、すべて狩野家の一族が支配していた。どの弟子も士族、つまり侍の出でなくてはならず、商人階級は誰ひとりとして入門を許されなかった。暁斎は27歳になるまでずっと狩野派の師匠の指導をうけた。その後、たぶん意見の違いから狩野派を離れることになったが、狩野派の作品と絵師たちに対して、大いなる畏敬の念を失なうことがなかった。

このころの若い日本人絵師たちの修業は、本来、名人の作品を、この場合は狩野派の師匠の作品を、模写ないし再模写することからなっていたことに言及すべきであろう。暁斎の場合、切断された首であれ、自分が捕まえた食べるつもりのない鯉であれ、実物を観察したということは、当時の日本の伝統からは逸脱するものであった。

暁斎は、条約にもとづいて日本のいくつかの港が外国人に正式に開かれる一年前の27歳のときまでに、独り立ちすることを望んだが、これは何も驚くようなことではない。暁斎は、伝統が支配する画派のうやうやしい雰囲気から離脱することで、おとなしく従う意向のないことを表明したのだが、これこそこの人の特性を示すものである。自分の画派を立ちあげるとき、かれは弟子たちが名人の作品を模写するだけでなく、直接実物をモデルにして制作することもまた期待したのだった。かれの画塾を囲む庭には動物がいっぱいいて、弟子たちはそれを素描のモデルとして用いることができたと言われる。

暁斎は日本のあまり知られないところに何度も旅をしている。1867年にはその最初の旅をした。こうした旅の途中に、宗教指導者から歓待をうけ、寺院や修業寺で大幅の仏画を描いてくれるようしばしば頼まれたのだった。この点で、かれは異彩を放つ画家であり、よく考えたうえで、芝居小屋や神社仏閣のための大がかりな依頼を引き受けようとしたのだった。こうした大作を描くために「絵画の悪魔」のように取り組むとき、暁斎は大量のお酒を飲んだものだった。酒をたっぷりほどこされたときの方がよい仕事をする大画家だ、とって評判になった。1870年に、ある書画会でいいところを見せようとして、ひどく酔っ

てしまい、当局が法に触れると考えるような絵を描いてしまった。そのため、かれは捕縛され獄舎に入れられてしまった。これは、監獄体制の残忍性による恐ろしい体験となった。暁斎はやがて釈放されはしたけれども、手荒い扱いを受けたことで健康を害したのである。

監禁されて以後、かれはずっと異端児であった。これは、風刺画を描きつづけたことや、すすんで英国人に語りかけて教えようとしたことに示されている。

絵師・暁斎の弟子コンダー

暁斎とコンダーの関係は師弟の関係にあった。これは、日本人が西洋の専門家から学ぶという大きな課題に取り組んでいた時代にあっては、注目すべきことである。造家学教授から暁斎の弟子に転身したいというコンダーの意向は、めったに見られない役割の転換であった。

暁斎の日記（暁斎画談）の記載を見ると、コンダーからの最初の依頼に対するこの画家の返答が、以下のように説明されている。

「英国人」J. コンダーは、本国で油絵の手法、それに製図法を懸命に学び、実に見事な技術を身につけた。しかし、かれは筆勢の妙がある日本画を愛した。相阿弥（？-1525年）の描いた鷺の絵、探幽（狩野，1602-1674年）の描いた鷺の絵、その他みずから集めた種々の古画の持つ静けさを愛した。暇があればこれらを見るのを、無上の楽しみにしていた⁽⁵⁾。

ところが、先般、日本にやって来て政府に雇われた。これ幸いと、この機会を利用して日本の古来の画法を学ぼうと思い、古い時代のすぐれた画家の描いた絵を集めてそれを研究した⁽⁶⁾。

しかし、かれは、これらの絵を観察するだけでなく、さらに暁斎のもとで勉強をはじめようとしたのである。暁斎は「コンダーの製図の腕前だけでなく油絵のすばらしい才能についても、前々から伝え聞いています。わたしにはそのような人を教授する力も場所もありません」と答えた。暁斎は譲ることなく、何度も断ったのだが、とうとう、かれらは師弟となる約束を結ぶことになった。1880年代にコンダーと暁斎は親密になった。暁斎は、土曜日の朝になると、コ

ンダー宅におもむいて教えをつけたことは明らかである。

この二人は何度も一緒に旅をして美術の勉強をしたり、絵を描いたりした。遠出をして、日光まで出かけたことがあった。東京の北にある山がちの町で、ここには初代徳川将軍家康が祭られている。暁斎とコンダーは三代将軍家光に敬意を払い、その美しい石造建築物を嘆賞した。入り組んだ石造物で飾りたてられた階段を何段ものぼり、それから中禅寺湖に進んで何枚も絵を描いた。そこにあるいくつもの壮観な滝の魅力をとらえようと、何時間も費やした。これらの滝の壮観な光景については疑うところはない。滝については、さまざまな記述があるが、その一つにこう説明してある。

「二荒山の北西3里（12キロメートル）程のところに、霧降の滝がある。滝の水が三段となって落下しており、その上の段のところは松や杉がうっそうと繁り、下の段では深い谷の下方が狭まって葉研のような形になっている。三重の滝が岩に当たって砕け散り、水しぶきがあたかも霧雨のようになる。

このようにして、数多くの滝を、暁斎とコンダーは何日か費やして訪れ写生したのであった。暁斎は、これらの写生画を用いて滝の水勢を若い弟子たちに示したことがある。初学の人とその筆致を注意深く観察すれば、多くの点でさぞかし参考となるであろう。」⁽⁷⁾。

暁斎とコンダーは何度も一緒に旅をしたが、この日光旅行はその一つであった。二人は江ノ島と鎌倉へも旅をした。いずれも東京から遠くはない。二人の関係は家族にもおよび、コンダーの娘で暁瑞という名前をもらったヘレンもまた、暁斎のもとで制作をしたのである。コンダー家は立派な邸宅に住み、したがって暁斎の一家がそこでもてなしをうけたのはなんら驚くことではない。暁斎の娘の暁翠もまたコンダー家と親しくしており、家族間の交わりも盛んであったのである。

暁斎は1889年に死去するが、コンダーの方は引きつづき建築家としての仕事をする生活を送った。だが、コンダーはかなり日本文化の虜になってしまった。かれは日本アジア協会に「日本の装束の歴史」（1881年）、「日本の造園法」

(1886年)、「日本の生け花理論」(1890年)についての論文を発表した。また、このころ、コンダーは暁斎の絵を集めていた。かれが述べたように、その大半はコンダーが弟子で暁斎が師匠であったころに暁斎が描いた作品である。それは1880年代のことであった。コンダーはかつて一緒に活動した画家・暁斎を後世に伝えたく思ったのである。1911年には、コンダーの著書『河鍋暁斎の本画と画稿』が出版された。これには、白黒の絵が34点と中間色の挿絵が87点含まれている。これらが、暁斎の生涯と画法に関するいくつかの章とともに、本を構成している。

「画材」、「画法」、「テクニックの実例」という三つの章がある。画材についての章では、コンダーは暁斎が用いた顔料についてだけでなく、描いた紙と絹地についても論じた。コンダーは、次のように説明する。

「絵を描くのに普通用いられる紙は、透し紙と呼ばれる、すべすべした白茶っぽい生地である。……もともとは中国産であるが、いまや日本ではそれをまねた紙が作られる。厚みとこわさを加えるのに裏打ちが必要であるが、これは美濃紙と呼ばれる日本紙でおこなわれる。この裏打ちと、みょうばんの入ったどうさの洗い薬を表面に塗る作業は、紙を売って画家の利用に供する紙業者によっておこなわれる。また、通し紙よりも厚手で、なめらかで、色の白い鳥の子紙と呼ばれる優良紙がある。これは掛け軸や作品集の絵画用によく用いられる。最高の仕上がりの繊細な作品や、金箔を使用するのにとくに適している。……」⁽⁸⁾。

コンダーは、絹地に描くときは「目の詰んだ、均一の糸で編まれた薄い素材」を用いることの重要性についても、説明している⁽⁹⁾。絹地を使うことは、とくに掛け物や壁掛けの場合ごく一般的であったが、絵を描くのにふさわしい表面にするための絹地の引き伸ばし、枠組み、糊貼りは、長くてとても手間のかかる工程であることは今も昔も変わらない。

日本の画家は、この当時、これから描こうとする絵をおおまかに描くのに、木炭を使ったものである。さまざまな筆が手元にあることや、インキ(墨)が使えることも重要であった。コンダーが評したように、「最良の黒い墨は中国

産であり、その極上の黒さと純度で見分けがつく」⁽¹⁰⁾。

コンダーは、「暁斎が用いた色顔料」についても説明している。

- 藍 ケーキ状または棒からこすり落とす濃青色の顔料。インジゴに同じ。
- 緑 青 粉末状の鮮緑色顔料。銅から生じる……。
- 紺 青 青色の炭酸化銅。……最良質は紺青で、古画にみられる。……深い瑠璃色を呈する……。
- 雌 黄 ガンボージ樹脂。固形のを中国から輸入。
- 黄 土 黄土色。いつも粉末で用いられる。
- 紫 土 赤色の酸化鉄。「インド赤」色の粉末顔料。
- 代 赭 焼きシエナ土。ケーキ状または棒にして用いる。
- 緋 朱色の粉末顔料、最良品は中国から輸入。
- 丹 赤色の酸化鉛、オレンジがかった赤い粉末、最良品は中国から輸入。
- 生臙脂 ローズマターに似た色をした、中国製の植物性染料。
- きえんじ 紫がかった茶色の粉状顔料⁽¹¹⁾。

暁斎の色の活用についての最後の説明は、金粉、すなわち金箔を使用することの重要性とかかわっている。

河鍋暁斎とジョサイア・コンダーの関係は、明治日本における東洋と西洋とのあいだの、もっとも興味をそそるかかわりの一つである。日本人が英国人の先生となったのは、両者の間の親交の珍しい事例である。この場合、日本の永住者という資格をもち、日本語が流暢であったコンダーは、暁斎に頼みつくして弟子として引き受けてもらうことができた。稽古は土曜日ごとにコンダー宅で開かれたので、暁斎とコンダーの家族との間の実に友好的な関係が、暁斎の晩年において、二つの文化を越えて深まったのだった。

しかも、その家族のつながりは、今もなお、希薄ではあるが生き続けている。

ジョサイア・コンダーとその妻は東京の護国寺の境内に埋葬されている。この墓は、これまで河鍋楠美博士が守り、手入れしてきている⁽¹²⁾。

英国のほかの美術愛好家や画家たちも、暁斎の門に大勢押し寄せている。

暁斎とウィリアム・アンダソン

1870年代に、東京の英国公使館付医務官であり、海軍医学校の解剖学・外科学教授であったウィリアム・アンダソンは、暁斎を天分に恵まれた画家だとたたえた、おそらく最初の英国人であったであろう。アンダソンは暁斎を訪ねて、一連の絵の制作を注文したが、それらは1878年と1879年に仕上がった。

アンダソンは、暁斎の鳥の絵の話をしている。それは、1877年に上野で開かれた第一回美術展に出品された絵である。その絵に暁斎は100円という値段をつけたが、当時としては法外に高い値である。アンダソンが言うように、

「……自選の公式審査員たちは顔をそむけて、普通の鳥を描いた絵についてとんでもない値段に意義を唱えた。暁斎が答えて言うには、その値段は普通の鳥の値段ではなく、50年間の研究のおかげでそのように一気に絵を書きあげることができたもので、その代価のほんの一部でしかないというのである。」⁽¹³⁾

アンダソンは、「滑稽なものとか恐ろしいもの」を描こうとする暁斎の熱意を強調している。アンダソンが取りあげている「蛇と蛙」という絵は、「当然の報い」という原理を物語っている。この絵では、「蛙の群れが天敵である蛇を捕らえて、二本の杭にしっかり結びつけたうえに、蛇の体の上で踊ったり、足を踏み鳴らしたり、体を揺らしたり、あるいはしっぽを引っぱったり、麦藁でこの野蛮な蛇のあごをくすぐったり、さもないと蛇の能なしぶりに歓呼の声をあげたりして、このかつての厄介者への恨みをはらしている」⁽¹⁴⁾。暁斎の作品のなかには、この種の主題の例が実に数多く見られる。

アンダソンは、暁斎が酒におぼれることをきびしく非難した。暁斎は絵の才能があるのに、悪酔いするなかで作品の質が左右されると考えたからである。ほかの人はたいていは、酒こそが暁斎の制作への刺激剤だと見なしたのだった。

それでも、アンダソンは曉斎とその作品を好意的に評価して、こう結んでいる。

「かれには奇癖があるけれども、自由な考えの持ち主であった。というのも、子どものころから天性の一部であった美的な原理・原則を忠実に守りはしたけれども、その限界をはっきり分かっていた。かれは鳥の素描画において、どれほど多くの美しさが忠実な観察のなかにあるかを表わしたし、またその観察力をより高尚なモチーフの表現に生かすことができないと、どれほど多くのものが失われるかをよく理解した。……そして、かれは、極東の美術の進展を遅らせてきた種々の慣行に代わって、西洋の科学が学習されるのが有益であろうということを認めた。画家として、かれは、優れた腕前と素早さでもってかれなりの画法を生み出したが、その点でかれにかなう者は一門にはいなかった。また、かれの作品には率直さ、力強さ、奇抜さという特性があり、その点でどこの国のどの美術愛好家の目からでも高い評価が与えられるであろう。」⁽¹⁵⁾

ウィリアム・アンダソンは美術に関心があったので、日本美術について興味を抱くようになった。アンダソンは日本美術の真の嘆賞者であり収集家であったのか、あるいは投機的事業として日本で日本美術品を収集していたのであろうか。ロンドンに戻るとき、かれは日本美術品のコレクションを手荷物に入れて運んだのだった。1881年には、その一部を大英博物館に3,000ポンドで売却した。大英博物館の理事たちはアンダソンに依頼して『大英博物館所蔵日中絵画解説・歴史目録』を作成させ、1886年に大英博物館から出版した。544頁という大部なこの本は、アンダソンが収集した品々が多彩であることをはっきり示している。

1900年に死去したとき、ウィリアム・アンダソンは11,282ポンド3シリング相当の遺産を残した。日本から帰国後、かれはセントトーマス病院に勤務し、ハーリー通り1番地に居住したが、ここでかれは私的な医療コンサルタントを営んでいたであろう。かれが残したかなりの財産は、医者として成功したことの結果なのか、それとも持っていた日本美術品を売却した結果であったのであろうか。アンダソンは、「銅製の巨大竜」を除けば、死去したさいに所有し

ていた日本や東洋の美術品に何ら触れていない⁽¹⁶⁾。

暁斎とモーチマー・メンピス

河鍋暁斎の作品に、直接ジェイムズ・アボット・マックネイル・ホイッスラー（1834-1903年）の注意を向かせたのは、モーチマー・メンピス（1856-1938年）であった。メンピスは、ホイッスラーの「弟子」つまり生徒であり、助言者もしくは助手でもあったが、1887年3月に、ホイッスラーに何も知らせずに日本に向けて旅立った。メンピスは、ホイッスラーへの責務を顧みず、自分は「身を立て、出世するんだと心に決めた」⁽¹⁷⁾という理由で、日本への航行を決断したのである。メンピスは1887年の晩春に日本へやってきた。たぶんかれはコンダーへの紹介状を携えていたであろうし、そのコンダーが暁斎にかれを引き合わせてくれたらしい。メンピスは、このようにして、暁斎が1889年の春に死去する少し前に、かれの作品について知ったのだった。

1887年に、メンピスは「ブリンクリー船長宅」で暁斎にはじめて会い、ついで「制作中の暁斎を見学するのにまる一日」⁽¹⁸⁾を費やした。暁斎は、メンピスに次のように説明したという。

「わたしは、鳥を描こうとする前に、鳥やとくに模写したいポーズを観察します。動いて姿態が変わるすぐ直前まで、それをじっくり観察します。それから立ち去って、そのポーズを思い出せるだけたくさん記録します。たぶん3・4本ほどの輪郭線を書きつけることができるでしょうが、記憶が薄れたらすぐにそれを止めます。それから、ふたたび戻って行って、鳥が前と同じ姿勢を取るまで鳥を観察します。それからまたそれをできるだけ多く記憶にとどめます。このようにして、鳥とその一つの姿勢を観察しながら、庭でまる一日を過ごすことから始めます。そして最後には、それを描写しようとたえず試みることで、そのポーズをしっかりと記憶してしまうのです。したがって、わたしは鳥から直接ではなく、記憶のなかから完全に再現することができるのです。そのポーズの絵を心に描くことができるときには、モデルを目の前におくことは邪魔になります。わたしがす

るのは記憶から描くことですし、それが本物の印象というものなのです。」

(19)

メンピスは日本の訪問をたいへん楽しみ、「日本画」制作におおいに励んだのだった。

メンピスが日本から帰るや、ホイッスラーはかれに不機嫌そうなあいさつをした。「おい、君、詫びたまえ」と叫んだのだった。メンピスは日本で別の師匠を見つけましたと、ホイッスラーに知らせたのである。ホイッスラーは「よくもまあ、自分勝手にこの日本人を師匠と呼べたものだ。訳をいいなさい。いったいどんなつもりなんだ」と応じた。メンピスは、ただちに、自分が目にしたとおりに暁斎の手法を説明しはじめた。ホイッスラーがさえぎって「それはわたしのやり方だ」と言うと、「いや、それは暁斎の方法です」とメンピスは言った。「暁斎は桁外れの才能と崇高な学識を見せてくれました。黒い装束を描けば、美しいあふれんばかりの黒一色、肉体は透き通った素肌の色、影は全体の一部を占める塊から出てくるのです」と話を続けると、

「それはわたしの手法だ」とホイッスラーは話に割り込み、まくしたてた。「まさしくそれはわたしのやり方だ。さまざまな色あいの青や緑や黄を少しずつ使って影を描き、ついには絵の一部でなくなってしまうようなことはしない。わたしは、影を自然界にあるがままに、全体の一部として描くのだ。この暁斎はすばらしい人にちがいない。かれの手法はわたしの手法だからだ。メンピス、続けてくれ。もっと話してくれ」⁽²⁰⁾。

このようにして、モーチマー・メンピスは暁斎の技法についての情報を、英国の活動的な画家であり、日本人画家がどのように制作しているかを知りたがっている人たちに伝えたのだった。

暁斎の方法は、修業中の画家は老練な師匠の作品を、暁斎の場合は狩野派の作品を模写することに明けくれる、という日本流のやり方であった。しかし、暁斎は日本流に「記憶から」作品を描くのだけれども、直接写生もしたということを経験すべきであろう。

日本を訪れる西洋の画家たちは、フランク・ブリンクリーかジョサイア・コ

ンダーあての推薦状と紹介状を手に入れるのが普通であった。ブリンクリーは
暁斎の正式の弟子ではなかったが、日本と中国の磁器に関する権威者であった。
この段階で紹介された者はみな、1889年に暁斎が死去するまでは、かれに会い
に連れていかれて、制作中の暁斎を見るというのが普通であった。

そうした紹介状の最初のもは、エミール・ギメとフランソワ・レガメイの
紹介状であったように思われる。ギメの著書『日本散策』（パリ、1878年刊）
がひとたび美術界に出回るようになると、暁斎の名前と作品が西洋で知れ渡っ
た。エリサ・エヴェットが述べているように、「暁斎はたぐいまれな人物で、
ギメとレガメイによって知られるようになった当代の日本人画家であったから、
ヨーロッパ人にとって重要な存在となった」⁽²¹⁾。このような個人的なつなが
りは暁斎自身の奇行と、あふれるほど豊かな作品展で示されたような技巧とに
よって、強化された。かれを見学する外国人の「観客むけに」演じたいという
かれの意向は、日本の神経質な官吏たちがかなり冷やかに対応したことで、助
長されたのかもしれない。

変貌しつつある明治日本の画家としての暁斎の地位は、ブレンダ・ジョーダ
ンによって綿密に考察されている。彼女の近著は、この画家の重要性を明らか
にしている。彼女は次のように書いている。

「本質的に暁斎の芸術は、学者にも素人にもたいていは、ごく自然に魅力
と興味を生み出す。テーマと技法の多彩さ、生き生きとした筆さばき、活
気ある人物、さらに、意外なほどあの手この手で伝統に加えた変化など、
かれは美術面だけでも見るに値する画家である。しかし、自分の芸術に対
する暁斎の創造的で個人主義的なアプローチは、長い歴史のなかで日本が
もっとも重要かつめざましい時期の一つを経験しつつあるときに生まれた
ものである。」⁽²²⁾

河鍋暁斎は、おそらく東京の日本人官吏たちとの関係が窮屈だったので、英
国その他の西洋の画家たちと親交を結びたいという意向を示した。かれは、ジョ
サイア・コンダーやフランク・ブリンクリーを通じて、自分を捜し求めた西洋
の画家たちに対して寛容であったことから、100年以上も前の西洋で高い評価

をうけたのだった。現代の西洋の人たちは、ようやく1993年から94年にかけて、大英博物館で開催された、河鍋暁斎の美術品の大展覧会をみることができた。かれが「数少ないが、もっとも傑出した日本美術界の巨匠の一人」⁽²³⁾であったことは、『絵画の悪魔』という題名で開かれたその展覧会で十二分に明らかにされた。

[注]

- (1)1997年に、蕨で助けていただいた河鍋楠美に感謝。
- (2)T. Clark, Demon of Painting, the Art of Kawanabe Kyosai, London, British Museum, 1993を参照。
- (3)ブレンダ・ジョーダンに感謝。B. Jordan, Strange Fancies and Fresh Conceptions: Kyosai in an age of conflict, カンザス大学, 1993年, 未公刊の博士論文を参照。
- (4)J. Conder, Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai(Tokyo, Maruzen, 1911年; 埼玉, 河鍋暁斎記念美術館, 1993年再版) pp. 1-14を参照。
- (5)Kyosai Gadan, the life in art of Kyosai Kawanabe Torokuを参照。
Baitei Gaso 編集の日本語版からスコット・ジョンソンによる英訳, 1983年再版。この『暁斎畫談』から引用することはいつも簡単とはかぎらない。暁斎の直接の発言かどうか, 明らかでないことがあるからである。[ただし, 訳文は『図録 暁斎畫談』暁斎記念館, 昭和57, 42頁を参考にした。
……訳者注]
- (6)Kyosai Gadan, p. 36を参照。[ただし, 訳文は同上。……訳者注]
- (7)Kyosai Gadan, p. 36を参照。[ただし, 訳文は同上, 46頁を参考にした。…
…訳者注]
- (8)J. Conder, Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai, p. 18.
- (9)J. Conder, Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai, p. 19.
- (10)J. Conder, Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai, p. 20.
- (11)J. Conder, Paintings and Studies by Kawanabe Kyosai, pp. 21-22.
- (12)O. Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan, 1868-1912

- (Basingstoke: Macmillan, 1989) p. 274, Note58参照。 [杉山忠平・玉置紀夫訳『明治日本とイギリス, 出会い・技術移転・ネットワークの形成』法政大学出版局, 1996年, 344-345頁……訳者注]
- (13)W. Anderson, 'A Japanese Artist, Kawanabe Kyosai', The Studio, Vol. XV (1898) p. 32.
- (14)W. Anderson, 'A Japanese Artist, Kawanabe Kyosai', The Studio, Vol. XV (1898) p. 35.
- (15)W. Anderson, 'A Japanese Artist, Kawanabe Kyosai', The Studio, Vol. XV (1898) p. 38.
- (16)1900年10月27日に死去した, ロンドン市ハーレー通1番地, ウィリアム・アングソンの遺言書の写し。
- (17)M. Menpes, Whistler As I Knew Him. London, A and C Black, 1904, p. 39.
- (18)E. Evett, The Critical Reception of Japanese Art in late nineteenth century Europe, Ann Arbor: UMI Research Press, 1982, p. 16.
- (19)M. Menpes, Magazine of Art, 1888, p. 195.
- (20)M. Menpes, Whistler As I Knew Him. 1904, pp. 40-41.
- (21)E. Evett, Critical Reception of Japanese Art. p. 16.
- (22)B. Jordan, 'Strange Fancies', p. 339.
- (23)L. Smith, Foreword to Clark, Demon of Painting, p. 7.

[訳者解説]

(1)

本稿は, このたび刊行された J. E. ホア編『英国と日本, 人物評伝』第3巻 (J. E. Hoare ed., Britain & Japan, Biographical Portraits, Vol. III, 1999) に含まれる一篇である。同書は, ジャパン・ソサエティから刊行された「日英交流史上の人物評伝」とでもいうべきシリーズのなかの一書である。これまでに刊行された『英国と日本, 人物評伝』の第1巻 (1994年) では, ロ

ンドン、マンチェスター、グラスゴウ、ニューカスル、東京にある、大学やテクニカル・カレッジ、造船所や鑄鉄工場、日本領事館などを舞台にしてすすめられた、日英交流の諸相について考察した22篇の論文から成っている。

第2巻（1997年）では、24篇の論文が、活躍した人物の年代順に配されている。外交官がもっとも多く、ついで実業界の人物も何人か取りあげられている。同書では、東京（江戸）とロンドンを舞台にして展開された政府レベルにおける日英関係史上の人物だけでなく、日本各地を訪れた英国人が数多く取りあげられていることが特筆される。

本稿で紹介したチェックランド論文が所収されている『英国と日本、人物評伝』第3巻は、18世紀末から現代までという長い時代をにおよぶ27篇の論文を含んでいる。裏表紙に掲載された紹介文にあるように、「今回は、取り扱う時期が『人物評伝』の前二巻の場合よりもやや長い。今日の日英関係について語る事ができる少し前の、18世紀後半の、あまりなじみのない英国海軍の偉大な測量士・探検家ウィリアム・ブロートンからはじまっている。1796年と1797年のアイヌ人と千島列島についてのかれの訪問記は、1797年の韓国訪問についての説明と同じく、今もなお興味深いものがある。そして、最新のもの、つまり、現代のシェクスピア演劇の制作者で解釈者である蜷川幸雄と、日本におけるラグビーの長い物語で終わっている」。また、「その他の話では、なじみのある人物もあまりなじみのない人物も、取りあげられている。時にはわれわれの多くが知っている役割とは違った役割が、取りあげられている。」

（2）

チェックランド論文では、河鍋暁斎をとりあげ、美術の面における日英交流の推進者としての側面が考察対象とされている。「絵師・河鍋暁斎の弟子コンダー」、「暁斎とウィリアム・アングソン」、「暁斎とモーチマー・メンピス」という小見出しが示しているように、「かれが英国人とかかわりあいをもった」点が注目されている。そして、河鍋暁斎は「ジョサイア・コンダーかまたはフランク・ブリンクリーを通じて、西洋の画家たちに見いだされたのだが、かれらに対して寛容であったことから、かれは100年以上も前の西洋で高い評価を

うけた」，ということを指摘している。

まず，お雇い造家学教師のジョサイア・コンダーとの関係については，①コンダーを弟子入りさせ，稽古をつけたこと，②この「コンダーとやはり日本に永住したフランク・プリングリーとを介して，英国ばかりかフランスからやって来たほかの外国人画家や美術史家も，暁斎は受け入れた」こと，③「暁斎と暁斎の作品をめぐる論文が 100年以上前の英国の美術誌に掲載された」ことで，「19世紀末ころの英国の美術家たちにとって，暁斎は，たしかに，当時，もっともよく知られた当代日本人画家であったと言ってよい」などといった指摘が見られる。当時といえば，「日本人が西洋の専門家から学ぶという大きな課題に取り組んでいた時代」であっただけに，暁斎が西洋人に稽古をつけ，種々の感化を与えたということは，著者チェックランドが指摘するように，誠に特筆すべき事柄なのである。

つぎの，ウィリアム・アンダソンもまた暁斎を高く評価した。「暁斎を天分に恵まれた画家だとたたえた，おそらく最初の英国人であったであろう」。かれは暁斎を訪ねて，一連の絵の制作を注文した。しかも，暁斎の作品のほかにも多彩な日本美術品を収集してロンドンに持ち帰り，1881年にはその一部を大英博物館に売却した。それらの多彩な品々は，アンダソンが依頼をうけて編集した『大英博物館所蔵日中絵画解説・歴史目録』（1886年）に収録されている。

M. メンピスの場合は，「暁斎の技法についての情報」を英国に伝えた点で注目される。①かれは河鍋暁斎の作品を師匠の J. A. M. ホイッスラーに伝え，関心を喚起した。②1887年の晩春には日本を訪問し，じかに暁斎に会い「制作中の暁斎を見学するのにまる一日」を費やし，自身もまた「日本画」制作におおいに励んだ。師匠である狩野派の作品を模写することに明けくれるという，暁斎の方法を学んだのだった。③この時期に「日本を訪れる西洋の画家たちは，フランク・プリングリーかジョサイア・コンダーあての推薦状と紹介状を手に入れるのが普通であった」が，この段階で紹介された者はだれであれ，暁斎に会いに連れていかれて，制作中の暁斎に面会するというのが普通であった。そうした紹介状の最初はエミール・ギメとフランソワ・レガメイの紹介状

であったように思われる。④とくに、ギメの著書『日本散策』が1878年に刊行されたのを機に、暁斎の名前と作品は西洋で知れ渡るようになり、「ヨーロッパ人にとって重要な存在となった」。このような個人的なつながりは、暁斎自身の奇行と、あふれるほど豊かな美術展覧会で示されたような技巧とによって、強化された。

明治日本の画家としての暁斎の地位の重要性は、ブレンダ・ジョーダンが考察したように、「テーマと技法の多彩さ、生き生きとした筆さばき、活気ある人物、さらに、意外なほどあの手この手で伝統に加えた変化など、かれは美術面だけでも見るに値する画家である。しかし、自分の芸術に対する暁斎の創造的で個人主義的なアプローチは、長い歴史のなかで日本がもっとも重要かつめざましい時期の一つを経験しつつあるときに生まれたものである」。

チェックランド論文は、日英美術教育交流史研究として注目される。日英両国のかかわりのなかでもとくに、明治日本はことごとく西洋の影響下にあったわけではなく、美術教育の面においても、河鍋暁斎という個性ある人物をとおして、西洋に逆影響を及ぼしたということを論証した点で出色である。技術教育の面では、ダイアー（Henry Dyer）、エアトン（W. E. Ayrton）、ペリー（John Perry）らを通じて、日本における教育の体験が英国にもち帰られ、母国であたらしい教育実践が展開されたということはよく知られているが、美術教育の側面でも日本から外国への影響がみられたのである。

なお、翻訳にあたっては、宮田学先生（名古屋市立大学）からご教示をえた。記して多謝する。

著者：オリーブ・チェックランド（グラスゴウ大学元リサーチ・フェロウ）

出典：'Kawanabe Kyōsai (1831-89), the Painter, and the British', J. E. Hoare ed., Britain & Japan, Biographical Portraits, Vol. III, Japan Library, 1999, pp. 78-87, 360.

第5章 日英交流史研究の考察

第1節 日英交流史上の人物評伝——ジャパン・ソサエティ刊行の三書

1. 日英交流史研究

異花受精 (cross-fertilization) といって、「異なった生物個体に生じた精子と卵との間におこる受精」を意味することばがある。転じて、異なる文化・思想・学問分野の間でみられる相互交換作用ないし交流、という意味にも使われる。

日本と英国の間には緊密でとても長い「異花受精」の歴史があり、その具体相の解明をめざす著作がこのところあいついで公にされている。英国は明治日本の近代化に大きな影響を与えた国であって、外交、貿易、商業経済、教育文化、造船・鉄道・紡績・電信・道路・土木・灯台の技術などの面でみられた、両国間の多面的な関係と交流の諸相をめぐって考察されている。

そうした分野の研究は、G. フォクス『英国と日本、1858-1883年』(Grace Fox, Britain and Japan, 1858-1883, Oxford U. P., 1969) を先駆とする。その後、数々の成果があらわれており、そのなかには、下記のように、翻訳・紹介されているものもある。

Marie Conte-Helm, Japan and the North East of England, From 1862 to the Present Day. The Athlone Press, London, 1989. ISBN 0-485-11367-8. M. コンティヘルム (岩瀬孝雄訳) 『イギリスと日本、東郷提督から日産までの日英交流』 (サイマル出版会, 1990)

Olive Checkland, Britain's Encounter with Meiji Japan, 1868-1912. Macmillan, Basingstoke & London, 1989. ISBN 0-333-48346-4.

O. チェックランド（杉山忠平・玉置紀夫訳）『明治日本とイギリス，出会い・技術移転・ネットワーク』（法政大学出版局，1996）

Sir Hugh Cortazzi & Gordon Daniels eds., Britain and Japan 1859-1991: Themes and Personalities. Routledge, London & N.Y., 1991. ISBN 0-415-05966-6.

H. コータッツィ，G. ダニエルズ共編（大山瑞代訳）『英国と日本，架橋の人びと』（思文閣出版，1998）

上記の第一書は、『イギリスと日本』と題してはいるが，実はイングランド北東部という特定地域と日本との，130年におよぶ交流の歴史が対象である。中心は政治・経済・軍事面における関係史であり，そのなかでも，とりわけ工業・鉱業・造船業その他の産業での関係史が主題になっている。教育・文化面への関心は強いとはいえない。

第二書は，他稿⁽¹⁾ですでに紹介したように，英国の工業技術の日本への移植いかんということを中心テーマとしている。訳書の「出会い・技術移転・ネットワーク」という副題が示しているように，工業技術の導入による日本の近代化のなかで果たした英国の役割をめぐった考察が主題になっている。しかし，それだけにとどまらず，スコットランドを含めた英国と日本との間の，経済面ならびに教育文化面にみられる人的・物的な，幅広い交流の諸相をたんねんに拾いあげまとめている。具体的には，①幕末以来日本にやってきた英国人（外交官，貿易業者と銀行家，灯台・港湾・鉄道・電信・鉱山の技術者，船舶の製造者と運転者，技術者養成のための学校教師など）の生活と活動，②渡英した日本人（岩倉使節団の一行，理工系学生や海軍将校の留学生，造船所での実習生など）の学習と体験のほか，③商業貿易および学術面でのネットワーク，④博覧会における交流，⑤画家・デザイナー・建築家の往来など，実に多岐にわたっている。日英間の交流と関係の歴史，とりわけ技術移転の諸相の全体像を描こうとしているのである。興味深いエピソードや資料も含みこまれている。

第三書では、日英の外交が1859年に始まって以来、両国の相互理解の推進に貢献してきた人びとのさまざまな活動と、両国間の外交・経済・教育文化の面における一大推進機関であったジャパン・ソサエティ（Japan Society）の活動が、考察されている。具体的には、ジャパン・ソサエティの100年史をたどった長篇論文、ならびに日英関係史年表のほかに、政治・経済・教育文化の進展に大きな寄与をした両国の主要人物をめぐる研究論文21篇から成っており、これらをとおして、日本の開国から今日に至るまでの両国の交流の歴史を描くという形をとっている。日英交流を推進した主要人物として同書で取りあげられたのは、日本研究の先駆者、外交官、お雇い教師、軍人、文学者、宣教師、ジャーナリスト、実業家、技術者、政治家・法律顧問、経済・政治思想家など、多分野に及んでいる。

2. 日英交流史上の人物評伝

(1)

日英間の「異花受精」の歴史研究といえば、このほかに、ジャパン・ソサエティの企画になる、「日英交流史上の人物評伝」研究とでもいうべきシリーズが注目される。『英国と日本、人物評伝』と題して、これまでに下記の三書が上梓されている。

Ian Nish ed., Britain and Japan: Biographical Portraits. Japan Library Publications, Kent, 1994. ISBN 1-873410-27-1.

Ian Nish ed., Britain and Japan: Biographical Portraits. Vol. II, Japan Library Publications, Kent, 1997. ISBN 1-873410-62-X.

J. E. Hoare ed., Britain and Japan: Biographical Portraits. Vol. III, Japan Library Publications, Kent, 1999. ISBN 1-873410-89-1.

この「日英交流史上の人物評伝」シリーズの三書について紹介するには、同シリーズの第一巻よりも3年前の1991年に刊行された、前出の Sir H. Cortazzi & G. Daniels eds., Britain and Japan 1859-1991: Themes and Person-

alities (Routledge, 1991) についても、あわせて論及すべきであろう。1991年といえば、ジャパン・ソサエティの創立百周年にあたる。それを記念して、この年、英国では「ジャパン・フェスティバル1991」の開催など種々の事業が、全土で企画された。それは、1991年9月から約4カ月の間、英国各地で日本文化を総合的に紹介する行事であって、「展示、舞台公演、音楽、シンポジウム、映画、大相撲などのスポーツ、庭園や祭りを含む幅広い分野にまたがっており、セミナーや教育プログラムも含まれて」いた。「古典芸能、伝統芸術のみならず、現代日本の科学技術もカバーして日本文化および日本人の生活の全体像を浮彫りにするねらい」があった⁽²⁾。本書も、その一環として企画されたものである。

同書では、既述のように、日英の外交が1859年に始まって以来、両国の相互理解の推進に貢献してきた人びとと、両国間の相互理解・相互交流における一大推進機関であったジャパン・ソサエティとが、考察対象になっている。具体的には、ジャパン・ソサエティの100年史、日英関係史年表、ならびに日英交流を推進した主要人物のをめぐる考察から構成されている。日英交流の推進者として取りあげられているのは、日本研究の先駆者(M. ストープス)、外交官(E. M. サトウ, W. G. アストン, C. エリオット卿, E. デニング, G. B. サンソム)、お雇い教師(J. コンドル, B. H. チェンバレン)、軍人、文学者(A. ウェーリー, W. ブルーマー)、宣教師(W. ウェストン)、ジャーナリスト(C. ワーグマン)、実業家、技術者、政治家・法律顧問(F. T. ピゴット卿, F. S. G. ピゴット少将父子)、経済・政治思想家(S. ウェップ, B. ウェップ夫妻)など、多分野における諸氏である。

ただし、登場する人物は多彩であるけれども、日英交流の実をあげながら取りあげられず、漏れおちている人びとが少なくない。また、取りあげられた日本人は馬場辰猪、菊池恭三、林董、山梨勝之進、坪内逍遙の5名であるから、日英のバランスに欠けるうらみがあるように思われる。男性中心であって、女性が軽視されているという傾向もみられる。そうした反省にたってあたらしい企画が練られ、それから3年後に刊行されたのが『英国と日本、人物評伝』第

1巻なのである。

(2)

「日英交流史上の人物評伝」シリーズの第1巻『英国と日本，人物評伝』は、人物を通してみた日英交流史研究であって、22篇の論文から成っている。同書はハードカバーとペーパーバックの二種類あるが、ハードカバーの場合のカバーの袖には次のような紹介文がみられ、内容を簡便に伝えている。

「日英両国の著名人のなかで、1850年代の日本開国以後、日英間の諸問題に登場し主役をつとめた人物は、話題豊富で価値ある研究領域を提供している。(本書には、おおくの事例研究のなかに、この種の詳細な初めての研究がみられる。)

人間の点からみると、両国とも才能豊かで人格の立派な、非凡な社会層の男女をひきつけたのである。かれらはかならずしも 任務に最適の人であったようには思えないけれども、しばしば変革の促進剤としての働きをしたのであった。

本書はそうした人たちの20篇あまりの伝記を提示している。1865年に来日し英国公使として20年ほど過ごして、英日の通商と外交関係の基礎をきづいたハリー・パークス卿にはじまり、それから約60年後、連合国の日本占領期間中の英国渉外連絡部部長アルバリ・ガスコイン卿で終わっている。大きく扱われ生彩にとむ人物には、イザベラ・バード、牧野義雄、東郷元帥がいる。

特定の活動との関連で取りあげられる人物もいる。たとえば、明治期日本における英国人ジャーナリストたち、『アームストロング・ヴィカー社』と日本史、日本における英国人宣教師たち、英国で教育をうけた日本人技術者たち、そして1910年の英日大展覧会である。」

同書に収められている22篇の論文は、序文で指摘されているように、四つの時期群に大別することができる。幕末・明治期、明治35(1902)年1月30日から大正12(1923)年8月17日に至る日英同盟の期間、1920年代・30年代の両国関係の衰退期、そして戦後期、という四期のそれぞれにかかわる論文である。考察は、ロンドン、マンチェスター、グラスゴウ、ニューカスル、東京におい

て、大学やテクニカル・カレッジ、造船所や鑄鉄工場、日本領事館などを舞台にしてすすめられた、日英交流の諸相について試みられている。

このうち、たとえば、幕末・明治期の論文群では、下記のような人物がとりあげられている。①英国駐日公使ハリー・パークス卿，②英国人ジャーナリスト（ジョン・レディ・ブラック，ウォルタ・デニング，ロバート・ヤング，ジェムズ・マードック，F. V. ディキンス，フランシス・プリングリー，H. S. パーマーなど），③英国人宣教師（ヘンリ・フォウルズ，バークレイ・バックストン，アーサー・ロイド，ビショップ・エヴィントン，ジョン・バチェラー），④英国を訪れて活躍した日本人，たとえば山尾庸三・菊池恭三らの技術者，日本郵便制度の創始者・前島密，大英博物館を拠点に活躍した生物・民俗学者の南方熊楠，夏目漱石・野口米次郎・高楠順次郎といった研究者，画家で著述家の牧野義雄，⑤1878年から1897年まで4度の日本旅行を試みたイザベラ・バード。

（3）

『英国と日本，人物評伝』第2巻もまた，第1巻と同じように，1850年代の日本開国以後の，日英間の関係と交流を推進した人物評伝研究である。全部で24篇の論文からなり，活躍した年代順に配されている。

本書の特徴的事項をあげると，つぎの諸点が重要であろう。第1に，日英交流の推進者として，本書でもっとも多く取りあげられているのは外交官である。明治時代に活躍したラザフォード・オールコック卿，ローレンス・オリファント，ジョン・ハリントン・グビンズ，陸奥広吉。戦前と戦後期にかけて英国の日本大使館に在任した吉田茂，重光葵，そして英国大使館に勤務したヴェーア・レデネン（Vere Redenen）卿の諸氏である。また，極東国際軍事裁判所の一員として来日し，後には仏教研究で成果をあげ，しかも英国仏教会を創設したクリスマス・ハンフリーズをめぐる論文も含まれている。

そのほか，エンジニアも取りあげられており，井上勝ならびにエドモンド・モレルという，明治日本における鉄道建設のパイオニアについて，それぞれ考察されている。日本の銀行制度の確立に寄与した大蔵省紙幣寮顧問のA. A.

シャンド、戦間期のロンドンで横浜正金銀行ロンドン支店支配人として活躍した加納久朗子爵、といったビジネスマンについての論文も収められている。

以上の諸氏はいずれも政府レベルにおける関係と交流の歴史上の人物であり、おもに東京（江戸）とロンドンを舞台にして展開された日英関係史上の人物であった。これに対して、東京（江戸）だけでなく日本各地を訪れた英国人が数おおく取りあげられていることは、本書の第2の特徴としてあげることができる。日本文化の紹介者ラフカディオ・ハーン（松江・熊本・東京で活躍）、宣教師として函館に赴任しアイヌ研究やアイヌ伝道に専念したジョン・バチェラー、婦人宣教師として来日したが、宣教師を辞して救済活動に専念したハンナ・リデル（九州で活躍）。さらには、J. W. ロバートソン・スコット（新潟と東北地方）、バーナーズ・ショルモンデリー（小笠原諸島）、リチャード・ボンソンビー・フェイン（京都）といった、先記の諸氏に比べればあまり知られていない人びとも取りあげられている。

第3に、本書には、個人の評伝的研究というより、特定テーマを掲げてそこからからむ人物を考察している論稿が、何編かある。戦後の経済史上の重大事項である1962年日英通商航海条約について、日本の視点と英国の視点のそれぞれからみた2編の論文。「明治時代の英国王室の日本訪問」、ならびに「1921年5月の裕仁皇太子の英国訪問」と題する論文。「英国の日本領事活動、1859-1941年」。さらには、「戦後日本の小説家の英国への影響」と題して、英訳された日本文学が英国の出版社および読者へおよぼした影響をあつかった論文が、それである。

なお、第1巻・第2巻の編者であるイアン・ニッシュは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（ロンドン大学）の国際史の名誉教授である。第2巻のハードカバー版の、カバーの袖にある編者紹介によると、かれは「英国における日本研究の重鎮の一人であり、これまでに幅広い著述、とりわけ日英同盟と列強の海外政策とに関する著述をなしている。ごく最近、『国際協調主義との日本の闘い、1931-33年の日本・中国・国際連盟（Japan's Struggle with Internationalism: Japan, China and the League of Nations, 1931-19

33)』を刊行した。また、日本研究ヨーロッパ協議会 (European Association of Japanese Studies) の会長をはじめ、著名な地位をいくつも占めてきた。1991年には、日英関係に関する学問的貢献に対して、日本政府から勲章を受けた。現在はロンドンのジャパン・ソサエティの副会長の一人でもある」。これらの日本研究は『イアン・ニッシュ論文集』としてまとめられ、最近、「現代日本研究者精選論文集」のなかの一書として上梓されている⁽³⁾。

ニッシュはまた、このほど刊行され始めた『日英交流史1600-2000』全5巻の監修者の一人でもある⁽⁴⁾。同書は、今から5年前の1995年に、当時の村山富市首相の提唱で、日英交流の歴史研究を支援するために創設されたプロジェクト「日英歴史研究プロジェクト (Anglo-Japanese History Project)」の成果である。1600年のウィリアム・アダムスの日本漂着から今日に至るまでの、政治・外交、経済・商業、社会・文化、陸・海軍において見られる交流史の諸相が考察され、5巻本にまとめられて英語と日本語でそれぞれ刊行されることになっている。

(4)

『英国と日本、人物評伝』第3巻の場合は、18世紀末から現代までという長期間におよぶ27篇の論文を含んでいる。英国海軍の測量士・探検家であり、1790年代にアイヌと千島列島の訪問記を残したウィリアム・ブロートンから、あたらしいシェクスピア解釈で制作する演出家の蜷川幸雄、ならびに「日本におけるラグビーの発展に対する英国の貢献、1874-1998年」までが扱われている。裏表紙にも、つぎのような紹介文がある。

「今回は、取り扱う時期が『人物評伝』の前二巻の場合よりもやや長い。今日の日英関係について語る事ができる少し前の、18世紀後半の、あまりなじみのない英国海軍の偉大な測量士・探検家ウィリアム・ブロートンからはじまっている。1796年と1797年のアイヌ人と千島列島についてのかれの訪問記は、1797年の韓国訪問についての説明と同じく、今もなお興味深いものがある。そして、最新のもの、つまり、現代のシェクスピア演劇の制作者で解釈者である蜷川幸雄と、日本におけるラグビーの長い歴史で

終わっている。」

「その他の話では、なじみのある人物もあまりなじみのない人物も、取りあげられている。時にはわれわれの多くが知っている役割とは違った役割が取りあげられている。」

本書の特色をあげるとすれば、第1に、これまで扱われることの少なかった人物ないし活動面が取り扱われていることが注目される。伊藤博文の1863年におけるロンドン訪問、探検家・旅行家で事業家でもあったトーマス・ライト・ブラキストンの鳥類の研究、18世紀にアイヌ人ととともにクリール (kurile) 島を探検したウィリアム・ブロートン、1860年代ロンドンで購入した図書をもとに相当の資産を形成した福沢諭吉、戦間期に横浜正金銀行のロンドン支店長をつとめた加納久朗、などがそれである。

第2に、明治政府に雇い入れられた数々の英国人が登場している。海軍教育に寄与したアーキバルド・ダグラス將軍とダグラス使節団、砲兵隊教師であり後にはジャーナリストになったフランク・ブリンクリー、工部大学校のお雇い教師として活躍した科学者のヘンリー・ダイアーやJ. A. ユーイングがそれである。そのほか、政府雇いではない英国人として、ロンドン大学キングス・カレッジの中国語教授であり、ロンドンにおける日本語新聞の開拓者および日本の英文学のパイオニアとなったジェイムズ・サマーズ、日本聖公会の設立に寄与したA. C. S. ショウ大執事とE. ビッカーステス監督、1920年代はじめの2年間に日本へやって来て日本の自動車産業を指導したアルバート・ジェイムズ・ペニアル、といった人びとも登場している。

その反面、本巻では外交の関係者はそれほど多くない。1890年代の日英条約協議で大きな役割を果たした青木周蔵、両国の外交交渉の周延にあって、民間レベルでの日英交流の推進に寄与した麻生和子、伝説の駐日英国大使 (1967-72年) ジョン・ピルチャー卿、鑑定家としても知られる外交官ジョン・フィッギス、といった諸氏が取りあげられている。

第3に、美術家や著述家が登場していることも注目される。英国人の弟子を受け入れ日本美術を英国に伝えた絵師・河鍋曉斎の考察、ラファエル前派の絵

画や詩作、とりわけミレイ作『オフェリア』が夏目漱石に及ぼした影響をめぐる考察、ジョン・モリスの戦前の東京体験とジョージ・オーウエルの小説（1984年）との関連をめぐる考察、などがそれである。このうち「絵師・河鍋暁斎（1831-89年）と英国人」と題する論文は、河鍋暁斎とジョサイア・コンダー、ウィリアム・アンダソン、モーチマー・メンピスとの交流、ならびに日本人絵師から英国への影響、という側面を考察した点で特筆される。

なお、本書の編者 J. E. ホーアは、在京城英国大使館（1981-85年）や在北京英国大使館（1988-91年）などに勤務したあと、現在は北アジア・太平洋地域研究グループ（the North Asia and Pacific Research Group）の長をつとめ、日本・中国・韓国・北朝鮮に関する多数の著作がある。『日本の条約港と外国人居留地』（Japan's Treaty Ports and Foreign Settlements, Japan Library, 1994）や『東洋の大使館』（Embassies in the East, the Story of the British and Their Embassies in China, Japan and Korea from 1859 to the Present, Curzon, 1999）という著書もある。

最後に、『英国と日本、人物評伝』全3巻は、類書に比べてみると、表題が示しているように、文字どおり人物を通して見た両国間の交流史の全体像を明らかにすることが主題になっている。もっとも、それぞれの人物がどのような点において日英交流史上の人物たりえたのか、まさにその点にスポットをあてて詳述するということはなく、それだけに人物描写は概括的にながれている作品が多いように思われる。それでも、この三書は日英教育文化交流史をめぐる平易で簡便な案内書として実に有益であり、個別研究のテーマを簡単に見つけだすことができる宝庫である。

それからもう一つ、三書は、英国から日本への影響面だけにとどまらず、日本から英国への逆影響という側面についても大きく取りあげた論文が含まれている点で注目される。美術の面における河鍋暁斎、工学教育におけるヘンリー・ダイアーをめぐる論文などが、とりわけそうである⁽⁵⁾。

〔注〕

(1) 拙訳「明治期・英国の日本人技術者たち」、名古屋大学教育学部教育史研

究室『教育史研究室年報』第2号(1996年12月)55-71頁。記者解題においても、日英交流史上の人物評伝シリーズについて説明した。本稿は、この記者解題と重複するところがある。

(2) ジャパンフェスティバル1991日本委員会事務局『ジャパンフェスティバル1991, The Japanese Greatest Arts Festival Ever Staged in the United Kingdom』平成3年, 3頁, 参照。

(3) Ian Nish Collected Writings, Edition Synapse, 2000. ISBN 4-931444-39-3. [The Collected Writings of Modern Scholars on Japan, Vol. 6]

(4) 細谷千博, イアン・ニッシュ監修『日英交流史1600-2000』全5巻, 東京大学出版会。同書第1巻, 政治・外交I, および第2巻, 政治・外交IIは2000年3月に既刊。'The Completion of the Anglo-Japanese History Project', The Japan Society Newsletter, No. 226 (Spring 2000) p. 3.

(5) なお, 筆者は, この『英国と日本, 人物評伝』シリーズに所収された論文のうち, O. チェックランド (Olive Checkland) の論文3篇を翻訳・紹介したことがある。同書第1巻に含まれる 'Working at their Profession': Japanese Engineers in Britain before 1914', 第3巻に含まれる 'Henry Dyer at the Imperial College of Engineering Tokyo, and afterwards in Glasgow', および 'Kawanabe Kyōsai (1832-89), the Painter, and the British' の3点である。拙訳「明治期・英国の日本人技術者たち」, 名古屋大学教育学部教育史研究室『教育史研究室年報』第2号(1996)55-71頁; 拙訳「工部大学校都検ヘンリー・ダイアー—日英交流の推進者」, 大学史研究会『大学史研究』15号(2000年6月)所収 [本報告書第1章第6節]; 拙訳「絵師・河鍋曉斎と英国人」『教育史研究室年報』6号, 2000年7月, 33-50頁所収 [本報告書第4章第3節], 参照。

第2節 明治日本躍進の研究——H. ダイアー（平野勇夫訳）『大日本，技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』（1999）

（1）

だれが言い出したのか，日本は「東洋の英国」と呼ばれることがある。

この「東洋の英国」という言葉を好んで用いた英国人がいた。ヘンリー・ダイアー（Henry Dyer）である。日本と親密な関係をもちつづけたかれは，早くから日本がそうなるよう期待して，支援を惜しまなかった。

ダイアーは，明治初年に工部省の招きでスコットランドから来日したお雇い教師である。工学寮および工部大学校（のちの東京大学工学部）の都検（教頭）として，また土木・機械工学教授として活躍し，日本の工学教育の基礎づくりに貢献した。

明治6（1873）年から15（1882）年までの滞在中，そのような職務を通して日本の近代化事業に参画したし，日本を観察し日本通になることができた。帰国後も，日本と親密な関係をたもち，日本のあらゆる事物に対して関心をもちつづけた。やがて本格的な日本研究に着手すると，これらの日本体験が存分に生かされた。

その成果は，今世紀のはじめに，まず『大日本』（1904）という大著になってあらわれた。これには「東洋の英国，国民進化の一研究」という副題が添えられている。ついで，『世界政治のなかの日本，国際力学の研究』（1909）という厚冊もあらわれたし，「日本の教育と国家的効率」（1904）や「日本からの教訓」（1908）などという論稿もある。

これら一連の日本研究において，かれは早くから日本が「東洋の英国」になるよう期待したし，やがてそうなるであろうと確信し，実際にそうなったと称賛したのであった。そのさい，かれが一貫して着目していたことがある。日本の近代化にはたした教育の役割である。日本の急速な成長は「すべて国民教育の強固な基盤の上で展開されてきた」ということである。そのさい，自生的に

工業化がすすんだ母国・英国との比較考察をとおして、日本の国家的教育制度に注目し、日本の経験は「英国への教訓となる」と説いたのであった。これらのことは、三好信浩『ダイアールの日本』（福村出版）などに詳しい。

(2)

ダイアールの日本研究のうち、このたび『大日本』の翻訳が成り、刊行された。原著は450頁を越え、訳書では550頁におよぶ大著である。全部で20章から構成されて入る。訳書の章見出しは説明訳が加えられ、

工部大学校と私

封建制の崩壊

日本人の心情

移行期——明治維新から日英同盟まで

教育の普及

陸軍と海軍

交通と通信手段

産業の発達

伝統工芸と美術界の動向

商業と貿易

食糧の供給と農水産業

植民政策と移民

立憲政体の確立

行政組織の整備

財政と金融の改革

悲願の条約改正と対外関係

外交の展開

社会と生活の変貌

将来の展望、補遺——日露戦争の勃発

という広大な内容から成っている。まえがきには、「世界が一九世紀後半の奇跡とみなしたもの、つまり日本が国際社会の一員として台頭してきた過程で、

その原動力となったものは何であったのか」に注目するとある。近代化の成功要因についての分析が目ざされたのである。その要因としてダイアーがとくに重視したのが、教育政策と教育制度であった。「近年この国で起こった事態の進展は、すべて国民教育の強固な基盤の上で展開されてきたということである。政府は国民の先頭に立ってあらゆる種類の教育機関の設立を奨励し、支援を与えてきた。国民もまた、政府と民間団体から提供された教育施設を熱心に利用してきた」ことが注目された。なかでも、政府が政策を決定し、「科学技術教育に重点的に財源を配分したこと」が特筆されたのだった。

この『大日本』については、評者なりに格別の感慨がある。西洋教育と日本教育の出会いと交流に興味をもっていただけに、この本は前から気になっていた。最初は、大学院時代（昭和50年度）に内外教育文化交流史をテーマとするゼミでの報告用に、国会図書館に所蔵されている同書の1905年版を手にしたのが最初である。背には十六葉八重表の菊花紋が印刻されており、重厚なおもむきがある。ついで、「近代日本教育の確立過程における欧米教育の受容に関する比較的研究」という科研費総合研究（代表者：江藤恭二先生，昭和54・55・56年度）においても、本書を活用して、工部大学校やお雇い教師をめぐる日英交流史の一端を調べたことがある。そんなとき、本書の共同翻訳の話をもちかけられたこともあった。評者にはとても荷が重すぎて期待には応えられなかっただけに、このたびあたらしい企画のもとに待望の翻訳が成ったのだから、誠にありがたい。

早くから関心をいただいていたといっても、本書は大部であるだけに、くまなく読んだ訳ではない。第5章「教育の普及」のほか、第1章や最終章を活用した程度であるが、それでも、おおいに魅了されたところがある。とりわけ、工部大学校を介してみられる日英間の教育文化交流、そのなかでもとくに日本から英国への影響にかかわる言辞である。「欧米教育の受容」をめぐる科研グループであったが、評者の主たる関心はむしろ日本から英国への逆影響の側面にあったのも、本書に魅せられたところが大きい。

本書でダイアーのいうには、明治15（1882）年6月1日付で工部大学校を辞

して帰国後、グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジ（ストラスクライド大学の前身）の開設と運営に参加したとき、自分は「日本の教科課程をこの新しい大学に取り入れることができた」。同カレッジの『学課および諸規則』をみればわかるように、それは「日本での教育体験の成果を導入したことを示している」という。これは、ダイアーがいうように、実に「教育史上の一つの興味ある事実」であるにちがいない。

工部大学校からの影響はグラスゴウの技術カレッジに限らない。自分は、これまで、小冊子『技術者の教育』（1879）をはじめ、機会あるごとに、英国の工学教育の欠陥を指摘しその改善策を提示してきたが、「今日、イギリスのカレッジはほとんど例外なく、あの当時私たちが工部大学校で採用した技術教育の改善策をそっくり取り入れていると言ってよかろう」とも述べている。たとえば、ケルヴィン卿がグラスゴウ大学でジェームズ・ワット工学研究所を設けたとき、かれは「この種の研究所を最初に設置したのは日本の工部大学校であることを披露した」が、その「工部大学校が教科課程のすべての分野に導入した実験と図表を駆使する方法は、いまではイギリスのどこのカレッジでも、ごく普通のことになっている」。そのほか、「私が日本で技術者教育に導入した理論と実践を結びつけるやり方も、実習の〈サンドウィッチ方式〉の名のもとに、さかんに推奨されている」のである。

これだけにとどまらない。工部大学校に雇い入れられた英国人教師は、J. ミルン、E. ダイヴァーズ、W. E. エアトン、J. ペリーなど、そのほとんどが帰国後「科学と教育の分野でよく知られた存在」となり、しかも、それまで「日本で働いたときの経験を生かして、母国イギリスの科学技術教育の環境作りに強い影響を及ぼしてもきた」、というのである。

英国への逆影響について、ダイアーが述べているところを要約すれば以上のとおりである。今では、前出の三好信浩著をはじめとして、逆影響の諸相についての論証作業が試みられてきているが、当時の評者にとって、これは実に新鮮で魅力ある事柄であった。本書では工部大学校ないし工学教育の影響をめぐるかぎりでの話であるが、内外の交流ないし関係の歴史を分析するさいには、

これまでのような外国モデルの輸入論としてだけでなく、モデル輸出論としても立論することが可能であることを示唆している点で重要である。交流というなら、先進モデルの輸入と輸出の両面、さらには環流面の諸相をも考察の対象にすべきであることに気づかされたのであった。日英の交流と関係について数ある研究文献のなかで、本書は、日本から英国への逆影響の面を指摘したきわめて初期の事例であろうと思われる。

日本教育の逆影響といっても、考えてみれば、それほど不思議なことではない。というのも、わが国が指導を求めていた当時の英国といえ、実は自国の技術教育体制の不備ゆえに工部大学校に強い関心を示し、同校を理想視していたところがあった。当時の英国の新聞や雑誌、たとえば『エンジニア』『エンジニアリング』『ネイチャー』などを調べてみると、かなり頻繁に工部大学校を取りあげている。その内容は多岐に及んでいるが、とりわけ教科課程の内容編成と教育システムには強い関心を示しているように思われる。大学要覧をもとにした詳細な解説記事をのせ、そこから自国の工学教育に対する反省をひきだし、同時に工部大学校における教育の特質とその世界的な先進性に言及しているのである。

(3)

『大日本』は、刊行当時、大きな関心をもって迎えられていた。刊行された翌年の書評要約雑誌(The Cumulative Book Review Digest, vol. I)には、6誌に載った書評がみられる。また、ダイアーのもう一つの大著『世界政治のなかの日本』(1909)の見返しの遊び紙には、8誌にのった書評の抜粋が掲載されている。

そのなかには、封建国家から発展して「世界の近代史におけるアジア最初の大勢力」に至った日本についての情報源について、「周到に用意して書かれた正確な追加物」(『デイリー・クロニクル』)と称えるものもあれば、「構想は冷静で、方法は科学的、情報は詳細かつ確かであって、めったに兼ね備えることのない数多くの長所を合わせ持っている。」(『マンチェスター・ガーディアン』)という指摘もみられる。

今日でも、本書は多角的な視座からの日本研究、大量の統計資料を活用した実証的な考察であるということのほかに、先見性のある、批判的な指摘を含むという点に着目するむきもある。「グローバリゼーションという言葉はまだできていなかったが、かれは、スエズ運河の開通、電信の発明、シベリア横断鉄道の建設といった技術開発に由来する、世界の中の幾多の多様な影響について記述している。世紀が進むにつれ、世界の『縮小』が人びとの生き方に大きく影響するということ为先見の明でもって見抜いていた。」といった類いの指摘である。

本書には、右の評言にもあるように、「詳細かつ正確な」日本情報が大量に含みこまれていることが興味深い。同じような日本体験をもった外国人はほかにも少なくなかったのに、ダイアーがこれほどまでの日本情報に恵まれた理由は何か。これを考えてみると、まず第一に、日本の外務省をつうじて資料を入手できるようになっていたことが注目される。1902年に「帝国財政及工業通信員」に任命され、日本の財政事情と経済社会の現況を英国に紹介するという任務を、秘密裏に委嘱されていたのである。外務省外交史料館には、それを裏付ける機密扱いの文書が残されている。

第二に、工部大学校関係者からの協力もとうぜん考えられる。教え子の田辺朔郎が、明治37（1904）年の12月15日に、グラスゴウのダイアーからこの『大日本』を贈られたが、同書には「成績優秀な工部大学校卒業生・田邊朔郎教授に贈呈。『大日本』執筆へのご協力に感謝。友情と尊敬のしるしとして。ヘンリー・ダイアー」と書き添えたということである。同書には、参照した重要文献が各章の終わりに一括して掲げられ、そのなかにかんがりの日本語の文献がみられるが、かれら教え子たちの協力があればこそであろう。本書の「まえがき」には、「日本各地のさまざまな分野で活躍している私の教え子たち」へという謝辞が記されている。

そのほか、まえがきには「日本にいる大勢の友人たちに大変世話になった」とある。そのなかでも、とくに「日本政府の重要刊行物を余さず私のもとに送り届けてくれた」阪谷芳郎大蔵次官と、英字紙『ジャパン・デイリー・メール』

の社主兼主筆であったC. F. ブリンクリーの二人の名前をあげて、謝辞を述べている。

また一つ、明治期日本の実像を考察した大著が加えられたことを、喜びたいと思う。

[ヘンリー・ダイアー著，平野勇夫訳『大日本，技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』実業之日本社，1999年12月]

第3節 日本・スコットランド交流史研究——O. チェックランド（杉山忠平・玉置紀夫訳）『明治日本とイギリス』（1996）

（1）

スコットランドといえば、スコッチ・ウイスキーを連想する人がおおいであろう。「蛍の光」や「故郷の空」というスコットランド民謡、ネッシーで知られたネス湖のことを思いうかべるかもしれない。松本清張の推理小説『黒の回廊』にでてくるリーヴン湖、『セント・アンドリュースの事件』の舞台になったゴルフ場のことをあげる人もすくなくないであろう。

しかし、スコットランドと日本がとても深い交流の歴史をもち、影響しあっていたということに関心をもつ人は、あまり多くないであろう。その交流の跡はいまなお偲ぶことができる。この日本・スコットランド交流史研究にかかわる取材をするため、筆者はスコットランドに滞在したことがある。そのさい、図書館やアーカイヴズでの史料調査、関係者の子孫へのインタビューなどを試みたのだが、このたび刊行された翻訳書『明治日本とイギリス』の原著者オーヴ・チェックランド夫人にお会いしたのも、そのときであった。

（2）

チェックランド夫人に会うことになったのは、一つの記事がきっかけであった。『グラスゴウ・ヘラルド』紙の1987年7月18日号にのった、「スコットランド人サムライの足跡をたどる (On the trail of the Tartan Samurai)」と題する特集がそれである。

記事はウイークエンド版のほぼ一面をつかい、「前世紀の日本の産業革命は、スコットランド人ヘンリ・ダイアー教授（グラスゴウ大学工学士号の最初の取得者）と若いサムライ山尾庸三（現在のストラスクライド大学に在籍）の大きな影響をおよぼした仕事に、いかに依存していたか」を報じている。

この記事を読むと、どうにも気になる一節があった。グラスゴウ大学のチェックランド夫人が、明治期の日本とスコットランドの関係史に関する著書を仕上

げつつあるというのである。同書のなかで、アンダソン・カレッジ（ストラスクライド大学の前身）の夜間学級で、「山尾庸三が初年度にはA. S. ハーシェルの機械学および熱学の講義に、その後は音響学と光学の講義に出席したということをはっきりさせた」。後年、工部大学校（のちの東京大学工学部）の都検となり、その教育と経営において山尾と協力しあうことになるH. ダイアーも、実はそれらの講義を受講していた。「かれらのたどる道はその後に交差することになるが、当時どのような関わりあいももっていたとは思われない」、ともある。

ダイアーと山尾がグラスゴウのアンダソン・カレッジに同時期（1904）に学んだことは、ダイアー自身が『東洋の英国・大日本』という自著のなかで記している。同カレッジの夜間学級で山尾を見かけたことがあるとも書きとめているが、はたして山尾はどんな授業をとったのであろうか。また、二人は単なる同窓生（schoolmate）であって同級生（classmate）ではなかったかどうかなどということは、筆者にとって、かねてからの検討すべき課題であったのである。

そこで、チェックランド夫人にインタビューすることにし、グラスゴウ大学のカレッジ・クラブのバーで会うことになった。例のW. マッキルヴァニーの推理小説『レイドロウの怒り』（早川書房、中村保男訳）のなかにも登場するバーである。グラスゴウ警察のレイドロウ警部が、部下をともなって立ち寄り、ライム・ジュース入りの炭酸水とラガー・ビールをそれぞれ飲みながら、スコットランド人の学問観に触れたり、大学アカデミズムを批判したりしているのだが、バーの「四方では、どっしりした建物と、がらんとした校庭がグラスゴウの市街地を締め出して、まるで過去に通じる竪穴の入口にでも来ているような気持ちにさせるのだった。」と書かれている。

そんな雰囲気のあるバーで、筆者たちは夫人の秘書を交えてランチを楽しんだ。そのさい、上記の疑点をふくめ、日本・スコットランド交流史にかかわる史料や視点、それに事跡調査のことについて話がおよんだ。

夫人は執筆原稿のうちの第5章を持参してこられ、筆者はそれをいただくこ

とになった。その見出しは「The Educators」となっていたが、やがて1989年に刊行された Britain's Encounter with Meiji Japan, 1868-1912では、「Educators for Engineers」に改められている。注も全部で51番から64番に増補されている。同書こそ、このたび翻訳書が刊行された『明治日本とイギリス』なのである。

(3)

『グラスゴウ・ヘラルド』紙の特集記事には、もうひとつ、気になるところがあった。工部大学校の一大特色である、サンドイッチ・システムを導入した教育課程にかかわる記述である。

具体的にいうと、工部大学校では、6年間の教育課程のうち、入学後の2年間は「英語・英文学、地理学、数学、工学、化学・物理学・製図学を含む、科学を基礎とする幅広い教育課程」を履修するが、つぎの2年間は、「毎年6カ月をダイアーが赤羽に設立した工場で過ごし、残りの6カ月は工部大学校で工学の7分野（土木工学、機械工学、化学、電信術、鉱山学、冶金学、建築学）のうちのどれかひとつについて理論学習ないし実験実習をする」ことにあてられた。最後の2年間になると、全期間を赤羽の工場か、政府の管轄下にあるどこかの官営工場で実地研修をする、というものである。

こうした教育課程はダイアーが先導して導入したといわれるが、いったいこれはどのようにしてこれを構想するに至ったのか。これも筆者の検討課題であったのである。

ダイアーは、帰国後の1905年、ある講演のなかで、「わたしが日本に導入したエンジニアの訓練における理論と実践の結合の方法は、今日では徒弟制度の『サンドイッチ』方式という呼び名で強く奨励され、またある程度実践に移されています」といっているが、この方式を構想し導入するには、それに先だつ何らかの体験なり情報なりがあったであろうことが、とうぜん考えられる。これについて、新聞記事にはつぎのような説明がみられる。

「ダイアーは、グラスゴウで長期の夏期休暇中に実習した経験をもっただけに、工学の作業場で実習する必要性についてのジェンキンの勧告と、

ラッセルのいう理論学習と実地研修の期間を交互におこなうこととを結びつけて、自分の学生たちが所定の期間を工場か作業場で過ごすよう求める構想を作りあげた。」

ここにでてくる J. S. ラッセルとは著名な造船技師であり、1869年に自著『体系的技術教育』を刊行し、同著では、ヨーロッパの実情を紹介して政府支援による技術教育の必要を訴え、また、理論学習と実習の期間を交互におこなうことを勧告したのであった。その前年には、古くからある土木技術者協会が、内外の技術者教育について詳しい報告書をつくるよう委託していた。この報告書は1870年に出版されるが、当時エディンバラ大学工学教授であった F. ジェンキンによる、機械製図の必要性に重きをおいた重要な見解をいくつか含んでいる。

ダイアーは学生時代における実習体験と内外の類似の事例についての情報とを結びあわせて、サンドイッチ・システムを構想し日本に導入したのである。当時の英国は、技術教育体制の充実に腐心していただけに、工部大学校のこの教育課程に強い関心をしめし、『ネイチャー』や『エンジニア』といった科学技術の専門雑誌では早くも1875年から論究されている。A. マーシャル『経済学原理』でも、初版（1890）から注目されている。

（4）

『明治日本とイギリス』は、以上のような工部大学校をめぐる日本・スコットランド交流史の考察にとどまるものではない。確かに同校などを介してすすめられた、英国工業技術の日本への導入いかんが中心テーマであるが、それだけでなく、スコットランドを含めた英国と日本とのあいだの、経済ならびに教育文化面における人的・物的な、幅広い交流の歴史をたんねんに拾いあげまとめているのである。具体的には、日本における英国人（外交官、貿易業者と銀行家、灯台・港湾・鉄道・電信・鉱山の技術者、船舶の製造者と運転者、技術者養成のための学校教師など）の活動、英国における日本人（岩倉使節団の一行、理工系学生や海軍将校の留学生、造船所での実習生など）の活動のほか、商業および学術面でのネットワーク、博覧会における交流、画家・デザイナー・

建築家の往来など、多岐にわたっている。

日英交流の研究といえば、すでに、M. コンティヘルム（岩瀬孝雄訳）『イギリスと日本、東郷提督から日産までの日英交流』（サイマル出版会）という類書があるが、これはイングランド北東部という特定地域と日本との、130年におよぶ交流の事跡を描いたものである。それに、政治・経済・軍事面での関係史、そのなかでも、とりわけ工業、鉱業、造船業その他の産業との関係史が主題になっていて、教育・文化面への関心は強くない。

同じ日英交流といっても、『明治日本とイギリス』は、もっと広範な局面をあつかい、英国全体の諸相を対象にしていることに加えて、英国から日本への影響面だけでなく、日本から英国への逆影響という側面についても大きく取りあげていることが注目される。文字どおり、日英間の「交流」の諸相を考察している。明治期の日本は先進諸国の教育文化を一方的に摂取したとみなされがちであるが、そのなか、本書は日本モデルの逆輸出というあたらしい視点からも、日英交流のさまざまな局面について具体相を分析しようとしたのである。

しかも、日英交流のなかでもとくにスコットランドとの交流面に着眼し、それを大きく取りあげたことが特筆される。スコットランドといえば、19世紀後半期に、科学技術教育で世界の先頭をきっていた。北政巳『国際日本を拓いた人々』（同文館）などですでに明かにされたように、明治期日本の工業化と工業教育の体制づくりは、英国のなかでもとくにスコットランド人およびスコットランドで教育をうけた人びとの指導のもとで推進されただけに、『明治日本とイギリス』は、近代日本教育の国際関係をあきらかにするうえで、とても有益なものがある。

もっとも、日本の近代教育に対するこうした視点は、あたらしいものではない。たとえば、レスター大学のW. H. ブロックは、1980年5月24日、英国科学史学会の年次総会における会長基調講演「日英関係：19世紀末の東京・ロンドン・グラスゴウにおける工学」のなかで、工部大学校をめぐる日英教育文化交流史を考察するさい、すでに明示している。三好信浩『ダイアリーの日本』

（福村出版）でも、ブーメラン現象という用語を用いて、お雇い英国人教師を

介した日本からグラスゴウとロンドンにおける技術教育への影響が紹介されている。

北政巳著，M. コンティヘルム著，三好信浩著につづいて，日本と英国，とりわけスコットランドとの出会いと交流にかかわる著作をもったことを，喜ぶたいと思う。

[O. チェックランド著，杉山忠平・玉置紀夫訳『明治日本とイギリス，出会い・技術移転・ネットワークの形成』法政大学出版局，1996年6月]

第4節 明治期日本人留学生の母校——ストラスクライド大学200年史研究

1. 待望の創立記念史

『ジョン・アンダソンの遺産』。さきごろ、こんな題名の本が贈られてきた。アンダソンを創立者とするストラスクライド大学の創立 200年記念史である。スコットランドのグラスゴウにあるこの大学は、日本と深い関係があるだけに注目される。

創立者のアンダソンといえば、大学開放の先駆者のひとりとして知られる。グラスゴウ大学の自然哲学教授時代（1757-96年）、グラスゴウの市民と職工たちのあいだにみられた学習要求にこたえて、自然哲学の実験コースを、正規の学生だけでなくかれらにも開放していたのである。

そのような体験と遺言書のなかで描いた構想とにもとづいて、アンダソン・インスティテュートという成人専用の学習機関が誕生した。1796年のことである。本学はこの年を創立年としている。やがてここから、熟練職工層が中心になってつくったメカニクス・インスティテュートと称する自主的な組織体が派生し、ここを拠点に成人たちの自己実現を目指す活動が展開されたのだった。これらの機関は、その後さまざまな発展経路をたどり、名称を何度か変更し、いくたびか吸収合併をしたのち、現在のストラスクライド大学に至るのである。本書は、このような「2世紀にわたるアンダソンの知的遺産の影響」を考察するものである。

2. 実学の重視

ストラスクライド大学は、実学人材の教育という点で特色ある歴史をもっている。アンダソン自身、自著『物理学原理』にみられるように、科学知識の応用、実用的な教育の推進ということに強い関心があった。その遺志をつぎ、本学は創立以来、幾多の技術教育課程を用意し、社会の変化しつつある要求にこたえて「実学」を提供してきた。多数の技術者が輩出され、そのなかには、テ

レビの発明者 J. L. ベアド、BBCの創設者 J. リース、スコットランドとアメリカで石油会社を興した J. ヤングの名前が光っている。探検家 D. リヴィングストンはここの医学部出身であった。

創立 200年目にあたる昨年、同校から送られてくるレターヘッドやクリスマスカードには、大学の紋章の下に

「実学の200年 (200 years of useful learning)」

という標語が、あらたに加わっていた。実学こそ本学の教学の根本精神なのである。

もっとも、創立初期には物理学、化学、数学の教育研究が重視されていた。西部スコットランドの経済が機械や造船への依存を高めるようになると、機械工学、土木工学、造船学への重視が目だってきた。そして、王立技術カレッジと名のつた1912年ころまでに、本校は上級工学の学問中心地として世に知られるようになる。応用科学における高いレベルは、1919年に大学補助金委員会から直接補助金が支給されたことに示されている。

西部スコットランドの盛んな経済活動は、ヴィクトリア時代の1888年に、グラスゴウにもスコットランド商業カレッジを誕生させたが、本学は、1964年になると、これをも傘下にいれた。設立勅許状をえて大学（ユニヴァーシティー）に昇格し、ストラスクライド大学と名のつたときである。

さらに、先般、1993年4月1日になると、ジョーダンヒル教育カレッジをも合併している。70年以上にわたる教師教育の歴史をほこり、英国ではこの種の最大でもっとも評価の高い学校である。

このようにして、本校は、社会のニーズにこたえて多彩な教科目を提供し、今や文字どおり総合大学に至っている。現在あいかわらず工学と理学を重視しており、コンピューター科学と電気工学がこの分野の最大の学科であるが、かつての理工系の学校は、美術、商学・経営学、教育学などをも含みこんだ、幅広い教育研究活動の拠点となったのである。

3. 日本との交流

ストラスクライド大学は、何よりも、日本との緊密な関係がある点で注目される。とくに明治期に日本から何人もの留学生がここに学んだし、お雇い教師のヘンリー・ダイアーを介して、かれが主導した日本での工学教育実践がこの大学に移し入れられようとしたからである。

本書にも、索引のなかに「Japan」という見出し項目があり、本文に9名の日本人が登場している。山尾庸三、石丸虎五郎、馬渡八郎、高峰讓吉、宮島可次郎、松田清一、竹鶴政孝、北川政、鈴木重初の諸氏である。工部大学校に招かれたお雇い教師H. ダイアーおよびA. W. トムソンも登場している。

右の日本人9名のうち、最初の3名は開国前の渡英であった。まず、山尾は文久3（1863）年に、伊藤博文ら長州藩士4名と一緒に、ジャーディン・マセソン商会の船で密出国。ロンドン大学ユニヴァシティ・カレッジで2年間学んだのち、グラスゴウにやってきた。ストラスクライド大学の前身であるアンダソン・カレッジの夜間学級に学び、そのかわり、ロバート・ナピエの造船所で徒弟修業をした。伊藤博文は、山尾のこのような「グラスゴウでの体験にもとづいて、工学校でエンジニアと職人を養成する計画を構想し」、それは工部大学校として結実することになる。東京大学工学部の前身にあたる。

その工部大学校に招かれて都検（教頭）の任にあったダイアーは、「サンドイッチ課程教育を組織化し、立派な学校を設立したので、日本人があたらしい高等教育制度を作るさいに用いるアイデアの真の提供者であった」。実学重視のカリキュラム編成と、大学内に草創期から工学部を明確に位置づけるという、わが国工学教育制度の生みの親といってもいいであろう。

ダイアーの教育構想が実現し、工部大学校が成果をあげたのも、帰国後に新政府に出仕し工部大輔から工部卿になった山尾より、誠心誠意の支援が与えられたことに負うところが大きいといわれる。ダイアーはグラスゴウ大学に進学する前、徒弟修業中にアンダソン・カレッジの夜間学級に通っていたというから、ふたりは同カレッジの同窓の間柄であったのである。

次の石丸虎五郎と馬渡八郎は、慶応3（1866）年に、グラバー商会のT. B.

グラバーらの支援で英国に密航した。アンダソン・カレッジに学んで、理工系の知識を身につけた。石丸虎五郎は、のちに工部省の電信頭や造船所長を歴任している。

高峰讓吉のばあいは、工部大学校の一期生として1880年に化学科を卒業後に、アンダソン・カレッジのヤング実験室に学んでいる。「スコットランド最大の会社であるセント・ロレックス化学工場で年季奉公の口をえた」記録もある。

ダイアーが1883年にグラスゴウに戻ってからも、一段とおおくの日本人留学生がやって来た。グラスゴウは英国技術教育の発祥地であり、本学とグラスゴウ大学の両方で、世界最先端の工学や造船学を学ぶことができたのである。それに、学理の教育を現場での実務経験と組みあわせることも、重視されていた。「このようにして、アンダソン・カレッジは、学生の教育を介してだけでなく、山尾とヘンリー・ダイアーの非常に重要な関係のゆえに、日本が工業化を目ざす過程で大きな役割をはたした」のだった。

その後も日本人留学生はつづき、1890年から1905年までに16名を数えたという。かれらはたいてい機械工学を専攻した。宮島可次郎（東京帝国大学の出身）のばあいは、造船学を学んでいる。

竹鶴政孝は大正7（1918）年の留学であって、この年度の化学講師E. J. ウィルソンの「最優秀学生のひとり」であったという。「帰国するやニッカ・ウィスキー会社を創設し、これによって日本ウィスキー産業の創始者になった」ことはよく知られている。

1920年代になると、日本海軍関係の留学生が目立ってくる。北川政と鈴木重初がそうであって、ふたりは海軍機関学校の出身である。それぞれ、1925年度と1928年度に機械工学を専攻し、のちには海軍工兵大尉と海軍少佐になっている。

かれらが学んだ校舎はいまも残っている。ロイヤル・カレッジ・ビルディングといって、グラスゴウ市庁舎の北側にある。レンガ風造りのその建物は、厳かで重みのある風情がただよっている。今は化学・電気工学・薬学・生理学などの教室や研究室が入っており、実験研究を繰り返す白衣姿が行きかうのが窓

越しに見える。もとは本大学の母体である王立技術カレッジ、さらにはその前のグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの校舎であった。本書の表紙裏から見返し（きき紙）にかけて、この校舎を描いた絵が掲載されており、雄姿を忍ぶことができる。

日本から帰国後のダイアーが活躍したのも、この建物であろう。グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの理事として、技術教育のあたらしい学科課程の編成や、「賞つき修了証書や学位記を授与する制度」の創始などに尽力したのである。本書では、ダイアーは「このような刷新策が称賛されるのはすべて自分によるものだとはいっていないけれども、かれはその刷新策を確かに承認しており、後年、それと東京の工部大学校で自分が作った制度とを比較している。」とあって、ダイアーの指導性について日本ほどの評価は与えられていないけれども、かれは工部大学校での諸種の体験と成果を生かして、同カレッジの教育改革に寄与したことにまちがいない。

このような交流と関係は、今また一段と深められようとしている。ストラスクライド大学創立 200周年にあたる昨年、同大学と東京大学の大学間交流協定が結ばれた。ヘンリー・ダイアー・シンポジウムも開催されている。しかも、今年には工部大学校が設立されて 120年目にあたることから、それを記念して、この3月、同校の後身である東京大学工学部はストラスクライド大学と協同で、日英相互交換シンポジウムを開いたのである。「日本の工学の先達ヘンリー・ダイアーの業績を評価し、21世紀に向けて工学教育と技術移転を広く討議するため」、という趣旨からの催しである。

[J. Butt, John Anderson's Legacy, the University of Strathclyde and its Antecedents 1796-1996. Tuckwell Press, 1996. ISBN 1898410682]

第5節 ストラスクライド大学200年史研究 —— J. バット『ジョン・アンダソンの遺産』(1996)

1. 大学史研究の新動向

『ジョン・アンダソンの遺産』と題する図書が、先ごろ刊行された。「ストラスクライド大学発達史, 1796—1996年」という副題があるように、ストラスクライド大学の創立200周年記念史研究である⁽¹⁾。スコットランドのグラスゴウにあるこの大学は日本とも深い関係があり、特徴ある歴史をもっているだけに、その歴史研究が注目される。

大学史研究といえば、近年、ひとつの研究動向がみられる。第一に、個々の大学の組織と機構の沿革を記録し、著名な先祖をたたえるというかつて支配的であった伝統に代わり、できるだけ広く社会的・政治的・経済的・文化的な背景のなかに位置づけて、大学の歴史を分析しようという動きである⁽²⁾。

第二に、共同事業として企画され執筆されるという傾向もめだっている。一人で全体を執筆するのではなく、おおくの研究者が協力して執筆するという体制である。執筆体制の変化は研究の視点およびスタイルの変化と連動しているのであって、通史的叙述から問題史的叙述へという変化も認められる。おおくの執筆者が参画し、各人が専門とする特定のテーマを担当するという体制であり、何冊かの本からなる叢書方式での刊行が採用されようとしているのである。

英国のばあいでは、オックスフォード、バーミンガム、それにアバディーンの各大学史の叙述がそうである。そのなかでも、とくにアバディーン大学の500年史研究叢書の刊行事業が注目される。これは通史という形で執筆し刊行するのではなく、大学史上の個々のテーマを、大学の部外者をも含めた何人もの研究者にそれぞれ委託し、問題史的に考察し刊行するという企画である。同じスコットランドのグラスゴウ大学においても、そうした体制と方式が計画されている⁽³⁾。

2. 『ジョン・アンダソンの遺産』の構成と特色

(1)

近年の大学史研究にみられる以上のような動向のなか、本書『ジョン・アンダソンの遺産』はどうかというと、いささか趣を異にしている。

第一に、本書は主要人物とイベント中心に記された全体的・通史的叙述である。ブックカバーにある紹介文には、創立者の偉業を検討し、大学の来歴をたどるのがねらいだとある。

「有用なる実業的学習、とりわけ科学をいかにして社会に応用するかということに重点を置きながら、また教養ある都市エリートの統制を受けながら、啓もうの時代に高等教育の代替モデルが一般に論じられた。

グラスゴウのジョン・アンダソン教授（1726-96年）は、資産の大半を新大学設立のために遺増して、このような考えを具体化した。本書は、そのアンダソンの貢献を検討・評価し、2世紀にわたるかれの知的遺産の影響ぶりを考察するものである。

アダム・スミスの時代に生まれただけに、アンダソンの『大学』はヴォランティアによって実現された。その科学技術教育の重視策は、急激な社会経済の変ぼうの影響を受けた都市社会の求めに応えたものであった。

1850年代以降は国際的な関連をもち、その後150年間に大きな進展をみた。1920年までに、一部は誕生したばかりの大学補助金委員会から、また一部はスコットランド教育局から資金を受けて、スコットランド第一の科学技術教育センターになった。

名称を何度も変更し、またいくたびか吸収合併をしたのち、その変則的なステイタスは1964年にストラスクライド大学として組織化された。本書のかなりの部分は、最近の歴史と現在の国際的な地位にいたる進展ぶりを取りあげている。」

創立祝賀記念史であり、通史的叙述であるという本書の性格は、目次からもうかがわれる。本書は10章から構成され、次のような見出しになっている。各章の区切り方は、大学の組織・機構の変化が重要なメルクマールになっている

ことがわかる。創立者の偉業から起筆し、吸収合併を繰り返しながら、かつての技術系学校が総合大学に成長する経緯と事情についての通史的な叙述なのである。

- 1 ジョン・アンダソン（1726－1796年）とその遺言書
- 2 インスティテューションから大学へ，1796－1830年
- 3 統合と発展，1830－60年
- 4 あたらしい大学＝技術カレッジ，1860－86年
- 5 第一次吸収合併と王立技術カレッジの出現，1887－1914年
- 6 戦争，平和，不況，再度の戦争，1914－45年
- 7 大学昇格運動，1945－64年
- 8 第二次吸収合併，あらたな研究課題と発展
- 9 1980年代の大学
- 10 第三次吸収合併と西暦2000年代，1991年以降。

第二に、執筆形式の点でも、本書の特色がみられる。共同執筆でもなく、また何人かが各人得意のテーマで一冊づつを担当するという叢書方式でもない。J. バット教授一人による単著なのである。

著者バットはロンドン大学およびグラスゴウ大学で学んだあと、1959年から本学（当時の校名は王立科学技術カレッジ Royal College of Science and Technology）の教授陣に加わり、ついで1964年には新設の経済史学科に移籍し、長らく経済史の教授であった。ストラスクライド大学副学長の職にもあった。1960年から同大学の歴史について研究を開始し、創立200年目にあたる1996年の1月に本書を刊行したものである。

本書はバット教授による単著の形をとって刊行されてはいるが、実は、同大学では、早くから全学的な本学の歴史研究グループが生まれていた。1954年に、創立200周年にあたる1996年をめざして「96グループ」という研究会が組織され、以来営々と、本学の歴史上のトピックスをめぐる研究と関連資料の収集がつづけられてきていたのである。このたびバット教授の手で200年史が成るには、この「96グループ」における調査と研究の成果がおおいに活用されたの

である。

「96グループ」という研究組織は、本学の歴史の調査研究と関連諸資料を収集し、その歴史への関心を増大することを期して設けられた。バット教授の前任者であるリース (S. G. E. Lythe) 教授の主導で成ったもので、本学の教員 (リース、バット両教授のほかに土木工学教授 I. H. バーなど)、付属図書館やアーカイブズのスタッフ、本学の歴史をテーマとする研究論文で学位を取得した卒業生⁽⁴⁾などが参加している。1954年2月24日の第1回から1996年6月10日の最終回まで、毎年一回の研究集会が開かれ、本学史上の人物ならびに特定のトピックスにかかわる43件の研究発表⁽⁵⁾ (そのうち、1965年は「ストラスクライドと海洋」というシンポジウムを開催) が積み重ねられている。関連する資史料 (書簡、回想録、肖像画、基石の銘、写真、模型と実験器具、蔵書印、新聞記事、ポスター、パンフレット、インタビュー・テープなど) の収集と、それらの展示会もまた、精力的におこなわれている⁽⁶⁾。

(2)

本書の特徴を理解するには、近年の大学史研究の動向と比較するだけでなく、同大学のこれまでの沿革史研究と比べることも重要である。

本学の歴史研究書としては、二書ある。A. H. セックストン『最初の技術カレッジ』(1894)、および J. ミュア『ジョン・アンダソン』(1950)である⁽⁷⁾。

第一書は、本学の母体となったグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジ (Glasgow and West of Scotland Technical College) の歴史研究であり、同校に統合されるいくつかの学校の沿革が記されている。章構成は次のようになっている。第1章 時代と立地。第2章 創立者。第3章 アンダソン・インスティテューション、1796-1828年。第4章 アンダソン・ユニヴァシティ、1828-1877年。第5章 アンダソン・カレッジ、1877-1887年。第6章 メカニックス・インスティテューションと科学技術カレッジ (College of Science and Technology)、1823-1887年。第7章 グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジ。第8章 アラン・グレンズ校、1843-1894年。第9章 アンダソン・

カレッジ医学部，第10章 技術カレッジ織物部，1877-1894年。

このような章見出しと時代区分に象徴されているように，本書は，制度機構の統廃合と指導的人物の活動が主要な関心事であり叙述の対象になっている。創立者J. アンダソンの口絵のほかに，本学の歴史を特徴づける創立関係文書，建築物，教室，著名教授の写真ならびに図版がふんだんに使用されており，全部で108点を数える。

第二書は，5章から構成されている。①本学の創立者アソダソンの生涯と技術教育および成人教育における先駆的な実践，②『物理学原理』その他のアンダソンの著作ならびに発明品（鉄砲や砲弾），③実験器具・博物展示室・図書室の構造と特色，④アンダソンが構想した新大学プランの具体的内容，⑤そこから生まれたアンダソン・インスティテューションとグラスゴウ・メカニックス・インスティテューションの設立経緯と活動内容，について考察した5章である。これに，遠大な新大学構想を記したアンダソンの遺言書の全文が，付録されている。

第一書が全体的・通史的叙述であるとすれば，この第二書は問題史的な叙述の傾向がみられる。また，両書はともに，学内の機構と組織の変遷史，ならびに大学を指導する人的成員の顕彰という性格が強く，社会のなかの大学，あるいは世界のなかの大学という位置づけはほとんどみられない。しかし，大学をとりまく環境にかかわる視点が乏しいといっても，叙述は具体的な史料をおおいに活用ないし提示しながらすすめられている。このような地味で確かな先人の作業があればこそ，のちになってたらしい大学史像を描くことができるものである。

3. 成人教育の拠点

ストラスクライド大学は，創立以来，英国の歴史の古い諸大学とはいくぶん異なった伝統をもっている。とりわけ注目されるのは，次の三点である。第一に，成人の自主的な教育・学習活動の拠点であったという歴史を前史および創立当初にもっていること。第二に実学こそ本学の根本精神であり，長い実学教

育の伝統をもっていること。第三に日本との興味深い交流関係が認められること、である。以下では、これらについて本書で語られていることを紹介して、本書の概要紹介にかえたいと思う⁽⁸⁾。

まず第一に、本学は成人の教育・学習史上に特異な位置をしめている。向上心と自己改善の意欲をもった成人たちの学習活動と余暇充実活動の拠点であった歴史を、前史ならびに創立当初にもっているのである。

そもそも本学の創立者ジョン・アンドソンは、大学開放の先駆者のひとりであった。グラスゴウが工業都市として活況を呈した18世紀の後半期、具体的には1757年から96年までグラスゴウ大学自然哲学教授であった期間中に、同僚の教授たちと同じように、グラスゴウの市民と職工たちのあいだにみられた学習要求にこたえて、自分が担当していた自然哲学の実験コースを、正規の学生だけでなくかれらにも開放したし、種々の工夫をしてかれらの学習を支援していたのである。

グラスゴウといえ、もともとは543年以来宗教活動の拠点であった。それが、1707年のスコットランドとイングランドとの合邦を機に、次第に産業都市に変貌した。合邦によってアメリカ植民地との貿易がスコットランドにも開かれると、この貿易の拡大によって、18世紀には経済的に大発展をみる。アンドソンの時代には、アメリカ貿易、とりわけタバコ産業は後退したけれども、クライド峡谷の石炭と鉄という天然資源が開発されたことで、産業革命の一大中心地となって進展することになる。そのようななか、数学や自然哲学（物理学）の実験を取り入れた教育に対して、大きな需要が生まれてきたのである。そうした学習熱は、アンドソンが教えた自然哲学の実験コースが大きな反響を呼んだことにあらわれている。

アンドソンは、この体験をもとに、「遺言書」のなかで新大学の進展を願った遠大な構想を残した。そこには婦人学級の開設、聖職者ではない理事からなる運営委員会の構成、「健全なる宗教、有用なる学問、寛大なる精神」にもとづいた大学運営についての条項が含まれていた。

そのような経験と遺言書のなかで描かれた構想をもとに、まず、アンドソン・

インスティテュートという成人専用の学習機関がグラスゴウに誕生することになった。1796年のことである。本学はこの年を創立年としている。やがてここから、熟練職工層が中心になって作ったグラスゴウ・メカニクス・インスティテューションと称する自主的な組織体が派生し、ここを拠点に成人たちの自己実現を目指す活動が展開されたのだった。本書では、第1章および第2章において詳述されている。

これらの学校は、その後さまざまな発展経路をたどり、名称を何度か変更し、グラスゴウにある諸機関を吸収合併したのち、現在のストラスクライド大学に至るのである。

すなわち、①アンダソン・インスティテューションに始まるアンダソン・カレッジ、②同校付属のヤング応用化学講座、③グラスゴウ・メカニクス・インスティテューションを起源とする科学技術カレッジ、④アラン・グレンズ校、⑤アトキンソン・インスティテューション、というグラスゴウにあった技術教育機関が統合されて、1887年にグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジが設立する。同カレッジはその後王立技術カレッジ、さらには王立科学技術カレッジと改称し、これが母体となって、1964年には商業カレッジを併合して現在のストラスクライド大学が誕生したのである。これらは、グラスゴウ地域における商工業の発展と緊密なかかわりをもち続けた。数千名のエンジニア、医者、科学者（ジョン・ロジィ・ベアドやダビド・リヴィングストンなど）に対し理論学習と実務訓練の場を提供したし、王立科学技術カレッジとして知られることになる技術学校は、世界的な名声を確立したのである。

4. 実学の重視

第二に、本学は、実学人材の教育という点でも特色ある歴史をもっていることが特筆される。アンダソン自身、自著『物理学提要 (Institutes of Physics)』にみられるように、科学知識の実際的応用いかんという点に強い関心をもっていた。その遺志を受けつぎ、本学は、創立以来、幾多の技術教育課程を用意し、社会の変化しつつある要求にこたえて「実学 (useful knowledge)」

を提供してきた。日々の教育研究活動を、その時代の商工業や経済生活とに
関連づけて展開することを重視してきたのだった。応用科学、工学、経営学を重
視する傾向は、ながく続いている。

本学から多数の技術者が輩出されたのも、そのようなことと関連がある。そ
のなかには、テレビの発明者 J. L. ベアド、BBCの創設者 J. リース、ス
コットランドとアメリカで石油会社を興した J. ヤングの名前が光っている。
探検家 D. リヴィングストンはここの医学部出身であった。創立 200年目に
あたる1996年、同校から送られてくる書簡のレターヘッドやクリスマスカード
には、大学の紋章の下に、「実学教育の200年 (200 years of useful learn-
ing)」という標語が、あらたに加わっていた。実学こそ本学の教学の根本精
神なのである。

もっとも、創立以来、実学教育が目ざされてきたといっても、開設される教
科の幅にはとうぜん変化がみられた。創立当初には物理学、化学、数学の教育
研究が重視されていた。それが、西部スコットランドの経済が機械と造船への
依存を高めるようになると、機械工学、土木工学、造船学への重視が目だっ
てくる。そして、王立技術カレッジと称した1912年ころまでに、本校は上級工学
の学問中心地として世に知られるようになる。応用科学における水準の高さは、
1919年に大学補助金委員会から直接補助金が支給されたことによくあらわれて
いる。地元では、何世代ものあいだ、親しみをこめて「ザ・テック」と呼ばれ
ている。

西部スコットランドの盛んな経済活動は、ヴィクトリア時代の1888年に、グ
ラスゴウにもスコットランド商業カレッジ (Scotland College of Commerce)
を生み出したが、本学は、1964年になると、これも傘下に入れた。この吸収合
併により、本学は美術、経営学、社会諸科学をも含みこんだ幅広い学問を基盤
とするに至った。この年には、設立勅許状をえて大学 (ユニヴァシティ) に昇
格し、従来の校名も変わってストラスクライド大学となった。1980年代には、
造船工学から薬学にいたる諸要求に応じて、商工業界とより緊密な接触をもつ
ことになったし、研究部門ならびに大学院教育の充実がはかられた。

先般、1993年4月1日には、さらにジョーダンヒル教育カレッジ（Jordan-hill College of Education）をも合併している。同校は、70年以上にわたる教師教育の歴史をほこり、英国のこの種の教育機関のうち最大規模であり、もっとも評価の高い学校であった。

以上のようにして、本校は、社会のニーズにこたえて多彩な教科目を提供し、今や文字どおり総合大学に成長したとあってよい。グラスゴウ大学およびエディンバラ大学について、スコットランド第三の大学になるまでに発展した。現在あいかわらず工学と理学を重視しており、コンピューター科学と電気工学がこの分野の最大の学科であるが、かつて理工系の教育を重視した学校は、人文諸学、商学・経営学、教育学などをも含みこんだ、幅広い教育研究活動の一大拠点となったのである。創立者アングソンが構想した総合大学は、ようやく実現をみつつあるとあってよいであろう。

5. 日本との交流

第三の注目点は、ストラスクライド大学が日本と緊密な関係をもっているということである。とくに幕末ならびに明治期に日本から何人もの留学生が本学に学んだし、お雇い教師のH. ダイアー（Henry Dyer）が工部大学校を拠点にして主導した実践的工学教育の方式が、この大学に移し入れられようとしたからである。

本書には、索引のなかに「日本（Japan）」という見出し項目があり、本文中に9名の日本人が登場している。山尾庸三、石丸虎五郎、馬渡八郎、高峰讓吉、宮島可次郎、松田清一、竹鶴政孝、北川政、鈴木重初の諸氏である。日本人留学生のほかに、工部大学校に招かれたお雇い教師H. ダイアーおよびA. W. トムソン（Arthur Watson Thomson）もまた登場している。

上記の日本人留学生9名のうち、最初の3名は日本が開国する前の渡英であった。まず、山尾は文久3（1863）年に、伊藤博文ら長州藩士4名と一緒に、ジャーディン・マセソン商会の船で密出国した。ロンドン大学ユニヴァシティ・カレッジで2年間学んだのち、グラスゴウにやってきた。ストラスクライド大学

の前身であるアンダソン・カレッジの夜間学級に学び、そのかたわら、クライド河岸にあるロバート・ナピエの造船所で徒弟修業をつんだ。伊藤博文は、山尾のこのような「グラスゴウでの体験にもとづいて、工学校でエンジニアと職人を養成する計画を構想し」⁽⁹⁾、それは工学寮ならびに工部大学校として結実することになる。東京大学工学部の前身にあたる。

ダイアーは、工部省のロンドン代理人ヒュー・マセソンに推薦されて来日し、10年間（1873-83年）工学寮ならびに工部大学校の都検（教頭）の任にあった。「サンドイッチ課程教育を組織化し、立派な学校を設立したので、日本人があたりらしい高等教育制度を作るさいに用いるアイデアの真の提供者であった」⁽¹⁰⁾。実学重視のカリキュラム編成と、大学内に草創期から工学部を明確に位置づけるという、わが国工学教育制度の生みの親といってもいいであろう。

ダイアーの教育構想が実現し、工部大学校が成果をあげたのも、帰国後に新政府に出仕し工部大輔ならびに工部卿に就いた山尾より、誠心誠意の支援が与えられたことに負うところが大きいといわれる。ダイアーはグラスゴウ大学に進学する前、クロンストンヒルの鋳物師でエンジニアのジェームズ・エイトキンの会社での徒弟修業中に、アンダソン・カレッジの夜間学級に通っていたというから、二人は同カレッジの同窓の間柄であったのである。「このように、アンダソン・カレッジは、学生の教育を介してだけでなく、山尾とヘンリー・ダイアーの非常に重要な関係のゆえに、日本が工業化を旨とする過程で大きな役割をはたした」⁽¹¹⁾のだった。

次の石丸虎五郎ならびに馬渡八郎のばあいは、慶応2（1866）年に、グラバ-商会のT. B. グラバーらの支援で英国に密航した。グラスゴウのアンダソン・カレッジに学んで、理工系の知識を身につけた。石丸虎五郎は、のちに工部省の電信頭や造船所長を歴任している。

高峰讓吉のばあいは、工部大学校の一期生として1880年に化学科を卒業したのちに、アンダソン・カレッジのヤング実験室に学んでいる。「スコットランド最大の会社であるセント・ロレックス化学工場で年季奉公の口をえた」という記録もある⁽¹²⁾。

ダイアーが工部省お雇い教師の任務を終えて1883年にグラスゴウに戻ってからも、一段とおおくの日本人留学生がやって来た。グラスゴウは英国技術教育の発祥地であり、本学とグラスゴウ大学の両方で、世界最先端の工学や造船学を学ぶことができたからである。それに、学理の教育を現場での実務経験と組みあわせるという教育体制も、重視されていたからであった。

その後も日本人留学生はつづき、1890年から1905年までに16名を数えたという。かれらはたいてい機械工学を専攻した。宮島可次郎（東京帝国大学の出身）のばあいは、造船学を学んでいる。

竹鶴政孝は大正7（1918）年の留学であって、この年度の化学講師 E. J. ウイルソンの「最優秀学生のひとり」であった。「帰国するやニッカ・ウイスキー会社を創設し、これによって日本ウイスキー産業の創始者になった」ことはよく知られている⁽¹³⁾。

1920年代になると、日本海軍関係の留学生が目立ってくる。北川政と鈴木重初がそうであって、両名は海軍機関学校の出身である。それぞれ、1925年度と1928年度に機械工学を専攻した。のちには海軍機関大尉と海軍機関少佐になっている。

以上のような、日本人留学生の留学記録はとても興味深いけれども、史実の点で別段あたらしいところは見られないように思われる。巻末の文献一覧に明記されているように、実は、北政巳（創価大学）が1980年に同大学において調査し発掘した史料に依拠するところが大きいし、北の先駆的著書『国際日本を拓いた人々』（同文館）の第6章や、O. チェックランド（杉山忠平・玉置紀夫訳）『明治日本とイギリス』（法政大学出版局）などで論及ずみの事柄なのである。

かれらが学んだ校舎は今も残っている。ロイヤル・カレッジ・ビルディングと称しており、グラスゴウ市庁舎の北側にある。現在は化学・電気工学・薬学・生理学などの教室や研究室が入っている。もとは本学の母体である王立技術カレッジ、さらにはその前身のグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの校舎であった。本書の表紙裏から見返し（きき紙）にかけて、この校舎を描い

た絵が掲載されており、往年の校舎の面影をしのぶことができる。

日本から帰国後のダイアーが活躍したのも、この建物である。かれは、グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの理事として、また同カレッジの教務・人事委員会の一員ならび大学要覧（Calendar）検討委員会委員長として、技術教育のあたらしい学科課程を編成するさい、「きわめて重要な役割を果たした」⁽¹⁴⁾。また、機械工学、電気工学、化学、造船学のディプロマを新設し、徒弟制度を活用しながら3年間学校で学習したのち、試験合格者には「賞つき修了証書ならびに学位記を授与するという制度」の創始に、尽力したのである。本書では、ダイアーは「このような刷新策が称賛されるのはすべて自分によるものだとは言っていないけれども、かれはその刷新策を確かに承認しており、後年、それと東京の工部大学校で自分が作った制度とを比較している。」⁽¹⁵⁾とあって、ダイアーの指導性について日本におけるほどの評価⁽¹⁶⁾は与えられていないけれども、かれは工部大学校での諸種の体験と成果を生かして、同カレッジの教育改革に寄与したことにまちがいない。

もう一人のお雇い教師 A. W. トムソンについては、かれは「ヘンリ・ダイアーが校長であった工部大学校で3年間（1878-81年）を送った」こと、グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの最初の非常勤講師に任命され、土木工学ディプロマを開設したことなどについて、簡単に触れられている⁽¹⁷⁾。

6. むすび

『ジョン・アングソンの遺産』は、ストラスクライド大学の創立200年史研究である。近年の大学史研究は祝賀記念史的な叙述から分析的な研究にすすんでおり、執筆と刊行の体制においてもあたらしい動きが見られるのだが、本書は従来の伝統的な大学史研究の特徴を多分におびている。

しかしながら、本学は成人の教育学習活動の拠点として先駆的な歴史をもっているし、実学人材の教育機関として傑出した活動を展開したことが注目される。何よりも、幕末と明治期に多数の日本人留学生がここに学んだし、お雇い教師を介して日本と緊密な関連が認められることが特筆される。本書では、こ

れらにかかわる個々の史実が一冊の通史のなかに具体的に示されている。このような特徴ある歴史を有した大学の歴史研究が、英国大学史研究に加わったことを喜びたいと思う。

ある評者が指摘しているように、「幅広い歴史上の諸問題にはあまり論究することはないけれども、ストラスクライド大学の発展をめぐる慎重で実証的なバットの記述は、これまでの学問的関心の大部分を占めてきた中世の諸大学や『レッドブリック』大学以外に、英国大学史研究の領域を広げるものである。」

(18)

注

- (1) J. Butt, John Anderson's Legacy, the University of Strathclyde and its Antecedents 1796-1996. Tuckwell Press, 1996. ISBN 1898410682.
- (2) D. Greenstein, 'University History: recent contributions from Scotland', Oxford Review of Education, Vol. 23, No. 2 (1997) pp. 223-227 参照。
- (3) Ibid. : 拙稿「英国における大学史研究——アバディーン大学史研究叢書を中心に——」『名古屋大学史紀要』第7号(1999年3月)65-96頁参照。
- (4) たとえば, R. J. Heydon, The Origins and Development of Glasgow Mechanics' Institution. Glasgow University, M. Ed Thesis, 1968。著者ハイドンは、この論文をもとに、1971年および1973年の研究集会で、それぞれ「Professor Thomas Edmondson—the 'Young Shetlander'」および「The Glasgow Mechanics' Institution」を発表している。
- (5) 第1回はC. G. Wood, 'The '96 Group Inaugural Meeting' (24 February 1954), 最終回は do., 'John Anderson; his self-styled 'Actuating Spirit', its emergence and influence in the years of conflict and dissension (10 June 1996)。本書の著者J. バットも 'History in the History' (13 June 1979) を発表している。
- (6) University of Strathclyde, University Archives and Record Centre,

Catalogue, K10: The 96 Groupを参照。

(7) A. H. Sexton, The First Technical College, A Sketch of the History of "The Andersonian", and the Institutions of Descended from It. London, Chapman and Hall, 1894; J. Muir, John Anderson, Pioneer of Technical Education and the College He Founded. Glasgow, John Smith & Son, 1950. ほかに、通史的論文として、A. H. Sexton, 'The Andersonian: A Centenary Sketch', Proceedings of the Royal Philosophical Society of Glasgow, 28 (1897) pp. 161-172; D. C. M'Vail, 'On Anderson's College; Its Founders and Its Medical School, Being the Introductory Address at the Commencement of the Session 1878-79', The Glasgow Medical Journal, No. II (Feb. 1879) pp. 99-117, などがある。

(8) 以下は、別稿「明治期日本人留学生の母校、ストラスクライド大学の二〇〇年史」『学鏡』94巻7号(1997年7月)36-39頁と重複するところがある。

(9) J. Butt, op. cit., pp. 88-89.

(10) Ibid., p. 89.

(11) Ibid.

(12) Ibid.

(13) Ibid., p. 124.

(14) Ibid., p. 93.

(15) Ibid., p. 99.

(16) 三好信浩『ダイアールの日本』（福村出版、1989）その他。

(17) J. Butt, op. cit., p. 108

(18) D. Greenstein, op. cit., p. 224.

本稿の作成にさいし、別府昭郎「ドイツにおける個別大学史叙述の歴史的変遷」『明治大学史紀要』9 (1991) 1-18頁を参考にした。

日英教育文化交流史研究

—日本・スコットランド間の
技術移転と文化交流を中心に—

課題番号 11610257

平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金
(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

研究代表者 加藤 鉦治 (詔士)

平成 14 年 3 月 1 日印刷・発行